

国 日本 境  
遺産

| 壱岐 | 対馬 | 五島 |

交易・交流と緊張の歴史

国  島



## はじめに

このたび、平成 27 年に日本遺産に認定された「国境の島 壱岐・対馬・五島」について、その歴史的背景と価値を深く掘りさげ、より多くの人々に広く知っていただきたいとの思いから、この本を作成いたしました。

ご承知のように全国の都道府県の中で、有人島の数が最も多いのが長崎県です。数だけではなく、長崎県の“しま”は、朝鮮半島や中国大陸と直接海路でつながり、常に国境であることを身近に意識せざるを得ない地理的・歴史的な特性を有しています。

日本の西端に位置する島々は、海を隔てた国や地域との対立・侵攻などの緊張状態をはらみながら、一方ではその先にある大陸の質の高い文化を受け入れる交流の最先端の場所となっていたのです。

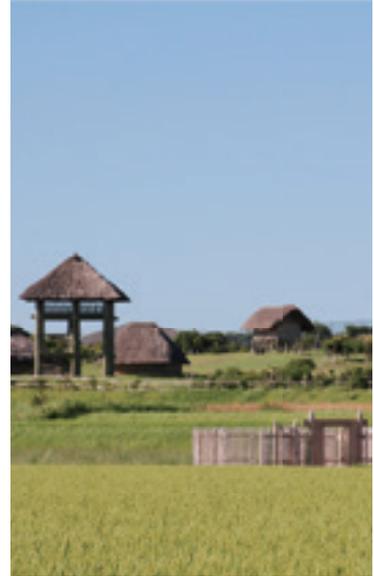
このように古代、邪馬台国の時代から、中世・近世・近代、そして現代に至るまで、長崎県の島々を語るとき、その先にある異国との交流と緊張のストーリーを抜きにしては語ることはできません。この本は壱岐・対馬・五島という3つの地域のストーリーを一貫して見渡せる内容になっており、これらの地域が我が国の歴史と文化に大きな影響を与え続けてきたことがご理解いただけると思います。

県民、島民の皆様には、この本を、改めて本県の“しま”の奥深い歴史を学ぶための一助にいただき、豊かな歴史に育まれた島々の魅力を再発見していただきますことを願っています。あわせて、県外の皆様におかれましては、興味・関心を持たれた本県の島々にぜひ足を運んでいただき、その歴史と文化を現地で体感するとともに、これを機に地域住民との交流を深めていただければ幸いです。

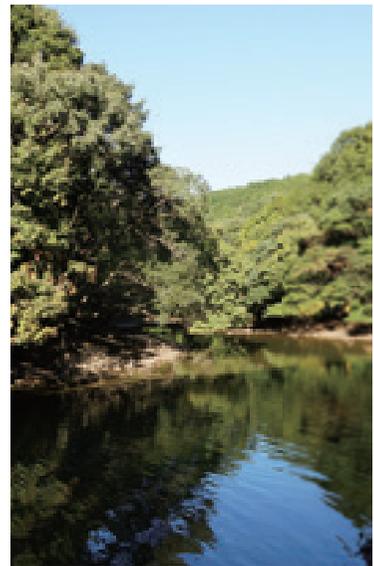
平成 30 年 3 月  
長崎県知事 中村法道

# 目 次

はじめに	3
総 説	8
<b>第 1 章 邪馬台国への道～対馬国・一支国～</b>	
1. 3 世紀の東アジア情勢	11
2. 対馬国	13
3. 一支国の王都・原の辻遺跡	17
コラム 人面石クッキーの誕生	19
4. 末廬国・伊都国・奴国 ～邪馬台国へ	22
コラム 邪馬台国はどこ?	24
<b>第 2 章 朝鮮半島三国とヤマト政権</b>	
～壱岐・対馬の役割	
1. 朝鮮半島の三国時代	26
2. ヤマト政権軍の半島出兵	28
コラム 長崎西高校所蔵「広開土王碑拓本」	29
3. ヤマト政権兵站基地としての壱岐	31
4. 白村江の海戦と金田城	39
コラム 対馬の郷土料理「石焼き」と石英斑岩	42
<b>第 3 章 壱岐・対馬の式内社と航海神</b>	
1. 壱岐の式内社	44
コラム 山口麻太郎と松永安左エ門	46
2. 対馬の式内社と古代の神事・祭祀	47
コラム 美女塚伝説	51
3. 海北道中 ～筑前・壱岐・対馬・半島～	52



原の辻遺跡(壱岐市)



西の漕手(対馬市)

## 第4章 遣唐使船航路の変更 北路から南路へ

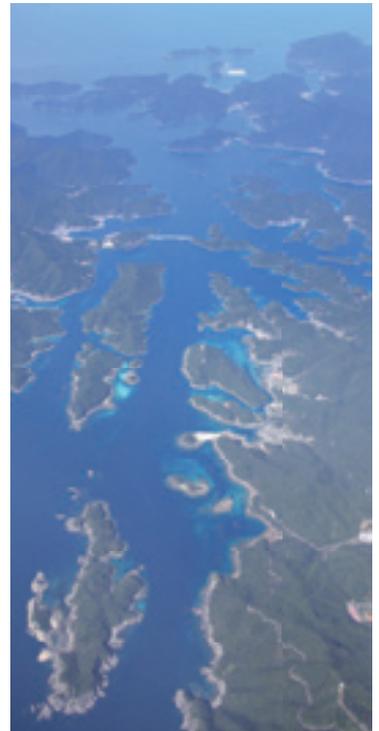
- |                   |    |
|-------------------|----|
| 1. 遣隋使・遣唐使の派遣     | 59 |
| コラム 福江島明星院の白鳳仏    | 64 |
| 2. 遣唐使船の航路変更と国際情勢 | 65 |
| コラム 海石榴油          | 68 |
| 3. 遣新羅使と『万葉集』     | 69 |
| コラム 山王山と最澄伝説      | 72 |

## 第5章 東アジア交易網と貿易陶磁

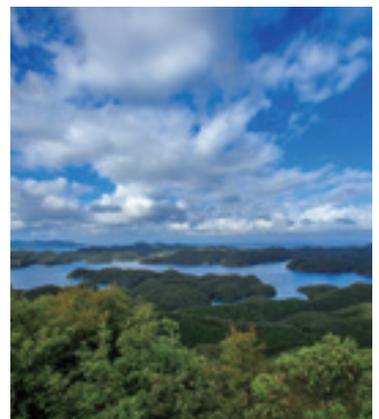
- |                          |    |
|--------------------------|----|
| 1. 東アジア交易網の成立            | 74 |
| 2. 日宋貿易・日元貿易             | 78 |
| コラム 薩摩塔                  | 80 |
| コラム 招宝七郎神と『水滸伝』          | 82 |
| 3. 貿易陶磁を出土する壱岐・五島・対馬の諸遺跡 | 83 |

## 第6章 元寇 ～防衛の最前線～

- |                    |     |
|--------------------|-----|
| 1. 東アジアの中の元寇       | 94  |
| 2. 文永の役 対馬～壱岐～博多   | 97  |
| コラム 秋山峡に紅葉して       | 99  |
| コラム 蒙古襲来絵詞（竹崎季長絵詞） | 103 |
| 3. 弘安の役 東路軍と江南軍    | 104 |



若松瀬戸(新上五島町)



烏帽子岳(対馬市)

## 第7章 対馬の海民・海商と松浦党の活動

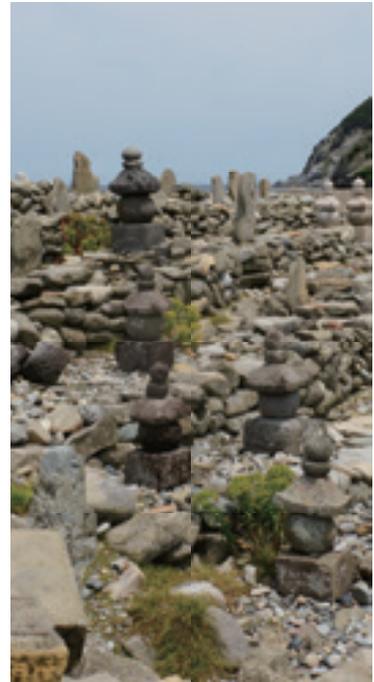
1. 「倭寇」とは	114
2. 『高麗史』・『朝鮮王朝実録』にみる 「倭寇」記事と対馬宗氏	117
コラム 黒瀬の女神さま	124
3. 『老松堂日本行録』・『海東諸国紀』にみる 対馬・壱岐	125
4. 五島日島の石塔群と日引石	132
5. 松浦党の活動	137
コラム 松浦党の城館は円形プラン	144
コラム 若松極楽寺の新羅仏	145

## 第8章 いわゆる「後期倭寇」の真実

1. 「後期倭寇」の構成員と特質	148
2. 「後期倭寇」を取り巻く状況	151
3. 王直の活動について	153
4. 嘉靖大倭寇、「後期倭寇」の収束 コラム 五島手延うどん	161 164

## 第9章 秀吉の朝鮮出兵

1. 文禄の役（壬辰倭乱）始まる	166
2. 朝鮮渡海軍団と戦闘概要 コラム 沙也可（さやか）の謎 コラム 小麦様とは？	169 173 177
3. 慶長の役（丁酉倭乱）	178



日島の石塔群(新上五島町)

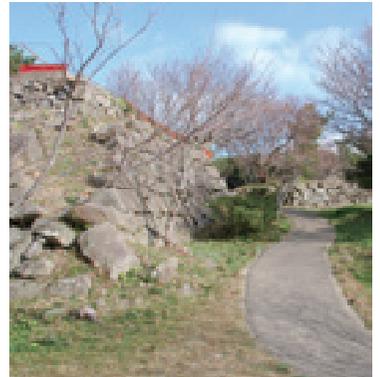


大宝寺にて(五島市)

## 第10章 朝鮮通信使と対馬藩 ～250年の平和～

- |                  |     |
|------------------|-----|
| 1. 日朝国交回復交渉      | 184 |
| コラム 小西マリア        | 186 |
| 2. 朝鮮通信使 対馬から江戸へ | 190 |
| コラム 倭館（和館）の虎退治   | 200 |
| 3. 正徳・享保の通信使     | 201 |
| コラム 朝鮮人参と孝行芋     | 205 |
| 4. 対馬での易地聘礼      | 206 |

- |                   |     |
|-------------------|-----|
| 日本遺産「国境の島」関連年表・地図 | 213 |
| あとがき              | 223 |



勝本城跡(壱岐市)



万松院の三具足(対馬市)



「辞本涯」の碑(五島市)

# 国境の島

～ 壱岐・対馬・五島 ～

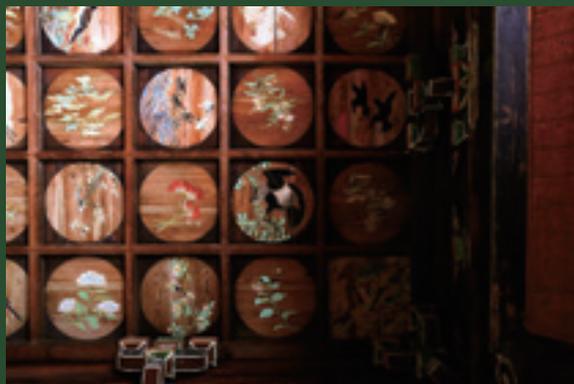
総説

「魏志倭人伝」に朝鮮半島南岸から一海を渡れば対馬、また一海を渡れば壱岐とあります。半島に対して最前線の対馬、中継基地的な性格の壱岐には、交易・交流あるいは緊張関係が繰り返されたことを証明する史跡・文化財が、原の辻遺跡や金田城など数多く存在しています。

交流のルートは五島列島にも広がり、遣唐使派遣による中国との通交、また中国商船の来航もありました。緊張関係の代表が「元寇」です。対馬・壱岐、おそらく五島も、国防の最前線でした。さらに対馬海民や、松浦党のような中世海商集団（海の武士団）の活発な活動から、長崎県の国境の島は東アジア交易圏の主要な一翼をにいます。

秀吉の野望から起こった文禄・慶長の役終了直後、初代対馬藩主・宗義そうよし智としは徳川家康の命めいもあって、いち早く朝鮮通信使の来日かいくを画策し成功しました。そして対馬藩の経済に欠かせない朝鮮貿易も復活。これにより250年の交隣平和という世界史的にも希まれな二国間関係が始まったのです。

以上のことがらを、できるだけ史料に基づいてわかりやすく記し、壱岐・対馬・五島の歴史的役割、位置付けを明確にしたいと思います。



五島最古の木造建築「明星院」本堂格子天井の狩野派の花鳥絵

第1章

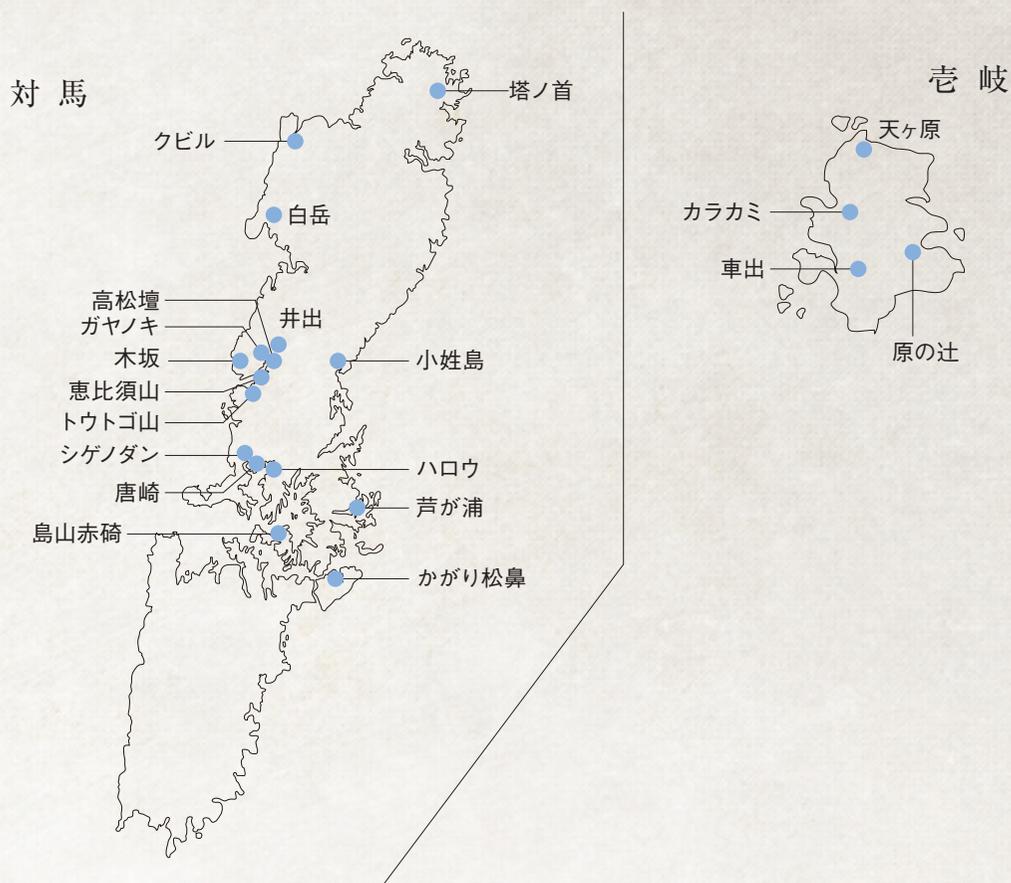
# 邪馬台国 への道

～対馬国・一支国～



「魏志倭人伝」に3世紀（弥生時代の終わり）の日本列島の情況が記されています。邪馬台国の女王卑弥呼が30ほどの国を従え、魏王朝に使節を送って朝貢したところ、魏からも使節がやってきました。「魏志倭人伝」にある対馬国・一支国の記述をもとに、朝鮮（韓）半島と日本列島の架け橋に位置する対馬・壱岐の弥生文化を、とくに原の辻遺跡に焦点を当てて紹介しましょう。

### 対馬・壱岐主要弥生遺跡地図



# ① 3世紀の東アジア情勢

## (1) 魏・呉・蜀 三国鼎立時代と公孫氏

「魏志倭人伝」を正式に表記すると『三国志 魏書』の「東夷伝倭人条」となります。有名な曹操・孫権・劉備を中核とした戦乱の時代で、劉備の配下に勇将関羽・張飛・趙雲がおり、諸葛孔明が軍略をめぐらせました。曹操軍と劉備・孫権連合軍が激突した赤壁の戦いは大変よく知られています。このまま書き記しますと、いつまでたっても日本にたどり着きませんので、興味がある読者は直接『三国志』をお読みください。

魏呉蜀三国のうち、東方と関係するのは魏王朝です。曹操のあと曹丕が魏王となり、220年に漢の献帝に迫って帝位を譲り受けました。その後曹叡が帝位に就くと、遼東地方（中国東部の南地域）を3代にわたって支配した公孫氏を滅ぼし、楽浪郡および、公孫氏が楽浪郡の南部を割いて設けた帯方郡を支配下に置きました。

BC（紀元前）108年、漢の武帝が設置した楽浪郡が現在の平壤付近であったことは考古学的にも証明されていますが、帯方郡がどこにあったかはわかっていません。ソウルかその近辺と思われます。ともあれ公孫氏が滅んだことで、直接中国との交渉が可能となりました。奴国が後漢の光武帝に朝貢して「漢委奴国王」（かののわのなのこくおう）の金印を与えられたのはAD（紀元後）57年、その後も後漢への朝貢が続きましたが、2世紀後半から公孫氏が滅びる238年まで途絶えていました。卑弥呼が魏に朝貢したのはその直後の

ことです。

なお、「漢委奴国王」は（かののいどこくおう）と読むこともできます。これについては4で説明します。

なお、卑しい「卑」弥呼や「邪」馬台国、「奴」、この後も「狗邪」韓国というように、中国の史書には卑字が多く使ってありますが、それは「東夷」だからです。

## (2) 東夷諸国の状況と女王卑弥呼

「東夷」とは、中国から見て東方の夷、つまり東の未開の民です。高句麗、韓、倭などがそれに当たります。中でも中国東北部に起こった高句麗は、668年に唐に滅ぼされるまで、600年以上続いた国ですが、中国の新（王莽）、後漢、公孫氏、魏、晋（魏の後の王朝）などと抗争し、侵攻・服属を繰り返してきました。一方、朝鮮半島方面に南下し、313年には楽浪郡を占拠し、その前後馬韓・弁韓・辰韓諸国にも圧力をかけていきます。さらに、南から海を渡ってきたヤマト政権と衝突しますが、これは第2章で述べることにします。

「魏書東夷伝」には、伝聞の類が多く記述されており、民俗・言語など詳しいことはわかっていません。近年、高句麗の歴史をめぐって、中国と韓国の間で綱引きが行われています。中国史の一環とみるべきか、いや韓国史の一部とみるべきか、ということです。

次に朝鮮半島南部の三韓諸国です。日本という弥生時代には、馬韓・辰韓・弁韓諸

国それぞれの地域内で並立・抗争を繰り返してきていました。いわゆる小国家分立の状態です。

馬韓は半島西部に位置し、全部で50余国に分立、大きな国は1万余家、小さな国は数千家で、全部合わせると10余万戸になるとあります。定住して穀物を植え、養蚕の技術もあって、綿や布を作っているという、こうした具体的な記述はありますが、全体に伝聞・伝承が多く取り入れられ、史料として活用するにはためらわれます。

辰韓は馬韓の東方に位置し、もともと6国だったのが分かれて12国になり、弁韓は弁辰ともいいますが、やはり12国に分かれていました。これら24国合わせて4・5万戸になります。辰韓と弁韓とはつながりが強かったようです。

こうしてみると、当時（3世紀前半）朝鮮半島は馬韓諸国の勢力が大きく、辰韓・弁韓諸国にも及んでいたと思われます。弁韓は鉄を産し、韓・倭のほか、楽浪・帯方の2郡にも供給されていました。次に述べますが、弁韓の一部地域（金海）に倭勢力が進出したのも鉄資源確保のためでしょう。

最後に「魏書東夷伝」倭人条です。高句麗・韓と同じく伝聞の類が多いのですが、読んでいてこれは信頼できそうだと思う個所があります。まず、帯方郡から伊都国までの記述、次に、魏の皇帝から「親魏倭王」に叙すという詔書の部分です。後者から見ていきましょう。

公孫氏滅亡後、すぐに朝貢使を派遣した

卑弥呼の外交感覚はすばらしい。帯方郡と対馬・壹岐の間に日常の接触があって、すぐに情報が入ってきたのでしょうか。朝貢外交の利点は、第一に国内有力者に対して威圧・牽制ができ、第二に献上品よりはるかに価値ある下賜品がもらえるということです。「魏書東夷伝」には景初2年（238）の遣使とありますが、その時は公孫氏滅亡の混乱の中なので景初3年（239）説の方が有力です。

卑弥呼が帯方郡を介して派遣した難升米が持参した献上品は、男の奴隷（生口）4人、女の奴隷6人、斑布2匹2丈でした。このような献上品に対して魏の皇帝は、よくぞ遠隔の地から使節を派遣し貢ぎ物を持ってきた、汝の忠孝の情の表れである、よって「親魏倭王」となし金印とそれを帯びるための紫綬（紫の組紐）を遣わす、献上品に対して文錦5匹、高級毛織物10張、紺青色の服地50匹などを遣わす、とくに汝には文錦3匹、高級毛織物5張、白絹50匹、金8両、5尺の刀2口、銅鏡100枚、真珠と鉛丹各50斤を下賜するので、汝の国内の者たちに知らせよ、と詔書を下されたのです。後に受け取った卑弥呼は大喜びしたでしょう。

ところで、帯方郡の太守（長官）が邪馬壹（台）国（原文には「壹」とあるのですが、「台」が正しいとして、以下「邪馬台国」とします）に遣わした使節は、卑弥呼に直接金印紫綬、下賜品を渡したのでしょうか。「魏書東夷伝」の記述を見れば、正始元年（240）皇帝（少帝）の意を受けた帯方太守は邪馬台国に使節を送り、金印紫綬、詔書とともに金・

## ② 対馬国

帛・刀・鏡などを下賜したとありますが、直接渡したとは書いてありません。女王国に関する記述は、戸数7万余戸が目立つくらいで簡略なものです。

これに対して「伊都国」の部分を見ると「帯方郡からの使者の往来では、常に駐まるところ」とありますから、使節は伊都国までしか来なかったとみてよいでしょう。対馬国・一支国・末盧国・伊都国に関する記述が具体的で、かつ的確な理由は、使節が実際に見聞したからだと考えます。以下、対馬国はじめ各国に関する記述をみてください（これからは「魏志倭人伝」とします）。

### (1) 「魏志倭人伝」にみる対馬国

帯方郡より倭に至るには、海岸に沿って海路を行き、韓国（馬韓）を経て南にあるいは東に進んだりして、その（倭の）北岸にある狗邪韓国に到る、ここまで七千余里。はじめて一海を渡ること千余里にして、対馬国に至る、その長官を卑狗といい、副官を卑奴母離という。対馬は海に囲まれた絶島、広さは四方四百余里ばかり。土地は、山険しく深い森があって、道路は獣道けもののようだ。千余戸あり、良い田んぼはなく魚介類を食して生活し、船に乗って南（北九州）や北（朝鮮半島）へ渡って交易を行い、穀物を買っている。

以上は「魏志倭人伝」の対馬国部分の記述をわかりやすくしたものです。いくつか解釈を加えます。狗邪韓国は現在の金海にあった小国とされています。邪馬台国連合の勢力が、3世紀前半には朝鮮半島南端に及んでいたと考えられそうです。

対馬国長官の卑狗は海幸彦・山幸彦の「彦」で、男性有力者を意味していると思われます。後述するように壹岐も同じですので、卑狗が対馬国の王なのか、邪馬台国から派遣された高官なのか、はっきりしません。おそらくは前者でしょう。一方、卑奴母離は「鄙守」（辺境の守り）を意味し、一支国・奴国・不弥国でも副官ですから、邪馬台国からの派遣の可能性が強いです。

これに続く「魏志倭人伝」表記は、まさに対馬を的確に表していますので、原文を紹介させていただきます。

## 所居絶島 方可四百余里 土地山険多深森 道路如禽鹿径 有千余戸 無良田食海物自活 乗船南北市糶

前半部が対馬の地勢、後半部が対馬人の生活ですが、実際対馬に行くと山険しく深森が多いことは実感できますし、「南北市糶」は昔も今も変わらない対馬の“生きる道”（方向性）を示しているのではないのでしょうか。「市糶」は交易を意味し、「入り米」とあるように対馬の場合は、穀物を入手しなければなりませんでした。

なお、対馬の語源は「津島」、つまり多くの「津」（港）がある島です。これに「魏志倭人伝」が「対馬」の漢字を当てたことから、対馬の表記が一般化しました。

### (2) 三根地区の弥生遺跡

南北に市糶していた弥生時代の対馬海民は、その活動が活発なだけに対馬の各地に遺跡が残っています。とくに、クビル遺跡・白岳遺跡しらたけが知られる佐護地区、三根地区、浅茅湾沿岸地域あそう（後述）に遺跡が集中していますが、いずれも対馬西岸で、朝鮮半島への渡海を意識していたかのようです。勿論、対馬東岸にもたくさんの弥生遺跡が存在し、こちらは壱岐、北九州に面しています。

対馬から南北に市糶するには、対馬の両側の海峡が大きな障害となります。正式には対馬海峡西水道（一般的には朝鮮海峡）、同東水道（対馬海峡）といいますが、さらに、南西から北東方向へ流れる対馬海流が難題



三根のガヤノキ遺跡 対馬市峰町歴史民俗資料館展示



仁位のハロウ遺跡 対馬市豊玉町郷土館展示

で、北東の風が強いと三角波が立って航海を妨げます。この後第4章にかけて繰り返し検討することですが、一貫していえるのは、対馬海民あるいは壱岐海民も海流・潮流、気象を熟知していたということです。それは朝鮮半島南・西岸の海民集団にも当てはまります。このことを前提にして、造船・航海技術の向上を加味して考えていきたいと思います。

故永留久恵先生から伺った話ですが、三根湾口に船を浮かべて、明け方の山風を受けて朝鮮半島に向けて漕ぎ出すと、海峡の半

ば近くまで行くことができるというのです。これは対馬西海岸の伊奈（仁田）でも同じと思われる。それからは半島に進路をとりながら海流に乗って航海すれば、半島に近づけるらしいのです。弥生時代の対馬海民が知らなかったはずはありません。

その三根湾域には、とりわけ注目すべき弥生の遺跡が集中しています。ガヤノキ、タカマツダン（高松壇）サカドウ（坂堂）、木坂そして吉田浦の恵比須山は、弥生中期から古墳時代にかけての遺跡で、朝鮮半島との交流を物語る貴重な遺物が数多く出土しています。少し遺物を列挙します。細型銅剣、石剣・鉄剣・刀子の類、ガラス小玉・管玉・曲玉の類、そして豪華な把頭飾（剣の柄飾）などです。遺跡の形状は箱式石棺がほとんどで、一部に祭祀遺跡もあります。壱岐の原の辻遺跡や北九州の諸遺跡に見られる甕棺墓ではありません。

三根に対馬国の王がいたかもしれないと推測させる重厚な遺跡群ですが、今後年代を確定させるためにも、土器が出土する生活跡（住居跡）の発見・調査が期待されていました。対馬では生活に便利な平地に限られていて、そうした場所は現在も住宅になっているのです。幸い三根地区では、最近山辺遺跡で住居跡が発見され、対馬で初めての弥生集落の一端が明らかになりました。弥生から古墳時代にかけての遺跡ですが、まだ弥生前期の住居跡が調査されただけで、これが対馬国の王都というわけではありません。しかし、可能性は膨らみます。山辺遺跡の今後

に注目しましょう。

### (3) 浅茅湾地域の弥生遺跡

浅茅湾は日本一のおぼれ谷（沈降湾）です。仁位浅茅湾、濃部浅茅湾などの支湾、また浦々があつて、海に突き出た岬も無数にあります。そうした岬の突端には多くの箱式石棺が埋もれていました。「倭の水人」と呼ばれた対馬海民の墓としてふさわしいものです。

遺跡（箱式石棺）として、仁位のハロウ遺跡、貝口の赤崎遺跡、唐崎遺跡、佐保浦（卯麦）の赤崎遺跡、加志々遺跡など多くが調査・発掘されています。採集品を含めた遺物（副葬品）で印象的なものはガラス小玉です。とにかく数が多い。また、大陸から舶載された青銅器類も多く、そして銅矛が副葬されている石棺もあります。

その銅矛ですが、本来武器だったものが大型化し、中広銅矛・広型銅矛といわれるものは祭祀に使われていたと考えられます。写真



広形・中広銅矛

を見てください。両手でやっと持てるくらい  
の大きさですから武器には使えません。これが  
箱式石棺にも1・2本副葬されていました。

対馬には130本もの祭器銅矛が確認され  
ており、全国で一番の集積地ですが、石棺  
出土を除けば、それらの出土状況はよくわ  
かっていません。仁位浅茅湾貝口浦に浮かぶ  
黒島の例をみてみましょう。美津島町長板浦  
(樽ヶ浜)から対馬市営の渡海船「うみさち  
ひこ」に乗船して、船が仁位湾に入っ  
てしばらくすると、左手に写真の島が見え  
ます。その黒島の畑の地下70cmくらい  
のところに15本の広型銅矛が並んで埋ま  
っていたということです。これらは東京国  
立博物館に11本、奈良国立博物館に3  
本、細川家に1本収蔵されています。つ  
いでに東京国博には、豊玉町(おおつな  
)から出土した中広銅矛も11本ありま  
す。

対馬全体では豊玉町の例と同じく、地下  
に埋まっていた状態で出土した銅矛が多  
かったと思われます。発見した地元の人  
たちは、銅矛を神社に納めたようです。  
浅茅湾の一番奥に鎮座する大吉戸神  
社(ちんざ)神社(第2章で触れます)  
には7本(現在は住吉神社蔵)、木坂海  
神社に6本、確認できていませんが峰  
町の奈須(なす)加美金子神社に13  
本、仁位和多都美神社に4本とい  
ったところが主な収納先です。

こうした祭器銅矛の鑄型は北九州で  
出土していますから、対馬海民が北九  
州との交易で持ち帰ったものでしょう。  
そして、その祭りは航海安全を祈願  
する性格と考えるのが自

然です。永留先生は、疫病・災厄が入る  
のを防ぐ祭器であるとも言っておられ  
ました。

もう一つ、是非とも紹介したい遺跡が  
あります。遺跡とってよいか、正規の  
調査が行われておらず詳細は不明で  
すが、朝鮮半島からの非常に豪華な  
舶載青銅器が出た佐保シゲノダンの  
ことです。生前永留先生は、この遺  
跡を遺跡として疑問に思っておられ  
ました。

ただ、遺物は超一級品で、双獣付十  
字形把頭飾、粟粒文十字形把頭飾、  
馬鐸、貨泉など舶載青銅器に混じ  
って国産の中広銅矛もあります。年  
代的には弥生後期という説が有力  
です。また、鉄剣・鉄鏃、槍鉋(工  
具)もあり、これらは国立歴史民俗  
博物館(千葉県佐倉市)が購入して  
収蔵し、現在一括して重要文化財の  
指定を受けています。なお、馬鐸は  
銅鐸の原型といわれ、貨泉について  
は3の原の辻遺跡で説明します。



仁位湾 黒島

### 3 <sup>い き こ く</sup>一支国の王都・原<sup>はる</sup>の辻遺跡

#### (1) 特別史跡となった原の辻遺跡

原の辻遺跡は2000年に国の特別史跡に指定されています。特別史跡というのは、国指定の史跡の中でも特別貴重で評価される史跡のことですから、文化財でいうと国宝に当たります。弥生の遺跡としては、登呂遺跡、吉野ヶ里遺跡と合わせて3つしかありません。原の辻遺跡の何が評価されたのでしょうか。最初に一支国博物館に行って原の辻遺跡を眺望しましょう。特別史跡は保存状態がよくないと指定されません。近くの圃場整備の直線畦道<sup>あぜ</sup>や、遠くに近代建築物や山上の鉄塔が見えますが、これに目をつぶると弥生時代の情景そのままと言ってもあまり違和感はないで

しょう。よくこうした原風景が残っていたものです。離島だけに近代化の波が大きく押し寄せてこなかったためと思われます。



吉岐市立一支国博物館



原の辻遺跡 遠景

## (2) 一支国博物館の展示と大陸・半島系遺物

次に博物館内の原の辻遺跡関係展示を見て回しましょう。原の辻遺跡の詳細な情景模型がありますので、これで遺跡全体をつかんでください。王の祭祀、原の辻弥生人の日常生活、海に潜って魚や貝を獲る海人、当時最先端の敷粗朶工法で作られた船着場と削り抜き船や準構造船（外洋航海も可能）の模型、竪穴住居を建てている様子、またしゃがんで何かしている男性もいます。登場している人形の顔は、壱岐市民をモデルに作られたそうです。

土器の展示では、弥生式土器に混じって大陸・半島系の土器が目につきます。原の辻遺跡からは1200点以上の韓（朝鮮）半島系無文土器・瓦質土器・陶質土器や、楽浪系土器、遼東（半島）系土器などが出土しており、全国の弥生遺跡の中では一番多いそうです。しかし、原の辻全体の土器の量からすれば

一部ですから、半島から渡来した人々は交易のため、あるいは九州に渡る目的で中継地原の辻に滞在したものと思われます。それに渡来系土器主体の墓地は、これまでの発掘では見つかっていません。

なお楽浪郡とは、漢王朝によって半島に設置された郡で、中国文化はここを径由して日本にもたらされたようです。同時期の半島は馬韓・弁韓・辰韓の三韓それぞれに小国家の分立している状態だったらしく、その点は日本の弥生時代中期と同じです。後に、馬韓は百済に統一され、弁韓は加羅諸国になり、辰韓は新羅に統一されました。

大陸・半島系の遺物は土器だけではなく、青銅製の「権」すなわち秤の錘が出土しています。これは原の辻で行われていた交易に使用された可能性があります。また、中国貨幣として貨泉（王莽の「新」の時代の貨幣）14点のほか、大泉五十・五銖銭各1点が出ていますが、渡来してきた楽浪人の中で使



船着場 ジオラマ模型



楽浪系土器



準構造船  
くり抜き船に舷側板を立てた船  
(キールはない)

用されたとみる向きもあります。

遺物としておもしろいのは人面石でしょう。目は半分まで彫られ、口のところは穴があいています。眉や鼻の部分には細い線刻があつて、この人の顔をした石製品は、ノルウェーの画家ムンクが描いた「叫び」に似ていると評判です。

以上のようなユニークかつ歴史的に貴重な出土遺物のうち、1670点が一括で重要文化財に指定されました。



人面石

## 人面石クッキーの誕生

一支国博物館での売れ筋土産NO1は「人面石クッキー」という。これが竜崎市あるいは業者の人たちが開発したのなら、ここで取り上げることはない。人面石クッキーの誕生には県立竜崎商業高校の生徒さんが関わっていた。商業高校の家庭クラブの発想である。

同校家庭クラブでは、竜崎の豊かな農産物を使ったお菓子ができないだろうかと考え、原料として挙げたのが古代米の赤米。ビタミン・ミネラルに富み、ポリフェノールが豊富な食材である。当時竜崎では原の辻遺跡の発掘が進み、古代に対する関心が高まっていた。

おりしも2001年、手のひらサイズの人の顔と思われる人面石が発掘され、マスコミに大きく取り上げられていたところであったが、その人面石と赤米を結びつけてクッキーを作ろうという発想がおもしろい。顧問の山本久美先生の指導のもと、小麦粉との配合割合など試行錯誤し、当時の校長先生による銅板の型作りという思わぬ援助もあって「人面石クッキー」が誕生した。うん、なかなかうまい。その後は商業高校のDNAが騒ぎ、ことある機会をとらえて宣伝・販売した。豊増なぎささん、山口麻衣子さん、山口俊幸君は一連の創作・工夫の中心メンバーである。



やがて一支国博物館の開館が近づくと、お土産として販売したいという朗報が竜崎市から舞い込んだ。より洗練されたデザインを考え、さらに味・食感を磨き、菓子業者と連携して販売にこぎつけた。不気味だけどユーモラス、香ばしく、さくさくとした食感、素朴でヘルシー等々、いろいろな感想が寄せられている。どうぞお求めを。

### (3) 整備された一支国の王都

それでは、いよいよ原の辻遺跡を実際に見学しましょう。まず丘陵部に復元された高床倉庫、祭殿、物見櫓ものみやぐら、堅穴住居などを見て回ってください。そして、資料によって、居住地区を二重三重に取り囲んでいる環濠（埋まっています）に思いをめぐらせてください。ここは防御と交易という政治的経済的理由から、具体的には朝鮮半島、九州本土の情勢が反映した人為的な集落なのです。

11月下旬から3月にかけて、北西の季節風が吹いたときの原の辻は、非常に住みにくい吹きさらしの台地です。初めて環濠が掘られた時期は、BC（紀元前）2世紀後半から約100年間、「漢書地理志」にいう「分かれて百余国をなす」弥生中期でした。

このころ一支国いっきが誕生したのでしょうか。小国の分立・抗争は半島でも同様と思われます。その後環濠は埋められ、つまり平和な時期には周辺の低地が居住地区になりましたが、再び環濠が掘削、再整備されたのはAD（紀元後）1世紀中ごろからで、その背景とし

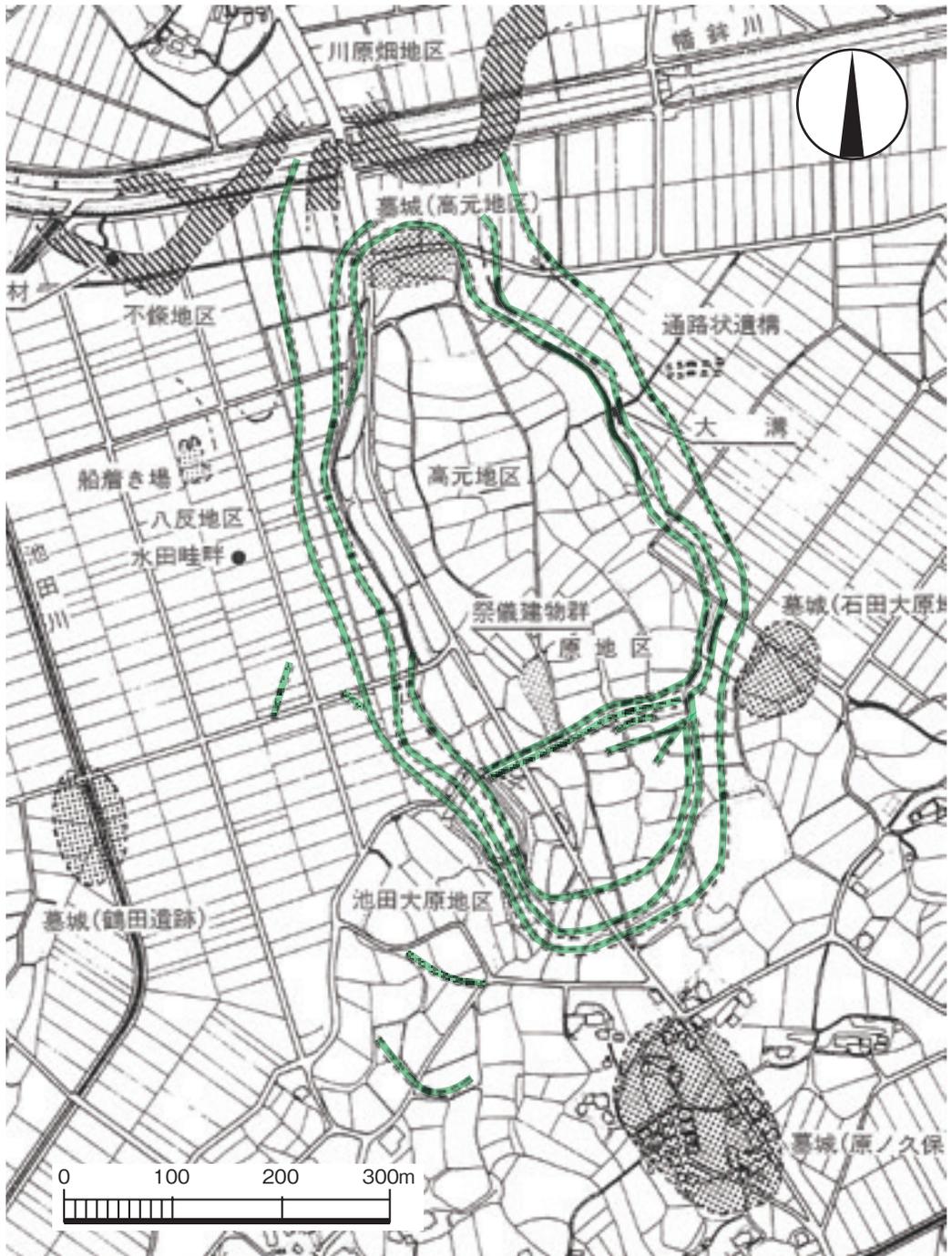


復元集落高床倉庫

て半島三韓地域の抗争激化、日本列島のいわゆる「倭国大乱」（「後漢書東夷伝」とうい）が考えられます。

2世紀末にはまた平和がおとずれたのでしょう、環濠が埋められはじめました。「魏志倭人伝」に「共に一女子を立てて王となす、名を卑弥呼という」とありますが、ここに邪馬台国連合（約30国）が成立し、239（238）年に女王卑弥呼が魏に使節を送って朝貢したことはすでに述べたとおりです。これに対する帯方郡からの使節が邪馬台国にいたる記述があります。帯方郡の南方くやくかんに狗邪韓国（半島の南端部）がある、初めて一海を渡ると対馬国、さらに一海を渡ると一支国に至る、ここでも長官を卑狗といい、副を卑奴母離ひぶろという、広さは四方三百里ばかり、竹林や藪が多く、三千ばかりの家があつて、田はあるが、なお食料は不足し、南や北に交易に出かけ、食料を補っている、というのです。対馬国同様これも非常に的確な表現です。なお、原文は「一大国」ですが「一支国」と表記します。

壱岐にはカラカミ遺跡くろまでや車出遺跡といった有力な弥生の遺跡も存在しますが、これまで述べてきたように大陸・半島系の遺物が多数出土し、多重環濠に囲まれた大規模拠点集落であるといったことを考えれば、魏（帯方郡）の使節が来たであろう一支国の王都は、原の辻において他にはありません。すなわち一支国の王都が研究者一致で確定しました。邪馬台国連合約30国のうち、中心集落とその構造が明らかになっているのは一支国の原の辻だけです。これも特別史跡に指定された大きな理由です。



環濠集落 「原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集」より

## ④ 末廬国・伊都国・奴国～邪馬台国へ



### (1) 末廬国

まず、「魏志倭人伝」に記された末廬国をみてみましょう。(一支国から) また一海を渡る千余里、末廬国に至る、四千余戸あり、海岸に沿って人家がある、草木が繁茂(あわび)して前を行く人が見えない、人々は魚や鰻を好み、水の深い浅いに関係なく潜ってこれを獲る、とあります。

末廬国は肥前国松浦郡、現在の佐賀県唐津市あたりから長崎県平戸市にかけての一帯こんにちと思われます。今日も水産業が大変盛んで、「沈没」して魚やアワビを獲る海民を容

易に想像できます。

末廬国を考える考古学的知見は、唐津のさくらば桜馬場遺跡から得られそうです。先の大戦中防空壕を掘っていて見つかったようですが、一部の鏡などを除いて埋め戻されていました。それを再度調査し、その結果末廬国の王墓ではないか、という結論にいたりました。時期は弥生時代の後期(1世紀後半から2世紀)です。1944年発見の方格規矩鏡ほうかくきくと巴形銅器ともえがたは重要文化財に指定されています。他に、素環頭鉄刀そかんとうの一部、ガラス小玉2,000個以上が発掘されました。

## (2) 伊都国

「魏志倭人伝」の伊都国部分を紹介し  
ます。(末廬国から) 東南に陸行すると伊都国  
に到る、長官を爾支といい、副官を泄謨觚・  
柄渠觚という、千余戸あり、代々王がいて、皆  
女王国に属していた、帯方郡からの使者が常  
に駐まるところである、とあります。長官・副  
官の読み方・意味はわかりません。さらに別  
のところで、女王国より以北には特に一大率  
を置き、諸国を監察していた、諸国はこれを  
恐れている、一大率は常に伊都国に置かれ、  
中国の刺史のような権威を持っている、王が  
使者を魏の都、帯方郡、諸韓国に遣わすと  
き、及び帯方郡が倭国に使者を送るときは、  
いつも港に行って監察し、文書や朝貢・下賜  
の物品を点検して、間違いのないように下賜  
品を女王に送る、と記されています。

この一大率の存在は、ヤマト政権における  
大宰府の役割を果たしていたのではないで  
しょうか。ここまでの「魏志倭人伝」の記述  
は、非常に具体的で信頼できると判断しまし  
た。伊都国が現在の福岡県糸島市あたりで  
あることは衆目一致しています。なお、「千余  
戸」については中国の古文献『魏略』に「万  
余戸」とあり、次に述べる考古学的知見もそ  
れを示唆しているようです。

これまで調査された糸島市の弥生遺跡は  
大変著名で、半端ではない遺構・遺物が並び  
ます。このうち、三雲・井原遺跡、平原遺跡  
の2つを簡単に紹介しましょう。

卑弥呼は魏の皇帝から銅鏡100枚を得てい

ますが、この銅鏡は三角縁神獸鏡(最近中国  
でも出土)と言われてきました。銅鏡は錫合  
金ですから、新しいときは金色に輝き、権威  
の象徴としてふさわしいものです。

その卑弥呼の時代から少しさかのぼって、  
弥生時代中・後期の三雲・井原遺跡や平原  
遺跡では、甕棺や方形周溝墓(木棺)から  
100枚ほどの銅鏡出土が確認されており、そ  
うした甕棺や方形周溝墓は、伊都国の王墓と  
考えられています。とくに、平原遺跡の方形周  
溝墓からは40面分の銅鏡が出土し、銅鏡と  
玉類が「福岡県平原方形周溝墓出土品」とし  
て国宝指定を受けました。

## (3) 奴国

奴国は現在の福岡市博多区・東区・南区、  
春日市あたり、古代の筑前国那珂郡に当たる  
とされています。「魏志倭人伝」には、(伊都  
国から) 東南方向奴国に至る百里、長官を兕  
馬觚といい、副官を卑奴母離という、二万余  
戸あり、と簡単です。

二万余戸の大国なら、いろいろな状況・情  
報が見聞できるはずですが、ないということ  
は帯方郡の使節が行っていないということ  
でしょう。それでも、この地域の弥生遺跡は  
二万余戸の大国にふさわしい豪華さで、春日  
市の須玖岡本遺跡は、1899年偶然に巨石の  
下から大型の甕棺が見つかり、中から中国の  
前漢の鏡が約30枚、銅剣・銅戈(武器)、ガ  
ラスの璧・勾玉・管玉が出てきた、いわゆる  
奴国の王墓を中心に遺跡が広がっています。

まだ発見されていない王墓もありそうです。都市化が進んで、ビル・団地が展開している福岡・博多圏ですから、発見は困難かもしれませんが。

ところで、志賀島で発見された「漢委奴国王」の金印は、AD57年に後漢の光武帝から奴国王に与えられたものと言われてきました。実際、志賀島は奴国の範囲ですし、『後漢書東夷伝』にも記事があるので問題はなさそうです。それでも、金印の文字を素直に読

むと「かんのわのなのこくおう」ではなく、「いな(ぬ)」あるいは「いど」ではないか、という人もいます。隣に伊都国があるだけに、決着したわけではありません。

## 邪馬台国はどこ？

ここで本章を終えるが、九州か、畿内きない（大和）か邪馬台国所在論にも少し触れておく。

「魏志倭人伝」を読んで、方角・距離、いろいろな伝聞情報など頼りにならないところが多いと感じる。これからは考古学の資料、それも確実な出土遺構・遺物が証明する範囲だけを積み重ねることが必要と思われる。しかし、その考察は卑弥呼の墓誌が埋葬された墳墓の発見など決定打が見つかるまで続くだろう。

現段階では、邪馬台国が存在した3世紀の有力遺跡として、奈良県桜井市の纏向遺跡まきむくが注目されている。そこには卑弥呼の墓と言われている箸墓古墳はしはか（約280mの前方後円墳）がある。伝承ではヤマトトトビモソヒメノミコトの墓というが、現在「陵墓」となっており調査は制限されてきた。因みに、彼女に関しては三輪山の太物主神おおものぬしのかみと結婚したという記事が『日本書紀』崇神天皇条にある。

卑弥呼は「鬼道を事とし、よく衆を惑わす」（魏志倭人伝）という巫女的性格を持つが、倭迹迹日百襲姫命やまとととびもそひめのみことも同様である。ヒミコは、ヒメミコ、ヒメノミコトの略語ではないか。

一方、邪馬台国がヤマト政権とは関係のない九州王朝であるという説もあって、この考えに立てば福岡県南部から熊本県北部のある地域に、弥生末期（3世紀）の有力な集落跡・墳墓を発見しなければならない。邪馬台国が畿内に移ってヤマト政権になったという「東遷とうせん」説をとった場合も同様である。



第2章

# 朝鮮半島三国と ヤマト政権

～壱岐・対馬の役割



4世紀から7世紀にかけて、朝鮮半島には、北部に高句麗<sup>こうくり</sup>、西南部に百濟<sup>くだら</sup>、東南部に新羅<sup>しらぎ</sup>の三国が鼎立<sup>てい</sup>しており、高句麗・新羅は半島に攻めてきたヤマト政権軍と対立しました。また百濟や南端部の加羅諸国<sup>から</sup>はヤマト政権と親交関係にありましたが、百濟は南下してきた高句麗の強い圧迫を受け、また加羅諸国は新羅に滅ぼされてしまいます。その後、唐は新羅と結んで、白村江の海戦で日本・百濟連合軍に勝利しました。対馬に金田城が築かれたのは、両国に対する防衛のためです。

## ① 朝鮮半島の三国時代

はじめに用語を整理しておきます。第1章で出てきた「三韓」は、およそ日本の弥生時代に朝鮮半島に存在した馬韓<sup>ばかん</sup>・辰韓<sup>しんかん</sup>・弁韓<sup>べんかん</sup>を指します。それぞれ小国家分立の状態でした。

これに対し「三国」は、すでに存在していた北方の高句麗と、馬韓諸国を統一して成立した百濟、同じく辰韓諸国が統一された新羅の2国を合わせて「三国」といいます。弁韓諸国は統合されずに、加羅<sup>きんかん</sup>、金官<sup>くや</sup>（狗邪韓）、安羅<sup>あら</sup>など有力な数国とその他の小国が残りました。

古代国家としての百濟・新羅の成立は、4世紀になってからという説が有力で、それは313年に高句麗が楽浪郡を滅亡させたことと関係しており、高句麗南下の圧力を受けて統一が進んだと解釈されています。

西南日本のヤマト政権（倭王権、かつては大和朝廷が一般的でしたが、近年はあまり使いません）の古代国家としての成立も、ほぼ同じころと考えられます。こうした政治情勢の推移は、およそ日本の古墳時代にあたる

と考えてよいでしょう。

もう少し百濟と新羅を掘り下げます。百濟は、三韓の中でも優勢だった馬韓諸国の有力国伯濟<sup>はくさい</sup>を中心に成立した古代国家とされています。伯濟が百濟というわけです。北方の高句麗と抗争を繰り返し、一時は高句麗王を戦死させることもありましたが、次第に国力を消耗していきました。ヤマト政権との同盟関係はずっと変わらず、百濟系の渡来人がヤマト政権の支配層に存在していたとされています。

また、百濟や加羅諸国にも「倭人」が多数居住しており、その影響か詳細は不明ですが、日本独自の墳形と言われてきた前方後円墳が半島西南部全羅道<sup>ぜんら</sup>に10数基確認されています。朝鮮半島と日本列島間には多くの人の移動が継続的であったわけで、文化や物だけが移ったわけではありません。

新羅は建国以来ずっと百濟やヤマト政権と抗争してきました。『三国史記』の「高句麗本紀」に「倭」の記述はほとんどなく、次

に述べる好太王（広開土王）のところでさえ一つも出てきませんが、「新羅本紀」には多くの「倭」侵攻・来襲記事があって、王都金城（慶州）はたびたび危機にひんします。結局は撃退するという筋書きなので、意図的に並べて表記した感じもします。反対に『日本書紀』の「神功皇后紀」の対象は新羅で、これもまた新羅を制圧したことを意図的に強調しています。

新羅は、北に高句麗、西に百済、海を渡った南にヤマトというように強国に囲まれていました。あるときは高句麗に従い、またあるときは百済と結び、ヤマトに対しても朝貢して宥和策を取りました。そうしたたかな外交戦術は国力が充実した後も続き、とうとう朝鮮半島を統一したのです。第4章にかけて、その経緯をお読みください。



三韓（1,2世紀）



三国（4世紀）

## ② ヤマト政権軍の半島出兵

### (1) 広開土王碑文という金石文史料

『日本書紀』・『三国史記』は日韓古代史の基本文献として高い評価を受けてきましたが、すでに明らかなように、国家権力者や編纂者の意図・思惑のもとで作られた編纂史料です。したがって、どちらも古記録を引用しているものの、史料として用いる際は慎重でなければなりません。

『日本書紀』は奈良時代初期720年の成立、天皇中心の律令国家体制がどのような過程で作られていったかを知らしめる編年体（年ごとに記述してある）の歴史書です。一方、『三国史記』は、1145年高麗王朝時代に完成したものです。高麗が新羅の政治権力を引き継いだ正当な王朝であることを意図したもので、自然と新羅を重視した記述になっています。

金石文史料も史料批判は必要ですが、編纂史料よりはるかに信憑性は高くなります。高句麗の「広開土王碑」は、広開土王（好太王）の没後、高句麗全盛期を築いた王の事績を顕彰するために建てられたもので（現・吉林省集安市）、その碑文には4世紀末から5世紀初めにかけての高句麗と百済・新羅、そして「倭軍」との関係が記されています。

好太王の没年は412年、その2年後に建てられた石碑ですから、何年に好太王がどこと戦った、といったことは間違いありません。勿論、顕彰碑であることは考慮しておく必要があります。事績の誇大表現はありますし、「歩騎5万を遣わして討つ」も実数以上と思

われます。それでは、碑文から朝鮮半島三国と倭国とのからみを年代順にあげてみます。

391年	倭が海を渡って来て、百済（百濟）・新羅などを破って臣民とした
396年	好太王自ら水軍を率いて百済を討ち、多くの城を攻略した。百済王は生口や貢ぎ物を差し出し、服属を誓った
399年	百済は誓いに背いて倭と和通した。好太王が平壤へ巡行したとき、新羅王が使いを遣わして言うには、倭人が国境に満ちて城池（濠）を破り、我々を支配している
400年	好太王は歩騎5万でもって新羅を救援し、倭賊を討ってさらに任那・加羅に侵攻した
404年	倭が取り決めに反して帯方の境まで侵入して来たので、好太王はこれを撃破し多数を殺害した

ここに出てくる倭軍は、ヤマト政権が動員したもので、高句麗や新羅と戦う程の軍事力です。半島南端部に集住していた倭人ではありません。日本の古代史家のなかに、波高い玄界灘・対馬海峡を大軍が渡れるはずがない、半島南端部の倭人である、と主張する人もいましたが、当時の準構造船でも、壱岐・対馬の海民を水先案内にして、ナギの日に船筏を組んで渡海すれば可能と考えます。碑文に出てくる「連船」がそれを示唆しているようです。

それでも半島南端部の上陸地点にヤマト政権の基地みたいなものがないと、内陸部への侵攻はうまくいきません。弁韓諸国の統合が進んだ加羅諸国の一部地域が、そうした役割を担っていたと思われます。

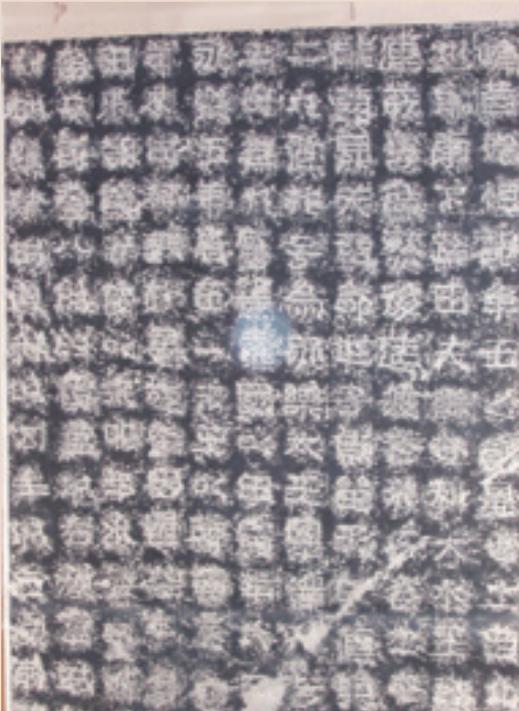
## コラム 長崎西高校所蔵「広開土王碑拓本」

長崎西高校に「広開土王碑拓本」が所蔵されている。旧制長崎中学から引き継がれたもので、詳細は不明だが、旧制長中の関係者が寄贈したものらしい。

1972年古代史家の李進熙氏から、「広開土王碑拓本」は最初にこれを日本にもたらした帝国陸軍の酒匂中尉が拓本をとるとき、石膏を塗って文字を改ざんしたという研究が発表された。どこが改ざんされたのかというと、「而倭以辛卯年来渡海、破百残□□新羅、以為臣民」の部分である。「辛卯年」は391年、上記の391年のところに「倭が海を渡って来て、百残（百済）・新羅などを破って臣民とした」と記したとおりで、これが通説となっていた。これに対し李改ざん説は、当時の倭が海を渡って来るはずはないとして、「倭」と「来渡海」の部分はなかった、別の文字だというのである。しかし、

酒匂本は石灰を塗って作ったものではないし、また、その後の石灰を塗る前の拓本（原石拓本）でも同じ文字であることが証明され、改ざん説は完全否定された。

また、「来」までは「倭」が主語だが「渡海」以下の主語は広開土王である、という主張が、韓国・朝鮮の学者から出されており、この解釈が韓国・朝鮮では通説であるが、ここの文章は、高句麗軍の出撃の正当性を示すための「前置文」なので、やはり「渡海、破」の主語は倭とみるべきであろう。ともあれ、古代史の一級史料が身近に存在していることに驚いたが、拓本に傷みがあったため、九州国立博物館から申し出があり、修復して展示に使用するという条件で5年間貸し出された。現在延長中。



長崎県立長崎西高等学校蔵  
「広開土王（好太王）碑拓本」

## (2) 対馬の役割

『三国史記』『新羅本紀』の倭軍侵攻に関して次のような記事があります。

(新羅)王聞く、倭人が対馬島に營(軍事基地)を置いて兵員・物資・兵糧を蓄え、我らを襲おうとしている、我らの方で先にこれを襲撃しようと思うがどうか。結局は諫められて実行されなかったのですが、この記事が対馬の位置付け、役割をあらわしているように思います。

半島への出兵ルートは次の第3章で述べるとして、対馬にあったであろう前線基地を考えてみましょう。弥生時代の対馬海民は自由に南北に市糶(交易)していましたが、3世紀には邪馬台国連合に組み込まれ、4世紀になるとヤマト政権の勢力下に入ったようです。その証が<sup>あかし</sup>鶏知・<sup>けち</sup>高浜地区に集中して存在する<sup>きない</sup>畿内型の前方後円墳です。

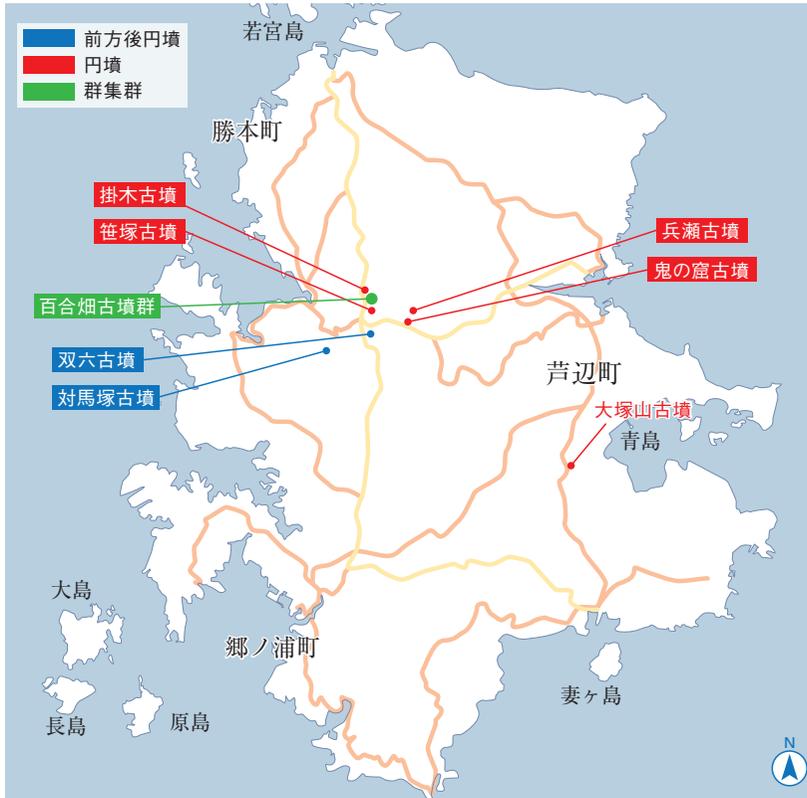
一番古い出居塚古墳は<sup>でいづか</sup>竪穴式石室をもつ4世紀後半の古墳です。以前は、約40mの前方後円墳とされていましたが、測定の結果前方後方墳であることがわかりました。盗掘された残りの副葬品に<sup>やなぎぼ</sup>柳葉形銅鏃12、<sup>くだたま</sup>管玉1、鉄破片があり、これまでの対馬の墳墓とは大きく異なるこの畿内型古墳には、ヤマト政権の強い影響が考えられます。

すぐ近くの海岸に<sup>ねそ</sup>根曾古墳群(国史跡)があって、前方後円墳3基、他に3基の古墳が確認されています。封土はいずれも浜石を積み上げた積石塚で、出土した<sup>すえき</sup>須恵器などから築造の時期は5世紀から6世紀にか

けてと推測され、出居塚古墳に続く畿内型古墳です。

積石塚は浅茅湾の<sup>かいふな</sup>貝鮎崎古墳にもみられる対馬に多い形態で、この点からしても葬られた人物は対馬地元の豪族、すなわち『日本書紀』に出てくる「対馬<sup>しもあがたあた</sup>下県直」ではないかと考えられています。ヤマト政権の地方官に任命された対馬下県直は、朝鮮出兵に際して前線基地の管理を担っていたのではないのでしょうか。第3章で述べる名神大社の住吉神社が鎮座しているのも、こうした推測を補強してくれます。次は、壱岐の巨大古墳を考えましょう。

### ③ ヤマト政権兵站基地としての壱岐



#### (1) 壱岐古墳群

ここでいう壱岐古墳群とは、国の史跡に指定された対馬塚古墳、双六古墳、笹塚古墳、兵瀬古墳、掛木古墳、鬼の窟古墳からなる6基の巨大古墳をいいます。あえて巨大古墳としましたが、実際6基の古墳が造られた6世紀後半から7世紀初めという時期を限定すれば九州本土を含めても有数の規模を

誇る巨大古墳です。

ほぼ同時期に築造された畿内斑鳩の藤ノ木古墳は径約50mの円墳で、横穴式石室の長さは14mですから、ほぼ同規模といえることができます。つまりこの時期、この規模の円墳は王墓クラスといえるでしょう。6世紀末の畿内では、前方後円墳の築造は終わって、円墳・方墳に移行していました。



双六古墳 後円部（上）と前方部（下）



双六古墳 横穴式石室

次の表を見てください。これまで述べてきたことが確認できると思います。

〈九州地方6世紀後半の前方後円墳 墳丘規模〉

1位 弁慶ヶ穴古墳(熊本県)	105m
2位 田主丸古墳(福岡県)	103m
3位 在自剣塚古墳(福岡県)	102m
4位 大野窟古墳(熊本県)	100m
5位 双六古墳(長崎県壱岐)	91m

〈九州地方6世紀後半~7世紀初の横穴式石室の長さ〉

1位 宮地嶽古墳(福岡県)	21.8m
2位 綾塚古墳(福岡県)	19.4m
3位 楠名古墳(福岡県)	18.0m
4位 鬼の窟古墳(長崎県壱岐)	16.5m
5位 橘塚古墳(福岡県)	15.6m

『壱岐の古墳』

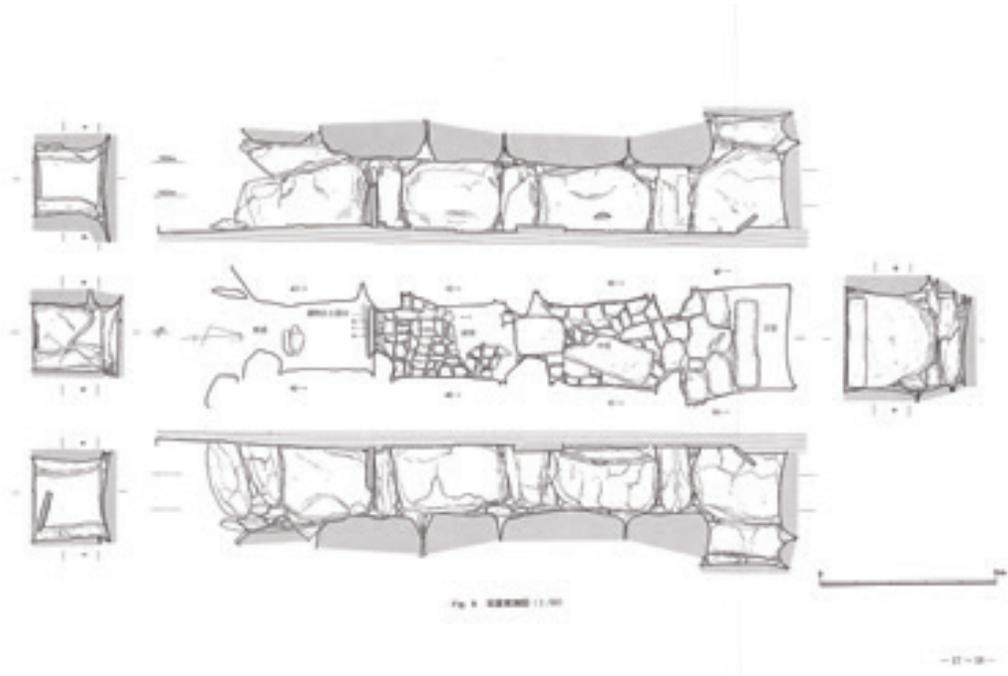
(2008年 壱岐市教育委員会)より

〈九州地方6世紀後半の円墳 墳丘規模〉

1位 兵瀬古墳(長崎県壱岐)	54m
2位 童男山古墳(福岡県)	48m
3位 鬼の窟古墳(長崎県壱岐)	45m
4位 田代太田古墳(佐賀県)	42m
5位 笹塚古墳(長崎県壱岐)	40m
(基壇約70m)	
鬼塚古墳(熊本県)	40m



鬼の窟古墳（左は墳丘、右は石室正面）



鬼の窟古墳 石室実測図「長崎県芦辺町文化財報告書 第4集」より

## (2) 磐井戦争および新羅との抗争

それでは、6基の巨大古墳を造ったのは、どのような勢力の豪族だったのでしょうか。壱岐の農業・漁業生産力だけでは巨大古墳は造れません。島の人々を古墳造りに動員すれば、生活のための農業・漁業生産に支障をきたします。巨大古墳を造ることができた豪族の出現、その背景を国内外の情勢から考えてみましょう。

6世紀初めのヤマト政権は内紛状態にあって、『日本書紀』によれば大連の<sup>おおむらじ</sup>大伴金村らが越前国（一説に近江国）から<sup>おおとも</sup>応神天皇の子孫である継体天皇を迎え皇位に就けたとあります。大連とは天皇側近の軍事司令官と解釈しておきます。当時大連はもう1人いて、<sup>もののべあらかひ</sup>物部麁鹿火といました（天皇という称号は7世紀以降で、「大王」のほうが史実と思われませんが、ここでは『日本書紀』の記述どおりとします）。

そうしたヤマト政権の不安定な情勢もあってか、九州では<sup>つくしのきみいわい</sup>筑紫君磐井という豪族が勢力を伸ばし、朝鮮半島の<sup>しらぎ</sup>新羅と結んで交易・交流の主要ルートを掌握したらしいのです。6世紀に入って、新羅は軍事・行政組織を整え、西の百済や南の<sup>から</sup>加羅諸国に攻勢をかけてきました。527年（継体21）、ヤマト政権は新羅を攻撃するため、近江毛野臣に6万の大軍（大げさです）を授けて半島に渡海させようとしたのですが、磐井軍に妨げられました。

そのためヤマト政権は、大連物部麁鹿火を将軍とする討伐軍を派遣して磐井軍を討

ち破りました（磐井戦争）。磐井は生前から墓を造っており、それは八女市にある<sup>いわとやま</sup>岩戸山古墳とほぼ確定されています。墳丘の規模は150m近い前方後円墳で、北部九州最大のものです。

その勢力は<sup>つくし</sup>筑紫（福岡県地域）だけでなく、<sup>とよ</sup>豊の国（大分県・福岡県地域の一部）、<sup>ひ</sup>肥の国（長崎県・佐賀県・熊本県地域）にもおよんでいたらしい。ヤマト政権の地方支配は<sup>ゆる</sup>緩やかなものでした。

この戦争後もヤマト政権は新羅とたびたび対決しています。国づくりに必要な大陸・半島の制度・文化・技術を取り入れるためには、友好国である百済や加羅諸国を継続して支援しなければなりません。『日本書紀』が記す半島への派遣記事を上げてみると、次のとおりです。

515年 (継体9)	物部 <sup>むらじ</sup> 連、軍船500艘を率いて、直に(加羅の) <sup>たきのえ</sup> 帯沙江にいたる
527年 (継体21)	磐井戦争
529年 (継体23)	物部伊勢 <sup>ちちね</sup> 連父根・ <sup>きし</sup> 吉士老等を遣して(多沙)津を以て百済王に賜う近江毛野臣、使者として安羅にいたる
537年 (宣化2)	新羅が <sup>みまな</sup> 任那（加羅）に侵攻したため、大伴金村大連の子磐と狭手彦を派遣。磐は筑紫で政務を執り、狭手彦は任那を鎮め、百済を助ける

553年 (欽明14)	(百済の救援要請に対して) 救援軍1000、馬100匹、船40隻を送ろうとする
562年 (欽明23)	新羅、加羅諸国(任那)を滅ぼす
この年7月、大將軍紀男麻呂宿禰、副將河邊臣瓊缶、兵とともに半島にわたり、新羅の行動を詰問した	
この年8月、大將軍大伴連狭手彦、兵数万を率いて高句麗を攻撃(編纂時の誤りか)	
587年 (用明2)	仏教受容をめぐる蘇我・物部戦争で、物部大連守屋が滅ぼされる
591年 (崇峻4)	紀男麻呂宿禰・巨勢猿臣らを大將軍とし、2万余を授けて筑紫に下らせ、任那について使者を新羅に派遣
600年 (推古8)	境部臣を大將軍、穂積臣を副將軍とし、万余の兵をもって新羅を討つ
602年 (推古10)	来目皇子(聖徳太子の同母弟)を新羅征討の將軍となし、兵2万5千を授ける。来目皇子筑紫に到り、嶋郡(現・糸島市)に駐屯、船舶を集めて食糧を運ぶ。病により死去、河内国の岡の上に葬る
603年 (推古11)	来目皇子の兄の當摩皇子を新羅征討の將軍としたが、同行の妻死去により播磨から帰る

勿論、以上の記事がすべて史実というわけではありません。でも6世紀から7世紀初めにかけての新羅との抗争がある程度読み取れると思います。半島渡海の拠点は筑紫に置かれ、その「筑紫」は、現在の福岡県一帯の意味で使われるのが普通ですが、北部九州を

さす場合も多いのです。兵站基地が設定されたであろう壱岐も、壱岐牛が「筑紫牛」の代表とされたように「筑紫」の範囲でした。来目皇子が嶋郡から食糧を運んだところは壱岐だったのではないのでしょうか。

少し気になっていることを付け加えます。

『日本書紀』応神紀に武内宿禰にからんで「壹伎直の祖眞根子」が登場しています。武内宿禰は新羅征討に関係の深い伝承の人物で、このとき筑紫視察に来ていましたが、謀反の疑いありと弟から讒訴され殺されそうになりました。眞根子が言うには、自分はあなたに似ていると言われる、代わりになるから二心なきを明らかにしてほしい、と自死しました。亀卜神事と関係深く中央に進出した壱岐直ですが、ちょっと気になっています。

### (3) ヤマト政権と古墳を造った豪族の関係

遠征軍を派遣するには、それだけの兵員や輸送船団の確保、造船・兵器製作のための技術者が必要で、壱岐はそのためにヤマト政権が設置した兵站基地ではなかったかと考えられます。当然全体を指揮する將軍もヤマト政権の意を受けて派遣されてきたでしょう。それが畿内あるいは北九州から来た豪族だったとしても、壱岐に根をおろして伊吉氏を名乗った可能性があります。壱岐土着の首長が壱岐県主・壱岐直を称したのに対し、彼(ら)は伊吉嶋造と称してヤマト政権との密接な関係を維持したのではないのでしょうか。第4章に登場する伊吉博徳、雪宅麻呂



物部布都神社（跡） 壱岐市発行「壱岐事典」より

はこの系譜の人物と思われ、『新撰姓氏録』  
（古代の氏族名鑑）では「諸蕃」、すなわち  
渡来人系統になっています。

半島情勢をみると、この後も新羅は加羅  
（任那）諸国を圧迫し、562年には滅亡させ  
てしまいます。これに対し、欽明はじめ歴代  
天皇が「任那」回復に非常に執着していた  
ことが『日本書紀』に記されています。

以上のストーリーを壱岐古墳群に当てはめ  
てみましょう。まず対馬塚・双六という6世紀  
後半の二つの前方後円墳については、ヤマト  
政権から派遣された将軍の墳墓とみるこ  
とができそうです。壱岐に「物部」の地名が残  
ることから、もしかしたら物部氏の一族か配  
下の豪族かもしれません。その後6世紀末~7  
世紀初の20・30年間に造られた4基の円墳  
は、前方後円墳が造られなくなった畿内の古  
墳造営情況に符合しますし、それらの横穴式  
石室が、前室・中室・後室からなる3室構造と  
いう北九州一部地域の古墳に共通する構造  
がみられることから、やはり派遣将軍系豪族  
の可能性がります。

もっともこうした大規模な兵站事業には原

の辻以来の地元首長も協力したでしょうし、  
4基のうち1・2基は壱岐直の墳墓とみることも  
できるでしょう。古墳造営に動員された人員  
は、数百人、ときに千人をこえるヤマト政権軍  
の兵站基地を念頭におけば無理なく理解で  
きそうです。壱岐自身食糧生産力があります  
し、北九州本土からの輸送も可能です。将軍  
配下の指揮官・将校クラスの墓と思われるも  
のも百合畑古墳群等として存在しています。

一般に古墳の副葬品は、盗掘によって持ち  
去られていることが多いのですが、壱岐古墳  
群の場合横穴式石室を調査した結果、盗掘  
を受けていたにもかかわらず笹塚古墳・双六  
古墳からは写真に見られる貴重な馬具類や、  
多数の大陸・半島系の陶器が出土し、一括し  
て国の重要文化財に指定されました。

とくに双六古墳出土の「<sup>にさい</sup>彩陶器」  
（<sup>はくゆうりよくさいわん</sup>白釉緑彩碗）の破片は、専門家の調査  
によれば中国北齊（550~577）の時代に作  
られた珍しいもので、そうだとすれば北齊  
との交流で入手した百濟・新羅あたりから  
もたらされたと考えられます。双六古墳の  
被葬者はそうした宝物を副葬できる立場に  
あったということです。



笹塚古墳出土 金銅製龜形飾金具 (左) 金銅製杏葉 (右)



双六古墳出土 二彩陶器 (左) 新羅土器 (右)

## ④ 白村江の海戦と金田城

### (1) 白村江海戦にいたる半島情勢

百済は唐の攻撃を受けて660年に滅亡、なお、日本は百済救援を続けましたが、663年白村江の戦で唐・新羅の連合軍に敗れました。この後、日本は軍事的には半島から完全撤退しました。ここに至る経緯をもう一度ふり返ってみましょう。地図を時代順に添えますので、合わせて見てください。

まず、三国時代の始まりからです。北方の精強な騎馬軍団を持つ高句麗が313年に楽浪郡を滅ぼした時、南の帯方郡も機能停止状況になりましたが、漢人勢力は存続しました。それも5世紀初めには百済によって攻略され、更なる高句麗の南下で帯方郡は完全に消滅してしまいました。高句麗の南下圧力は続き、475年に百済は王都を漢城（現・ソウルの南部）から熊津（現・公州市）に移しました。

その後新羅の国力が伸張すると、新羅と百済の対立が激しくなりました。百済はヤマト政権との親交をさらに深め、一方で新羅は高句麗に接近してこれに対抗しました。百済聖明王は、538年に王都を南の泗泚（扶余）に移しましたが、この538年は日本に仏教が公式伝来した年です。

新羅が強大となり、562年に加羅諸国を滅ぼしたことは3で述べたとおりです。今度は百済が高句麗と結べば、旧百済王都の漢城地域に進出していた新羅は、618年に興った中国の唐王朝に通じて対抗しました。ここに、日本・百済・高句麗と唐・新羅が対立すると

いう構図が生まれました。

こうした東アジアの情勢を反映した遺跡が対馬比田勝の南にあるコフノ際遺跡です。津和浦に突き出た岬にある古墳時代の箱式石棺群で、5世紀から7世紀までの土器が出土しています。発掘報告書によれば、第Ⅰ期は5世紀前半の加耶（加羅）式土器系統、第Ⅱ期は5世紀後半の百済系土器、第Ⅲ期は6世紀半ばから後半の古新羅系土器、第Ⅳ期は6世紀末から7世紀前半の新羅系土器が出土し、第Ⅴ期7世紀後半になると日本産須恵器だけになってしまいます。

これらの墳墓から出土した土器は、そこに葬られた人とその周囲の人々が行っていた朝鮮半島との交流・交易をあらわしていると考えれば、半島では加耶（加羅）・百済が衰退し、新羅が台頭したことを反映しているとみてよいでしょう。最後の第Ⅴ期が日本産須恵器だけというのは白村江海戦後の状況を示しているのです。

その白村江海戦では安曇比羅夫率いる日本の水軍が、劉仁軌配下の唐の水軍に完璧なまでに敗れました。おぼれ死ぬ者多し、と『日本書紀』は伝えています。

### (2) 金田城造営

白村江海戦の翌年（664年 天智天皇3年）日本は唐・新羅の攻撃に備えて、大宰府防衛のためその前面に水城を築き、北に大野城、南に基肆城を築きました。これらは遺構が残っています。大野城の発掘では、城

門の一つからコウヤマキの門柱が出土しています。この筏穴があるコウヤマキは高野山から切り出して紀伊の有田川を下り、大野城まで運ばれたわけです。国を挙げての事業であることが実感できるでしょう。

長門国にも城を築いたと『日本書紀』にあります<sup>が</sup>、いまだ遺構は確認されていません。また、防人の配置、烽火の整備もこの年です。壱岐には数十人、対馬には百数十人の防人が配置されたようです。防人は逃亡を防ぐため東国から連れて来られました。

さらに667年、大和国高安城、讃岐の屋島城、そして対馬金田城が築かれました。大野城・基肆城も合わせて、いずれも朝鮮(百濟)式山城と総称されるもので、百濟からの亡命将軍・技術者の指導による築城とされています。その後実際には唐と新羅が対立して、日本攻撃の余裕はなく幸い<sup>きゆう</sup>紀憂に終わりました。朝鮮式山城の分布については地図を見てください。

さて対馬金田城ですが、その遺構は対馬で「黒瀬城山」と呼ばれ、1962年に「対馬城山」として長崎県の史跡に指定されていました。その後調査が進み、1982年には「金田城跡」として国の特別史跡になりました。いきなり特別史跡指定は稀有なことです。『日本書紀』の「金田城」が「黒瀬城山」であると確定され、また遺構もすばらしくよく残っていたからです。

金田城は、浅茅湾南部の箕形浦と黒瀬浦に挟まれた通称城山(276m)に築かれています。写真を見てください。山頂からは浅茅湾一帯が眺望され、気象条件がよければ湾口の向こうに朝鮮半島を見ることもできます。対馬第一の絶景と言っても過言ではありません。そうした場所はたいがい軍事上のとなっていて、城山山頂付近にも旧陸軍の砲台跡が残っています。西の箕形側は絶壁になっており、遺構は黒瀬側に集中しています。海岸部には大吉戸神社(式内社)が鎮座し、入江の



古代山城「天智紀」(7世紀後半)山城分布図

奥に向かって一ノ城戸、二ノ城戸、三ノ城戸、南門が並び、水門跡（排水遺構）や門の礎石が残っています。とくに二ノ城戸、三ノ城戸、南門には柱穴のある門礎石があります。

山腹には、地元にある石英斑岩を切り出して積み上げた石塁がおおよそ2.8kmも廻っています。高さは2mから5mくらい、これが667年に築かれたものです。写真をご覧ください。そして実際に現地を見ると、史跡指定を飛び越えて特別史跡となったことが実感できるでしょう。幸いというか、現在も砲台を造営するために切り開かれた明治後期の軍用道があって、石塁などを観察しながら1時間ほどで山頂に着きます。

近年は発掘調査も進み、「ピングシ山」と呼ばれる80mほどの小高い山の斜面では、防人が住んでいたと思われる住居跡、使って

いたらしい7世紀代の須恵器なども発見されました。調査は、古代史・考古学の専門家である八木充先生・小田富士雄先生・坂上康俊先生らの指導のもとで進められ、『金田城跡』という一連の報告書が出されています。

『万葉集』巻14東歌「相聞」のところに「対馬の嶺は 下雲あらなふ 上の嶺に たなびく雲を 見つつ偲はも」（3516）とい

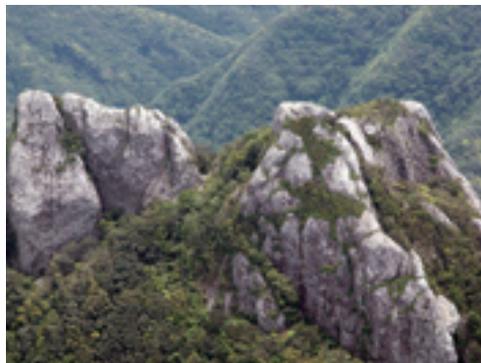


黒瀬城山々頂から見た浅茅湾 湾口の向こうは半島



石英斑岩の城壁 金田城

う歌が収録されています。対馬の山には低い雲はかからない、山の上にたなびいている雲を見てあなたを偲ぼう、という意味ですが、東国から対馬に来た男、おそらく防人の歌でしょう。



霊峰白嶽 対馬市美津島町 画像提供：國分英俊氏

## コラム 対馬の郷土料理「石焼き」と石英斑岩

最初にこれを食べたとき、何か違和感があった。新鮮なタイやヒラスの刺身を、何故わざわざ、炭火で熱した石の上で焼いて食べなければならないのか。そうは思いながらも、タマネギ・ピーマン・キャベツなどの野菜といっしょにタレに漬けて焼く石焼き料理はおいしかった。

もともと、野趣あふれる漁師の浜料理が起源らしい。新鮮な刺身なんて食べ飽きている人たちにとっては、変わった食べ方をしたかったのだろう。

ところで、七輪の上に置く平たい石は石英斑岩である。根緒の料理屋の女将が、石焼きに使える形のよい石は少ない、うちは海岸を探して確保していると言った。でも、石英斑岩が貫入している地域は美津島町から巖原いずはらにかけて広がっており、海底で荒波にも



画像提供：対馬観光物産協会

まれて角が取れ、いい形になった石はたくさんあるようだ。女将は石焼きに付加価値を付けたかったのかもしれない。

小さな話題を壮大に展開すると、対馬の霊峰れいほうとして名高い白嶽、あの尖った白い峰も石英斑岩なのである。

第3章

# 壱岐・対馬の 式内社と 航海神



式内社とは、10世紀初めに作成された「延喜式神名帳」記載の神社をいいます。神名帳記載の神社は全国で2861社、神の数は3132座で、平安時代中期における社格といえるでしょう。大和（286座）・山城（122座）など畿内に多いのは当然として、九州本土をみると式内社は計54座、これに対して壱岐は24座、対馬は29座あって、合わせると、ほぼ九州全体と同じです。なぜ、壱岐・対馬に式内社が多いのでしょうか。

ちなみに肥前国は4座、うち長崎県本土の式内社は平戸の志々伎神社1座だけです。

## ① 壱岐の式内社

### (1) 式内社神口密度は日本一

壱岐の式内社は24社24座、面積はおよそ136km<sup>2</sup>ですから1座当たり5.7km<sup>2</sup>です。式内社が多い国は五畿（畿内）の山城・大和・河内・和泉・摂津ですが、これらの国々より実は壱岐の方が式内社の密度は高いのです。

もっとも、ずば抜けて多い大和の式内社は286座、それも奈良盆地から飛鳥地方に集中しています。しかし、大和の約3分2は吉野から大峰の山地が占めており、そこには式内社は少ないので、結果として大和全体では1座当たり10km<sup>2</sup>をこえます。ちょっと苦しい計算かもしれませんが、数字的には壱岐が日本一の式内社神口密度ということになるのです。壱岐に次いで密度が高いのは河内で、113座、678km<sup>2</sup>で、1座当たり6km<sup>2</sup>です。日本一がアブナイところでした。

さらに、壱岐の24座のうち名神大社が、住吉神社、兵主神社、月読神社、中津神社（以上壱岐郡）、天手長男神社、天手長比売神

社（以上石田郡）と6座もあります。ちなみに式内社が29座ある対馬の名神大社も6座です。名神大社とは、とりわけ神威が強いとされた社格の高い神社のことです。『延喜式』（神名帳）の壱岐式内社を見てください。



<延喜式神名帳 壹岐嶋>

壹岐郡十二座 大四座 小八座

(およそ勝本町と芦辺町の範囲)

水神社	阿多弥神社
住吉神社 名神大	兵主神社 名神大
月讀神社 名神大	國片主神社
高御祖神社 <small>たかみおや</small>	手長比賣神社 <small>たながひめ</small>
佐肆布都神社 <small>さしふつ</small>	佐肆布都神社
中津神社 名神大	角上神社 <small>つのかむ</small>

石田郡十二座 大三座 小九座

(およそ石田町と郷ノ浦町の範囲)

天手長男神社 名神大	天手長比賣神社 名神大
弥佐支刀神社 <small>よささきと</small>	國津神社
海神社 大	津神社
與神社(興神社?) <small>よ</small>	大國玉神社
余自神社 <small>よじ</small>	見上神社
國津意神社 <small>くにつ</small>	物部布都神社 <small>ものべふつ</small>



月読神社 壹岐市芦辺町国分東触

(2) 記紀にみる壹岐の神々

もう一つ、記紀神話と壹岐の神々の関係にも触れておきます。『古事記』に載っているイザナギ・イザナミの国生み神話では、最初に淡路島が生まれ、続いて四国、隠岐島、筑紫島(九州)が生まれました。5番目に生まれたのが伊伎島で、さらに津島、佐渡島、秋津島と生まれて大八洲おおやしまがそろいました。つまり日本です。このうち淡路島、隠岐島、佐渡島は、奈良時代にはいずれも1つの「国」になっており、壹岐島、津島(対馬)は国に準じる「島」という行政単位になっています。

この後、イザナミは火の神を生んでから黄泉の国(死の世界)に入ります。これに対し、恋しさのあまりイザナギが会いに行き、見てはいけないというタブーを破ってイザナミの姿を見てしまいました。イザナギは怒ったイザナミ追いかけられ、黄泉比良坂よもつひらさかを抜けて、この世に逃げ帰りました。戻ったイザナギが穢れを洗い浄めることで神々が生まれるのですが、左の目を洗ったとき生まれたのが天照大神、右目を洗うと月読命つくよみのみこと、鼻を洗うと須佐之男命すきののおのみことが誕生しました。そしてイザナギは天照大神に高天原の主宰を、月読命には夜の世界を、須佐之男命には海を支配するよう命じたのです。

すでに名神大社のところであげたように壹岐には月読神社が鎮座しており、『日本書紀』けんぞう 顕宗天皇紀にも壹岐の月読神の分霊が山城国葛野かどのに祀られたとあります。月読神の本社は壹岐かもしれません。

## コラム 山口麻太郎と松永安左衛門

江戸時代になって『古事記』・『日本書紀』、神道譜に詳しい神官(国学者)が新たに式内社を検討して比定したため、古代の神社と現代が一致しないところもある。現在の香岐式内社は、橘三喜たちばなみつよしという神官が1676年(延宝4)に平戸4代藩主鎮信の命を受けて比定したもので、香岐のことを十分調査したわけではない。式内社の異説については香岐を知り尽くした山口麻太郎先生が『式内社調査報告 西海道』にまとめて記載しておられる。



先生は、柳田国男・折口信夫しのぶとも親交のあった高名な民俗・歴史学者であった。柳田・折口書簡や三木露風の手紙が段ボールに一箱あったが、里舂さとぶねの自宅火災で焼失した。まことに惜しい。

山口先生は終生、電力の鬼・松永安左衛門翁への感謝と敬愛の念を持ち続けた。翁から郷土香岐の研究を続けなさい、と援助してもらったことを最晩年に語ってくれた。このお二人、香岐はもっと「活用」した方がいい。



勝本聖母宮は、式内社名神大社のどれかに当たると考えられる

## 2 対馬の式内社と古代の神事・祭祀

### (1) 対馬の式内社

#### <延喜式神名帳 対馬嶋>

上縣郡十六座 大二座 小十四座

(およそ豊玉町、峰町、上県町、上対馬町の範囲)

和多都美神社 名神大	嶋大國魂神社
能理刀神社	天諸羽命神社
天神多久頭多麻命神社	宇努刀神社
小枚宿弥命神社	那須加美乃金子神社
伊奈久比神社	行相神社
和多都美御子神社 名神大	胡祿神社
胡祿御子神社	嶋大國魂御子神社
大嶋神社	波良波神社

下縣郡十三座 大四座 小九座

(およそ美津島町、厳原町の範囲)

高御魂神社 明神大	銀山上神社
雷神神社	和多都美神社 名神大
多久頭(魂)神社	太祝詞神社 名神大
阿麻氏留神社	住吉神社 名神大
和多都美神社	平神社
敷嶋神社	都々智神社
銀山神社	

対馬の神道はとりわけ深遠ですので、名神大社を中心に、その他もいくつか紹介したいと思います。まず和多都美神社ですが、御子神社も入れて上県郡に2座、下県郡に2座あって、うち3座が明神大社になっています。現在の対馬で確実に比定されるのは、仁位の和多都美神社でしょう。対馬海民による海民のための神社、江戸時代は渡海宮と呼ばれていました。ここからは永留久恵先生の謎解きを引用させていただきます。

[永留説]

八幡宮文書の文永四年(1267)、「寺社僧徒等免行事」の注申(進)状に、下県と上県の主要な寺院と神社を列記したなかで、下郡筆頭は八幡新宮、上郡筆頭は八幡本宮とある。下郡はこれに高御魂宮、加志宮、住吉宮、銀本宮、日吉宮が続くが、上郡は和多都美宮と宗形宮だけである。(中略)上郡には本来、明神大社は和多都美と和多都美御子だけなので、これで上・下の名社が揃ったわけだが、これに見えないのが上郡の和多都美御子神社と下郡の和多都美神社で、なぜこの上・下郡の明神大社がないのかを考えた。

つまり、上郡の筆頭「八幡本宮」が、本来は和多都美御子神社で、下郡の筆頭「八幡新宮」が、和多都美神社であることが自明となった。(『対馬国志』より)

もともと対馬には八幡宮は鎮座していませんでしたが、平安後期から鎌倉時代に外敵防御のために、豊前宇佐か博多箱崎から勧請され、蒙古襲来(文永の役)前には、八幡本宮・新宮として上県郡・下県郡の中心に位置していました。八幡宮文書に記された神



故 永留久恵 氏

社は、高御魂宮が豆殿鎮座、加志宮が太祝詞神社ですから、上県郡の和多都美御子神社と下県郡の和多都美神社を除けば明神大社4社が揃って記載されています。そうすると、上県郡の和多都美御子神社に八幡本宮が、下県郡の和多都美神社に八幡新宮（厳原）が鎮座したと解釈すれば、すべて氷解するわけです。現在の木坂海神神社は、かつて対州一の宮、上津八幡宮と言われていました。下県郡にあったもう一つの和多都美神社の所在には諸説あります。

住吉神社は次節3の「海北道中」で述べるとして、加志の太祝詞神社を簡単に説明します。

壱岐・対馬には亀の甲羅を焼いて吉凶・世の動きを占う「亀卜きぼく」が行われてきました。対

馬では、佐護と仁位の和多都美神社、阿連あれの雷命神社とともにここでも亀卜が伝えられていましたが、現在は豆殿まめどの（後述）を除いて絶えています。海岸から少し離れたところに鎮座する太祝詞神社は古木・銘木に囲まれた大変趣のある神社です。

次に、豆殿の高御魂神社ですが、『古事記』・『日本書紀』でいう「タカミムスビ」即ち皇祖神に当たるとい説があります。元は海辺の森に鎮座していたのが、中学建設のために多久頭魂神社境内に移されました。また、(小)船越あまてるの阿麻氏留神社は『日本書紀』顕宗天皇紀に出てくる「日神」ではないかとされ、対馬下県直あたいくにのみやつこ（国造）が大和国に出仕して「高皇産靈たかみむすび」を祀ったという記事が見えます。日神、高御魂、どちらも皇祖神に



太祝詞神社 対馬市美津島町加志  
上は本殿、下は境内

阿麻氏留神社 対馬市美津島町小船越  
上は鳥居、下は拝殿

つながります。

佐護と豆殿の多久頭魂神社は、背後の山そのものがご神体で、麓には遙拝所ようはい（拝殿）があるだけという古来の神社の形体をよく残しています。対馬には人が入れない神域（茂地）が各所にありました。

銀山神社、銀山上神社が、佐須郷の「銀」=「調みつぎ」産出に関わる神であることはいうまでもありません。



銀山神社 対馬市厳原町檜根

## (2) 古代・中世が息づく神事・祭祀

対馬の南端部に豆殿つづという集落があります。気候は温暖で農業に適し（豆殿ミカンを栽培）、沖合の海域は大変な好漁場ですから、豆殿の里人は経済的にも精神的にも豊かな安定した環境にあったと思われます。

対馬の南端部だけに近世・近代期も府中（厳原城下）から陸路は遠く、独特の古俗や豆殿言葉が変わらず伝えられました。古俗については以下に述べるとして、豆殿言葉の響きは優しく、また古い都の表現が残っています。福岡県などの影響を受けた府中城下や、とくに近世・近代に鯛・鯛・鯖・イカなどを求

めて近畿・瀬戸内地方や島原半島から移り住んだ海岸集落の人々とは随分と違います。

さて、古俗の代表「亀卜」は前項でも触れたように、仁位の和多都美神社の神官長岡氏、加志の太祝詞神社の橋氏（加志氏）、阿連の雷命神社の橋氏などによっても受け継がれていたのですが、現在は豆殿の雷神社祈年祭において旧暦正月3日、「亀卜伝義抄」を伝える岩佐家を中心に行われています（「対馬の亀卜習俗」国選択無形民俗文化財）。古代律令国家の祭祀として、対馬の他に壱岐・伊豆からも卜部が都に出仕していました。卜部については次章「遣唐使」のところで再度出てきます。鹿の肩甲骨で占う鹿卜資料は日本各地の遺跡から出土しているのに対し、亀卜は極めてまれで、朝鮮半島から対馬・壱岐に伝わったか、あるいは直接中国から伝播したとも考えられます。

次に赤米神事、国選択無形民俗文化財としては「豆殿あかまいの赤米行事」です。その起源は古代にさかのぼり、神田で作った稲を神に供え感謝する神事であったと思われます。神田では不浄の肥料を使わずに「赤米」（種籾は厳重に管理）が栽培されてきました。

その後中世になって天童てんどう法師信仰と結びつき、一連の行事も村落祭祀集団が行うようになりました。中心は頭仲間とうと呼ばれる組織で、頭主が1年交代で神田（寺田）を耕作し、行事の世話役を勤めます。年間の主な行事は、田植え～[栽培・収穫]～おつりまし（陰曆10月17日新穀を俵に詰めて頭主の家の座敷

の天井につるす)～初穂米(陰暦10月18日新穀を炊いて供える)～頭受け(陰暦正月10日頭主の交替、神霊が宿った米俵を背負って次の頭主に渡す)などがあります。頭主になる人は潮あび・家祓やばらいをして浄めておかなければなりません。

このように古代・中世の祭祀形態を伝える極めて貴重な「赤米行事」ですが、困ったことに現在は頭仲間が主藤家すとう(主藤公敏氏)だけになり、行事の存続が危うくなっています。

なお、炊いた赤米はバサバサしておいしくありませんが、歴史のエキスがたくさん詰まったお米です。



対馬の赤米神事 赤米の籾を詰めた俵が御神体 画像提供：國分英俊氏



赤米新田 対馬市巖原町豆酸



対馬の亀ト習俗

## コラム 美女塚伝説

権力者(殿様)が美女に横恋慕<sup>よこれんぼ</sup>して悲劇の結末、という伝説・昔話は日本各地に残っている。いや世界各地だろう。山口にもあった。姫山<sup>ひめやま</sup>という山に因<sup>ちな</sup>んだ伝説で、私は美人に生まれたためにこのような目に遭<sup>あ</sup>う、今後山口には美人は生まれないように、と言い残して自死した。なるほど、だから山口には美人がいないのかと変に納得したような、しないような。人吉の例では、反対に殿様をやっつける、たくましい知恵者の美女もいた。

ところで、古来美人の里として名高い豆酛<sup>まめ</sup>の美女塚伝説はこうだ。昔、鶴王御前という美女がいた。彼女は年老いた母と暮らしていたが、采女<sup>うねめ</sup>(官女)として朝廷に召し出されることになり、悲しみのあまり自ら命を絶った。その際、今後豆酛の里には美人が生まれないようにと言い残したという。さすがは豆酛、古代にさかのぼる伝説である。保床山古墳<sup>ほとこ</sup>の存在は采女を差し出した郡司<sup>ぐんじ</sup>クラスの豪族がいたことを裏付けている。その後、豆酛の娘は美人に見られないよう継ぎはぎ<sup>かすり</sup>の緋(ハギトウジン)を着たとか。



対州馬に乗る女性

### ③ 海北道中～筑前・壱岐・対馬・半島～

#### (1) 渡海の難儀と神の靈力

九州本土の式内社は54座、うち名神大社は23座、そのうち筑前国には式内社が19座、名神大社16座ですから、多くは九州北部の筑前国に集中していることがわかりでしょう。具体的には、宗像神社、筥崎宮、住吉神社、志賀海神社など著名な神社が名神大社として並んでいます。筑前国から北上し、壱岐・対馬を経て朝鮮半島に至る、この日本と大陸を結ぶルートは、古代において、とりわけ重要視されていたわけです。

平時の交易・交流、戦時の緊張、どちらをとっても人々は船に乗って玄界灘・対馬海峡を移動します。まず航海の障害となるのは、玄界灘の荒波、南西から北東方向へ流れる対馬海流でした。対馬や朝鮮半島を目指していても、ヘタをすると日本海に流されてしまいます。とりわけ北東風が強いと、対馬海流の海域では三角波が立ち、逆に南西の風が強いと流される危険性が高くなるでしょう。したがって、風向・風力などの気象予測ができ、潮の流れを熟知した海の民の存在が欠かせません。

奈良時代のことですが、761年に藤原仲麻呂(恵美押勝)が新羅征討計画を立てたとき、水夫7520人のうち2400人を肥前国に、さらに200人を対馬に割り当てています。対馬の海民に水先案内を期待したのでしょうか。

さらに、神の靈力の後押しも必要と人々は考えました。玄界灘に浮かぶ宗像沖ノ島祭祀遺跡はそれを証明しています。4世紀後半か

ら9世紀にかけての祭祀関連の遺物が巨岩の上や岩陰などにあつて、約8万点が国宝に指定されており、一連の神社・祭祀遺跡等が「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」としてユネスコ世界文化遺産を申請し、総会で承認されました。

また、外敵を防ぐにも当時は神の靈力が欠かせません。時代は下りますが、元寇に際して京都の朝廷・貴族が敵国降伏を神仏に祈ったことを思い出してください。博多の筥崎宮楼門には「敵國降伏」の扁額が掲げられています。

以上、航海安全・外敵防御の点から、壱岐・対馬に式内社が多い理由をご理解いただけたと思います。

#### (2) 航海神と渡海ルート

式内社のうち、主な航海神と神社をあげてみましょう。

- 住吉三神すみよし…底筒男そこつつのお、中筒男なかつつのお、表筒男うわつつのお
  - ・住吉大社、長門住吉神社、博多住吉神社、壱岐住吉神社、対馬住吉神社
- 綿津見三神わたつみ…底津綿津見そこつ、中津綿津見なかつ、上津綿津見うわつ
  - ・志賀海神社(博多湾)、壱岐海神社、対馬和多都美神社(浅茅湾渡海宮)
- 宗像三女神むなかた…田心姫たごりひめ、湍津姫たぎつひめ、市杵島姫いちきしまひめ
  - ・宗像大社 辺津宮、同 中津宮(大島)、同 沖津宮(沖ノ島)



航海神（住吉神・名神大社）分布図



紫の瀬戸 右岸に住吉神社



吉岐 住吉神社 吉岐市芦辺町住吉東触



航海神（綿津見神・宗像神）の分布



和都美神社 対馬市豊玉町仁位字和宮

航海神古社の鎮座地をたどると、およその渡海ルートが見えてきます。

住吉ルートが一番わかりやすく、現在の大阪住吉から瀬戸内海を西へ、関門海峡を通過して、筑前博多湾から壱岐、そして対馬東海岸を北上して朝鮮半島へ向かうものです。住吉大社は神功皇后伝説に関する伝承を持ち、ヤマト政権の軍事行動、国家事業と結びついていたと思われます。

対馬の東岸には、式内社名神大社に比定された<sup>けち</sup>鶏知の住吉神社の他にも紫瀬戸の住吉神社など古社がいくつか鎮座しており、住吉ルートを補強しています。住吉の古社は海上交通の要衝に鎮座しているとみてよいでしょう。ついでながら、神の名が「筒」とい

ことから、住吉神の起源は対馬の豆敷ではないかという説（『住吉大社史』）がありますが、豆敷に住吉神社はありません。

次に、綿津見は海民集団の神ですから、航海においても平時の交易・交流と密接な関係にあったのではないのでしょうか。それは、おそらく弥生時代にさかのぼる交易ルートで、半島南端の<sup>ろくとう</sup>勒島遺跡など～対馬国の三根湾・浅茅湾～一支国の原の辻遺跡～奴国の板付遺跡のことは第1章でご説明しました。それを綿津見神社の鎮座地と照らし合わせると、総本社である<sup>しか</sup>志賀海神社から壱岐（場合によっては糸島・唐津へ寄って壱岐）を経て対馬へ渡るルートと重なります。壱岐

海神社は大社ですが、名神大社ではありません。でも壱岐には名神大社「中津神社」がありますので、これを綿津見系の中津宮と考えることもできるでしょう。対馬では浅茅湾から西岸を北上し半島南岸に至るのですが、その浅茅湾に入るルートは二つ考えられます。一つは豆酩崎を西に回って浅茅湾に入る、もう一つは船越を利用する、すなわち東西に船を準備しておく方法です。これについては次章で述べるとして、三根湾口に近い現・海神神社（旧対州一宮、八幡本宮）を式内社名神大社の和多都美御子神とする永留久恵説が有力ですので、綿津見ルートの存在がより鮮明に浮かび上がってきます。最後に、宗像ルートですが、筑前宗像から大島、沖ノ島、さらに対馬北東岸に至り、新羅方面へはそのまま北

上、加羅・百濟方面へは北端の豊・鰐浦<sup>とよ わにうら</sup>を西回りして、佐須奈あたりから半島を目ざします。このルートは胸形氏<sup>むなかた</sup>という筑前北部の古代豪族が主として掌握していました。つまり、航海神・宗像三女神は地方神からヤマト政権が祀る国家神に昇格したと考えられます。なお、対馬海流を考慮したとも考えられる対馬北端西回りは住吉ルートも同じです。

蛇足ながら一言。日本三景である瀬戸内海の安芸の宮島は有名です。あの神社は、宗像三女神のうちの市杵島姫<sup>いちきしまひめ</sup>を祀っていることから巖島神社<sup>いつくしま</sup>といい、海中の鳥居が印象的です。一方、対馬浅茅湾の和多都美神社<sup>わたつみ</sup>も同様に海中に鳥居がありますが、別系統の航海神であり、言わせてもらえば、対馬の和多都美神社の方が歴史は古いのです。

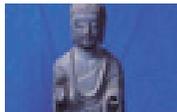


壱岐より宗像沖ノ島をのぞむ【2017.12.05 一支国博物館より撮影】

第4章

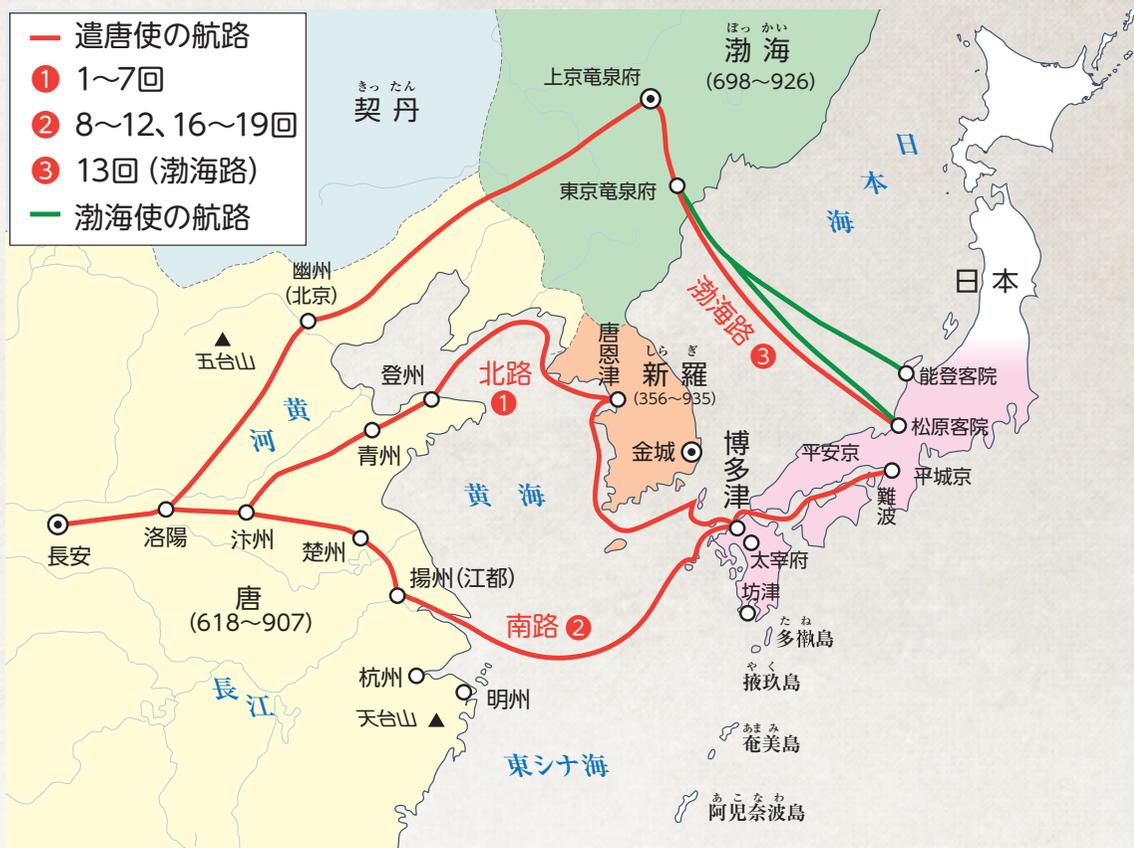
# 遣唐使船 航路の変更

北路から南路へ



日本は7世紀から9世紀にかけて、隋・唐の優れた律令制度、仏教、文化・芸術を学び、取り入れるために遣隋使・遣唐使を派遣しました。ここでは東アジアの国際情勢、外交にも触れながら、五島、壱岐、対馬との関係をみてみましょう。遣唐使船の航路が、北路から難破の危険が大きい南路に変わったのは、なぜでしょうか。また、あまり馴染みのない遣新羅使にも言及しますが、対馬の娘子「玉槻」とはいかなる女性だったのでしょうか。

### 8世紀の東アジアと遣唐使ルート



# ① 遣隋使・遣唐使の派遣

## (1) 遣隋使・遣唐使一覧

最初に、遣隋使・遣唐使を渡航年代、使人（大使など）、航路、その他の事項について、先学の著作・資料をもとに概観することにして、史料がはっきりしないものは省きます。

（遣隋使 略年表）

600年（推古8）	『日本書紀』に記載なく『隋書』倭国伝が出典 摂政は聖徳太子
607年（推古15）	小野妹子 隋使 裴世清らと帰国
608年（推古16）	小野妹子 留学生 高向玄理 学問僧 旻ら渡隋
614年（推古22）	犬上御田歙 <sup>いぬがみのみたすき</sup> 以上【北路】那 <sup>な</sup> の津（博多）→壱岐→対馬→朝鮮半島西岸を北上→山東半島

（遣唐使 略年表）

630年（舒明2）	犬上御田歙 【北路】
653年（白雉4）	吉士長丹（大使）、吉士駒（副使） 【北路】 高田根麻呂（大使）、掃守小麻呂（副使）【?】薩摩竹島付近で遭難
654年（白雉5）	高向玄理（押使）、河辺麻呂（大使）、薬師恵日（副使） 【北路】2隻編成 ※高向玄理は唐で死去
659年（斉明5）	坂合部石布（大使）、津守吉祥（副使）、伊吉博徳 <sup>いぎのはかどこ</sup> （随員） 【北路】2隻編成 第1船は往路南海の島に漂着、大使ら殺される
665年（天智4）	守大石ら（送唐客使） 唐使 劉徳高 【北路】
667年（天智6）	伊吉博徳（送唐客使） 【北路】
702年（大宝2）	粟田真人（執節使）、高橋笠間（大使）、坂合部大分（副使） 【南路】4隻編成 山上憶良（少録）も乗船
717年（養老元）	多治比県守（押使）、大伴山守（大使）、藤原馬養（副使） 【南路】4隻 玄昉（学問僧）、吉備真備・阿倍仲麻呂（留学生）乗船
733年（天平5）	多治比広成（大使）、中臣名代（副使） 【南路】4隻 第4船帰路難破 玄昉、吉備真備帰国
752年（天平勝宝4）	藤原清河（大使）、大伴古麻呂（副使）、吉備真備（副使） 【南路】4隻 第1船帰路ベトナムに漂着、藤原清河・阿倍仲麻呂 ※鑑真和上来日（第2船に乗船）
759年（天平宝字3）	高元度（迎前入唐大使使）【渤海路】で入唐 ベトナムから長安に帰った藤原清河を迎えに行ったが、清河に帰国の許可下りず

777年(宝亀8)	佐伯今毛人(大使)… <sup>あいごた</sup> 五島の合蚕田まで来ながら、都へ帰る 小野石根(副使、大使代行)、大神末足(副使) 【南路】4隻 帰路第1船遭難、二つに裂け、別々に漂着 第2船薩摩国出水、第3船松浦郡橘浦に帰着 第4船済州島へ(新羅に善処依頼)
779年(宝亀10)	布施清直(送唐客使) 唐使 孫興進 【南路】
804年(延暦23)	藤原葛野麻呂(大使)、石川道益(副使) 【南路】4隻 最澄・空海・橘逸勢乗船 第1船対馬阿礼(阿連)に帰着、第2船松浦郡鹿島に帰着
806年	空海・橘逸勢の乗船、日本へ
838年(承和5)	藤原常嗣(大使)、小野篁(副使、下船) 円仁乗船 【南路】4隻 帰りは新羅船9隻を備 <sup>やと</sup> って帰る
894年(寛平6)	菅原道真(大使)…遣唐使廃止を上奏

〈東野治之『遣唐使船 東アジアのなかで』、『国史大辞典』など参照〉

南路は、那の津(博多)から平戸を経て、五島列島で順風を待って東シナ海へこぎ出し、中国長江付近に達するルートです。東寄りの風が吹いて一気に宇久島から船出した838年遣唐使の例(この時は帆柱を伐り、<sup>かじ</sup>舵を捨てて着岸、円仁『入唐求法巡礼行記』)もありますが、多くは青方湾、三井楽付近まで南下して風待ちをしたと思われます。

『肥前国風土記』松浦郡に、<sup>ちか</sup>値嘉(五島)には西側に船が停泊できる港が2ヶ所あ

る、一つは相子田の<sup>とまり</sup>停といい、20余りの船が停泊可能である、もう一つは川原の浦といい、10余りが停泊できる、遣唐使はこの港を出て、<sup>みみらく</sup>美弥良久の崎から出船して西(唐)を指して大海を渡る、とあります。風待ちをするためには、ある程度施設が整った港が必要でしょう。青方湾と川原の浦がそれに当たるとみて間違いありません。取引される物品もあったということです。アワビ・サザエなど海産物や、牛・馬の飼育が多いと『肥前国風土記』にありました。



青方湾(合蚕田、相子田)、奥に山王山  
新上五島町青方郷



川原の浦 五島市岐宿町川原



遣唐使関連地図1 (下五島エリア)



遣唐使関連地図2 (上五島エリア)

## (2) 遣唐使船の人々

### <乗員の構成>

#### ○遣唐使の四等官

大使、副使、判官、録事（公文書作成役）

#### ○『延喜式』（大蔵省式）によれば

- ・知乗船事（船団長）、船師（船長）、船匠（船大工）、柁師（かこ）、水手長、水手
- ・史生（書記官）、雑使、射手
- ・留学生、学問僧
- ・主神、医師（おんみょうじ）、陰陽師（うらべ）、卜部
- ・画師、音声長（楽長）、音声生
- ・玉生、鍛生（鍛冶職）、鑄生（鑄物師）、細工生

全員で500人前後と思われるのですが、半数は水手です。凧・弱風のときは彼らが櫓を漕いで進むのです。また、芸術、技術職の人々は唐の進んだ技術・手法を学ぶ一種の留学生でもあったでしょう。もう一件、壱岐・対馬は卜部の「ふるさと」であり、多くが畿内に呼ばれていました。遣唐使船にも乗った可能性があります。

### <入唐した著名な人物>

#### ○小野妹子

日出るところの天子、書を日没するところの天子にいたす、恙なきや…という国書を上程して、隋の皇帝を怒らせたときの遣隋使。

#### ○山上憶良

『万葉集』の和歌でも大変有名な「貧窮問答歌」は彼の作。貧しい民に寄り添ったこの歌は、筑前守在任（福岡県北部の行政長官）の体験から作られた。

#### ○吉備真備

留学生として儒学・天文学・兵学等を学び、帰国後は橘諸兄（たちばなのもろえ）に重用された。藤原仲麻呂が政権を取ると左遷され、遣唐副使として再度入唐。その後、恵美押勝（えみのおしかつ）（藤原仲麻呂）の乱鎮圧に功績があり、右大臣にまで昇任した。

#### ○阿倍仲麻呂

渡唐後大学で学んだ後に朝廷に使え、玄宗皇帝（げんそう）の信任も厚かった。帰国に際し流されてベトナムに漂着、長安に戻った。「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」（百人一首）は望郷の歌として有名である。

#### ○最澄

浙江省東部の天台（てんだいさん）山に学び、帰国後天台宗を開いた。

教義は法華経を中心として念仏、禪、密教に広がり、鎌倉新仏教の開祖は皆ここから出た。空海と同じ遣唐使船団で



〔伝教大師入唐帰国着船之地〕顕彰碑  
対馬市厳原町阿連

五島から渡唐し、帰路は対馬の阿連あれに着岸でんぎょうだいしした。伝教大師は最初の大師号。

#### ○空海

五島を船出した後、福州長溪県赤岸鎮に漂着。長安に行き、青龍寺けいりやうの恵果和尚から真言密教の奥義を授けられる。現代中国に真言密教は伝わっておらず、中国でも関心が高まってきた。長崎県下各地こうぼうだいしに弘法大師（お大師様）伝説が残っている。

#### ○円仁

最澄の弟子で、天台宗山門派の祖。838年実質最後の遣唐使船に乗り、五島宇久島から渡唐ようしゅう、揚州海陵県に着岸した。その後五台山等ごだいさんで修行、新羅海商の船で帰国までのおよそ10年じかくだいし間が『入唐求法巡礼行記』に記されている。慈覚大師。

<伊吉博徳> (出自は壱岐、生没年不詳)

『日本書紀』に「伊吉連博徳書に曰く」という資料が出てきます。伊吉博徳は大化改新後に外交官として活躍した人物で、遣唐使随員、送唐客使、遣新羅使副使を務めました。「博徳書」には、唐皇帝の「日本国の天皇、平安にますや不いなや」の問いに使人（遣唐大使）が「天地徳を合せて、自づからに平安な



三井楽（みみらくのしま）辞本涯の碑

ることを得たり」と答えるなどの対話が記されており、遣唐使の資料としても貴重です。このときの遣唐使一行は、唐の百濟くだら出兵が近いとして、洛陽に留められ、2年後の661年に帰国しました。

博徳は大津皇子の謀反に関与したとして中央政界から遠ざけられましたが、実務派外交官の実力から返り咲き、さらに唐の法制・制度に関する知識を評価されて大宝律令の編纂者に連なりました。

## コラム 福江島明星院の白鳳はくほう仏

福江島明星院に小さな「銅造如来立像」(国指定重要文化財)が鎮座しておられる。

『長崎県の文化財』には「やさしい慈愛あふれる表情には明るい童顔の白鳳仏の笑みをも読みとることができる」との解説があって、清楚・清新な白鳳仏が好きな人にはたまらない魅力があふれている。代表的な白鳳仏に法隆寺「夢違観音像」がある。

厨子ずしに書かれた墨書によれば1686年(貞享3)に当院隠居寺から移されたとあり、また左手先が失われているが、寺では薬師如来像と伝えられてきた。

白鳳仏制作の年代は7世紀後半から8世紀初め(飛鳥時代後半・奈良時代初め)、福江島が遣唐使船出の島ということのを合わせ考え、想像をたくましくすれば、遣唐使船に乗る誰かが、船出を前に航海の安全、無事の帰還を祈ったのかもかもしれない。彼が無事帰着したとしても、それは福江島ではなかったようだ。



明星院 銅造如来立像  
国指定重要文化財

## ② 遣唐使船の航路変更と国際情勢

### (1) 7世紀・8世紀の東アジア情勢

北路から南路への航路変更は、白村江の海戦後新羅との関係が悪化したためであると教科書にも記されてきました。また、日本に勝利した唐・新羅連合軍が、今度は朝鮮半島の支配をめぐる相争ったことは第2章の「金田城」のところで触れたとおりですが、これによって航路（北路）の安全が脅かされたから南路をとらざるをえなかった、とみる向きもあります。

ところが、この章の最後で述べる遣新羅使のルートは筑前、壱岐、対馬、朝鮮半島で、それも白村江海戦の後20回以上も派遣されており、新羅使もずっと日本にきていますから、航路変更、南路定着の理由が、今一つはつきりしません。そのあたりも含め、東アジアの国際関係を整理して考えてみましょう。

663年	白村江の海戦 日本・百濟軍、唐・新羅の連合軍に敗れる
668年	唐・新羅連合軍の攻撃を受けて高句麗が滅亡
672年	新羅、旧百濟駐在の唐軍を追放し、百濟の故地を併合
674年	唐、新羅に出兵するも失敗
675年	新羅、唐に謝罪
676年	新羅、朝鮮半島を統一（唐、領有を認める）
698年	震国（後の渤海国）建国
727年	第1回渤海使来る、翌年第1次送渤海使を派遣
733年	唐、新羅とともに渤海に侵攻を企てるが、大雪のため失敗

735年	唐と新羅の関係完全修復（唐の冊封体制下）
761年	惠美押勝（藤原仲麻呂）、渤海と結んで新羅征討を企画、渤海動かす

確かに日本と新羅の関係はよくありません。それに渤海までからんできました。渤海は、建国当初は特に国境を接している唐・新羅を牽制するため、日本との友好関係を重視して使節を送ってきたのです。こうした使節は平安時代まで200年間、30回以上続きました。

つまり7世紀後半から8世紀前半をおよそくると、日本と新羅は緊張・友好関係、新羅と渤海は緊張関係、渤海と日本は友好関係、渤海と唐は緊張関係、唐と新羅は緊張・友好関係、日本と唐は緊張・友好関係、ざっとこのようになります。つまり、国境を接している国同士には緊張があったのです。その後は、超大国である唐を中心に冊封体制が確立しました。

### (2) 南路は遭難多発

奈良時代の遣唐使船は4隻編成です。1隻でも無事帰還しなければ、先進文化取得の成果がすべて失われるから4隻派遣された、と言われてきました。とにかく往復とも船が皆無事だったのは2回だけという悲惨さです。

出航した後、北寄りの風が強くなれば目的の長江付近ではなく、南の福建地方やベトナム方面に漂着した船もありました。空海の乗

船は福建に到着しましたし、復路の場合も同じです。日本を旨とした藤原清河・阿倍仲麻呂が乗った船はベトナムに流されました。さらに台風や台風並みに発達した低気圧に遭遇すれば、破船・沈没となる危険があります。

歴史地図掲載の遣唐使の航路に「南島路」とあるのは、往路・復路で吹き流されて奄美諸島・琉球列島にやむなく寄港したものだという研究が有力です。わざわざ奄美諸島まで行って東シナ海を渡る利点はなく、とくに帰路なら北寄りの風に流されて奄美・琉球に着くことはよくあるでしょう。653年の例にあるように往路でも起こりえたということです。遣唐使乗員の中に奄美通訳がいるのは、それだけ漂着が多かったということでしょう。

結局のところ、船の構造が確かで、かつ季節風や潮流など気象に精通した乗員がいれば、遭難は大幅に減ると思われるのですが、そのあたりどうでしょうか。

遣唐使船の規模・構造については全く資料が残されていません。1隻当たり100人から120人が乗っていますので、かなりの大型船です。大型船は古来安芸国（現・広島県）で造られており、おそらく安芸に造船技術の集積があったのでしょう。遣唐使の帰路、用船が破損しているため唐で船を造ってもらうこともありました。日本側の船匠（船大工）も参加して唐の造船技術を学んだことと思われれます。

全く資料がないなかで、船の歴史に詳しい石井謙治先生は、宋の時代の貿易船が泉

州・寧波で発見・発掘された調査情報や、元の時代日本に向かう貿易船が韓国新安沖で沈没し、海底から発見・調査されている情報などから、全長30m、積載量150t、前後の帆柱に竹を編んだ帆（最近の研究では麻布の帆も）を装備した中国式ジャンクを想定しておられます。仮にそうだとすると、外洋航海は可能で、問題は気象情報ということになります。

北路の場合、壱岐・対馬の海民集団が気象情報に精通していることはこれまでも述べてきました。かつて5世紀ころ「倭の五王」は中国南朝に朝貢して官職を得たことが中国の史書に記されていますが、おそらく陸地を見ながらの地乗り航法（この場合は北路）で行ったものでしょう。

それでも、五島も含めた海民集団の気象知識はもっと評価してよいと思います。東アジア海域で交易が積極的に行われ始めた弥生時代から、海民集団に1000年近くの蓄積があるとすれば、安全航海が可能な確率は高いと思われます。彼らは中国大陸、朝鮮半島や奄美・琉球諸島と交易し、色々情報交換も行ってきたはずです。

では何故遭難が多発するのでしょうか。それは遣唐使の派遣が、唐への朝貢であり、正月（陰暦）に行われる皇帝の朝賀の儀式に参列することが大きな目的の一つでしたので、2ヶ月前後かかる長安までの旅程を考えれば、航海の時期は台風シーズンと重なります。日本側の都合で航海の時期を決めることはできません。長安までの往復旅費、滞在経

費は唐が負担しますので、早く到着することも、帰路に出航時期を大幅調整することもできなかったようです。特に帰路は、到達地である日本が中国大陸と違って小さいので、漂流・難破が多かったのではないのでしょうか。

これ以上は神様にすぎるしかありません。遣唐使船が船出をするのは（大阪）<sup>すみのえ</sup>住之江、そこの住吉大社の神官一族である津守氏が「主神」（神主）として遣唐使船に乗り込み、一心に航海の無事安寧を祈願したはずです。

### (3) なぜ南路に変更されたのか

日本と新羅に緊張関係があるとしても、新羅使、遣新羅使の往来が続いていたことはすでに述べたとおりです。遣唐使の略年表を見ると、667年（天智6）に伊吉博徳が送唐客使として渡航してから、702年（大宝2）に粟田真人が行くまで、34年間の空白があります。その間高句麗の滅亡、唐・新羅戦争がありますから、やはり航路の変更に影響したとみることもできそうです。

しかし、新羅が半島を実質統一した675年（天武天皇4）には遣新羅使が派遣され、その後毎年あるいは数年おきに奈良時代中期（740年くらい）まで派遣されていました。くどいようですが、実際の任命の年とその使人（大使）の名前だけ並べてみましょう。

675年（天武4）	大伴国麻呂
676年（天武5）	物部麻呂
681年（天武10）	采女竹羅
684年（天武13）	高向麻呂
687年（持統元）	田中法麻呂
692年（持統6）	息長 老
695年（持統9）	小野毛野
700年（文武4）	佐伯麻呂
703年（大宝3）	波多広足
704年（慶雲元）	幡文 通
706年（同 3）	美努浄麻呂
712年（和銅5）	道 首名
718年（養老2）	小野馬養
719年（同 3）	白猪広成
722年（同 6）	津主治麻呂
724年（神亀元）	土師豊麻呂
734年（天平4）	角 家主
736年（同 8）	阿倍継麻呂 …本章3で紹介
740年（同 12）	紀 必登
752年（天平勝宝4）	山口人麻呂
753年（同 5）	小野田守
779年（宝亀10）	下道長人

（『国史大辞典』「遣新羅使」の項より）

新羅は唐や渤海と戦時の関係がありましたから、日本に対しては下手に慎重な姿勢をとっており、日本の遣唐使船に対して妨害をするとは考えられません。新羅が朝貢形式から対等外交を主張するようになったのは唐や渤海との関係が落ち着いてからで、むしろ緊張が高まったのは後述する736年の遣新羅使の頃からです。

すると、南路への変更、航路定着の要因は

もう少し掘り下げて考える必要があるのではないのでしょうか。このあたり確実な史料がありませんので、見通しをいくつか述べてみます。

南路を取った4隻編成の遣唐使船は、702年(大宝2)が初めてです。大宝<sup>たいほう</sup>といえば、唐に学んで<sup>りつりょう</sup>律令国家になったことを証明する大宝律令が前年に成立していました。この遣唐使のころの朝廷は、造船技術の進歩で、地乗り航法に頼らなくてもいい大船建造に自信をもっていたと考えられます。7世紀後半は百済・高句麗からの遺民が多く、多彩な技術者が含まれていたはずで、南路が選択された理由の一つにあげておきます。

もう一つ、正倉院には唐を中心とした交流

によって、ササン朝ペルシア・インド・東ローマ帝国など西方の様式を内包する宝物が多く保管され、シルクロードの終着点と呼ばれています。シルクロードには海の道もありました。むしろ海のシルクロードの方が多くの物品をもたらしたわけで、五弦<sup>ごげん</sup>の琵琶<sup>びわ</sup>など工芸漆器類、白瑠璃<sup>はくるり</sup>椀<sup>わん</sup>などのガラス製品、そうした貿易品取引の中心都市が揚州<sup>ようしゅう</sup>だったのです。遣唐使一行には貴重な物品を持ち帰る役割があり、皇帝からの下賜品<sup>かじ</sup>に加えて、購入するためには揚州に行かなければなりません。そうすると航路は南路になります。

## コラム つばき 海石榴油

遣唐使が唐の皇帝に献上する物品名は10世紀に成立した『延喜式』(大蔵省式)にあって、銀、絹織物、木綿・麻布類など、いわゆる調庸<sup>ちようよう</sup>(税徴収)の物品が並ぶ。加えて瑠璃<sup>めろう</sup>、金漆<sup>うるし</sup>、甘葛汁<sup>あまぎす</sup>があり、そうした中に「海石榴油六斗」が目についた。おそらく奈良時代からあまり変わってはいないと思われる。

海石榴(椿)油は、オレイン酸を多く含み、薬用、食用、化粧品としても、その有用性はよく知られており、唐でも大変珍重された薬用食品と思われる。

五島で古来海石榴油を作っていたとしたら、遣唐使船が寄港したとき積み込まれ、玄宗皇帝に献上されたものを楊貴妃が使ったかもしれない。想像するだけでも愉快である。

なお、対馬南西部の佐須郷<sup>さす</sup>は銀を産出し、「調<sup>みつぎ</sup>」として大宰府に納めていた。

### ③ 遣新羅使と『万葉集』

#### (1) 雪宅麻呂、壹岐石田野に眠る

736年(天平8)阿倍継麻呂を大使、大伴  
三中将を副使とする遣新羅使の一行が難波の  
津を出立しました。その船は遣唐使船より  
一回り小さく、乗員70~80名くらいでしょう。

『万葉集』巻第十五は大半が(150首近く)  
この遣新羅使関係の歌で占められており、は  
じめは「大船を荒海に出だします君つつ  
むことなくはや帰ませ」と、無事の帰りを祈  
る妻の歌、また別れゆく夫の相聞歌が続いま  
す。一行は瀬戸内海を西に進み、逆風に遭っ  
て漂流することもありましたが、ようやく豊前  
国の下毛郡(現・大分県)に到着し、ホッとし  
て詠んだ歌が8首あります。その1つ「大君の  
命かしこみ大船の行きまにまに宿りするか  
も」は、壹岐ゆかりの雪宅麻呂(随員)の作  
です。船は那の津(博多)からさらに西へ航  
行し、唐津付近から壹岐へ渡りました。そこ  
で悲劇が…。

雪宅麻呂が鬼病に罹って死去したのです。  
みんなは悲しみました。宅麻呂の死を悼んで  
長歌3首を含む9首が詠まれています。反歌



遣新羅使・雪宅麻呂の墓  
壹岐市石田町池田東触

を1首、「石田野に宿りする君家人のいづらと  
我を問はばいかに言はむ」、石田野に眠る君  
よ、あなたの妻・家族がどこにいるのかと私  
に尋ねたならば、なんと答えようか。

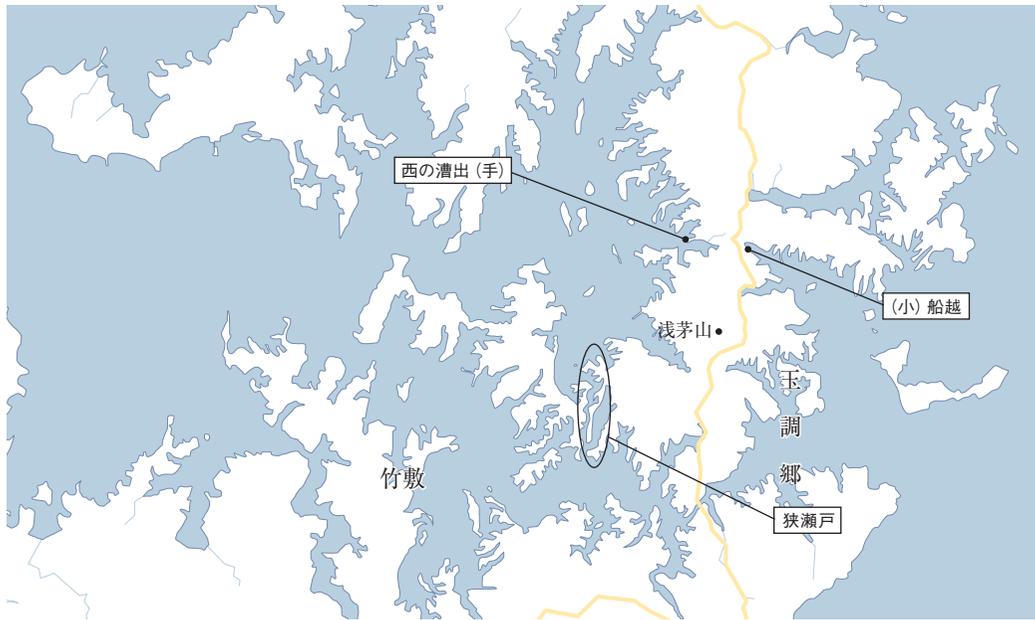
雪宅麻呂の墓(石碑)は現在も石田野に  
ひっそりたたずんでいます。

#### (2) 対馬浅茅湾での風待ち

一行の船は対馬の浅茅の浦に停泊して順  
風を待ちました。「百船の泊つる対馬の浅茅  
山しぐれの雨にもみだひにけり」で詠まれた  
浅茅山は大山岳のことと言われています。そ  
の海域は浅茅湾の一番奥、現在の小船越(江  
戸時代に大船越が開削されるまでは船越)西  
岸、いわゆる「西の漕出」近くようです。

すると、これまで対馬で言われていたこと  
ですが、遣新羅使船は船越東岸に到着し、  
小型船ならともかく大型船が船越したとは考  
えられませんので、乗員や荷物だけ移動して  
西の漕出(手)に待たせてあった船に乗り込  
んだのではないのでしょうか。「百船の泊つる  
対馬」を象徴しているようです。船が豆酸崎  
を回って浅茅湾で風待ちをするならば、湾口  
の尾崎あたりでしょう。わざわざ一番奥まで  
入る必要はありません。これについては読者  
諸氏に教えを受けたいと思います。

船は竹敷の浦に移りました。そこに対馬の  
娘子が現れました。名を玉槻といい、おそら  
く玉調郷集落の女性と思われます。周知のと  
おり、対馬は銀と真珠を「調」として納めてい  
ました。久根田舎の「大調」小学校と、玉調



遣新羅使関係地図 対馬浅茅湾



狭瀬戸 対馬市美津島町大山

はそうした歴史を伝えています。

遣新羅使船は、玉調郷の狭瀬戸せばを通して竹敷に移動したのでしょう。玉槻は次のような歌を詠んでいます。「もみち葉の散らふ山辺ゆ漕ぐ船のほひにめでて出でて来にけり」、もみち葉が散っている山辺あたりに行く船の美しさに惹かれて出て参りました。また、一行が竹敷を離れるときは、「竹敷の玉藻たまもなびかし漕ぎ出なむ君がみ船を何時いつとか待たむ」、船出していく(いとしい)あなたの船の帰りを待っております。この玉槻について、玉調の首長の娘とか遊女とかの解釈がありますが、これ以上は小説の世界です。それより大使継麻呂しが「玉敷ける清き渚を潮満てば飽かず我行く帰るさに見む」と詠んでいるのが気になります。継麻呂は玉槻へ後ろ髪を引かれながら、出航していったのではないのでしょうか。

### (3) 阿倍継麻呂、対馬に死す

遣新羅使一行は、目的地の新羅王都金城（慶州）を目指します。これまでも触れてきましたが、当時の日本と新羅の関係は微妙に変化していました。唐・渤海との緊張関係から日本に朝貢形式の外交姿勢を取っていた新羅が、国境の安定もあって対等外交を打ち出していたのです。阿倍継麻呂ら遣新羅使一行は王都まで行けたどうか、勿論国書も受け取ってもらえず、屈辱的な取り扱いを受けた大使継麻呂は帰途対馬で死去しました。お墓がどこにあるか全く伝えられていません。

雪宅麻呂の鬼病、阿倍継麻呂の死因はどちらも天然痘の可能性があるとされています。

す。天然痘が流行するのは、外国との往来でウイルスが持ち込まれたときです。断定はできませんが、外国との往来には、こうしたリスクもあったのです。なお、副使の大使三中也りかん罹患し、平城京に帰るが遅れました。その都では、政権を担っていた藤原氏の4兄弟が相次いで死去し、政治が大混乱していました。



船越（現・小船越）



西の漕出 対馬市美津島町小船越

## コラム さんのうさん 山王山と最澄伝説

新上五島町中通島に位置する山王山は山岳信仰の山で、遣唐使の時代に最澄がこの山に入唐成就のお礼詣でのために訪れたという伝説が残っている。頂上に展望所(439m)があり、福江島から小値賀島まで五島列島ほぼ全域をパノラマで見渡すことができ、五島列島屈指の眺望が堪能できる。史実によれば最澄は対馬の阿連に帰着しているが、この地に残る最澄伝説に思いを巡らせながら登山をするのも一興である。

8合目までは車で行くことが可能、ただし道は狭いので運転には注意を要する。駐車場から山頂までは徒歩約20分。頂上までの登山道は足元が悪い箇所もあるので、トレッキングシューズなどの準備をお勧めする。

現在Googleストリートビューにて頂上までの登山道が公開されており、パソコンまたはスマートフォンなどでバーチャル登山も可能。



写真上：山王山展望台からの風景、写真下：宋代の舶載鏡が発見された二ノ宮岩窟

第5章

# 東アジア交易網と 貿易陶磁



第1章の「邪馬台国への道」で、壹岐原の辻遺跡は日本で一番大陸系土器が出土する弥生の遺跡ですと述べました。時代は下り古代・中世の日本各地の遺跡で、国産の土器・陶器に混じって中国産越州窯・龍泉窯、華南系の磁器や朝鮮（韓）半島系の陶磁器が出土しています。中にはベトナムやタイといった東南アジア系もあり、交易・交流によってもたらされたこれらの陶磁器を「貿易陶磁」と呼んで近年研究が進められてきました。五島列島や対馬・壹岐の遺跡でも出土する貿易陶磁の歴史的背景を探ってみましょう。

## ① 東アジア交易網の成立

### (1) 新羅海商の活動

遣唐使の派遣は、円仁が乗船した平安時代初期の838年が最後でした。菅原道真是894年に遣唐大使に任命されましたが、唐の荒廃した状況を訴えて廃止を建議しました。ということは、交易が盛んになり中国大陸の詳細な情報が、また唐物優品も伝わっていたのです。危険を犯してまで遣唐使を派遣する必要はありませんでした。

ところで、円仁が属した遣唐使一行は新羅船9隻に分乗して帰国することになりました。新羅船は小型だが、よく波を凌いで行くと言われていました。円仁自身は途中一行から別れ、五台山（文殊菩薩の聖地として名高い霊場）で修行し、やはり新羅海商の船で大宰府鴻臚館まで帰ってきました。大宰府鴻臚館については後ほど説明します。

9世紀初めの唐～新羅～日本を結んだ交易網は新羅海商が牛耳っており、総元締は張宝高（張保臯）という人物です。その

根拠地は朝鮮半島の西南端に位置する莞島で、ここに多数の私兵を養っていました。当時の海商と海賊は表裏一体、張宝高の兵力は新羅中央政府が活用するところとなつて、莞島に海防のための清海鎮が置かれました。

張宝高ら新羅海商が、遣唐使一行の帰国に便宜をはかったのは、大宰府鴻臚館で行われていた官営貿易に参入する目的だったと思われまふ。彼等の交易ネットワークは中国山東半島・長江沿岸地域から朝鮮半島、そして九州に及んでいましたが、841年に新羅の王位継承に参与した張宝高が暗殺されると、海商組織の統制がとれなくなり、大宰府を通さずに九州各地の豪族と直接取引し、海賊行為に走る者たちも多かつたようです。

『日本三代実録』から長崎県関係の史料をあげてみます。応天門が炎上した866年（貞観8）、京都の朝廷に大宰府からの駄馬が驚くべき報告をもたらしました。肥前国高

来郡や彼杵郡の豪族たちが、新羅人珍賓長と結んで新羅に渡り、兵器器械を造る術を教わって対馬を撃ち取ろうとしている、というのです。さらに、対馬下県郡の人卜部乙屎麻呂が、新羅国で材木を運んで大船を造る作業や兵の演習風景を見たため、ひそかに聞いてみると、対馬を伐り取るためであるというので急ぎ帰国して訴え出た、といえます。どちらも真偽の程はわかりませんが、新羅海商が地方の郡司・土豪層と直接接触する状況が存在していたとみるべきでしょう。

## (2) 唐海商の来航

9世紀の後半、新羅海商の交易活動は唐海商の活動に引き継がれ、大宰府鴻臚館に彼らが滞在して官営の管理貿易が行われました。まずは朝廷（大宰府）による唐物先買いがなされ、その後寺社・支配者層や地域の豪族たちが購入したと思われます。

1987年、福岡城跡の一角にあった平和台球場改修の発掘調査が実施され、その結果大宰府鴻臚館跡がここに存在していたことが明らかになりました。かつては筑紫館と呼ばれ、唐や新羅など外国使節を接待していましたが、9世紀には中国の外交施設鴻臚寺に習って鴻臚館というようになったのです。



鴻臚館遺構 福岡市中央区城内



大村市竹松遺跡出土貿易陶磁（越州Ⅰ類）



大村市竹松遺跡出土貿易陶磁（越州Ⅲ類）

なお、鴻臚館は難波（大阪）、平安京（京都）にもありました。

発掘では中国浙江省の越州窯青磁・河北省の荊州窯白磁・長沙窯磁器やイスラム陶器も出土しています。渡来の途中破損したもの、生活用の碗・皿が割れたものがここで出土しているわけで、これらが一応の基準となって日本各地の遺跡から出土する貿易陶磁が分析・考察されています。（ここで掲載した貿易陶磁は大村市竹松遺跡出土で、長崎県教育庁学芸文化課 新幹線工事事務所のものです。）

とくに越州窯系青磁は、浙江省以外に福建省でも粗製品が焼かれており、これからの9世紀から11世紀にかけての遺跡の出土品にその名が出てくるでしょう。越州窯系青磁はⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類に分けられています。発掘担当者は報告のなかで「越州の皿が出た」と強調します。実際越州Ⅲ類を見て触ると、職人の丁寧な手作りを実感できました。これを手にとって使用した当時の人々も高級品として大事にしたと思います。

さて876年（貞観18）、松浦郡平戸・五島に関する行政区画変更が『日本三代実録』に記載されています。起案者は大宰権帥として赴任していた在原行平（業平の兄）です。行平が言うには、

（イ）松浦郡の平戸・五島は遠隔にあつて地勢は広大、人口も多い、また物産は豊かで珍しい物もあるが、国司の巡検は難しく、（地元の豪族でもある）郡司がほしいままに集めている

（ロ）当地は海中にあつて異国と境界を接し、唐や新羅の海商、日本から唐に渡る者、この島を経由しない者はない、先の新羅海賊もそうであつて、まことに国家の枢轄の地、重要拠点である

（ハ）唐人たちは、島で多くの香葉を採集して貨物に加え、海浜の奇石を鍛錬して銀を得、また磨いて玉を得ている

（二）よつて、庇羅（平戸）・値嘉（五島）の二郷を新たに二郡とし、上近郡・下近郡と号す、合わせて値嘉嶋として嶋司・郡領を置き、肥前国衙の行政官と兼務させる

というわけです。

（イ）と（ロ）は正確に近い情報で、大宰府が平戸・五島をどう見ていたかがわかります。

（ハ）はかなり不確か、大げさな情報でしょう。ただ、この後肥前国本土部（西彼杵半島など）で生産され、全国に流通した滑石製石鍋のことを言っているという見方もあります。行平の提案は裁可され、平戸・五島は国境の最前線に位置するとして壱岐嶋・対馬嶋と同格の「値嘉嶋」になりましたが、行政の実態はよくわかっていません。

## 2 日宋貿易・日元貿易

### (1) 日宋貿易の展開

10世紀には東アジアで王朝の交代がありました。中国では唐が滅び、五代十国の混乱期を経て、960年宋王朝が興りました。朝鮮半島では、新羅に代わって936年高麗が半島を統一しました。王朝が変わったからといって貿易商人が入り替わるわけではありません。唐商がそのまま宋商となりましたが、交易の拠点はやがて大宰府鴻臚館から東の博多地区に移りました。

11世紀後半には、博多に唐房（宋商人の居住区）が生まれたようです。有力商人（船頭層）を博多「綱首」といい、日本の社寺・権力者と組んで日宋貿易を主導しました。日宋貿易の主要海上ルートは次のとおりです。

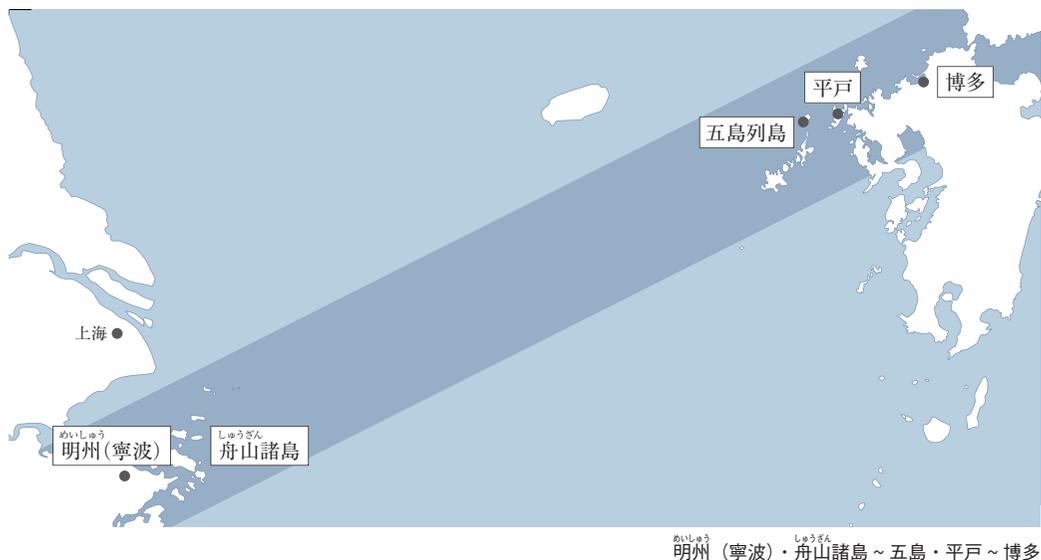
博多港、平戸港、小値賀島（前方湾など）からは、中国貿易船（通称唐船）の礎石と思われる石材が発見されていましたが、とくに前方湾の海底調査では新たに11本が発見されました（後述）。今後は貿易陶磁とともに礎石の形体・材質、産地調査も必要でしょう。

#### ○日宋貿易の輸出入品

<輸出>金、硫黄、木材、工芸品（刀剣・漆器など）

<輸入>宋銭、陶磁器、薬種、絹織物、絵画、書籍

金は陸奥で採れた砂金が唐物購入に使われたと思われます。硫黄は火薬の原料として貴重でした。産地は九州の火山地域、とくに薩摩南方の硫黄島（鬼界島）あたりです。博多・明州間の東西幹線海路に対して、南北「硫黄の路」があったかもしれません。



宋の時代は、科学技術が発展して羅針盤・火薬・活版印刷が実用化され、ルネサンス期のヨーロッパに影響を及ぼしました。産業・経済も高度に発展して森林が伐られ、木材が不足したようで、そのため日本から大木を2隻の船で挟んで航行・輸出したといえます。

一方、宋銭が大量に輸入され、日本の貨幣経済に大きな影響を与えました。鎌倉大仏の鑄造にも使われています。宋の時代の青磁・白磁は人類史上最高レベルの磁器と言われ、日本でも大変珍重されました。薬種以下は日本人あこがれの唐物です。

もう一つ、日宋貿易に関する最新の研究を紹介します。半世紀前に鹿児島県薩摩半島で、褐灰色の石塔（仏塔）が数基発見され、「薩摩塔」として報告されました。その後同一材質の石塔が博多近辺や平戸で確認され、現在その総数は30余基になっています。とくに、志々伎神社（3基）、安満岳白山神社（2基）など田平地区も合わせて平戸市に10基以上存在することが確認されました。志々伎神社のうち1基は、鎌倉末期の1323年（元亨3）の奉納らしいのです。また、博多周辺にも10基存在しており、総じて立塔の時期は12世紀から14世紀と推定されています。

石材そのものの研究からは、明州（寧波）近郊に産する「梅園石」であるとの成果が発表されていますが、明州（寧波）、平戸、博多とくれば、日宋貿易のルートに位置していることは明らかです。

立塔には、博多綱首や平戸に来航した宋商、また松浦氏が関わっていたとも考えられます。

平戸と宋商については、1183年に松浦直（御厨氏）が宋船頭の未亡人と再婚し、混血の連れ子を正式に「松浦連」として、後に小値賀島の領主権を譲ったという例もあります。平戸には、確かに宋船が入港し、宋商（船頭）が来ていました。この後、日宋貿易のルートに当たる五島でも梅園石の石塔が発見されるかもしれません。

※宇久島平（佐世保市宇久町）の毘沙門寺に2基分（残欠）の薩摩塔があるという情報を得ました。



薩摩塔（二基分 13世紀ごろ）  
安満岳白岳神社 画像提供：大石一久氏

## コラム 薩摩塔

鹿児島県歴史資料センター「黎明館」を見学したときのこと、常設展示中世で庶民の信仰生活を表現したコーナーがあり、そこには鹿児島県各地に見られる石塔が再現・展示されていた。ちょうど質問受付の机に女性が座っていたので、「薩摩塔はどこにありますか」と尋ねたところ、「上の階に展示してあります」ということであった。早速階段を上がってみたら、そこには「薩摩刀」が展示してあった。鹿児島県の博物館でも「薩摩塔」は浸透していないようだ。いっそ名称を変えたらどうだろうと思った次第。

### (2) 元寇後も日元貿易は行われていた

蒙古襲来、文永・弘安の役といえば、国家間の大戦争でした。詳しくは次の第6章をお読みください。それでも、元寇後博多・慶元間の日元貿易は行われていたのです。フビライ後継のテムルハーンは対日強硬策を転換し、貿易船を受け入れる体制を整備しましたので、多くの日本船が慶元を目指しました。しかも中には、鎌倉幕府の中枢にある有力者が出資した船までありました。その例を五島で難破した貿易船で説明します。

念のため補足します。慶元は元のときの都市(港湾)名で、唐・宋・王朝では明州、明・清時代になると寧波と呼ばれるようになりました。鎖国時代の長崎と最も関係が深かった貿易港です。

さて、『青方文書』(長崎歴史文化博物館

蔵、第7章で詳しく説明します)の1298年(永仁6)の史料に「関東御使義首座注進状案」があります。これは五島列島の西海岸で唐船が難破した状況を、乗船していた義首座という関東御使の禅僧が報告したものです。この場合の「関東」は鎌倉幕府を指します。積み荷からしてこの唐船は中国を目指していたと思われます。

具体的な内容は結構衝撃的なもので、青方湾(旧上五島町)を出た渡唐船が日島沖で座礁・遭難したのですが、すぐに近隣の海民たちが7艘の船で押し寄せ、積み荷を奪い取ったというのです。おそらく鎌倉幕府要人仕立ての船ということで、津料(入港税、安全航行誘導料)を払わなかったのでしょう。そうした渡唐船を地元海民が浅瀬に誘導して難破させたのかもしれませんが。海岸を離れてすぐの難破は不自然です。品物を返

せといっても、松浦党海賊の流儀からすれば、命令に従うはずはありません。衝撃的なのは鎌倉幕府にとってであり、いくら鎌倉御家人といえども、松浦党側からは当たり前のことでした。松浦党については第7章で説明します。

奪い取られた積み荷は、次のようなもの（輸出品）でした。

- 砂金、円（まとめ）金
- 銀劍（劍）
- 水銀
- 白布
- 諸具足

マルコポーロが『東方見聞録』において、日本を黄金の国と表したのは、こうした中国向け輸出の中心に「金」があったからです。さすがに、軍事物資である硫黄はありません。

次に日元貿易に関する確実な物証を紹介いたします。博多を発った貿易船が慶元での取引を終え、博多へ帰る途中北に流され、朝鮮半島西南部の多島海新安で遭難・沈没した、いわゆる「新安沈没船」のことです。1976年から海底遺跡の調査が継続され、多くの学術的成果が得られました。この沈没船の長さは約30m、幅は9mで、尖底船、竜骨（キール）構造の典型的な中国ジャンク船でした。船の構造については第4章・第6章も参考にしてください。

この船が慶元を出航した年は、元の年号である「至治三年」銘木簡からして鎌倉末期の1323年と思われます。荷札木簡には「東福

寺」を記したものが40点ほど見つかって一番多く、東福寺造営名目の貿易船（寺社造営料唐船）ではないかとされています。

年代がはっきりした輸入品（当時日本が求めていたもの）がまとまって出てきたのですから、大変貴重な大発見でした。積載荷物でびっくりするのは、800万枚もの大量の銅銭と2万点以上の中国陶磁器類です。陶磁器類のうち、浙江省龍泉窯青磁が1万点をこえ、これが当時の流通陶磁器の主流であったことを証明しています。鎌倉時代以来多くが日本にもたらされ、その逸品が大阪東洋陶磁美術館などに保存・展示されています。

他に、江西省・福建省の青・白磁も数千点、高級材紫檀も海底から引き上げられています。当然のことながら積み荷にあったであろう薬種・織物類はほとんどありません。乗員の日常用具も引き上げられました。将棋の駒、下駄、これは日本人です。高麗の匙ほか数点の高麗青磁、また中華鍋もあります。新安沈没船は、多国籍の乗員で構成されていたのでしょ。

このように、日宋貿易ほどではないにしても、元寇後も日元貿易は続けられました。双方に多大な利益があるからです。外海航行の貿易船には漂流・難破がしょっちゅうでしたから、利益を出すためには航海安全が何よりのこと、次のコラムで紹介する七郎神、そして福建省の媽祖女神も厚く崇拝されました。仏教の世界では舟山諸島普陀山の観音様も、海をつかさどる仏様として祀られ、航海安全が祈願されました。

## コラム 招宝七郎神と『水滸伝』

平戸松浦氏の守護神を七郎神という。宋の時代に明州（寧波）<sup>めいしゅう ニンポウ</sup>地域で祀られていた福招きの七郎神が平戸でも崇敬されたわけである。1561年に起きたポルトガル商人とのトラブルは宮の前事件というが、その「宮」は七郎宮のことであった。現在は平戸城内亀岡神社に合祀されている。

ところで、招宝七郎神は『水滸伝』にも登場する。その第77回「梁山泊十面に埋伏し、宋公明兩たび董貫に勝つ」のところに、「張清は左手に槍を持ち右手を招宝七郎のようにかまえて、「やっ!」と一声。石のつぶては周信の鼻のくぼみに命中し、周信はもんどりうって落馬した」とある。つまり、名人張清が石つぶてを投げるかまえを、七郎神の右手を挙げて福を招く所作のようだと表現したのである。それだけ招宝七郎は庶民に知られていた。

この福を招く神様を貿易に従事する人々が祀るとすれば、航海の安全祈願が第一である。無事交易を終えて帰還したときの利益は元手の10倍、いやもっとかもしれない。

そんな七郎神が、今日熊本県や佐賀・福岡県では性と腰の神様として崇められている。子宝を得ることは福を招くことに通じるのだろう。

### ③ 貿易陶磁を出土する 壱岐・五島・対馬の諸遺跡

貿易陶磁の研究は日が浅く、調査・発掘された遺跡は極めて限定されています。現時点で明らかになっている遺跡・資料から多くを語るのは慎んだ方が賢明でしょうが、さりとて中国の窯・朝鮮半島の窯で、またベトナム・シヤムなど東南アジアで焼かれた陶磁器が出土していることは間違いありません。

#### (1) 壱岐の諸遺跡

##### ◆原の辻遺跡大川地区

原の辻の弥生遺跡から南側に埋葬遺構が続くと思われていましたが、調査の結果古代・中世の遺構・遺物が検出されました。大形の柱穴が目立ち、その中には30cmを超えるものもあって、掘建柱の建物があったようで、規模からして何らかの公的な施設からの存在が推定されます。時代は遺物から判断して8世紀から10世紀、奈良時代から平安時代中期です。近くには優通うまや駅家推定地があり、壱岐国府も気になるところです。

出土遺物としては、越州窯系青磁・白磁・長沙窯系陶器など貿易陶磁に加えて、国産のりまくゆう緑釉陶器・灰釉陶器があります。さらにイスラム陶器が1点出土しました。

##### ◆壱岐興触遺跡

芦辺町湯岳こうふれ興触こうの興神社に近接した丘陵から、数百点の貿易陶磁が出土しました。興触の地名と興神社は、その読みが「国府」（こう）に通じ、また印鑰大明神の別名もあることから、この地域に壱岐国府があったのでは

ないかと言われています。印鑰いんやくとは役所の印鑑（官印）と倉庫（官庫）のカギのことであり、そうした伝承には説得力があります。

出土した貿易陶磁の内訳は、越州窯系青磁、白磁碗、同安窯系青磁皿などで、これに緑釉陶器もありました。彼杵郡衙と推測される竹松遺跡から大量の貿易陶磁が出土している例からもわかるとおり、平安時代から鎌倉時代にかけては、郡衙などの役所と官員が貿易を行っていました。次の五島大浜遺跡も参照してください。

##### ◆壱岐観城跡遺跡

壱岐にはまとまった中世文書が少なく、近世の史料『壱岐国続風土記』・『壱岐名勝図誌』や朝鮮の文献『海東諸国記』（第7章参照）などから、壱岐の中世を組み立てていますが、十分ではありません。

その『海東諸国記』に15世紀中ごろの壱岐について、志佐しざ・佐志さし・呼子よぶこ・鴨打かもち・塩津留しおつるの5氏が代官を置いて分治している、という記述があります。その後の壱岐中世史では、志佐氏が有力となって壱岐守護（代）となり、代官の真弓氏とともに観城とじょうを拠点に壱岐を支配していました。そこへ1472年（文明4）唐津の岸岳城主波多泰はたやすしが壱岐に侵攻、志佐氏ら5氏は観城に籠もって防戦しましたが敗れ、壱岐は波多氏が支配するところとなりました。

発掘の結果をみてみましょう。遺物の量から判断して、主体は14世紀から15世紀にかけてと思われる。貿易陶磁は中国・朝鮮に加

えてベトナムのものも出土しています。河北省の磁州窯系や福建省建窯の天目茶碗もあります。建窯と言えば、最近話題となった、あの曜変天目の故郷です。観城の主は東アジアの海を越えて交易を行っていたのでしょう。

これまでの調査では、城は14世紀から17世紀中ごろまで利用されていたようで、波多氏侵攻・攻防を示す焼土層などは調査されておらず、詳しい経緯はわからないままです。

波多氏の後、日高氏さらに平戸松浦氏と勢力の交代があって、江戸時代の壱岐は平戸藩の穀倉、捕鯨基地として藩財政に大きく貢献しました。このように政治勢力の交代があると中世文書は残りにくくなります。幸い壱岐には中世の城館が30ヶ所余り残っており、今後の調査次第では新たな発見・知見が得られる可能性があります。

## (2) 五島列島の諸遺跡

### ◆五島市大浜遺跡

福江島の東部、旧福江市の富江寄りに位置します。貿易陶磁に関して言えば、この遺跡からは8・9世紀（奈良時代・平安前期）の国内外陶磁器が出土し、10世紀の希薄な時期を経て11・12世紀（平安後期・鎌倉初期）には貿易陶磁主体の多くの遺物が出土しました。

具体的に見てみましょう。8・9世紀の越州えっしゅう窯系青磁りよくゆうや緑釉陶器、多量の須恵器すえき、そして高坏たかつき底部に墨書がなされた破片も出ています。貿易陶磁より国内産が多く、とくに役人などが使う高級食器である緑釉陶器や墨書土器の出土は古代の役所との関連をうかがうことができます。

1の(2)の在原行平提案によって設立された郡衙ぐんがが考えられますが、役所の遺構など全く調査されていない段階では何とも言えませ



小値賀町前方湾  
画像提供：小値賀町教育委員会

ん。あえて現時点で推測すれば、『肥前国風土記』に値嘉嶋は「馬・牛に富めり」とあり、『延喜式』にも「馬牧」の記載があることから、これに関する役所が存在していた可能性があります。

11・12世紀の貿易陶磁は、県内各地の遺跡と同様に龍泉窯系青磁を主体とし、一部高麗青磁も出土しています。福江島では、大浜遺跡以外に貿易陶磁がほとんど出土しておらず、今後は岐宿の川原の浦や唐船浦あたりの調査が求められるところです。

#### ◆小値賀町相津遺跡・前方湾海底遺跡、宇久の山本遺跡

小値賀町の前方湾は小値賀島の東岸、およそ東西南北四方の風を避けることができる良港です。相津遺跡はその湾奥にあって神方古墳もありますので、古代・中世における小値賀地方の中心的位置を占めていたことがわかります。ちなみに、五島列島には小値賀島以外に古墳はなく、神方古墳は現存する唯一のものです。

前方湾では2004年から海底遺跡の調査が3ヶ年実施されました。北松鷹島の元寇沈船調査と並んで、わが国の水中考古学研究をリードした一面を有しています。潜水調査に加えて水中ロボットが試験的に導入され、将来の調査では実用化されるでしょう。

どのような成果があったかという点、貿易陶磁については42点の龍泉窯系青磁・福建省の同安窯系青磁・(福建省)白磁碗・褐釉陶器壺などが引き上げられ、時期はおおよそ



小値賀町前方湾海底遺跡 水中調査  
画像提供：小値賀町教育委員会

12~13世紀が主体と報告されました。これは相津遺跡や宇久山本遺跡の出土物においてもおよそ同様と考えられています。ここでも龍泉窯系青磁が多いのですが、それは当時の交易商品としての地位によるものです。

「系」が付くのは、龍泉窯青磁の窯が浙江省だけでなく福建省にまで広がり、破片・断片では窯の同定が難しいためです。9世紀(唐時代)浙江省北部に越州窯が起り、その後同省南部に龍泉窯が起こって12世紀後半から(南宋時代)大発展し、ほぼ同じく福建省に同安窯が生まれたと理解しています。龍泉窯系青磁は大量生産されて広まりました。

また、碇石が11本確認されていることはすでに述べましたが(他に既存も6本)、おそらく貿易船のものと思われます。うち大型の一石型碇石7本は博多湾発見のものと共通しており、貿易陶磁の年代からしても、日宋貿易船の碇石だった可能性は大きいと思われます(鷹島近海発見の元船碇石は二石型、第6章参照)。



小値賀町前方湾海底から回収した龍泉窯、同安窯など  
画像提供：小値賀町教育委員会

宇久の山本遺跡出土の陶磁器を数量（破片数）分析したところ、貿易陶磁が約8割を占め（国産土器は土師質土器・須恵器など）、大浜遺跡とは対照的です。おそらく宇久・小値賀海域は宋船の航路に当たっており、前方湾は中継港、避難港の役割を果たしていたと考えられます。地図で貿易船の推定経路をご覧ください。

中継港ならば帰路に積み込む商品が必要で、この場合は干鮑<sup>ほしあわび</sup>が一番に思い浮かびます。その生産は近世・近代を通して盛んでした。避難港として湾に入ったとしても大型台風などは碇を破損させ、積み荷を崩して陶磁器の商品価値を損じることもあったでしょ

う。それらは海中に廃棄せざるをえません。最悪沈没もあり得ます。これまでの調査では、海底遺物が沈没船のものかどうか、もう少し調査が進むまで判断できません。

すでに確認調査が行われた前方湾北部入り口の山見沖海底遺跡からは、タイ（シャム）産の陶器を中心に、ベトナム陶器、明代の陶磁器など1000点を超える遺物が発見され、東南アジア系の貿易船が沈没したことを示唆しています。

現時点では、貿易陶磁出土の遺跡があまりに小値賀・宇久地域（海域）に集中しており、これから新上五島町域、とくに青方湾、若松島などでの調査が大切になってくるでしょう。

### (3) 対馬の水崎（仮宿）遺跡ほか

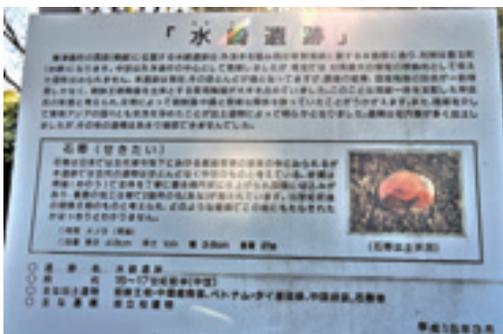
考古学調査と文献史学の研究は互いに補完し合って確実な史実を導き出すことが理想です。この遺跡の発掘調査は、九州大学中世史の佐伯弘次教授（長崎県対馬出身）の研究もあって、まさに理想的な展開となりました。

た。佐伯先生の著作は第7章にかけて参照させていただきます。

はじめ通常の地名である「水崎」遺跡として調査し報告書も出されたのですが、小字を<sup>かりやど</sup>確認したところ「仮宿」ということがわかり、水崎（仮宿）遺跡となりました。この水崎・仮宿という地名は第7章で詳しく述べる『海東



対馬市美津島町尾崎土寄集落



水崎（仮宿）遺跡 対馬市美津島町

諸国紀』に登場します。美津島町尾崎地区だけ先に紹介しましょう。

「可里也徒浦」（仮宿浦）、「敏沙只浦」（水崎浦）とあって、それぞれ200余戸の集落と記されています。その前後に「阿吾頭羅可知浦」（大連河内浦）、「頭知洞浦」（土寄浦）があって100余戸、200余戸となっています（実際の小字図では、大連河内は水崎と土寄の間）。合計で700余戸、この数字が正確かは確定できませんが、三根650余戸、佐賀500余戸を上回る、当時の対馬にあっては最大級の集落です。

土寄は早田水軍（海商）を率いる早田氏の拠点で、現在でもご子孫の家が続いています。早田氏は船越（現・小船越、ここにも現在早田家がある）にも拠点を置き、一時期島主の宗氏をしのぐ勢力を持つと言われました。早田一族については第7章でも述べます。

さて、この遺跡から出る貿易陶磁は、龍泉窯系青磁や白磁など中国産が20%ほどなのに対し、朝鮮半島系が70%ほど、他にベトナム・タイ（シヤム）など東南アジア系陶磁も5%入っています。国産は数%に過ぎません。中国陶磁や半島系陶磁器のうち粉青沙器（朝鮮王朝初期の陶器20%の割合で出土）の多くは神仏への供膳具として使われ、釉薬がかかっていない無釉陶器（50%の割合）は日用品（貯蔵具など）あるいは貿易品入れ容器そのもので、水崎（仮宿）遺跡の出土品は、この土地の人々が中国よりも圧倒的に朝鮮半島との交易・交流を行っていたことを示唆しているようです。東南アジア系陶磁について

は第7章で触れます。

遺物が出土するのは14世紀後半から15世紀前半（南北朝～室町前期）の地層が一番多く、特に第IV層とされる土層からは焼土層が確認されました。すぐに思い浮かぶのは、1419年（応永26）の応永の外寇です。対馬尾崎に攻め寄せた朝鮮軍（227艘、17200人余）が民家を焼き払ったことが『朝鮮王朝実録』に記されており、考古学の成果と文献史学研究が結びついたわけです。これも詳しくは第7章です。

他に特徴的な出土品を紹介しましょう。まずは瑪瑙製石帯です。いわゆるベルトの飾りで、身分ある者が身に付けていました。おそらく朝鮮からの舶載品と思われる。

また、銭貨が55枚出土し、そのうち大型銭が14枚あります。まさに交易が盛んだった証拠です。中でも写真のパスパ文字「大元通寶」は、博多遺跡群出土の2例に続く3例目の珍しいものでした。パスパ文字とは、元寇のときの皇帝フビライハーンがチベット僧パスパに命じて作らせた元の共通国字です。

以上、水崎（仮宿）遺跡の概要を紹介しましたが、説明を第7章にゆずったところが多々ありますので、併せてお読みください。わずかな発掘面積では全体を推測することはできません。やはり土寄が尾崎地区の中心集落だったでしょうから、今後調査されるようなことがあれば注視したいと思います。



瑪瑙製石帯（15世紀）  
対馬市教育委員会 蔵

#### ◆おおいしぼる大石原遺跡

この遺跡は対馬北西部の佐護さごにあります。一般に山がせまっている対馬ではめずらしく佐護川の沖積地が広がる一画に小字「屋敷畑」があつて、そこに立地しています。佐護川河口から対馬海峡西水道（朝鮮海峡）を渡れば大陸です。調査当時としては対馬で初めての掘立柱建物が検出され、総柱そうばしらの建物（住居や倉庫）・小規模な小屋10棟の復元が確認されました。建物の数はもっと多いでしょう。遺物から判断して、時期は12世紀から13世紀前半ころと推定されています。

出土した貿易陶磁をみると、中国産は龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、北宋後半の白磁、越州窯系青磁などがあり、半島産は高麗青

磁むゆう、無釉陶器などでした。これらを数量分析してみると次のようになります。

- ・貿易陶磁と国産土器の比率は、前者が約80%、後者は20%に過ぎない。
- ・貿易陶磁のうち中国産磁器は半島産磁器の2倍の量が出土し、両者のほとんどが碗を中心とする（皿・杯はいも）供膳具である。
- ・半島産無釉陶器は甕が多く、ほとんどが貯蔵具として使われている。
- ・全体からすると少ない国産の土師器はしきは杯が多く、須恵器すえきは食器・貯蔵用に使われた。

古代・中世の対馬では日用品としての土器・陶器を50キロしか離れていない朝鮮半島から入手するのが普通だったと考えられます。



大元通寶（パスバ文字）  
対馬市教育委員会 蔵

#### ◆<sup>かいじん</sup>海神神社<sup>みろく</sup>弥勒堂跡遺跡

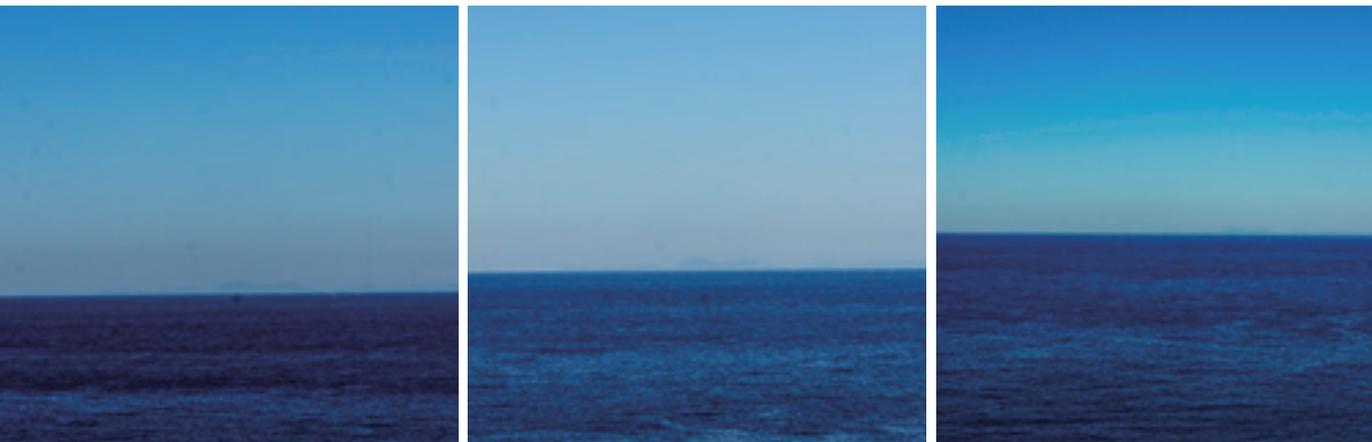
<sup>きざか</sup>木坂の海神神社は、旧対州一の宮上津八幡宮のことで、第3章の対馬の式内社のところを参照してください。一ノ鳥居をくぐり、宝物館（第7章に出てきます）を左に見て二ノ鳥居を過ぎ、三ノ鳥居右脇の小さな平地が弥勒堂跡と伝えられていました。

1987年対馬を襲った台風で立木が倒れ、根元から土器類が出てきたことから発掘調査が行われました。出土物は峰町歴史民俗資料館に保存されています。その報告書や新たな調査によれば、中国産の貿易陶磁は、白磁碗・白磁皿、越州窯系青磁碗、龍泉窯系青磁碗・皿、同安窯系碗・皿などで、その時期は

11世紀後半から13世紀ということです。

いずれも碗・皿の供膳具が主体となっており、高麗青磁や陶器（収納などの用途）も出ていることから、木坂海神神社の立地から考えれば、日宋貿易や日麗貿易（日本と高麗間）の貿易商が立ち寄って航海安全を祈願した祭祀場の可能性があります。まだ一部発掘しただけですから、はっきりしたことは言えません。

永留久恵先生の考察では、この神社は式内社名神大社の<sup>わたあみみこ</sup>和多都美御子神社ですから、八幡神鎮座の前は、まさに航海の守護神でした。



対馬阿連から見た韓半島（島嶼部）

ここでは壱岐・対馬・五島にしぼって紹介しましたが、最近大村市の竹松遺跡の発掘が進み、多くの貿易陶磁の出土をみました。長崎県に限らず九州西北地方における基準的な貿易陶磁となる可能性があります。彼杵<sup>そのぎ</sup>郡<sup>ぐん</sup>衙<sup>が</sup>本体の建物遺構発見とともに、以下の写真のような貿易陶磁についても今後の調査に期待したいと思います。



龍泉窯系青磁



同安窯系磁器



福建省産白磁



緑釉陶器（国産高級陶器）

大村市竹松遺跡出土貿易陶磁  
新幹線文化財調査事務所



第6章

# 元寇

～防衛の最前線～

元寇といえば、文永の役における博多（湾）での合戦が竹崎季長の「蒙古襲来絵詞」に描かれ、弘安の役での大暴風による江南軍壊滅については、近年松浦市鷹島南海域で発見された沈没船の調査が脚光を浴びていますが、元・高麗軍が最初に攻撃してきたところは、対馬・壱岐でした。五島・平戸にも江南軍が侵攻したと思われます。これらの島々は日本を攻める元軍にとって、どのような位置付けになるのでしょうか。

## ① 東アジアの中の元寇

### (1) モンゴル帝国の発展

まずは、チングスハーンの出現で急成長したモンゴル帝国のことです。

西はヨーロッパのポーランド・ハンガリーに侵攻、東は中国・朝鮮半島にも勢力を及ぼ

しました。1231年から1259年にかけて朝鮮半島の高麗に継続侵攻したため、高麗国王は江華島に王宮を移して抵抗しました。以後、東アジア世界に絞って略年表で表示してみます。

1257年	モンゴル軍、ベトナムに侵攻（失敗）
1260年	フビライ（チングスハーンの孫）、大ハーンの位に就く 高麗王、モンゴルに従属的立場
1261年	ビライ、(南) 宋攻撃開始を指令 = 主たる敵と位置付け ベトナム、モンゴルの冊封下に入る
1264年	マルコポーロ、フビライに謁見
1270年	高麗の三別抄（反乱鎮圧部隊）、モンゴル・高麗王に反旗 三別抄、朝鮮半島南西部の珍島（チンド）に拠点を置く
1271年	三別抄、日本に同盟を申し込む（鎌倉幕府黙殺）～ 73年 三別抄の乱終結 モンゴル、国号を「大元」とする
1273年	元軍、長江中流域の拠点都市である襄陽を陥落させる
1274年	元・高麗軍、日本を攻撃
1276年	元軍、南宋の首都・臨安府（杭州）を攻略
1277年	元軍、ビルマ（ミャンマー）のパガン朝を攻撃～ 87年 パガン朝滅亡
1279年	南宋滅亡、最後の皇帝は水中に身を投じた

1281年	東路軍(元・高麗軍)と江南軍(南宋の降伏兵主体)、日本を攻撃
1284年	チャンパ(ベトナム南部の国)を攻めた元の水軍が暴風のため大被害
1285年	元軍、チャンパを支援したベトナムへ侵攻(失敗)
1287年	元軍、ベトナムへ侵攻するも敗退
1292年	元軍、ジャワ遠征 ~ 撤退

モンゴルの草原を縦横に駆け巡ったモンゴル騎馬軍団は、陸路では抜群の力を發揮して華北の金王朝を滅ぼし、高麗を服属させました。高麗三別抄の抵抗には苦しめられましたが、珍島から拠点を移した済州島を1273年に占領し、三別抄の乱は終わりました。

一方、アジアで最も豊かな経済力を持つ南宋を攻略するため、新たに水軍を建設・養成して長江対岸の襄陽を包囲し、同年ようやく陥落させました。襄陽が手に入ると、長江を下ることは易く、商品流通網の幹線も元の支配下に入ります。首都・臨安府(杭州)の攻略は時間の問題です。

ところが、海の向こうに大軍を送るとなると勝手が違います。襄陽を攻めるに当たって建造した船は小型平底の河川航行用でしたし、食料・水など必需物品の補給手段も大きく異なります。陸路の戦闘だったバガン朝攻略はともかく、遠隔の海路でもって兵員軍馬・戦略物資を輸送しなければならなかった日本攻撃、またベトナムやジャワへの遠征は、結果からいうとみんな失敗でした。元寇は日本だけではなかったのです。

それでも、蒙古襲来は未曾有の国難、「神風」によって日本は助かったという見方も根強くあります。このあたりをもっと掘り下げてみましょう。

## (2) 元の「国書」と鎌倉幕府の対応

フビライが欲しい国は豊かな南宋でした。そのための正面作戦が襄陽攻めとすると、日本、ベトナムを服属させることは、東、南から南宋を包囲する拵め手作戦に当たります。でも、南宋を滅ぼした後も日本攻撃計画、ベトナム遠征は継続されましたが、なぜでしょうか。それは3のところで検討します。

さて、フビライは日本に対して幾度も幾度も使者を送ってきています。『元史日本伝』によれば、フビライは、1266年(文永3)黒的を使者に遣わし国書を送ろうとしましたが、日本遠征に関わる負担もあつてか道案内役の高麗は始終消極的でした。結局この時は日本に渡らず、翌年高麗はフビライの厳しい命を受けて潘阜を使者として国書を持参させたものの、6ヶ月滞在(大宰府)の後むなしく帰還しました。

その国書には、高麗の民は長年の戦乱に苦しんでいたが、自分が収束させたので、みんな感謝している、日本は高麗に近い国であり、これまで中国に通じていたが、自分の代になって一度も使いを送って来ない、今から通好・親睦せんことを希望する、兵を用いるような事態は誰も好まないだろう、日本国王よ、よく思案なされよ、といった内容が書かれ

ていました。一見丁寧な文体ですが、脅しは効いています。

この後も、1268年対馬まで来て国書を渡そうとして納れられず、塔二郎・弥二郎の二人を連れて帰りました。1269年高麗使節の金有成が塔二郎・弥二郎を連れて来て太宰府に滞在、なおうまくいきません。1271年秘書監の趙良弼（フビライ側近の女真人官僚）が派遣されてきました。その国書には、なぜ使者を遣わさないのか、遣わしたとしても高麗の内乱で通行できなかったのか、それで特に趙良弼に命じ書を持って行かせる、彼と共に使者が来るならよし、ぐずぐずして兵を用いるようになっては誰が楽しむところであろうか、日本国王よ、よくこの点思案なされよ、とかなり苛立った表現になっています。

これに対応したように、日本がはじめて弥四郎という者を遣わしましたが、これは日本との交渉に圧力をかけられている高麗が仕立てた使者でしょう。もしかしたら対馬人、あるいは高麗南岸の島に住む倭人（これについては次章で説明します）だったかもしれません。日本遠征は、高麗にとって兵船建造、軍兵・水手の動員など負担が大きい事業ですから、何とか回避しようと画策したと思われます。趙良弼は1273年にも国使として来日しましたが、成果なく帰国しました。

ところで、こうしたフビライの外交攻勢に鎌倉幕府はどう対処したのでしょうか。1268年（文永5）幕府執権職に就いた北条時宗は、当時18歳の若者でした。モンゴル帝国（元）が超大国であるという情報は、日宋貿易を

行っている双方の貿易商から入ってきたことでしょう。また、宋から渡来した僧侶、帰国した日本人僧からもモンゴル帝国情報が入りませんが、当然ながらモンゴル（元）は目いっぱい悪し様に伝えられたはずです。元の国書に対する返書を朝廷が用意しても、幕府は送りませんでした。

1271年のことです。幕府は、国難到来を世間に吹聴したとして日蓮を捕らえ斬ろうとしましたが、許して佐渡へ流しました。この年、九州に所領を持ちながら在住していない御家人に対して、本人が下向するか、もしくは代官を下向させ、守護の配下に入って防備に当たるように指令しました。その守護には、この後時宗近親の北条一門が就任し、得宗（徳宗北条義時の法号）権力が一段と強化されていきます。関東の御家人が蒙古襲来前後に九州に移住した例として、深堀氏（肥前）、小代氏（肥後）そして防御の中枢に位置した豊後国守護の大友氏がおり、薩摩国守護の島津氏もそうだという研究があります。

とにかく具体的に何をしていたかわからないまま、時宗を頂点とする鎌倉幕府側は、御家人たちに防衛・動員を指令しました。一方、名目国王である天皇の朝廷は、各地の神社・寺院に敵国降伏の祈祷をさせました。ただそれだけでも、元寇後は恩賞の対象になったのです。

## ② 文永の役 対馬～壱岐～博多

### (1) 対馬佐須浦(小茂田浜)の戦

南宋攻略の最大の難関と思われた襄陽は陥落しましたが、長江を下っての首都・臨安(杭州)攻めはこれからです。かたわら日本遠征準備、とくに兵船建造は高麗に催促して進められました。



文永の役

『元史日本伝』には、千料舟(200人乗)・拔都魯(バートル)(勇士の意味)軽疾舟・汲水小舟のおおの300、計900艘、士卒15,000人とあります。千料舟は兵卒を乗せる大きな戦艦、拔都魯軽疾舟は、言わば上陸用舟艇に当たる軍船でしょうか。汲水小舟(水配給船)とともに千料舟に積まれていたと思われます。因みに、チンギスハーン(チンギス)の父はイエスグイ(イェスグイ)・バートルと呼ばれていました。

一方、準備させられた側の史料『高麗史』によれば、元の命令は戦艦300艘の建造、梢工(しょうこう)(舵取り)・水手15,000人の準備をな

せ、ということでした。これを文書で要求した者は、高麗人で早くから元に降った將軍・洪茶丘、受けたのは高麗の將軍・金方慶です。この二人の將軍の名前を憶えておいてください。結局のところ、日本遠征軍の構成は次のとおりになっています。

○元の都元帥(クドウシ)忽敦(クドゥン)(『元史』では忻都(シントゥ))、右副元帥(ウヘクドウシ)洪茶丘、左副元帥(サヘクドウシ)劉復亨

○蒙(モンゴル)・漢(旧金)軍 25,000人

○我が軍(高麗軍) 8,000人 梢工・引海(水先案内か)・水手 合わせて6,700人

○戦艦(その他) 900余艘

梢工・引海・水手6,700人という数字が正しいとすれば、『元史』には戦艦300艘に水手ら15,000人調達せよとありましたから、計算すると戦艦は150艘以下です。元の要求どおりには建造できなかったのでしょうか。数字については、元も高麗も思惑があって調整しているのかもしれませんが。いよいよ元・高麗軍は、合浦(がっぽ)(現・馬山市)を出航して対馬に向かいます。

これまで対馬における文永の役は次のように伝えられてきました。文永11年(1274)10月5日、西岸の佐須浦に異国船が押し寄せてきた、知らせを受けた守護代(地頭代)の宗資国(そうすけくに)(助国)は国府(現・巖原)から80余騎を率いて迎え撃ち、久根から駆け付けた齋藤資定らとともに討死した、その戦場は現在の小茂田浜ではなく海岸から少し入ったところ(佐須浦)、宗資国の墓と伝えられるお首塚(佐須の下原(しもぼる))、お胴塚(同樫根(かしね))



佐須浦小茂田浜（元寇古戦場）

は後世の供養塔だが、首と胴が別々に埋葬されたという伝承は元・高麗軍に圧倒された宗資国の壮絶な戦死を示唆している、というものです。

宗資国・斎藤資定の戦死は、斎藤家に伝わった中世文書で確認できます。なお、両者の名前の「資」は主筋にあたる少弐氏（武藤氏 大宰の少弐）からの偏諱（一字拝領）でしょう。

この佐須浦の戦いは間違いなく史実であるとして、対馬には他にも文永の役に関する伝承が残っているので紹介します。浅茅湾南岸の加志には、討死した越前五郎の墓碑があり、三根浦で討死した甲斐六郎の墓碑は吉田にあります。それぞれ与良郡司、三根郡司の職にあったと伝えられています。また、佐護郡司の下野次郎は比田勝浦で討死したとい

います。墓碑はみんな後世の供養塔と思われませんが、加志・三根・比田勝（佐護）はいずれも対馬の要衝の地であり、元・高麗軍は大軍を分散して対馬全体をにらんで攻め、物資輸送の中継基地を探したとも考えられます。

ここまで書いて、ちょっと気になることがあります。蒙古襲来は予想されていたのに、鎌倉幕府が対馬防衛のために兵員派遣、軍備増強を図った形跡はありません。博多・大宰府防衛を優先したのでしょうか。



御胴塚（法清寺） 対馬市厳原町檜根



小茂田浜神社大祭 画像提供：対馬観光物産協会

## コラム 秋山峡に紅葉して

長崎県立対馬高校の寮歌に次のような歌詞がある。旧制対馬中学の寮歌を引き継いだものかもしれない。

秋山峡に紅葉して	小茂田浜辺の荒磯に
文永の役 <small>とむら</small> 弔えば	恨 <small>うら</small> みは長し七百年
若人の血 <small>おど</small> は躍るかな	

「恨みは長し七百年」と歌詞にあるが、深刻さはあまりなく、地域のお祭りとして多くの人々が集っている。宗資国以下戦死者の霊が祀られている小茂田浜神社では、毎年11月12日に地元男性による武者行列が浜辺まで、そこでは神主が海に向かって弓矢を構え「鳴弦めいげん」の神事を行う。さらに武者頭さいが采を突き出して「エイエイ」と叫ぶと、武者たちが「オー」と呼応する。

この日の出店では、ダンツケ餅も売られている。その由来は、蒙古軍が来襲したため急きょ小豆餡あずきあんを餅にまがし、それも砂糖と塩を間違えて、山に逃げ込んだと伝えられている。

## (2) 壱岐島新城古戦場

10月14日、元・高麗軍は壱岐の西岸に現れました。『高麗史』を見てみましょう。対馬については「撃殺すること甚だ衆し」と一言ですが、壱岐については金方慶伝に、もう少し書いてあります。倭兵は崖の上に陣をしいて、これを攻撃すると降伏を乞うたが、後また来て戦った、洪茶丘らは1,000余人を撃殺した、という記述です。これでも戦いの内容はあまりわかりません。

日本側の史料はないのでしょうか。ここで『八幡愚童訓』という史料をご紹介します。タイトルから想像できるように、八幡神（八幡大菩薩）の靈験あらたかなこと、すなわち八幡神の不思議な神通力をわかりやすく解説したもので、京都の石清水八幡宮の神官が著したものです。したがって、敵の大將と覚しき者だけでも10万2千余騎、合計は何千万騎になるかわからないと記述してあるなど、大げさ、まか不思議が多いのですが、対馬と違って壱岐の部分はそうでもありません。

壱岐島の西岸に元の船が着いた、そのうち2艘から400人ばかり下りて、赤旛を差して東に3度、敵に3度礼す（何のしぐさか不明）、壱岐守護代の平経高（景高）と配下の100余騎は庄三郎ガ城の前で箭合わせをした、蒙古の矢は2町ばかり（約220m）飛び、守護代側に2人手負いが出た、敵は大勢なので城に退いて防戦したが、翌（10月）15日終に城中で自害した、18日に守護代の下人宗三郎は博多へ渡って詳細を報告した、とあります。



新城神社 壱岐市勝本町新城東麓

平経隆（景隆）らが籠もって自害した城を樋詰城といい、現在城跡には平景隆を祭神とした新城神社があり、付近には殺害された人々を埋葬したという千人塚、また「唐人原」という地名もあって「文永の役新城古戦場」として県史跡に指定されています。地図をみると、この地は海岸からかなり入った地域です。季節は初冬、急ぎ大宰府を攻めるならば、勝本の港にある船を破壊し、布陣した軍勢を「撃殺」すればことは済みます。おそらく元・高麗軍は、壱岐を臨時兵站基地として利用しようと地勢を調査したものと思われる。

壱岐・対馬への蒙古襲来で必ず語られるのが、「日蓮書簡」に書かれている元軍の残酷な行為です。蒙古が攻めてきた対馬では、総馬尉（そうまのじょう）が逃げ出し、百姓の男はあるいは殺され、あるいは生取になり、女は手のひらに穴を開けられて船に結びつけられ、あるいは生取にされて、一人も助かる者なし、壱岐も同じことが行われた、ということです。でも、宗右馬允資国は佐須浦の戦いで戦死（史料が証明）しています



文永の役 新城古戦場（中央右が千人塚）  
壱岐市勝本町新城東触

し、総じて根拠のない風聞・風説を記したものでしょう。この部分は注意した方がよさそうです。

ただし、壱岐・対馬の男女（子ども）が拉致されたのは事実で、『高麗史』に子ども男女200人を王と公主（王妃のこと、フビライの娘）に献上したとあります。壱岐には「むくりこくり（鬼が来る）」と言って、泣きやまない子どもをおどす風習がありました。「むくりこくり」とは蒙古・高句麗のこと、すなわち元寇で壱岐を襲った元・高麗軍を指します。それだけ悲惨な「元寇」であったことを語り伝えています。

### (3) 博多湾上陸の元・高麗軍

10月19日大船隊が博多湾に押し寄せ、翌未明元・高麗軍は今津から上陸を開始し、湾岸の長浜・百道・箱崎などから進攻しました。当時は石築地もありません。バアトル（軽疾舟）に積んできた軍馬が躍動し、投石機を使った「てつはう（鉄砲）」が炸裂、飛距離220mのヤジリに毒を塗った弓矢、これ

ら強烈な兵器が前面に出て、少武資能とその子経資・景資兄弟、大友頼泰らが率いる日本軍は、だんだん後退を余儀なくされました。そして、おそらく水城を盾に大宰府を守護しようと判断したようです。

水城は第2章に出てきました。大宰府防衛のため高さ13mもの土塁が1キロ以上続き、博多側には幅60m程の外濠が造られました。この当時は深田になっていましたが、十分機動力のある元・高麗軍に対処できそうです。まずは大宰府防衛が優先、したがって箱崎八幡宮はじめ博多の町は焼き払われました。町の人々は無事逃げるのができたでしょうか。

このように書いても合戦のイメージがあまり湧きません。そこで、『八幡愚童訓』から、なるほどそうだったかもしれないという部分を紹介しましょう。

少武入道覚恵（資能）の孫わずか12・3歳が箭合わせのため小鏑矢を射ると（合戦前の作法）敵陣はどっと笑った、敵は太鼓を叩き銅鑼を打ち、紙砲・鉄砲を放つ、その凄まじい大音量に日本の馬は驚いて制御できない、このように合戦開始の作法が全く異なります。

敵の甲は軽く馬を能く乗りこなす、力は強く、命を惜しまず、大変勇猛である、と兵士を表現しています。また、日本の戦は相互に名乗りあって勝負する、この合戦は大勢一度に寄せ合う、個人戦と集団戦という違いがはっきりしています。

とくに、雨が降るように数万人が毒矢を射



てつはう 松浦市立埋蔵文化財センター蔵

る、槍（鉾）ぶすまのように並んで、寄せ来る者に対し中を引き、両端から廻り込んで討ち取る、といった戦法には太刀打ちできなかったのではないのでしょうか。数万人は大げさですが、こうした戦法が事実とすれば、日本軍が水城まで撤退したことも容易に理解できます。

さて、文永の役最大の難問は、これだけ元・高麗軍が優勢だったのに、10月21日の朝「海ノ面ヲ見遣ルニ、蒙古ノ船皆々馳戻リケリ」（八幡愚童訓）、つまり異賊の兵船は退散していた、ということをどのように解釈するかです。

『八幡愚童訓』の記述は別にして、元・高麗軍の撤退に関する史料をあげてみます。

#### ○『元史日本伝』

日本を取ろうとしたが、官軍は整わず、また矢が尽き、財物を略奪し、人を虜にして帰った。

#### ○『高麗史』

倭軍を敗走させ、遺体は折り重なっていた。日が暮れて帰艦したが、たまたま夜に大暴風雨となり、戦艦は崖に触れて破損した。11月27日遠征軍は合浦に帰還、帰ら

ぬ者はおよそ13,500余人。

#### ○『高麗史』金方慶伝

方慶は優勢なまま退路を断って攻め入ろうと主張したが、忽敦元帥と副元帥の洪茶丘は、兵が疲れている、劉復亨副元帥も負傷しているし、帰艦することを決めた。たまたま、夜に大暴風雨があつて、戦艦は岩に当たって破損した。

なにより「八幡愚童訓」に暴風雨の記述がありませんから、八幡神の神威により「神風」が起こったというシナリオは後世作られたものでしょう。ただ暴風雨が、博多湾に集まっていた戦艦を破損させ、合浦に帰還しなかった者が13,500人余もいたのは事実です。この数はとても合戦による戦死者とは考えられません。そこで、次のように推測しておきます。

◇当初から日本軍を押しまくって優勢だったが、夜間は夜襲を警戒して博多湾の戦艦に帰っていた、そこへ暴風雨が襲い、撤退することになった、湾内にひしめき合っていた係留されていた戦艦は急ぎ湾を出て行ったものと思われる。

◇もう一つ、第一次日本遠征（文永の役）の早期撤退は、初めから予定通りだった。何度も大宰府まで使者が行っており、食糧・物資が集積され日本制圧には欠かせない大宰府攻略の目途が付けば継続、付かなければ撤退というわけである。再征に備えた対馬・壱岐の事前調査は行われていた。

◇同じ高麗人ながら、副元帥の洪茶丘と金

方慶將軍は仲が悪く、そこへ<sup>きんと</sup>忻都元帥の優柔<sup>すえなが</sup>普段も重なり、重要な戦況判断に狂い<sup>が</sup>が生じていた。日本にとっては幸いしたと言える。

## コラム 蒙古襲来絵詞（竹崎季長絵詞）

元寇と言えば、第一にこの<sup>えことば</sup>絵詞が紹介される。主人公竹崎季長が文永・弘安の役において活躍したことを誇るために描かせたものだ。どこの誰に依頼したのか詳細はわからない。写実的な描写からして博多・大宰府で描かれたという推測もある。時期は1290年代とされており、文永の役から20年、弘安の役から10年はたっている。

あらすじはつぎのとおり。肥後国の貧しい御家人竹崎季長が主従わずか5騎で参陣し、肥後勢の中で「一番<sup>か</sup>駆け」をしたいと勇み、「ただかけよ」と敵に突っ込んだが、負傷して肥前の御家人白石<sup>みちやす</sup>通泰に助けられた。後日、大将<sup>しょうじ</sup>の少弐<sup>すえな</sup>経資から負傷したことを記した<sup>かん</sup>感状（戦功など賞した文書）を受け取ったものの、恩賞<sup>しん</sup>の報せはない。そこで自身鎌倉に行き、恩賞奉行の安達<sup>あだち</sup>泰盛<sup>やすもり</sup>に直談判して肥後国海東郷の地頭職を得た。弘安の役でも兵船に乗って敵船に乗り移り、大活躍した、というものである。

どうも<sup>ふ</sup>腑に落ちない。肥後勢では、すでに菊池<sup>たけふさ</sup>武房が赤坂に陣取った敵軍を攻撃しているのに、「一番<sup>か</sup>駆け」の主張には疑問が湧く。その後突っ込んで負傷したことが、どうして地頭職に結びつくのか。とにかく後世の自慢話は、あまり史料としては使えないようだ。ただ、描かれた「絵」は迫力がある。



### 3 弘安の役 東路軍と江南軍

#### (1) 異国警固番役と元寇防塁



生の松原 元寇防塁 福岡市西区小戸

文永の役では、対馬・壹岐が元・高麗軍のために蹂躪され、博多が直接攻撃にさらされましたが、幸運も加わって何とか終わりました。これですべて終わったわけではありません。鎌倉幕府は、予想される蒙古襲来に備えて、今度はいろいろな具体的な方策をとりました。

まず、1275年（建治元）に定められた異国警固番役です。1年を春夏秋冬4季に分け、春3ヶ月は筑前・肥後が担当、夏は肥前・豊前、秋は豊後・筑後、冬は薩摩・大隅・日向が担当し、主として博多湾の警備を分担しました。動員された武士には非御家人もいて、例えば五島中通島の白魚行覚は数多く異国警固番役を勤め、それを根拠に地頭・御家人身分を主張して裁判を起こしています。鎌倉幕府は蒙古軍の再来に備えて、御家人以外の武士も合わせた総動員体制を敷いたのです。

同年、元の使節である杜世忠一行が鎌

倉龍ノ口刑場で斬られました。文永の役で勝利したとして、北条時宗にある種の高揚感が生じたように思えます。逆に、1276年こちらから高麗に攻め込もうという計画（異国征伐）も出てきました。日本遠征の基地を、事前にたたいてしまおうというわけです。しかし、博多湾岸の石築地（元寇防塁）建設開始とともに消えさりました。

その石築地（元寇防塁）は、博多湾岸に高さ2~3mの石塁が約20キロに渡って築かれ、河口・干潟には乱杭が打たれました。こうした元軍の馬が飛び越えられないような高さの石築地が、弘安の役では威力を発揮し、上陸を許しませんでした。築造の分担は、博多湾西端の今津が日向・大隅、今宿は豊前、生の松原は肥後、姪の浜は肥前、博多は筑前・筑後、箱崎は薩摩、東端の香椎は豊後となっています。したがって、長崎県（壹岐・対馬を除く）の武士団は少弐氏の指揮のもと、姪の浜石築地の築造、そして修復にずっと関わってきたわけです。大変な負担でした。

しかし、それもだんだん形骸化して、御家人たち配下の農民が直接博多に行って工事に当たるのではなく、銭の納入ですませることも多くなったといえます。当時銅銭は、日宋貿易の進展とともに大量に輸入されていました。南宋の滅亡後も、日本の貿易船が元に渡り、黄金と銅銭の取引を願い出て許可されています。フビライは戦争と貿易を切り離し、割り切って指示を出す現実主義者でした。

今日、元寇防塁は生の松原など各所で発掘が行われ、とくに博多区博多小学校建設に

ともなう発掘では、出土した石墨全てが保存され、一部は公開されています。

## (2) 壱岐島瀬戸浦古戦場

1279年の南宋滅亡後、日本再征計画が本格化し、1280年には征日本行省が新設されました。日本遠征指揮官は次のとおりです。合浦を出航する東路軍は、前回と同じ忻都と洪茶丘、その中高麗軍の指揮官は昇格して金方慶、江南軍の指揮官は、アラカンが病のためアタハイに代わり、また南宋降将の范文虎はんぶんこです（元史、高麗史参照、以下も同じ）。

戦力は、東路軍4万、高麗に造らせた兵船900艘、うち金方慶率いる高麗軍1万、管轄の水手は1万5千（高麗史金方慶伝）、江南軍は10万余、兵船3,500艘となっていますが、およその目安だと思えます。ただ今度の遠征には、フビライの駙馬ふま（娘むこ）として高麗の忠烈王が積極的に動いていますので、兵船・水手の準備は前回より整備されていたと考えられます（江南軍については後述）。

日本再征を前に、フビライは指揮官同士の不和を心配し「同心協謀」するように命じています。前回の遠征で反発し合った洪茶丘と金方慶のことがありました。ともかく東路軍と江南軍は、6月15日に壱岐で会合して博多・大宰府に攻め込む計画になっていました。

1281年、弘安4年5月3日、合浦を發った東路軍は5月21日「世界村大明浦」に着いたとあります。この場所がどこかについては対馬さか、博多しんか志賀島の2説が有力ですが、はっ

きりしません。佐賀説をとると、合浦を出て対馬東海岸の佐賀を経て壱岐に上陸、壱岐を制圧した後、博多湾へ向かいます。世界村が志賀島だとすると、東路軍は対馬・壱岐をパスして一気に博多湾襲撃となります。「八幡愚童訓」には、ある個所で高麗の兵船500艘が壱岐・対馬に上がりとあり、すぐ後の個所では蒙古・大唐の船は対馬に寄らず壱岐の嶋に着くとあります。あり合わせの情報で書かれたものでしょう。

しかし、東路軍にとっての対馬、壱岐の役割を考えた場合、対馬は中継基地、壱岐は臨時兵站基地として大いに使えそうです。博多湾に上陸して大宰府を制圧するか、あるいは大きく強固な陣地を築くまでは、水・食糧の補給、兵士の休養、軍馬の放牧・畜養が欠かせません。

対馬は山が深く、水は豊富でおいしいところ。壱岐は「筑紫牛」の異名をとる壱岐牛の産地として古来有名で、農産物も豊かです。平坦な地勢ですから軍馬の放牧・畜養もできるでしょう。前回の戦で日本軍の抵抗はわかっていますし、遠征が長引くことを想定すれば、対馬・壱岐という補給ルートの確保は非常に大切なことではないでしょうか。今回の日本再征でも、そうした点は十分考慮されていたと思われます。仮に、5月21日の「世界村大明浦」が志賀島だとしても、元・高麗軍は対馬の必要な拠点、また壱岐を面で確保したはず。

1925年中国大連の近くで発見された「張百戸墓碑銘」は、兵100人クラスの隊長として



碇石 壱岐市芦辺町瀬戸浦 少武公園内

参戦した張成のもので、東路軍の合戦の様子が具体的に書かれています。それによると6月6日に志賀島で戦闘が行われていますが、おそらく今津から香椎まで完成していた石築地のため元・高麗軍は上陸できず、石築地がない志賀島から攻め込もうとしたのです。この戦闘は一進一退、張成らの部隊は壱岐に「還った」と墓誌銘にありますから、6月15日の江南軍との合流日に合わせたものでしょう。すでに壱岐は元・高麗軍に制圧されていたと考えられますが、江南軍は到着しません。そうしているうちに6月晦日から7月2日にかけて日本側の攻撃を受け、大激戦になりました。

芦辺には「蒙古のいかり石」と言われるものが4本確認されています。例えば、宋商船の碇など色々な可能性はありますが、この戦

で沈められた東路軍戦艦（千料舟）の碇ではないか、あるいは(3)の大暴風雨での沈没か、石材の産地を確認したいものです。

芦辺の瀬戸浦には、少武経資の三男で守護代として着任儀たという少武資時の墓（ショウニイ様）が伝えられています。東路軍の壱岐制圧に抵抗して討死したのでしょう。瀬戸の壱岐神社には少武資時<sup>さいじん</sup>が祭神として祀られており、一帯は、弘安の役瀬戸浦古戦場（県指定史跡）です。



少弐資時の墓 壱岐市芦辺町瀬戸浦 少弐公園内

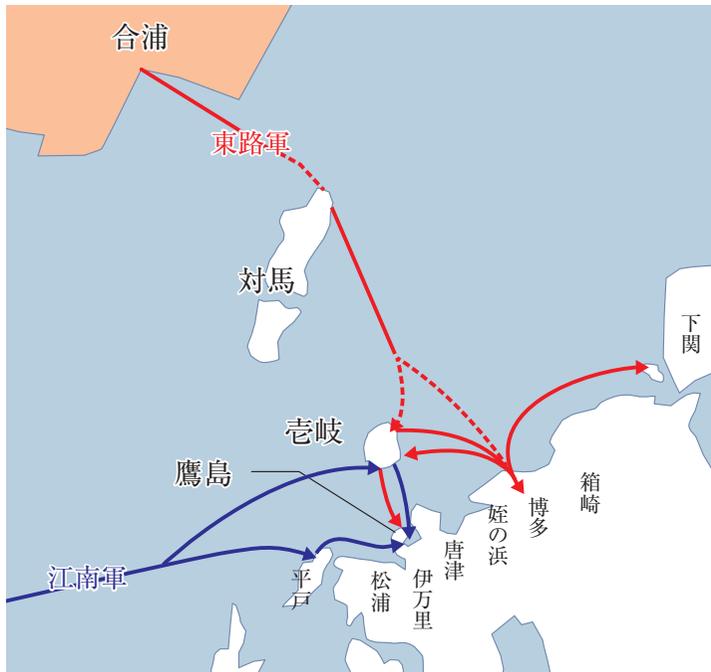
### (3) 大暴風雨が襲う

江南軍の動向に移りましょう。アタハイと范文虎が率いる兵力10万余、兵船3,500艘の兵士・船員は、ほとんどが南宋からの降伏とされます。日本遠征のため新たに兵船600艘を泉州・揚州などで造らせていますが、十分な建造ができず、多くは旧南宋の軍船を修復・再利用し、また河川用の平底船を徴発したものでしょう。平底船ではナギの時でない外洋は渡れません。

江南軍は、6月15日に壱岐で会合という事前の合意に間に合わない6月中・下旬に、慶元（寧波）<sup>ニンポウ</sup>・舟山<sup>しゅうざん</sup>を続々と出発したようです。大船に積載する小舟を除いても、2,000~3000艘の大船団です。といっても千料舟<sup>千バートル</sup>・拔都魯<sup>ばつとろ</sup>軽疾舟<sup>けいしつ</sup>・汲水<sup>きゅうすい</sup>小舟、合わせて

900艘という構成の東路軍高麗建造船とは違って、老朽船の中に新造船が混じる、寄せ集めだったと思われます。

まず先発隊が壱岐に至って、東路軍に合流地点の変更、すなわち「平壱島」（平戸島）に来るようにと伝達しました。『元史日本伝』には、平戸島は周囲に軍船を停泊させることができる、防備は万全である、との理由が書いてありますが、意味がよくわかりません。江南軍船団は小回りがきかず、軍船も古いものが多いので、博多湾への最短の航路に位置する平戸を急ぎよ選択し、東路軍を呼んだと推測します。実際には鷹島海域でした。7月27日張政の部隊が「打可島」（鷹島）に移動したところ、日本側の激しい攻撃にさらされました。これには松浦党も多数参加したはずで



弘安の役

ところで、江南軍来航の経路には五島列島があり、おそらく宇久島・小値賀島あたりですが、侵攻されたであろう平戸も含めて、全く史料が残されていません。五島・平戸の御家人たちは、博多湾の防御のために本拠地を離れていたためです。中世武家文書は、こういう戦いをして貢献した、仕事をしたと幕府や上級武士に提出した写しが多いので、五島・平戸に江南軍が侵攻してきたとしても伝承しきれません。それも具体的でない不確かなものです。

東路軍にとっての対馬・壱岐が、江南軍にとっては五島・平戸（鷹島）に相当すると考えられます。ただし、中国本土と五島・平戸の間には東シナ海があって補給は簡単ではありません。

江南軍が途中寄った済州島は広大ですが、兵站基地にするにはちょっと日本からは遠い。江南軍は農具を積んでいたといいます。日本での食料生産も考えていたのでしょうか。

いよいよ博多へ進撃というとき、<sup>うるう</sup>閏7月1日、大暴風雨が船団を襲いました。これが台風であることは衆目一致しています。鷹島南岸域から伊万里湾一带は江南軍船の停泊海域でした。まともに風波を受けた江南軍船団は、ほとんど壊滅状況になったと伝えられています。その証拠の一端が、これまで鷹島地元住民の採集や漁業者の網にかかった遺物によって示されてきました。「管軍総把印」(銅印 <sup>かんぐんそうはいん</sup> パスバ文字) や多数の壺、「てつはう」「石弾」などの遺物が松浦市立埋蔵文化財センター・

ガイダンス施設に展示されています。

生き残った兵は、閏7月5日から7日にかけての鷹島合戦で討たれ、また捕虜になりました。この大暴風雨が、いわゆる「神風」とされ、近代に至るまで日本は「神の国」と喧伝されてきました。「神風」はベトナム（チャンパ）でも吹きましたし、日本だけではないことはすでに触れたとおりです。

東路軍船団は、すべてが壱岐から鷹島に移動したわけではないと考えられており、また船舶そのものも総じて江南軍船隊よりは堅固だったようです。『高麗史日本伝』（岩波文庫）には、東征軍（東路軍のうち高麗軍）9,960名、梢工・水手17,029名、その生還者は

19,397名と非常に具体的な数字が上げられています。それでも7,592人が還ってこなかったことになり、生還率は71.9%です。大暴風雨の被害もあったとみるべきでしょう。

『元史日本伝』（岩波文庫）は大げさに江南軍10万のうち帰還者は3人のみとしていますが、范文虎ら将軍たちは帰っていますし、鷹島に至らず、まだ平戸島にいた船隊もおよそ無事で、帰国しました。戦いに負けたわけではない、大暴風雨のせいだと強調したものだと思います。

以上のように、第2次日本遠征（弘安の役）は、元にとって大きな失敗でした。フビライは3度目の日本遠征を考えましたが、ベトナムの



写真左：管軍総把印、写真右：管軍総把印陰影  
画像提供：松浦市教育委員会



海底から発見された壺  
松浦市立埋蔵文化財センター蔵



分離型碇石（いかりいし） 2本がセットになっている  
松浦市立埋蔵文化財センター蔵

反抗もあって、諦めざるをえませんでした。

しかし、日本遠征が南宋降伏兵の処分を目的の一つとしたら、目的は部分的に達成されたこととなります。元に反乱を起こす可能性がある南宋降伏兵の多くが海に消えたわけです。旧南宋には兵船建造を押しつけ、これは高麗に対しても同じで、反乱の経済力を削ぐことにもつながります。現在、鷹島海域で調査が進められており、その結果は弘安の役全体の評価に関わります。今後の進展に注目していきたいと思います。

#### <鷹島「元寇沈没船」について>

鷹島での元寇沈没船の発掘調査は、わが国における水中考古学の歴史を作っているようです。1980年代~2000年初め、床浪港や神崎港の改修および離岸堤建設にともなう緊急調査で、木製碇と船材、「てつはう（球形土製品）」、石弾、磚（煉瓦）など元寇関連の遺物が大量に出土していました。

1992年からは範囲確認調査が続けられ、2012年にはわが国で初めて、海底遺跡「鷹島神崎遺跡」が国史跡に指定されました。ま

た、2006年から2010年にかけては音波探査による伊万里湾全域にわたる調査が行われ、これが2010年の元寇沈没船発見につながりました。

琉球大学の池田榮史教授を中心とする沈没船の調査は続き、翌年にはキール（竜骨）など船材の残存が確認され、船の構造がわかる大きな成果として報道されました。周辺から採取された中国陶磁器や磚、「てつはう」などの遺物から判断しても、「元寇沈没船」に間違いありません。

海底にある木材は、数百年間にフナクイムシに喰われて消滅するのが普通です。この場合はシルト（細かい泥の粒子）にきれいに覆われていたため、蚕食をまぬがれてきたのです。すぐ引き上げればという意見もあるのですが、いろいろ難題があります。池田教授は最低3艘の沈没船を発見・調査して、一番条件のいいものを引き上げたい、それまでに引き上げ方法を確立しておこうと言っておられました。それまでは銅製の細かい網をかぶせて現地保存しています。なぜかフナクイムシを防

ぐことができるそうです。

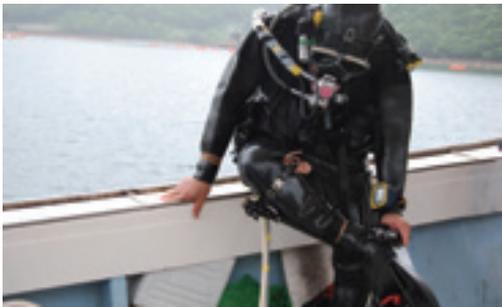
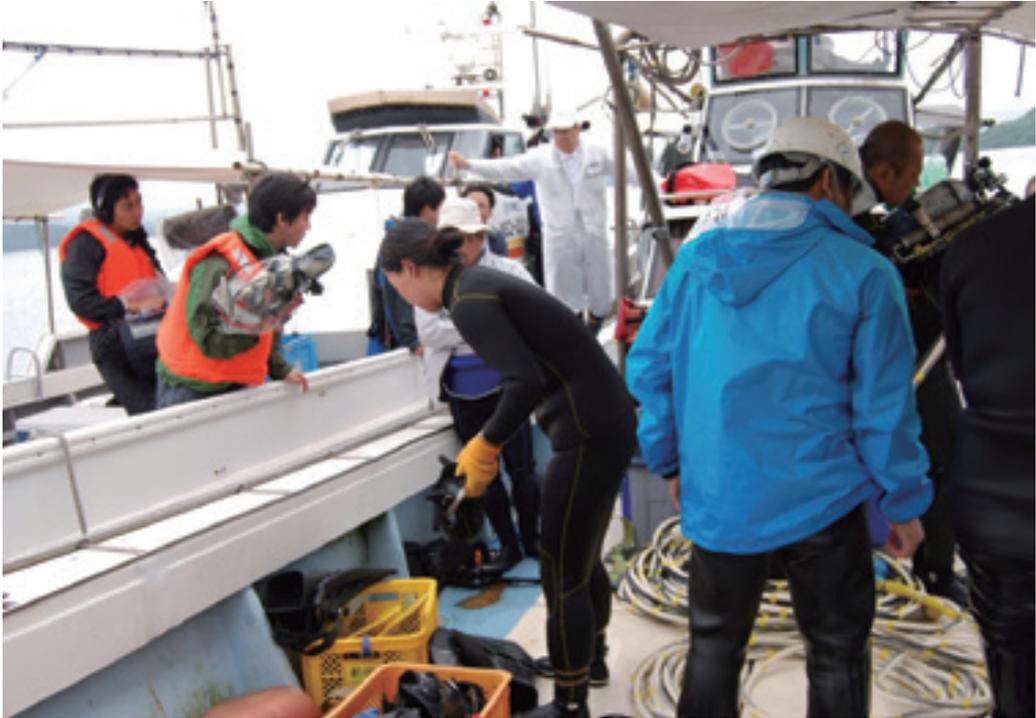
現在、2号沈没船が確認されており、2017年鷹島に設立された松浦市立水中考古学研究センターでは、調査・研究と合わせて、引き上げに関する研究もなされると思います。



写真左：木製碇（これに石材を取り付け）、写真右：キール（竜骨）  
松浦市立埋蔵文化財センター蔵



1号沈没船が発見された海域 神崎湾（松浦市）



潜水調査の様子 神崎湾

第7章

# 対馬の海民・ 海商と松浦党 の活動



14世紀後半から15世紀初めの東北アジア海域では、高麗・朝鮮側が「倭寇」と呼ぶ武装集団が活発に活動し、朝鮮半島・中国大陸沿岸地方を荒らし回りました。その主力は対馬の海商集団と松浦党勢力で、彼ら海の武士団は貿易商と海賊の二面性を有していました。

今日「倭寇」は、教科書に記載されている歴史用語ですが、これについて改めて考えてみたいと思います。

## ①「倭寇」とは

### (1) 歴史用語としての「倭寇」

もともと「倭寇」という表記は、『高麗史』や『朝鮮王朝実録』で使われる史料用語です。つまり、倭、〇〇(地名)を寇す(侵犯・略奪)という漢文表記部分の「倭寇」が歴史用語となり、歴史教科書にも使われるようになったのです。この章でいうところの主として14世紀後半から15世紀初めを「前期倭寇」、16世紀後半の中国沿岸を荒らし回った時期のものを「後期倭寇」といいますが、これらは日本の高校教科書にも記載されています。

東アジアの主要国である日・中・韓3カ国の友好関係は、現在の安定、将来の発展に不可欠であるという前提で、この論を展開します。

「倭寇」の「倭」は普通日本(人)を指しますから、日本の海賊が14・5世紀に朝鮮半島に侵攻し、米穀を略奪、人をさらうなどした、と理解されます。その多くは事実ですが、全てではありません。半島南部<sup>たとうかい</sup>多島海



銅造如来立像(国指定重要文化財) 木坂海神社

の海民や濟州島人の一部が「倭語」を話し、「倭服」を着て「倭寇」集団に加わっていたという有力な研究がありますし、また貿易商と海賊の二面性があることは、すでに申し述べました。「倭寇」が韓国の歴史教科書に記載されているならまだしも、日本の教科書で歴史用語として使われていることには違和感を覚えます。

「寇」の表現は、元寇（第6章）、刀伊の入寇、応永の外寇（後述）というように攻められた側、被害を受けた側の表現がほとんどです。これまで日本の教科書は寛容だなぁで終わっていたのですが、対馬仏像盗難事件とその後の問題を考えると、中世の日朝関係史において、「倭寇」の略奪がクローズアップされたままではいけないと思うようになりました。



海神神社

## (2) 対馬仏像盗難事件

2012年10月、韓国の窃盗団が対馬の海神神社、観音寺、多久頭魂神社から宝物・文化財を盗み出した事件があり、その後、窃盗団一行は韓国内で拘束され、盗品も没収されました。

まず、木坂海神神社の宝物館からは新羅仏の銅造如来立像（国指定重要文化財）だけが持ち去られました。館内には象嵌が入った高麗青磁の優品や、県有形文化財の木造仮面などもあったのですが、目的は防弾ガラスの展示ケースに入っていた新羅仏だけ。高価な文化財を狙う専門の窃盗団です。なぜ防弾ガラスかというと、一度盗まれて鎌倉まで旅をされ、当時の峰町（現・対馬市）学芸員がお迎えに行った事件があったためです。そのため嚴重な鉄筋の宝物館と、多重のカギ、防弾ガラスの展示ケースが整備されました。そうしたセキュリティをものともせずドリルでカギ等壊して侵入し、展示ケースを引き倒して盗み去ったというわけです。

2015年7月、海神神社の銅造如来立像は韓国政府から返還されましたが、小綱観音寺の造観世音菩薩坐像（県有形文化財）はいまだ返還されていません。韓国内には、対馬などにある新羅仏・高麗仏などの文化財は、みんな「倭寇」が略奪したものであるという共通認識があると思われます。だから木坂の仏像も返還に3年近くかかりました。

小綱の仏像の場合は像内に結縁文があつて、1330年（天曆3 元の年号）に忠清南道瑞

山郡の浮石寺の仏像として造立されたことが知られています。そのため浮石寺は「倭寇」に略奪されたとして所有権を主張、提訴に至りました。韓国の大田地裁では、対馬観音寺側が正当に所有するに至ったことを証明しない限り返還はありえないとして浮石寺側の主張を認めたのです。全く逆です。朝鮮王朝初期には、大規模な仏教排斥、仏像破壊の動きがありましたし、浮石寺側が略奪されたことを立証するのが筋ではないでしょうか。

韓国政府が控訴し裁判は続きますが、一刻も早い返還が望まれます。半島から対馬へ移動した経緯は不明としても、少なくとも数百年間小綱観音寺の大切なご本尊だったことは動かさない事実です。なお、像内の「結縁文」は、観音寺が普段無住状態であることから別途保管されていました。不幸中の幸いでした。

さらに言えば、この仏像は年代がはっきりした高麗時代後期の基準作です。貴重な優品ということで長崎県有形文化財に指定されていますが、そうした対馬の渡来仏120体以上の調査を長年（200回近く来島）続けてこられた鄭永鎬（チョンヨンホ）先生が新聞取材で語っておられます。

朝鮮王朝初期の仏教排斥もあり、正規のルートで渡ったものも少なくない、具体的な証拠もないのに浮石寺の所有権を認めた一審判決は間違っている、窃盗で持ち込まれたものを奪い取ることを認めれば国際的信頼を失いかねない、と至極正当なご意見でした。先生は、いったん観音寺へ返還した後、

定期的に浮石寺への里帰りといったことを考えておられたようです（鄭先生は2017年4月に死去されました）。

要は、意味を十分理解しないまま、すべて「倭寇」のせいにはされては困るので、対馬海商や松浦党については、史料引用などは別として歴史用語としての「倭寇」をやめ、状況に応じて海民・海商・海賊衆（海の武士団）と表記したいと思います。



海神社 宝物館

## ②『高麗史』・『朝鮮王朝実録』にみる「倭寇」 記事と対馬宗氏

### (1) 『高麗史』の例

『高麗史』は15世紀中ごろ朝鮮王朝時代に編纂されたもので、史料批判は必要です。朝鮮王朝に都合が悪い史料は採用されていませんし、中華思想と朱子学史観もとの下での編纂ですから、すべてが史実というわけではありません。それでも『三国史記』や『日本書紀』に比べて格段しんぴようせいに信憑性は高い史料です。そこから「倭寇」関係記事をあげてみましょう。

- ・高宗10年(1223)「倭寇金州(倭、金州に寇す)」
- ・高宗12年(1225)倭船2艘が慶尚道沿岸の州県に寇す
- ・高宗13年(1226)倭、慶尚道の沿海州郡に寇す
- ・高宗14年(1227)倭、金州に寇す
- ・高宗30年(1243)金州ぼうぎよの防禦官が報じた「日本国は方物ほうもつを献じ、わが国の漂流民を送ってきた」
- ・元宗4年(1263)倭、金州管内熊神もち島の勿とう島に寇し、諸州県の貢船を奪った  
使者を日本国に遣わして、賊の取締りを要請した

(岩波文庫『高麗史日本伝』を抄訳、以下この項同じ)

1223年の記事が「倭寇」の初出で、金州は釜山の西にあって現在の金海市に当たります。

また賊を「倭」として、日本国とは区別していることがわかります。13世紀鎌倉時代

の「倭」は小規模で、対馬海民集団あたりが主力でしょうか。この後、蒙古襲来関係記事が続く、再び「倭寇」が現れるのは次の記事です。

- ・忠肅王10年(1323)倭が王都開元かいげんへ向かう会原そうせんの漕船(税を運ぶ船)を群山島において襲った。また楸子しゅうしなどの島を寇し、老若男女を虜とりこにして去った
- ・忠定王2年(1350)倭、固城・竹林きよさい・巨濟に寇す。合浦ごうほの行政官・軍官が戦って300人を討ち取った。倭寇の侵すは、此れより始まる(「倭寇之侵始此」)。宮中に倭賊をはらうための(仏教)法会を設けた
- ・(同年)倭船百余艘、順天府に寇し、南原・求礼・靈光・長興の漕船を襲った
- ・(同年)倭船66艘、順天府に寇す
- ・(同年)倭船20艘、合浦に寇し、その軍営と固城・会原の諸郡を焼き払った倭、長興府の安壤郷に寇す
- ・(同年)倭、東萊郡とうらいに寇す
- ・忠定王3年(1351)倭船130艘、紫燕しえん・三木さんもくの2島に寇し、集落を焼き尽くした  
倭、南陽府・双阜県に寇す
- ・(同年)倭、南海県に寇す

1350年の記事は明らかに「倭寇」という用語になっていることがわかります。船数からして集団の規模が大きくなっていますし、襲った地域が慶尚道南端から広がって全羅道、さらに半島西岸を北上し忠清道・京畿道等に及んでいます。高麗側における「倭寇」という認識はこの時期からでしょう。

第6章の元寇で述べたように、元・高麗軍は対馬・壱岐・北九州（博多）に襲来しました。これに対し鎌倉幕府は、実現しなかったものの高麗への反撃遠征軍の派遣を計画したこともあります。こうした13世紀後半の一連の歴史事象が、対馬の海民や松浦党を刺激した可能性は大いにありそうです。

- ・辛禰<sup>しんぐ</sup>3年（1377）この年大規模「倭寇」…会原の倉、新平県、慶陽、平沢県、西鄙、蔚州、雞林、梁州、密城、彦陽県、南陽県、安城県、宗徳県、江華島等々
- ・辛昌<sup>しんしょう</sup>元年（1389）慶尚道元帥<sup>げんすい</sup>の朴歲<sup>ぼくさい</sup>が戦艦100艘をもって対馬を攻撃した。倭船300艘及び海岸の村々を焼き尽くした。虜<sup>とりこ</sup>になっていた男女百余人を採して連れ帰った。

1377年の「倭寇」は大規模、広範囲で、中には騎馬隊<sup>きう</sup>を擁する集団もありました。内陸まで侵攻するとリスクは大きくなります。対馬海民と組んで渡海した海の武士団、瀬戸内海賊衆あたりが参加していたのかもしれませんが。高麗も反撃に出て、1389年には対馬を攻撃しました。この後は襲撃回数が少なくなりますから、かなりの打撃を与えたとみるべきでしょう。高麗の史料にある「三島倭寇」は、対馬・壱岐・松浦地方とされていますが、松浦地方その他の地域からの半島渡海は、対馬海民の協力がなければうまくいかなかったと思われる。

## (2) 『朝鮮王朝実録』の例と応永の外寇

1392年、李成桂<sup>りせいけい</sup>が高麗に代わって朝鮮王朝を開きました。以後約500年間に及ぶ長期の王朝が続きます。高麗王朝を引き継いだかたちですが、高麗は仏教を国教としたのに対し、朝鮮王朝は儒教（朱子学）を国家の基本としました。

『朝鮮王朝実録』から王朝創始当初の「倭寇」関係記事をいくつか抜き出してみましよう。

- ・太祖2年（1393）倭、13艘にて寇す
- ・（同年）倭、全羅道阿容浦に寇し、軍船1艘を掠<sup>りやく</sup>す
- ・（同年）倭、文化・永寧2県に寇す
- ・（同年）倭、西北面定州に寇す
- ・太祖3年（1394）倭、延安府境に寇す
- ・（同年）倭、豊州に寇す
- ・（同年）倭寇、海州に突入し、我が兵船1艘を奪って帰る
- ・（同年）倭、忠清道に寇す、安城水軍万戸張龍劔は倭船9艘を獲る
- ・（同年）倭、靈光郡に寇す、倭船は10余艘、塩夫30余人で戦い、3人を斬り敗走させた
- ・太祖4年（1395）倭寇、三陟府を侵す、府使朴蔓が2人を斬った
- ・太祖5年（1396）倭120艘、慶尚道に入寇し、兵船16隻を奪う
- ・（同年）倭、慶尚道に寇し、通洋浦の兵船9隻を奪う

1396年の慶尚道に入寇した分を除けば規

模は小さくなっていますが侵攻は続いており、新王朝にとって「倭寇」対策は依然として大問題でした。一方、侵攻記事とともに九州探題の今川了俊（後述）が使人を送って大蔵経を求めるなど修好的な記事も目に付きます。硬軟両面の政策が採用・実施されたようです。強攻策の最たるものが応永の外寇（癸亥東征）でした。

明の永楽17年（1419）5月、対馬を出て中国遼東半島を目指した船団が、途中朝鮮半島沿岸で小競り合いを起こしました。大挙して中国へ向かう船団の情報を知った朝鮮政府は、機会よしとして翌6月すぐに対馬に遠征軍を送り攻撃しました。遠征計画はすでに作られていたのでしょうか。

『朝鮮王朝実録』によれば、指揮官は李従茂、兵船総数は227艘、兵員の総数は17,285人、65日分の兵糧を携行して、まず浅茅湾口南の尾崎を襲いました。当時対馬の実力者である早田氏の本拠地です。中国へ行った船団が帰ってきたと勘違いしていた尾崎住民は、あわてて逃走しましたが、50余人が立ち向かってきました。

奪った船舶は大小129艘、利用可能な20艘を除き残りは焼き、また焼き払った家々は1,939戸、斬首した敵は114、生け捕りした者21人、田畑はみな刈り取り引き抜き、虜になっていた中国人男女131人を連れ帰った、とあります。

さらに、朝鮮軍は対馬の要衝である船越に柵を築き、南北の通行を遮断しました。これに対して対馬勢も反撃して仁位の糠岳の

戦いで勝利するとともに、占領が長引くのを恐れた宗貞盛（都々熊丸）は李従茂に書を送って今後も修好を望んでいることを訴え、また7月は大風が吹くおそれがあり、長く留まるべきではない、と忠告しました。つまり、元寇の二の舞になるぞと脅かしたのです。これをきっかけに朝鮮軍は引き上げました。貞盛の修好策は次に述べることとします。

さて、第5章の水崎（仮宿）遺跡を思い出してください。14世紀後半から15世紀前半の地層に遺物が最も多く、とくに第四層と呼ばれる土層には焼土層（焼けた炭化物など含む）がありました。ちょうど応永の外寇の年代に一致します。

朝鮮軍が、まず攻撃した尾崎、ついで柵を設けた船越、いずれも早田氏が拠点を置いたところですよ。早田氏とは、いかなる豪族だったのでしょうか。第5章と本章に分散して出てきますので、ここで簡単にまとめておきます。

○浅茅湾の尾崎（土寄）と船越を本拠地とする対馬海民の統率者、早田水軍の棟梁。朝鮮側からすれば「倭寇」の首領ということになる。この時の当主は早田左衛門太郎。

○したがって朝鮮側からすれば、早田氏は懐柔して平和な通交者に変える対象者、それも大物である。左衛門太郎は朝鮮の官職を受け（受職人）、交易を行った。朝鮮貿易だけではなく、六地（九州本土のこと、筑紫・肥・豊・薩摩・大隅・日向）にも船を出していた。

（現在も早田家には、受職の証拠となる「告身」が3通伝来している）

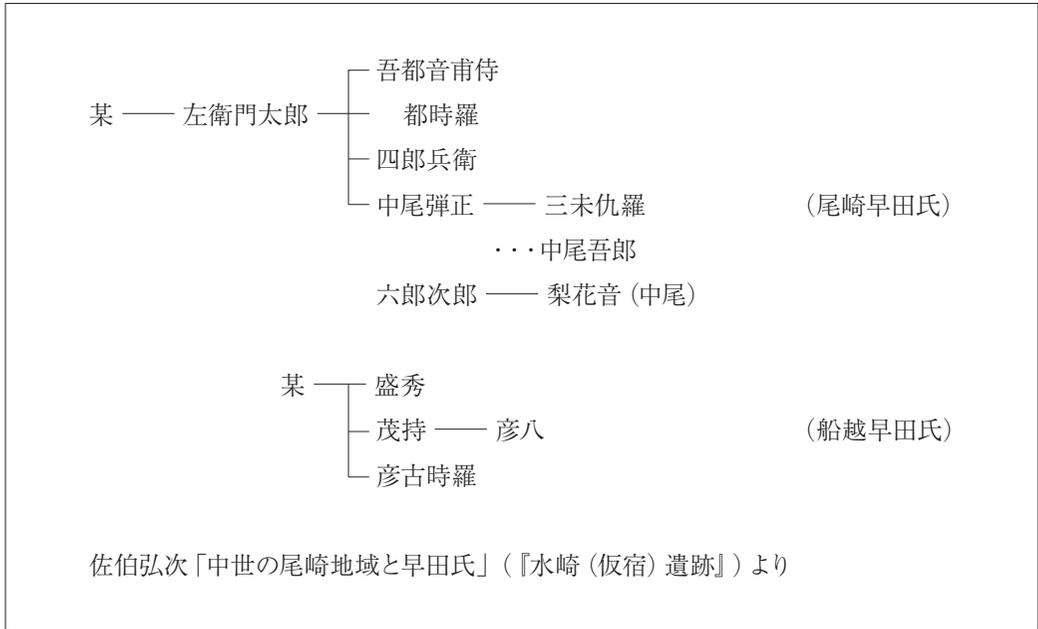


長崎歴史文化博物館「宝の島 対馬展」展示

- その子六郎次郎は、琉球とも交易を行っており、水崎（仮宿）遺跡から出土した東南アジア系陶磁器も、そのことを示唆している。南海の産物（香辛料など）を朝鮮で販売したのであろう。この父子はスケールの大きい海商である。
- すると1400年前後の尾崎地区は、塩・魚を売って米を買う朝鮮との交易を基礎に、九州・琉球、そして中国にも広げて、より付加価値の高い貿易品をも取引した交易基地であったと思われる。

- 15世紀半ば以降、宗貞盛の勢力が安定し、早田一族も島主の配下に組み込まれていったらしく、その際の知行には、田畑より交易にかかる税を免除するといったユニークなものがあった。

繰り返しになりますが、現在も尾崎と船越には早田家があって、地域社会で中枢の役割を果たしておられます。対馬深遠の歴史の象徴的な事例の一つと思います。朝鮮史料から復元された14・15世紀のおよその系図をみておきましょう。



これを早田家文書の「早田系図」と、どうつなげていくかが今後の課題ということです。

日本語の音に漢字を当てていますから、

ちょっとわかりにくい。第一早田全盛期の「左衛門太郎」、その子「六郎次郎」も系図では確認されていないそうです。



写真左：尾崎の早田家と現当主早田和文氏 写真右：船越早田家

### (3) 日朝貿易における対馬島主宗氏の役割

宗氏の出自については、およそ明らかになってきました。大宰府の在庁官人(役人)であった惟宗氏が、阿比留氏を討って対馬の支配者になったと言われてきましたが、対馬国衙の在庁官人に阿比留氏とともに惟宗氏がいることがわかりました。そうすると、国衙役人同士の権力闘争で惟宗氏が阿比留氏に勝利したと考えられ、一方阿比留氏は対馬の祭祀の分野で権威を保ちます。五島列島の神主家に阿比留氏が存在しますが、対馬阿比留氏の流れでしょうか。

当時大宰府のトップは武藤氏、鎌倉時代から代々大宰少弐という官職にありましたので、少弐氏を名乗りました。少弐氏は対馬の守護職・地頭職を兼ね、宗氏が守護代・地頭代の地位にあって仕えました。宗氏台頭のバックには武藤氏(少弐氏)の存在があったと思われます。御家人としては「宗」氏を名乗っていますが、対高麗交渉で一字姓の方が都合がよかったのかもしれません。

さて、高麗に代わった朝鮮王朝は「倭寇」対策として、日本からの平和的な通交者を優遇しました。朝鮮の官職を得た者(受職人)、通交許可の銅印「函書」を得た者(受函書人)は優先的に交易を行うことができました。また、地域の豪族・有力者が使者を送って来る「使船」(実質貿易船)も非常に多くなって財政を圧迫するようになったのです。

そこで、日本からの貿易船の数を減らす交通整理が必要になってきたのですが、それを期待されたのが対馬島主である宗貞茂です。館(拠点)を東海岸の佐賀におき、朝鮮渡海の貿易船に対して統制する役割を担いました。朝鮮側は、日本の有力者が発行する渡航証明「文引」所持を義務づけ、使船についても日本国王(足利氏)・対馬・大内氏・少弐氏などに制限し、こうしたことが貞茂を通して通達されました。その貞茂が死去し、渡航統制が緩むことを恐れた朝鮮が、応永の外寇を起こしたのです。

その後貞茂の子貞盛が対馬を掌握するようになると、1438年には対馬島主が発行する渡航証明「文引」の制度が確立し、使船受け入れの条件のようになりました。貞盛は1443年朝鮮との間に嘉吉条約(癸亥約条)を結び、年間50隻の使船(貿易船)を派遣する権利を得、また毎年米・大豆200石を朝鮮から受領することも決められました。

対馬宗氏は、日本と朝鮮の間において安定した二国間関係を維持するための特別な立ち位置を獲得しましたが、それは対馬が二国間の緩衝地帯という役割を果たすことに通じるものでもありました。



佐賀円通寺後山墓地 宗氏一族か（日引石塔）対馬市峰町佐賀

## おんながみ コラム 黒瀬の女神さま

朝鮮半島・大陸との架け橋に位置する対馬の自然と歴史は限りなく深い井戸のようなもの、今日でもなお新発見が続いている。浅茅湾の一番奥の浦とっていい黒瀬の観音堂宝物庫に、すばらしく上品できれいな顔の仏様（銅造如来坐像 国重要文化財 像高約43cm）がおられる。写真のとおり体部・台座は火災による損傷が著しい。

かつては赤い着物を着て、女神さま、安産の神様として黒瀬の人々に拜まれ、大切にされてきた。現在赤い着物は身に付けておられないが、安産の神様への信心・信頼は今なお深く、厚い。黒瀬を離れていても、赤ちゃんが生まれる前には安産祈願に、出産後はお礼のために里帰りしているという。

どうしてこのような仏様が見出されたのか。それは対馬の村々を民俗学的に調査されていた阿比留嘉博先生あびるよしひろの存在が大きかったと聞いている。永留・阿比留両先生は対馬研究のいいコンビ、永留先生も嘉博とはウマが合うんだ、と言っておられた。

ところで、重文指定の説明には「新羅統一時代の金銅仏中最も優秀な作品のひとつ」とある。頭部・右肩と体部ぶんちゆうが分鑄されている技法は新羅仏にあるが、それでもこれほど大きな新羅仏は韓国にも現存していないそうで、今後中国も視野に入れた研究が求められよう。

なお、女神さまの隣には、いか 威つ姿の男神さま（高麗仏）がおられる。



写真左：銅造如来坐像、写真右：銅像菩薩座像  
黒瀬観音堂（対馬市美津島町）

### ③『老松堂日本行録』・『海東諸国紀』にみる 対馬・壹岐

#### (1) 『老松堂日本行録』

外国船が攻めてきたという応永の外寇の情報は京都まで届き、しかも何万人の軍勢とか、モンゴル・高麗船500余艘とか大げさな情報が室町幕府はじめ皇族・貴族たちを動揺させました。100年以上経ってはいますが、元寇の恐怖は強く残っていたのです。元に代わって1368年明王朝が興り、数十年が経過していても蒙古襲来はなお人々の心の底にありました。

足利4代将軍義持も心中穏やかではなかったと思われます。というのは、先代の義満が始めた明王朝冊封体制下の日明勘合貿易を停止し、明から派遣された使者を追い返していたのです。情報が入り乱れるなかでの朝鮮軍による対馬攻撃でしたから、明が背後にいるのではという疑心もあって、まず室町幕府は1419年冬、博多妙楽寺の僧無涯亮倪を正使、博多商人の平方吉久（医者・薬師としても有名な陳外郎の子）を副使として朝鮮に派遣しました。名目は当時日本の寺院で強い要望がある大蔵経を求めることでしたが、実際は朝鮮側の意図を読みとることでした。

正使が僧侶、副使が博多商人、この組み合わせは、足利義満が日明勘合貿易を開いたときの正使祖阿、副使肥富と同じです。東アジア交易網の中で博多商人の位置・役割（金融資本力）は絶大なものがあり、それは江戸初期まで続きました。

日本からの使節に対し、朝鮮側は大蔵経

を交付するとともに回礼使を日本に送ることにしました。その正使に選ばれたのが宋希璟です。『老松堂日本行録』は彼が記した紀行詩文集で、帰国する無涯に同行して対馬・壹岐・博多、さらに京都まで旅しました。

2月15日（旧暦）釜山を発ち、順風を得て16日対馬の北端部に着き、東に船を回して西泊湾に着船しました。そこに魚を売りにきた小舟があり、中に中国人の奴の僧が居て食物の施しを乞いますので与えましたところ、涙を流して連れ出してほしいと頼みます。持ち主は米をくれればこの僧を売ると言っています。浙江省台州で虜にされ、転売されて来たようで、当時は人身売買が普通に行われていました。

近くに通事旧知の尼が住んでいるというので行ってみると、尼が通事に何用で官人（宋希璟のこと）に従って来たのかと問うので、通事が本国の回礼なりと答えます。尼が「然らば則ち大平の使なり。吾輩も乃ち生きたり」と喜びました。応永の外寇の衝撃は対馬全体に及んでいたようです。

2月20日住吉（おそらく紫の瀬戸、住吉神社がある）に停泊したとき「早田万户三美多羅」が夜来て酒の席を設けました。「万户」は朝鮮の官職、交易権を得るために受職したものです。尾崎の早田家には「告身」（官職授与状、重要文化財）が3通伝えられています。「三美多羅」はすでに述べた早田左衛門太郎のことです。

前年の外寇で尾崎・船越の拠点は焼き払われていますが、正使の無涯が先に船越の

左衛門太郎を訪ねて、朝鮮の船は回礼使が乗っており攻撃はしないと説諭し、米を左衛門太郎と都々熊丸（宗貞盛）の母と代官に送って好意を示していました。それで早速左衛門太郎が船にやってきたわけです。

これ以上対馬・日本を攻撃することはないとの説明に対して彼は、未だ戦争防禦の状況にあったが、官人の話を聞き、はじめて寝食を安んじることができる、家屋敷も再建できる、と答えました。この後の文章は漢文調で左衛門太郎の言ではないようです。ただ、宋希璟が「今事勢を観るに馬島（対馬）は凡そ事皆此の人より出ずるに似たり」と評価しているのは印象的です。去年の戦争で家財産が焼けているのに一言もそれに触れない、言うことは誠実で、我々への接待も厚い、とかなり誉めています。宗貞盛は博多の少弐氏のもとに行っており、宋希璟からすれば、現時点の対馬の実力者は早田左衛門太郎であるとの認識だったのでしょう。

21日、船は住吉から船越に進み、停泊しました。左衛門太郎はまた酒を持ってやって来ました。船は順風を得ず、船越に留まります。ここで困った問題が生じました。貞盛の使者を名乗る者が、対馬を慶尚道の属州とし、貞盛は朝鮮の官職を受けるという講和条件を出し、これが裁可された書状が届いていたのです。朝鮮貿易を生活の糧としていた対馬の一部の者が、勝手に一刻も早い正常化を期待しての行動でした。

左衛門太郎が言うには、少弐殿がこれを聞けば百戦百死してもなお抵抗する、この書

を見たならば官人の身の上にも関わる、と訴えるのです。結局、この件は書を隠し置くことで落着きました。

風雨に阻まれて船越に留まること10日、ようやく3月1日になって雨晴れ風よく、壱岐に向けて発船したところ風がなくなり、到着しないうちに日没です。真っ暗な海を航行するうち島影を見つけ、近づいて入江に停泊しましたが、波が高くなり座しがたいほどでした。ようやく夜が明けて壱岐に着いたことがわかり、風本（勝本）の港に向かうと、矢のように速い3隻の小船が向かってきます。海賊かと、鼓を打ち、旗を張り、甲をかぶって迎え撃つ準備をして問えば、3船は朝鮮から先に帰った陳（平方）吉久が迎えに寄こした船で、宋希璟の船を引いて難所を過ぎ、無事港に入ることができました。そこでは陳吉久配下の者が酒鴈（あひる）を用意して待ちました。酒鴈は酒肴と同じ意味です。

迎え船の理由は、20年ほど前朝鮮使節の船が勝本の湾口において、ひどい風浪によって船が激しく揺すぶられ、使節が亡くなったためです。これを知った宋希璟は酒飯を供えて祭りました。



勝本港 壱岐市勝本町

3月3日壱岐を登って「朴加大」(博多)に向かいました。天気は晴朗、船は快く進みます。普通紀行文という、その土地の風景や住民の生活が登場するのですが、厳しい外交交渉の任務の旅ですから、とてもその余裕はなかった感じがします。それでも博多から、無涯・宗金(博多の豪商、朝鮮貿易で活動)とともに瀬戸内海を往くうち、自然を愛でる描写や遊女の風俗などが記されるようになりました。

## (2) 『海東諸国紀』

『海東諸国紀』(1471年成立)の著者申叔舟は、議政府領議政(首相に当たる)を二度務めた政治家であり、ハン格尔制定にも寄与した学者・文化人でした。当時の日本・琉球の実態を地図入りで記した著作は、歴史学・地理学・民俗学的にも大変貴重なものです。とりわけ対馬についての観察・分析は非常に秀逸(しゅういつ)としますので、できるだけわかりやすく紹介しましょう。勿論朝鮮の政治家・学者ですから、中華思想の影響はあります。彼自身嘉吉(1443)の朝鮮通信使の書状官として来日、京都まで旅をしており、当然対馬・壱岐に立ち寄っています。

### 対馬島

郡は8つあり、住民は沿岸の浦で生活している。浦は全部で82ある。南北は3日の行程、東西は1日または半日の行程である。島内は石山が多く、土地はやせ、住民は貧しい。製塩(煮塩)・漁業(捕魚)、

その販売をもって生業としている。宗氏が代々島主の地位にある。宗慶(宗経茂)、靈鑑、貞茂、貞盛、成職…

(中略)

島主の牧馬場は4ヶ所あり、2,000余匹は飼うことができる。馬の多くは曲背である。農産物は柑橘類と楮(紙の原料)だけである。南と北に天神と呼ばれる高山がある。南の天神は子神といい、北の天神は母神として人々から崇められている。家々では供え物をしてこれを祭る。山は神域であるから草木、鳥や獣は取らない。罪人が神堂(神域内のお堂)に駆け込めば、あえて捕らえられることはない。

対馬は海東諸島(壱岐・九州・琉球など)の要衝(ようしゅう)にあつて、それらの地域から、わが国に交易に往来する者は、必ず經由するところである。皆島主(宗氏)発行の文引(渡航証明)を受けてからやって来る。島主はじめ各豪族が使船を遣わして交易を行うが、年々交易高は定まっている。対馬は朝鮮に最も近く、貧しさも甚だしいので、毎年定額の米を支給している。

対馬には郡が8つ、その下に82の浦が海岸部にあつて、塩を生産し、魚を獲つて、これらを主に販売している、というのです。すでに触れたように、販売先に朝鮮と六地(九州)がありました。対州馬は小型の馬なので、曲背(ねこぜ)という表現になったのでしょうか。

南北の天神は、佐護の天神(たぐずたま命)



天神多頭多麻命神社 対馬市上県町佐護



龍良山麓低地照葉樹林 対馬市巖原町内山

神社と豆殿<sup>つづたま</sup>の多頭魂<sup>たくずたま</sup>神社のことで、第3章にあるとおり、山そのものが御神体<sup>みかみ</sup>、麓<sup>ふもと</sup>には遙拝所<sup>ようはい</sup>（拝殿）があるだけです。神域内のお堂が遙拝所を指すのか、中世の修験宿所があったのか、このあたりはよくわかりませんが、とにかく神域は不可侵の聖なる場所（一種のアジール）になっていたらしいのです。

今日でも龍良山北麓の内山には、斧がほとんど入ったことがない100ha（ヘクタール）もの原始林が広がり（国天然記念物）、とくに縄文時代の原風景とも言える低地照葉樹林（スタジイ・ヤブツバキなど）は、動植物の種の保存においても重要な役割を果たしています。雨上がりの森に入ると思わず手を合わせたくなる、とはある植物学者からお聞きしたことです。現在、入山には営林署の許可が必要ということをし添えます。

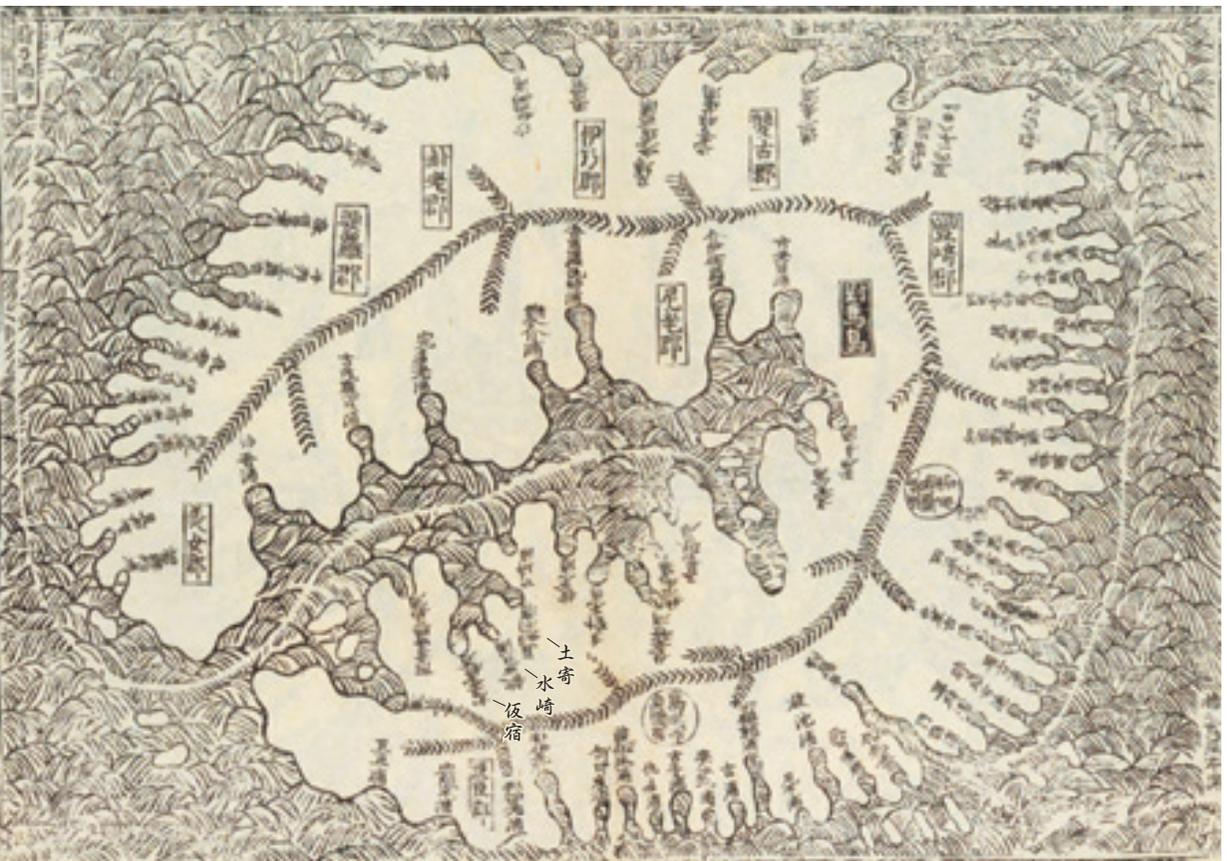
「文引」「使船」については、前項で説明しました。というより、この『海東諸国紀』が基本的史料として歴史解明に貢献しました。朝鮮王朝は日本からの平和な通交者を優遇したのです。生涯「事大交隣」（中国・日本と

の外交）を自分の任務としてきた著者は死に臨んで、言い残したいことはなにかと成宗から問われ、「願わくは国家、日本と和をうしなうことなかれ」と答えた話は有名です。中国とは冊封体制<sup>さくほう</sup>の中での外交ですからあまり心配することはなく、申叔舟にとっては「交隣」が最も気になっていたのでしょうか。それは日本からも言えることです。

それでは『海東諸国紀』記載の82浦のうち、主な浦・戸数をあげますが、戸数については当時の朝鮮側の認識と受けとめてください。まず豊崎郡から東海岸を南下します。申叔舟が実際に見聞した浦も含まれていると思われる。

- ・尼神都麻里浦100余戸（西泊<sup>にしどまり</sup>）
- ・皮多加地浦50余戸（比田勝<sup>ひたかつ</sup>）
- ・時多浦350余戸（志多賀<sup>したたが</sup>）
- ・沙加浦500余戸（佐賀<sup>さか</sup>）
- ・訓羅串100余戸（船越<sup>ふなこし</sup>）現在の小船越、ここだけ「浦」ではない
- ・桂地浦400余戸（雞知<sup>けち</sup>）
- ・古于浦100余戸（国府<sup>こふ</sup>）現在の巖原
- ・豆豆浦三処合わせて300余戸（豆殿<sup>つづたま</sup>）

- ・沙愁浦四処合わせて300余戸 (佐須)
- ・美女浦650余戸 (三根) 最も戸数が多い
- ・伊乃浦二処合わせて100余戸 (伊奈)
- ・尼多老浦300余戸 (仁田)
- ※「老」は日本語の「の」に当たる
- ・豆那浦100余戸 (綱浦)
- ※大綱・小綱
- ・沙愁那浦400余戸 (佐須奈)
- (尾崎地区4つの浦 計700戸)
- ・可時浦150余戸 (加志)
- ・多計老浦80余戸 (竹の浦 竹敷)
- ・仇老世浦140余戸 (黒瀬)
- ・愁毛浦400余戸 (洲藻)
- ・吾也麻浦300余戸 (大山)



『海東諸国紀』 対馬島之図

壱岐の記述はすっきりして短いですが、それでも重要な歴史的事実が含まれています。

## い き 一岐島

7郷あり。水田は620町6段。集落は、陸里（農村）が13、海浦（漁村）が14である。

東西の行程は半日程、南北は1日程の距離。

志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留の5氏が分治している。市は3ヶ所あり。水田と陸稲は半々くらい。五穀を産する。

まず、農産物・海産物を両方産する壱岐の豊かといってよい状況が表されています。

『魏志倭人伝』には、田はあるがなお不足し、南北に交易に出ている、とありました。弥生時代からは、かなり変わっているようで、兵站基地が置かれた古墳時代後期に農業生産力が増大したと考えられそうです。

注目すべきは、志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留の5氏による支配が行われているという記述です。志佐氏は松浦郡志佐（現・松浦市）を本拠とする有力な松浦党の一族で、一時期壱岐守護と称したこともあり、代官真弓氏を湯岳（旧石田町・芦辺町）に置いて勢力を張りました。その富の源は朝鮮貿易をはじめとする東アジアに広がる交易です。真弓氏自身、朝鮮国から「函書」を受けて貿易船を派遣した豪族でした。

佐志・呼子・鴨打・塩津留の4氏は上松浦地方（佐賀県）を本拠とする松浦党一族です。佐志氏は勝本、塩津留氏は国分（旧芦辺町）、鴨打氏は武生水（旧郷ノ浦町）を拠

点に代官支配を行い、やはり朝鮮貿易で利を得ました。呼子氏の代官は牧山氏、その本拠地小予郷は庄触（旧郷ノ浦町）でしょうか。

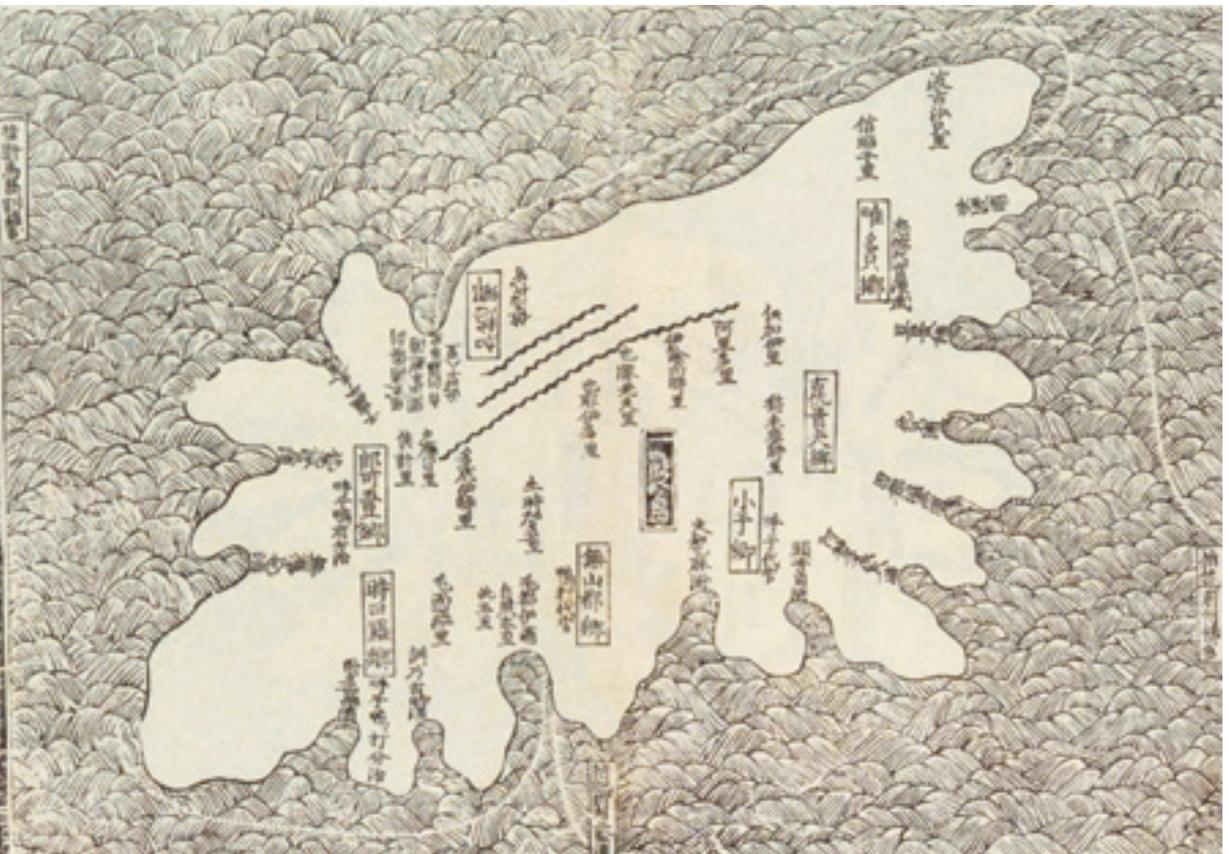
『海東諸国紀』が記す壱岐の主な集落は次のとおりです。

## 十三里（主な里）

- 
- ・波古沙只150余戸（箱崎）
  - ・信昭于70余戸（新城）
  - ・侯加伊130余戸（深江）
  - ・愁未要時70余戸（住吉）
  - ・也那伊多300余戸（柳田） ※ヤナイタ
  - ・牛時加多130余戸（牛方）
  - ・多底伊時90余戸（立石）

## 十四浦（主な浦）

- 
- ・世渡浦30余戸（瀬戸浦）
  - ・豆豆只浦20余戸（筒城浜）
  - ・因都温而浦40余戸（印通寺浦）
  - ・火知也麻浦100余戸（初山）
  - ・毛都伊浦100余戸（本居浦）
  - ・臥多羅浦100余戸（渡良）
  - ・無応只也浦140余戸（麦谷）



〔海東諸国紀〕一岐島之図

## 4 五島日島の石塔群と日引石

### (1) 日島の石塔群 (県指定史跡)

五島列島若松島の更に西に日島という小さな島があります。現在は橋が架かっていますが、少し前までは離島の離島でした。でも、この感覚は現代的なもので、100年前までは船が主たる移動手段でしたから、すぐその島です。

その日島の曲崎<sup>まがり</sup>に中世の石塔群が林立しています。曲崎は、強い沿岸流によって砂礫<sup>されき</sup>が嘴<sup>くちばし</sup>のように堆積・形成された砂嘴<sup>さし</sup>という地形です。その地形と林立した石塔群を写真で確認してください。嘴の先の方は雑木林になっていて、林の中にも石塔があります。



日島曲崎の石塔群 (全景) 新上五島町日島郷

日島曲崎の石塔群はどのような意味、意義を有しているのでしょうか。まず、その主たる石塔群建立の時期ですが、14世紀後半から15世紀前半です。つまり、南北朝期の後半から室町前期ということになります。そうした時期の関西形式の石塔が約50基分ここに建立されているのですから、有力者しか建てることのできない中世石塔の密度からすれば、圧倒的にすごい集積度です。

畿内<sup>きないけん</sup>圏から運ばれたであろう石塔の形式は五輪塔<sup>ごりん</sup>が多く、宝篋印塔<sup>ほうきょういん</sup>もあります。石材は花崗岩（御影石）と安山岩質凝灰岩で、御影石は五輪塔のみ、安山岩質凝灰岩は両方あります。問題は約30基分ある安山岩質凝灰岩の石塔がどこから運ばれてきたか、その石の産地はどこか、ということでした。

本県の石造物研究家である大石一久先生は、地道に同じ材質（安山岩質凝灰岩）の石塔を各地で調査し、東に進んでだんだん畿内に入っていました。同学の研究者と連携して、ようやく突き止めた産地が福井県の高浜町日引地区だったのです。写真で日引石の

石塔（宝篋印塔）と御影石の五輪塔を比べてみてください。日引石塔の方がやや黒っぽい感じで、火山灰が固まった凝灰岩ですから加工は容易ですが、600年以上経って一部破損しています。13基分は確認されている御影石の五輪塔はさすがにしっかりしています。

見てわかるとおり、どちらも規格・形状が同じで、実際計ってみました。基礎（地輪）の方形石のサイズが数基とも約31cm×31cm、あるいは34cm×34cmとほぼ同じでした。当時高浜の日引でも、おそらく神戸市の御影あたりでしょうが、そこでも多くの石工が規格生産していたものと思われます。

日島にはもう1基、規格外の紀年入りの日引石塔があります。釜崎の宝篋印塔といい、正平22年（1367年 南朝年号）の紀年は、日島日引石塔のおよその建塔年代を示唆しています。これは基壇の石から運ばれたものです。他に、旧玉之浦町島山島の宝塔銘も同年の紀年があり、同大宝寺の五重層塔銘は正平24年（1369年）です。南朝年号・北朝年号については次の松浦党の活動で説明します。



日引石塔



御影石塔

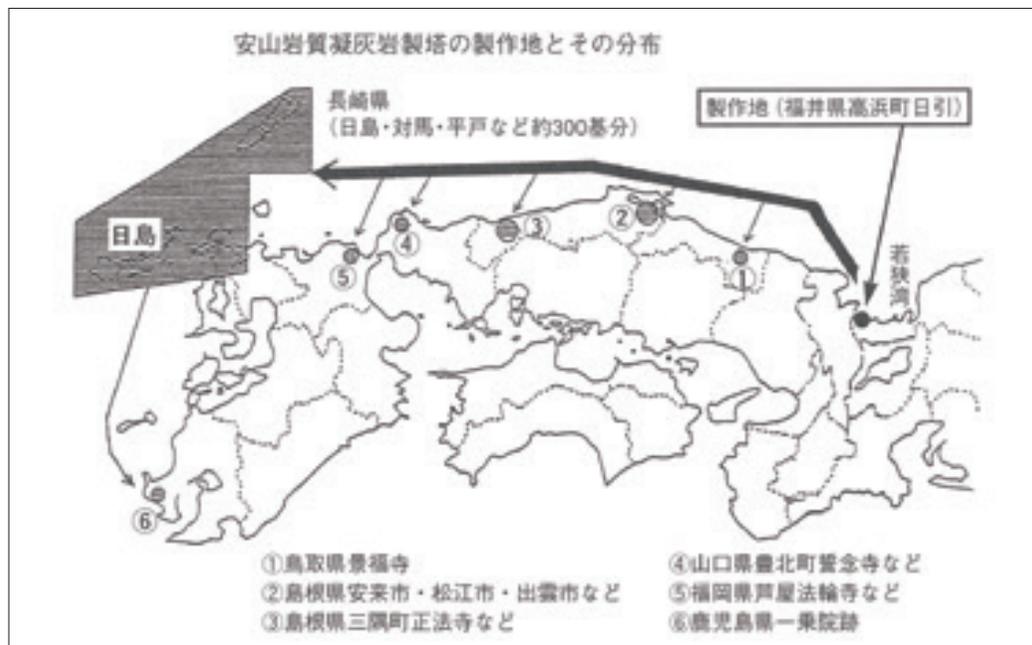


写真左：釜崎の宝篋印塔 新上五島町日島郷、右：大宝寺五重層塔 五島市玉之浦町

## (2) 日引石塔の分布と日本海交易ルート

長崎県における日引石塔の分布をみると、圧倒的に五島列島、対馬、平戸に多く、壱岐や県本土にも存在します。その数は300基を超え、今後も増え続けるでしょう。それらは間

違ひなく福井県若狭湾日引地区の石塔を購入したもので、積み荷を降ろした後のバラストとして船積みされたものと推定されています。そして、船がそれぞれの島・地域に帰着した後、日島等しかるべきところに建塔されたというわけです。



大石一久「石が語る中世の社会—長崎県の中世・石造美術 (ろうきんブックレット9)」より  
※以上の他に長崎県内では野母崎や佐世保市俵石、熊本県の玉名市や天草でも発見されている

すると、これから二つのことがわかります。一つは、五島・対馬・平戸などと若狭湾の間に日本海沿岸を航行する交易のルートが存在していたこと、もう一つは、往きの船に日引石塔購入額をはるかに超える高価な商品が積まれていたことです。それは五島・対馬・平戸などの海商・海賊衆（水軍）が朝鮮・中国・（琉球）との交易あるいた海賊行為によって入手した唐物（外国商品）ではなかったでしょうか。当時高価な唐物を購入できる客層は朝廷・幕府がある京都に集中していました。皇族・貴族、将軍はじめ幕府高官、大寺院などです。

若狭湾の港（高浜もその一つ）から京都までは、近年鯖街道の呼び名があるとおり、海産物の流通路でした。取引の形態はよくわ

かりませんが、五島・対馬・平戸などの海商は博多・京都の商人と連携していたと思われます。

現時点全国で最も日引石塔が見られる地域は五島・対馬・平戸として、他に日本海沿岸の福岡・山口・島根・鳥取の各県にも分布しており、遠くは青森県十三湊でも発見されました。南では鹿児島県坊津にもあり、日引石塔が分布しているところは海上交易の要衝であるともていいでしょう。現在、北米と韓国・中国を結ぶ海上輸送は、燃料コストの関係から大半日本海ルートをとっており、「裏日本」という言い方は近代だけだったようです。

一方、御影石の石塔が運ばれて来た瀬戸内海ルートも重要です。当時の経済の中心は京都、中国・朝鮮半島につながる貿易都市は



対馬内院の宝篋印塔 対馬市巖原町豆酸内院



内院 日引石塔群



尾崎の龍蔵寺 日引石塔

博多、二つの都市は瀬戸内海ルートで結ばれていました。全国で需要が多い御影石の石塔は、生産地と考えられる神戸の御影地方を中心に規格品が多く造られていたはずですが。それらを九州地方の需要に<sup>こた</sup>えるための集積地は、博多とみるのが自然ではないでしょうか。

県内にある御影石の石塔のうち、最もすばらしいと言われるのが対馬内院<sup>ないん</sup>の宝篋印塔（県有形文化財）です。総高3mを超える堂々たる関西形式の宝篋印塔には、これまで安徳天皇陵墓の伝説があり、近年は少弐頼忠<sup>よりただ</sup>（政資<sup>まさすけ</sup>）の供養塔とも言われてきましたが、裏付けの史料は全くありません。しかし、これだけ立派な御影の宝篋印塔です。九州本土に一番近い内院での建塔には島主宗氏が関わり、主筋の少弐頼忠の供養をしたとは十分考えられます。ともあれ最近では酸性雨が心配ですから、さや堂を考慮したほうがいいのかもかもしれません。

近くには同時に県指定された14基の石塔群があります。材質は日引石及び御影石で、完形の1基には応安7年（1374 北朝年号）の年紀が刻まれています。この他、早田水軍の根拠地である尾崎<sup>りゅうざう</sup>の龍蔵寺や、小船越にも日引石塔があり、前出の佐賀円通寺の宗氏の墓碑と思われる日引石塔と併せて、日本海交易ルートが浮かび上がってきます。

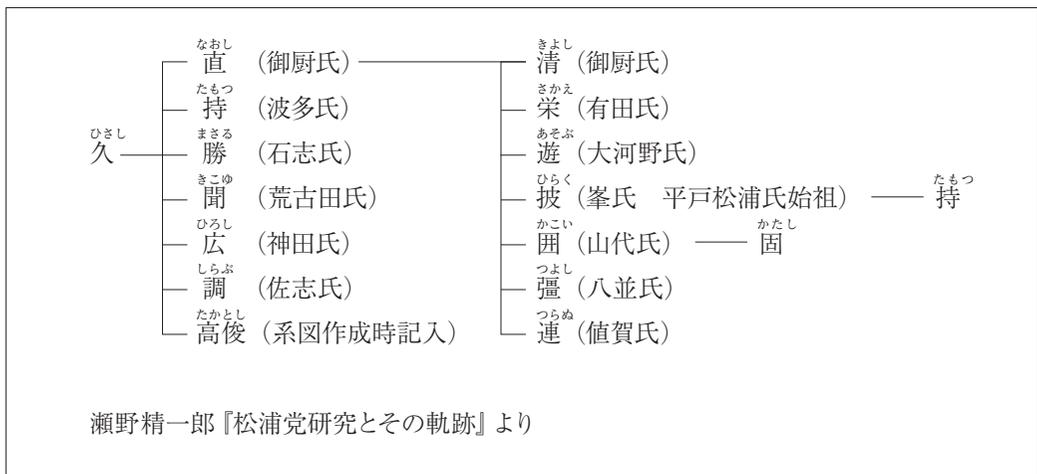
## 5 松浦党の活動

### (1) 松浦党とは

これまで第5章・第6章でも松浦党には少し触れてきましたが、ここでまとめておきたいと思います。松浦党の歴史は平安時代にさかのぼります。

松浦党を構成するのは肥前国松浦郡の浦々の領主たちです。最大の範囲は福岡県糸島あたりから長崎県の北西部にかけて、勿論五島は松浦郡ですし、これに壱岐国も

入ります。先祖は嵯峨源氏、みんな一字名を名乗ります。例えば松浦党の伝承の先祖は大江山鬼退治で有名な源綱、すなわち源頼光の四天王である渡辺綱のことで、渡辺は撰津の地名です。源綱の系統の源久が1069年渡辺荘から下向して今福に土着し、松浦一族共通の先祖となったという系図（『松浦家世伝』）がありますが、もう少し検討が必要なようです。



この系図では松浦一族が、すべて久もしくは直の子孫とあります。御厨直の系統が松浦氏の本宗家の地位にあり、後に相神浦松浦氏と称して、平戸松浦氏と対決し敗れました。後の戦国時代の攻防です。

御厨とは宇野御厨のことで、平安時代には大宰府へ贄を納めており、肥前から筑前・筑後の海面・水面（筑後川）を含んだ地域に広がり、その後だんだん縮小して平安末期には近代の南・北松浦郡の範囲となりました。贄

は朝廷への貢納をいいますが、形骸化して大宰府への食糧供給地となっていたようです。鎌倉時代には荘園になっていて、宇野御厨庄から京都の西園寺氏へ毎年子牛1頭が納められていたという記録があります。現在も「御厨」という地名が松浦市に残っており、そこからかつての広大な地域を想像してください。

ところで、御厨氏は宇野御厨の管理者の立場にあったと思われますが、複雑な海岸線地形のためか惣領の統制はきかず、また大宰府

の影響も緩んで、系図にある一族庶子が独立して浦々各所の領主となって松浦党の基礎がつくられました。

源久の実在性については、1019年刀伊の入寇の際、前肥前介の源知という人物が合戦において活躍した記事が『小右記』（藤原実資の日記）に見られ、他にも源聞が肥前守になった記事もあることから、源久も土着受領（国司）あるいは在庁官人が土着して領主化した一人かもしれないということです。後世に作られた系図はよくわかりません。

刀伊の入寇についても触れておきます。中国沿海州地域・朝鮮半島の北にいた女真族の海賊が船50余艘でもって、対馬・壱岐・北九州沿岸を襲いました。平安時代最大の外寇です。対馬の銀山坑が焼かれ、壱岐では国司の藤原理忠が殺害され、多くの男女・子どもが強奪されたと『小右記』にあります。京都への報告ですが、信頼できるものでしょう。さらに賊は筑前沿岸に侵入したところ、当時摂関家の藤原隆家が、藤原道長との権力闘争に敗れて大宰府に赴任（大宰権帥）しており、彼が九州の武士団を率いて撃退したということです。

## (2) 歴史の表舞台に登場

『平家物語』源平の合戦に松浦党が登場します。最後の壇ノ浦海戦を前に、各地の豪族は源・平どちらに味方するか迷っていました。大勢は源氏有利ということで、熊野水軍を率いる熊野別当湛増、四国河野水軍の大將河野通信はそれぞれ200余艘、150艘の兵船でもって源氏に合流しました。

松浦党は、もともと西国を地盤としていた平氏の影響下にあり、日宋貿易でも何らかの役割を担っていたと推測されますので、たぶん迷いながらも平家方として参戦しました。

平家は千余艘を三手に分けた。まず山賀（山鹿）の兵藤次秀遠が五百余艘で先陣として進む。二陣は松浦党が三百余艘で続く。平家の公達は三陣を形成して続いた。

（『平家物語』より）

源氏には三千余艘の船が集まりましたが、寄せ集めで海戦に不慣れな武将も多く、はじめ押し込まれました。一方、平家の船団には大きな唐船（ジャンク船）があつて、安徳天皇の他、母の建礼門院ら婦女子を乗せていたと思われまふ。

戦の結果はよく知られているように、源氏が勝利し、安徳天皇は二位の尼（平時子、清盛妻）に抱かれて入水しました。でも、幼い天皇は四国・中国・九州の各地に逃れたという伝承に包まれています。筑前鐘ヶ崎の海女がお連れして対馬西海岸の久根田舎に住んだという伝承もその一つです。御陵墓とされるものも存在します。

ところで、平家側に付いた松浦党には厳しい処分が待ち受けていたのでしょうか。そうではありませんでした。浦々に割拠する小領主の討伐は不可能です。それより鎌倉幕府は彼らの所領を安堵し、御家人にして使った方が得策と考えたようです。そのため松浦党の面々は京都大番役などの御家人役を勤めさせられました。異国警固番役を勤めたことは前章に出てきました。



青方神社

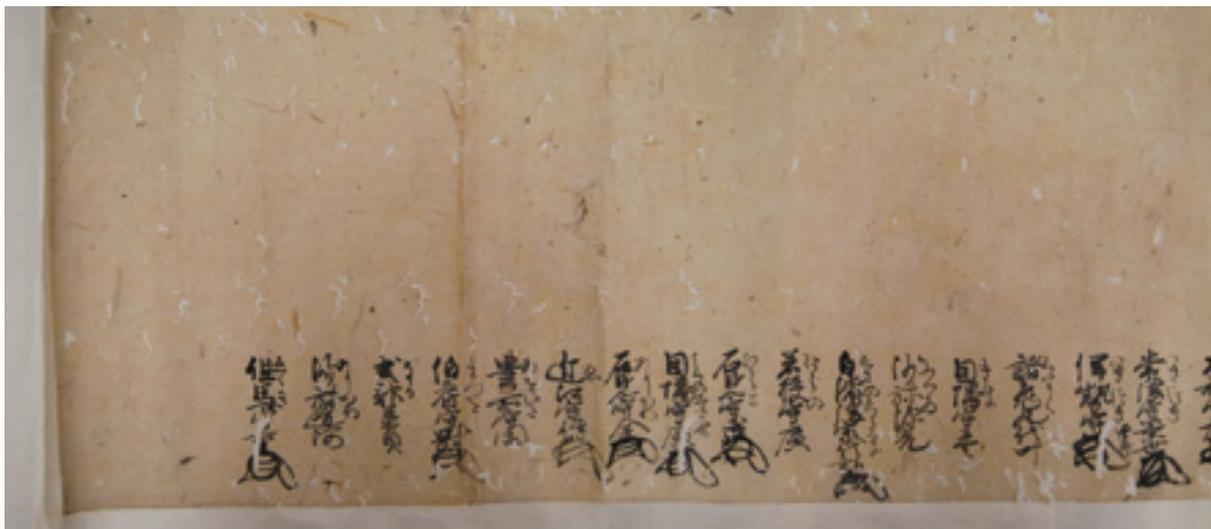
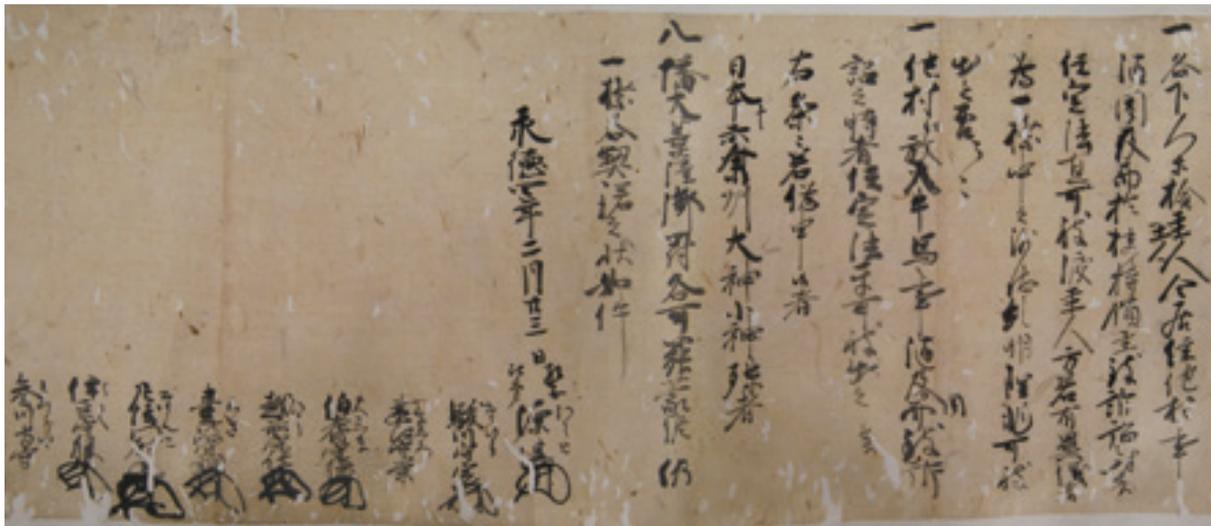
### (3) 松浦党の一揆

すでに松浦氏の系図で引用させてもらいましたが、中世政治社会史の研究者として著名な瀬野精一郎先生は長崎県出身です。佐世保のほか島原・対馬等にも住まわれました。とくに『青方文書』の研究では第一人者として、多くの人々がその恩恵を受けています。

『青方文書』（長崎歴史文化博物館蔵）は上五島の青方を本拠とする青方氏に伝来した中・近世の文書群で、県有形文化財に指定

されたのは中世を中心とした文書です。青方氏はもともと藤原氏でしたが、松浦党勢力の伸張・拡大によって松浦一族と称し、一字名を名乗るようになりました。宇久氏も同様に松浦党に入りましたし、血縁・親族集団が地縁集団に変化したと考えられます。

その『青方文書』に「下松浦住人等一揆<sup>けいだく</sup>契諾状」という有名な国人一揆の史料があります。代表的な永徳4年（1384 北朝年号）をあげて、いろいろ考察してみましょう。





瀬野先生の『青方文書』（翻刻・解説）をもとに、文書の内容をわかりやすく表記してみます。一揆の参加者は、現在の佐賀県伊万里地方から五島列島の奈留までです。花押影は書き判の写しの意味。一方、この文書は写しではなく正文ではないかという論考があることも申し添えておきます。なお、上松浦は佐賀県唐津方面です。

下松浦住民等一揆契諾を結ぶ

- 一 公私に「一味同心之思」をなし、公方様（足利将軍）に忠節をつくし、一揆中談合して物事を決め勝手な行動をしてはならない
- 一 一揆衆中で争いごとが起きた時は、衆中集まり道理によって解決すること
- 一 夜討・強盗・山賊・海賊などは一揆中で取締り、異議ある者に対しては、その申し立てにより処罰すること
- 一 地頭の年貢を<sup>よくりゅう</sup>抑留したり、<sup>ちようさん</sup>逃散した土民百姓を領内に留めおかないこと
- 一 収益や境界に関する争いは一揆中で話し合って解決し、喧嘩に及んではならない
- 一 下人が主人を捨て他村に居住しているとき、訴えがあったら定法に任せすぐに主人に渡すべし、<sup>も</sup>若し異議あるときは一揆中で道理にしたがって解決すること
- 一 他村に牛馬が入り込んでいる場合、訴えがあったら定法に任せて追い出すべし
- 右の条々につき、若し<sup>いつわ</sup>偽りを申す者は日本六十余州大神小神、<sup>こと</sup>殊には<sup>はちまんだいぼさつ</sup>八幡大菩薩の罰を受けるものである、よって一揆契諾の<sup>くだん</sup>状件の如し

永徳四年二月廿三日

ひらと 源 湛（花押影）	平戸氏
たひら 駿川守（花押影）	田平氏
やましろ 遠江守榮	山代氏
大しま 伯耆守徳（花押影）	大嶋氏
ひう 越前守純（花押影）	日宇氏
しさ 壱岐守調（花押影）	志佐氏
たんこ 左衛門尉達（花押影）	丹後氏
うく 伊豆守勝（花押影）	宇久氏
ミくりや 参川守	御厨氏
あいのうらのたいさきむら	
鬼益丸代（花押影）	相浦大崎村
さゝ 長門守相	佐々氏
こさゝ 備前守	小佐々氏
いまり 伊豆守高	伊万里氏
ちきた 若狭守助	千北氏
つきのかわ 周防守安	調川氏
つよし 因幡守安	津吉氏
ふねのハラ 長門守茂	船原氏
いちふ 大和守授（花押影）	一部氏
いきつき 常陸守景世（花押影）	生月氏
いきつき 伊勢守（花押影）	生月氏
くすく 諸亀丸代叶	楠久氏
きす 因幡守壹	木須氏
ふくる 沙弥源光	福井氏
しさのしらはま	
白濱後家代弘（花押影）	志佐白濱氏
うの 若狭守廣	大野氏
ひらと 石見守武（花押影）	平戸氏
うくのたかせ 因幡守廣（花押影）	宇久高瀬氏
ありかわ 石見守全（花押影）	有川氏
ゑ 近江守傳（花押影）	江氏

あをかた	豊前守固	青方氏
まつを	伯耆守對?	松尾氏
なる	式部承貞	奈留氏
ありかわ	沙弥道阿	有川氏
しき	但馬守重(花押影)	志自岐氏

も使船が送られています。このころは朝鮮王朝の政策もあって平和的な通交が行われましたが、それより前14世紀後半から15世紀初めには、松浦党の構成メンバーが、対馬の海商と組んで朝鮮・中国に侵攻したと思われま  
す。ただそうした史料は残っていません。

条文の最初に「公方」（ここでは足利義満）に忠節をつくすとありますが、これは1371年今川了俊（貞世）が九州探題となつて下向し、その後の軍事攻勢で南朝方（懐良親王、菊池氏等）をほぼ制圧したころ松浦党に結ばせた軍事的・政治的な一揆です。よつて年号は北朝の「永徳」です。了俊下向以前1360年代は南朝の全盛期で、そのころの年号が南朝の「正平」だったので。強い勢力に従うのは中小武士団にとってあたり前のことでした。

この一揆は軍事的性格と同時に、日常生活を秩序あるものとして送るための惣的結合でもありました。最初の条文以外は、治安の安定、社会秩序維持のため一揆衆中が話し合つて決めようと強調しています。浦々に割拠する松浦党の小領主にとって、漁業は主たる収益ですから、いつ、どこに網を入れると  
いった漁業権の問題は、話し合い解決の対象  
だつたと思われます。

34人の一揆衆の中の志佐、御厨、平戸、田平、宇久の5氏は、『海東諸国紀』によれば1450年代に使船を送つて朝鮮と交易をしたことが記されています。これら5氏は1船ないし2船の歳遣船を送る権利を有していました。ほかに、1460年代五島、同 玉浦、同 日島から

## コラム 松浦党の城館は円形プラン

長崎県中近世城館跡分布調査事業の報告では、松浦党系領主が関わる城館に特徴的なプランが浮かび上がってきた。佐賀県の同様調査の報告書を見ていないので、まだ見通しに過ぎないが紹介しておく。それは壱岐、平戸、五島に所在する各城館の縄張りを見ると、円形・楕円形のプランということである。

城郭の縄張りは、石垣を築くこともあって方形・長方形が一般的だが、松浦党城館の円形プランは、自然地形を利用したという立地条件だけでは説明できないと思われる。

○壱岐生池城跡 牛ヶ城ともいう最大規模を誇る山城で、保存状態の良好さは感動的

○壱岐高津城跡 空堀の深さは4m近くあって見応えがある

他に、帯田城跡、風早城跡、鶴翔城跡などがあり、平戸には松浦氏「鎧山」、田平籠手田城跡、五島では、小値賀膳所城跡、青方殿山城跡などがある。

今後の研究を待ちたい。

※民有地であるため、見学には許可とガイドが必要



高津城跡縄張り図 『長崎県中近世城館跡分調査報告書』より

松浦党には海賊衆のイメージが強いのですが、地域の領主ですから文化的側面もありました。小値賀島に善福寺という浄土宗のお寺があって、そこに書写された大般若経600巻が保存されています。佐伯先生の報告によれば書写の施主（スポンサー）は6人、その中に源宥、源之授という一字名の人物がいました。

この大般若経は大半明徳元年（1390）から応永3年（1396）にかけて書写されたもので、実際に先の永徳4年（1384）一揆契諾状を見てください。「いちふ 大和守授」がいます。他にも「授」名の人物がおり、また「宥」名の人物も複数いることから、特定はできませんが、松浦党であることは間違いのないでしょう。

もう一人、気になる人物がいます。『老松

堂日本行録』の著者宋希璟<sup>そうきけい</sup>が、博多から京都へ往くとき、無涯<sup>むが</sup>とともに同行した博多貿易商の宗金を思い出してください。実は施主6人の中に「宗金」がいるのです。応永3年（1396）書写の経本に「大旦那」としてその名が記されており、『老松堂日本行録』（1420年）の宗金と同一人物か断定はできませんが、可能性はあります。

とにかく、玄奘三蔵<sup>げんじょうさんぞう</sup>が漢訳した大般若経600巻は、国家安寧<sup>あんねい</sup>、災厄除去<sup>さいやく</sup>など様々な御利益<sup>ごりやく</sup>のため盛んに真読・転読（省略して読むこと）され、また中世には写経事業も各地で行われました。南北朝末期から室町時代初期にかけて、日中貿易の中継地である五島小値賀島で、松浦党内の小領主や博多貿易商らしい宗金を施主として、それが行われたのです。

## コラム 若松極楽寺の新羅仏

この章では対馬の新羅仏を2体紹介したが、五島の新羅仏も大変すばらしい。残念ながら招来<sup>しょうらい</sup>の経緯<sup>けいゐ</sup>は全く伝えられていない。肩がつり上がったキリッとしたお顔は、力強さをも感じさせる。像高は36.7cm、対馬海神社の新羅仏は38.2cmでほぼ同じ。拝読した感想を言わせてもらえば、造仏された半島の地域が異なるのではないか。

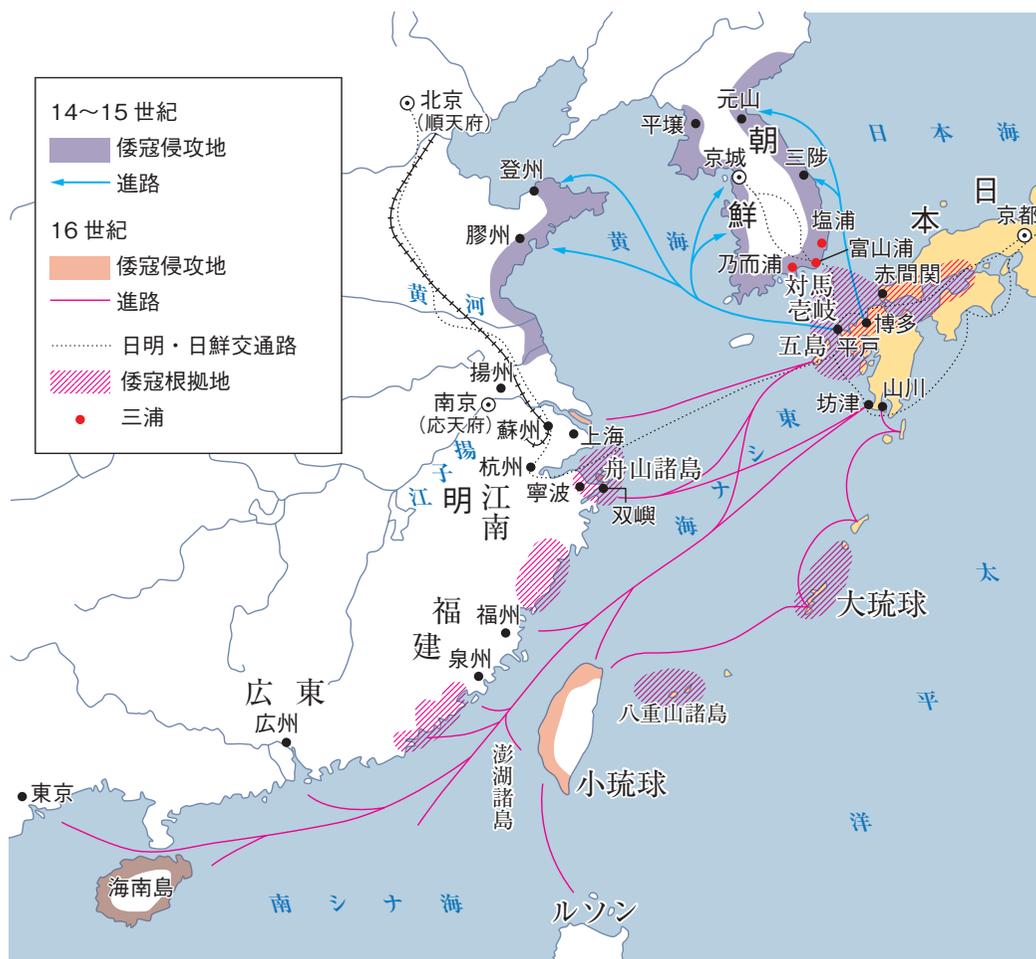
これまで若松において、おそらく600年間大切に守り、拝まれてきた仏様である。とくに若松の小・中学生の皆さんに、どのような朝鮮半島との交流の歴史があったかを学んでもらい、想像力豊かに、この仏様の由来を語っていただきたいと思う。現代の民話が誕生するかもしれない。



極楽寺 銅造如来立像  
(重要文化財)

この章の最後は日島石塔群に戻りたいと思います。日島に葬られた人々、祀られた人々については、およそ推測できるでしょう。南北朝後半から室町時代前期を中心とした時代、東アジアの海を自由に航海した海民集団がいました。ときに海商、また海賊と呼ばれた人々です。自由な海民集団の存在は沓岐・対馬でも同じです。

対馬の永留先生とお話ししていたとき、どの時代が対馬の島民にとって幸せだったか、輝いていたか、という話題になりました。先生が言われるには、それは弥生時代と室町時代（南北朝を含む）ということでした。主体的に自由に活動した時代と言われたのでしよう。



「倭寇」関連地図

第8章

いわゆる  
「後期倭寇」  
の真実



山口の有力大名・大内義隆が1551年家臣の陶晴賢に敗れると、大内氏が独占していた日明勘合貿易は断絶しました。代わって浙江省や福建省の中国人海商が台頭し、明の解禁政策に対抗して盛んに密貿易を行うようになりました。これに参加した日本人海商は2~3割程度で、大半が「偽倭（中国人）」だったといわれます。

その頭目の一人・王直は、福江や平戸を拠点に、五島や松浦氏とも結んで一大勢力を誇りました。種子島の鉄砲伝来にからんでいるともいわれますし、ポルトガル船が平戸に来航したのも王直の影響と思われる。

## ①「後期倭寇」の構成員と特質

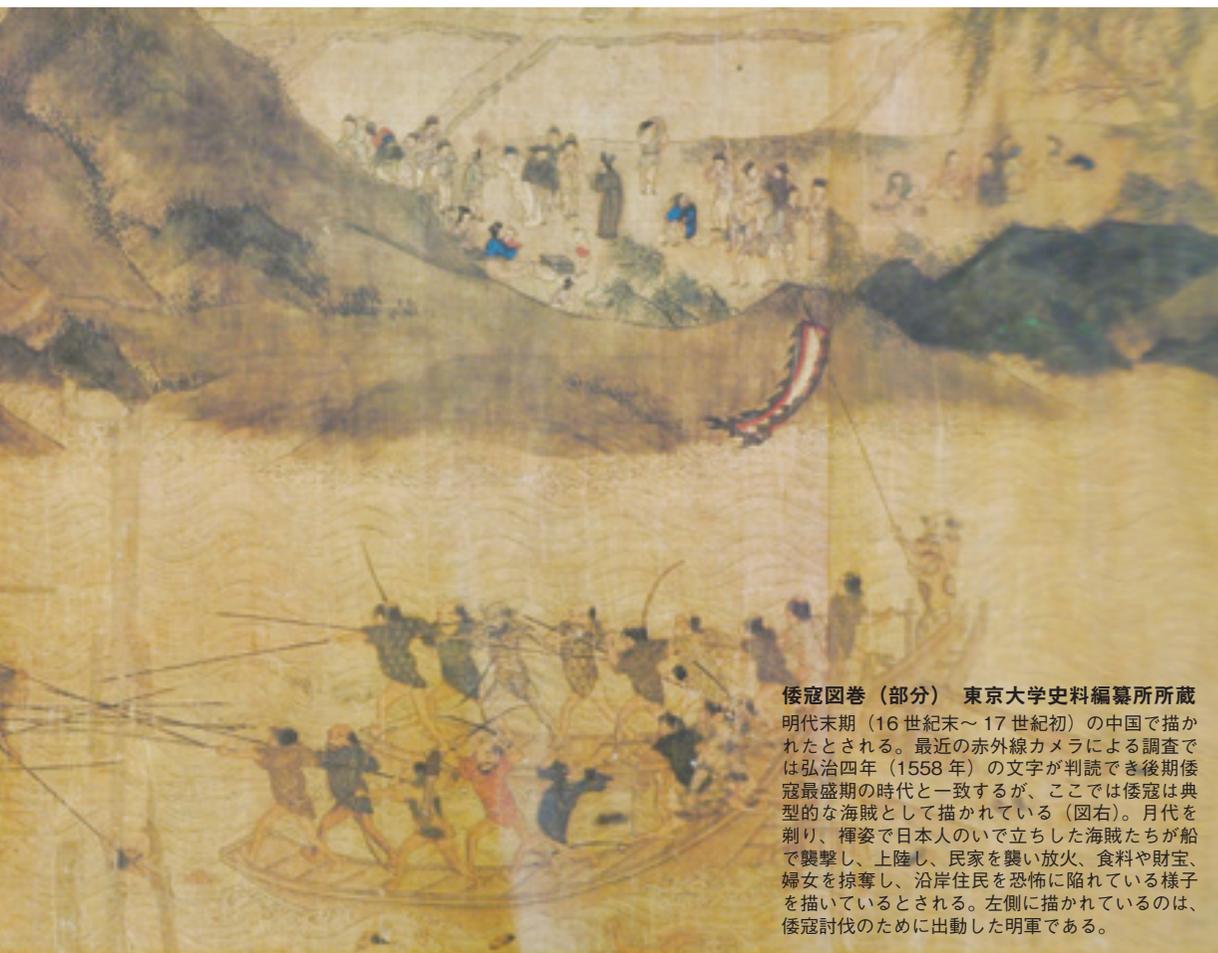


一般的に倭寇は14~15世紀初にかけて活動し、おもに朝鮮半島沿岸を襲った「前期倭寇」と、15世紀後半から16世紀に活動した「後期倭寇」に分けられます。前者は瀬戸内海から九州北部の文字通り日本人の海商が活動の中心だったと言われます。これに対し、「後期倭寇」の主体は中国人だったといわれています。このことを示す史料として『明史』日本伝、嘉靖三十三年（1554年）正月の条に

“大抵、真倭は十の三、倭に従う者は十の七なり”

という記述があります。これは真倭=日本人が3割で、残り7割の構成員が日本人にしたがう中国人であったということを示します。また同様の記述が『嘉靖東南平倭通録』嘉靖三十三年十月の条にも、

“蓋し江南の海警、倭は十の三に居るも、中國の叛逆は十の七に居るなり”



**倭寇図巻（部分）** 東京大学史料編纂所蔵  
明代末期（16世紀末～17世紀初）の中国で描かれたとされる。最近の赤外線カメラによる調査では弘治四年（1558年）の文字が判読でき後期倭寇最盛期の時代と一致するが、ここでは倭寇は典型的な海賊として描かれている（図右）。月代を剃り、禪姿で日本人のいで立ちした海賊たちが船で襲撃し、上陸し、民家を襲い放火、食料や財宝、婦女を掠奪し、沿岸住民を恐怖に陥れている様子を描いているとされる。左側に描かれているのは、倭寇討伐のために出動した明軍である。

と記されており、この当時すでに倭寇の中心は中国人の海寇であったということが、共通の認識として広く知られていたであろうことが推察され、中国人の海賊行為=倭寇として相当数処理されていたのではないかと思います。実際に後期倭寇の活動の中心となったのは、浙江や福建などの中国沿岸部の人々だったといわれます。

私たちがまず思い浮かべる倭寇のイメージは、教科書等でたびたび掲載されている『倭寇図巻』に描かれているように、禪をつげ月代を剃り、刀を振りあげながら沿岸で略奪をおこなっている姿でしょう。家に火を放っている様子も見ることができ、残忍で恐怖を感じさせる描き方がなされています。しかし略奪・放火などの海賊行為だけで彼らを理解しようとすると、その本質を見誤ってしまうおそれがあります。ではなぜ中国人が海賊行為におよんだのか、そしてそれは本当に海賊行為だけだったのかを、ここでは考えてみたいと思います。

このあと詳しく述べますが、いわゆる倭寇の動きが活発になるのは日本および中国など東シナ海を囲む国や地域の情勢が不安定になり、公式な国交・交流が途絶えた時期とほぼ一致します。このことはすなわち彼らの本来の目的が交易にあったということを意味します。「倭寇」とは交易を第一の目的とする海の商人=“海商”だったとも言えるのです。後に東アジアを舞台にした貿易に加わることになるポルトガル人たちも新種の「倭寇」と称されていたことがそれを物語ります。もちろん私

貿易（密貿易）という形式をとる以上、無法な海賊行為が無かったとは言えません。また、海禁という法によって国外での活動を禁じた権力に対する反発という面もあったことは事実でしょう。

現在残された記録や資料を紐解いていくと、海商とも称される彼らのもうひとつの側面を見ることができます。そこには国境という概念を越え海へ乗り出していった人々の富をめぐるダイナミックな活動を見ることができます。その一端（または“中心”といってもいいと思いますが）に位置する五島列島や壱岐、対馬もその動きとは無関係でいられるはずはありません。

また王直をはじめとする「後期倭寇」の活動はポルトガル人を日本へ導く役割を果たし、鉄砲伝来やイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルの来日とも浅からずかかわっています。すでにご存じのとおり鉄砲伝来は戦国時代の終焉を早め、ザビエルをはじめとする宣教師の伝えたキリスト教は豊臣秀吉や江戸幕府の外交政策を大きく転換させるなど、日本の歴史を大きく揺り動かすことになるのです。



典型的な「倭寇」像 五島市富江町

## ②「後期倭寇」を取り巻く状況

### (1) 「前期倭寇」の収束

「前期倭寇」をめぐる状況は、14世紀半ばに始まる東アジア諸国の大きな変化、すなわち朝鮮(李朝)の成立、朱元璋による明朝の成立、日本における室町幕府の成立により、それぞれの国情が安定に向かいつつあるなかで、変化があらわれます。これらの国々が最初に取り組んだのが、それぞれの国益と支配体制を脅かす存在と化していた海の武士団=倭寇への対策だったのです。1419年朝鮮はその根拠地と目されていた対馬を大軍で攻撃し、打撃を与えました(応永の外寇)。そのうえで倭寇対策を日本側に要求するとともに、倭寇に対して懐柔政策をとります。

いっぽう明は倭寇対策として、国民の自由な海外渡航と民間貿易を禁じる海禁政策をとることになります。そのため明と交易をおこなうには、その冊封体制の下に入り、明を宗主国として朝貢をおこなうというかたちをとることになります。そこで明は日本の室町幕府に対して朝貢をうながすと同時に、倭寇対策を要求します。

その結果、1401年に明と室町幕府の間に正式な国交が開かれ、第1回遣明船が派遣されます。これにより日明貿易が開始されることになりました。また1404年から日本から派遣される遣明船は倭寇と区別するための合札(勘合)を持参したため、勘合貿易ともよばれています。これらの東アジア諸国の取り組みにより、15世紀をすぎると倭寇の勢いは徐々に衰えをみせはじめることになります。

### (2) 「後期倭寇」へ

15世紀後半になると、再び東アジアをめぐる情勢が大きく動き出します。一つは日本の室町幕府の支配力が1467年の応仁の乱を機に急速に失われつつあったことです。それは日明貿易においても同様でした。貿易の実権は室町幕府から堺の商人と結んだ細川氏と、博多の商人と結んだ大内氏の手に移っていきました。両氏は貿易権の独占をめぐり激しく争い、1523年(大永3年)日本からの貿易船が到着する寧波で衝突します(寧波の乱)。

この乱に勝利した大内氏が貿易を独占し、その後2回貿易船が派遣されます。しかし時は戦国時代、大内氏は家臣の陶晴賢によって倒され、日明間の公式な貿易は途絶えてしまいます。そうなるとう交易の手段としては私貿易しか残っていません。このようにして倭寇という海商集団が再び跳梁する土壌が生まれました。

いっぽう明の国内を見ると、宋代にはじまる産業の発展により商品流通経済が飛躍的に拡大していきました。しかし対外貿易の実権は明朝とそれと結んだ大商人の手中にあり、中小商人の不満は高まるいっぽうでした。朝貢貿易とは別の側面では、政府による貿易権の独占形態ともいえるものだったので。こういう状況のなかで中小商人が国禁を侵してでも貿易の利益を求めようとして海外へ渡り、私貿易(密貿易)に走ろうとするのは容易に理解できると思います。

さらに明の商人たちが着目したのが、16世紀になって日本の石見地方で再発見された銀でした。石見銀山から産出される銀の鉱石は、朝鮮半島から伝わった「灰吹法」という技術で質の高い銀に精錬されたうえ、石州丁銀として国内外に流通するようになりました。石見産の銀は「ソーマ（佐摩）銀」という銘柄で知られるようになり、これを中国の商人たちが見逃すはずはありませんでした。当時の明は一条鞭法が施行され、税はすべて銀でおさめるようになっており、日本の銀を求めて中国の商人たちが日本へ押し寄せてくることになります。

16世紀半ばまでに中国の浙江沿岸にまで進出していたポルトガルは日本の銀の情報を

得て、日本に接近していくことになります。鉄砲伝来もフランシスコ・ザビエルの来日にはじまるキリスト教の伝来もその延長線上にあることは間違いありません。それ以降、日本に來航するようになった西洋諸国（ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス）との交易でも銀は国外に持ち出されるようになり、日本と世界は銀によって結ばれました。当時の世界に流通する銀の三分の一は日本産の銀だったともいわれていますが、その銀の流出ルート「銀の道」の一翼を担っていたのが倭寇という海商集団だったといえます。こうして私貿易の一形態として、「後期倭寇」が跋扈する状況が生まれていきました。



ぼほんせ  
八幡瀬 五島市富江町

八幡は倭寇の別称であり、周辺には倭寇が築いたとされる勘次ヶ城がある

### ③ 王直の活動について

#### (1) 王直について

16世紀の東アジア海域を舞台に繰り広げられる海商たちのようすを詳しく著わした書に『籌海図編』があります。十二巻からなるこの書は明朝が倭寇の様子を知り、それに対処するため1562年に編纂されました。この時代の海寇に関する記録には、王直（汪直ともいう）という人物に関する記事が数多く残されています。彼こそが「後期倭寇」の中心的存在として、今に語られる海商の頭目です。彼は平戸

に住居をもち、五島を根拠地として多くの部下を率いて活動し頭角をあらわし、徽王とも倭寇王とよばれる存在になっていきます。

王直の前半生については記録に乏しく、徽州歙県（現在の安徽省黄山市）の出身ということ、塩の商いに携わるも失敗、その後六横島（双嶼）へおもむき同郷を頼りに許頭という頭目の部下になり海商に転じたこと、親分肌の面倒見がいい人物で知略に富んでいた人望があった…というくらいの情報しか得ることができません。



籌海図編巻二 [日本国図]

籌海図編（ちゅうかいずへん）は明末に倭寇の分析と対策という目的で編纂された。この図中において伊岐（いき）= 杵岐、対馬のほか、五島列島に関する地名として、烏苦（うく）= 宇久、和十家（おじゅうか）= 小値賀、乃路（のる）= 奈留、衣屋奴密（いやぬみ）= 魚目、話哈達（えこうた）= 相子田 / 青方、達奴烏喇（たぬうら）= 田之浦が記されている。九州のほかの地域にくらべて五島列島が大きく描かれており、その重要性を見ることができる。

1540年代前後に海商に転じてからは、日本、暹羅（シヤム）、マラッカ、ルソン、安南など南洋方面までを往来し、当時輸出禁制品であった硫黄、生糸などの取引によって、短い間に巨万の富を得たといわれます。彼はそのころからすでに日本とも通じており、五島、平戸、薩摩などを日本での活動の拠点として独自のネットワークを築いていきました。いつのころからか彼は五峯（峰）船主と名乗るようになり、いわゆる「倭寇王」「海上の巨商」としての地位を確立してゆくのです。

## (2) 王直と五島、平戸

王直と日本との関係ですが、1540年代前半に五島領主宇久盛定に通商を求めに深江（現在の福江）を訪れたといわれます。五島は第3章で述べているように遣唐使の時代、そ

の最後の寄港地として知られていました。まさに南路と同じルートをたどり海商たちも中国と日本を往来したのでした。王直が五島に目をつけたのは当然といえば当然といえるでしょう。盛定は王直の求めを受け入れ密約を結び、交易がはじまりました。また王直には居城である江川城の対岸の高台に土地を与え、住居を構えることを許しました。王直の屋敷の周囲には彼の部下が多く住みつき、「唐人町」として賑わったということです。彼は屋敷の一角に廟堂を建て、朝夕の祈りと航海安全を祈願したといわれます。これが明人堂として今でもその地に残っています。また飲料水の確保のため中国風の井戸が掘られ、現在でも六角井としてその姿をとどめています。ちなみに王直の号である「五峯」は、五島（嶋）にちなんでいるという説もありますが、これは諸説あるところです。



六角井戸（左）と明人堂（右）

両史跡とも近接して現在の五島市中心部に残っている。この地に居を構えた王直ら海商の飲料用水、船舶用水確保のために井戸が掘られた。また航海安全のための廟堂が建てられ現在は明人堂（俗称：めーじんさー）とよばれている。現在の廟堂は1999年に改築され、中国から取り寄せた石材を用いて中国の職人が建てた本格的なものとなっている

王直が日本においてもうひとつの本拠地としたのが平戸でした。146ページの地図を見ていただくと一目瞭然ですが、王直の中国における根拠地、双嶼港のある浙江の沿岸から五島を結ぶ延長線上に平戸は位置します。今でも晴天の日には五島列島からはっきりと平戸島や生月島をのぞむことができます。王直をはじめとする海商たちにとって、五島と平戸の距離などものの数ではなかったのかもしれませんが。さらに言うなら当時の海商にとって、東シナ海を取り囲む地域は国境とは関係なく自分たちの庭のような存在であったのかもしれませんが。今でこそ「日本の最西端に位置する」という説明がされることの多い長崎の離島ですが、当時は大陸との交流の「最先端」の役割を果たしていたのです。

平戸は戦国時代、松浦氏の城下町として栄えた海の要地でした。王直はこの地に目をつけ貿易をおこなうことになります。平戸松浦家第25代松浦隆信は彼を優遇し、平戸の中心地に土地を与えました。王直はそこに中国風の大きな屋敷を建てて滞在し、その生活は豪奢をきわめていたといえます。ちなみに平戸にも王直と縁の深い六角形の井戸が残されています。この時、平戸における王直は2000人以上の配下を率い、数百隻の船団をかかえていました。その様子は「徽王（徽州の王）」「倭寇王」とよぶにふさわしいものだったのでしょう。



小手ノ浦（こてのうら） 新上五島町 飯の瀬戸

王直が上五島唯一の根拠地とした場所といわれており、周辺には空堀、石塁跡が見られる。湾口には串島という小島あり、湾内を外洋から隠す役割を果たしており、天然の良港として倭寇の基地となつたとされる。

もちろん王直は常に五島・平戸に留まっていたわけではありません。時にはもう一か所の日本における拠点といわれる薩摩、そして中国沿岸と、東アジア沿海を股にかけ縦横無尽に駆け回っていたのでした。朝鮮半島もその活動範囲のなかにあり、王直の指揮のもと海賊行為がおこなわれたという記録もあります。当時の対馬領主である宗氏は「五峯」と名乗る海寇の情報を朝鮮朝廷に報告し、警告を促していましたが、ここで言う「五峯」はやはり王直と考えるのが妥当ではないかと思われる。

このように海商として活動を始めてからの王直の行動については、中国側にも日本側にも記録が残っています。しかし彼の生涯すべ

での足取りを正確に辿るのは、容易ではありません。また王直がかかわったとされる事案についても、本人がその場で直接指揮したものか、または本人不在でその指示のもと部下だけによる活動なのか判断するのも難しいものもあります。裏を返せば、それだけ王直と彼の部下たちの活動が東アジア海域の広い空間（地域）で繰り広げられており、神出鬼没だったと言えるのではないのでしょうか。まさに「海上の巨商」の面目躍如というところ です。

### (3) 双嶼港の繁栄

「倭寇」の動きがふたたび本格化するのには、先にあげた「寧波の乱」以降とされま



寧波、舟山諸島 周辺地図

す。日本に対する反発から貿易を監視・監督する市舶司という役所が廃止され、海商にとってかえって私貿易がおこないやすい状況が生まれていました。

彼らの本拠地となっていくのが、中国の杭州湾の東南方、寧波からほど近い浙江省東北部の海域に位置する舟山諸島にある双嶼港でした。ここは大小1000以上の島々からなる群島のなかの一つである六横島の西海岸にあり、海商たちが隠れるのに最適な場所でした。そこには中国人、日本人、朝鮮人さらにはポルトガル人らが集住しており、東アジア海域をめぐる一大私貿易センターの様相を呈していました。「後期倭寇」の実態とは、このよ

うに民族や出身地が異なる人々が海を舞台に繰り広げる密貿易に他なりませんでした。

この双嶼港を基地として密貿易をおこなっていた海商たちは、頭目のもとにグループを作り活発に活動し、それぞれが覇を競いあっていたのです。

双嶼港を舞台とする海商たちによる国際的な私貿易が活発になると、明朝の中央政府も無視することはできなくなり、ついにはその禁圧に乗り出していくことになります。

1548年、海禁の厳守と海寇の取り締まりを命じられた官憲により双嶼港は襲撃され、壊滅に追い込まれることになります。最終的に



東インド図（オルテリウス）1570年部分  
この図の中央に Liampo（双嶼）と記されている

長崎歴史文化博物館蔵

港は木石で埋め尽くされ、ここを根城にしていた海商たちは二度とこの地に還ることができなくなりました。

しかし海商たちは交易をあきらめたわけではありませんでした。根拠地を失ってしまった彼らが活動を続けることができたのは、日本という逃げ場があったからでした。特に九州を中心とする西日本の海域には、五島列島をはじめとして舟山諸島と同じような大小の島が連なり、天然の深い入り江が多く存在しているので、海商たちの新しい拠点として最適の環境がありました。そして海商たちは九州を中心とする西日本各地の港で戦国大名をはじめとする有力者の支援を受け、交易をおこなうことができました。これらの港は「唐人町」として栄え、このあと述べる王直とゆかりの深い五島をはじめ、同じような過程を経て成立した港として長崎県内では平戸、口之津があげられます。また県外に目をむけると玉名、熊本、府内、臼杵、都城、飫肥、市来、国分などが交易の拠点として栄えました。

双嶼港を壊滅させた明朝による徹底的な海禁政策の強行は、その時点では成功を収めたかのように見えます。ところが実際は海商たちの明朝への反感が高まり、後に述べる「嘉靖大倭寇」への導火線になっていくのです。

#### (4) ポルトガル誘引とザビエル来日。そして鉄砲伝来

王直は直接的にも間接的にも当時およびその後の日本に大きな影響を残していますが、そのもっとも大きな事件は「鉄砲伝来」ではないでしょうか。鉄砲伝来に関するエピソードを簡単にご紹介すると「1543（天文12）年にポルトガル人を乗せた中国人倭寇の船が、九州南方の種子島に漂着した、これが日本にきた最初のヨーロッパ人である。島主の種子島時堯は、彼らのもっていた鉄砲を買い求め、家臣にその使用法と製造法を学ばせた（山川出版社『詳説日本史B』より）」となります。教科書では人名まで明らかにされてはいませんが、ここでいう「中国人倭寇」が王直だった可能性が非常に高いと思われるのです。

鉄砲伝来に関する記述としては、江戸時代初め種子島氏当主であった久時の命により南浦文之が編纂した『鉄炮記』があまりにも有名です。以下にその一部を抜き出してみます。

天文癸卯（十二年）秋八月二十五丁酉、我が西村の小浦に一大船あり。何れの国より来るかを知らず。船客は百余人、その形は類せず、その語は通ぜず、見る者は以って奇怪となす。その中に大明の儒生一人、五峯と名のる者あり

（南浦文之『鉄炮記』より）

ここでは漂着した船にはおそらくポルトガル人と思われる正体不明の人々が乗っていた

とあります。その名に「五峯」と名乗る人物がいたと記されていますが、これが王直の号であることは、すでにお話した通りです。ここでは海商ではなく「大明の儒生=儒学の研究者」と称されているのが興味深いところですが、そのあとの記述に種子島の織部丞なる人物と杖で文字を書いて筆談をおこなったとありますので、知識・教養も兼ね備えた人物だということがわかります。このように五峯（王直）は種子島では通訳のような役割を果たしていますが、実際はこの漂着した船の船長であったのではないかとされています。

その後、王直は五島・平戸を拠点とし双嶼港時代からの様々なネットワークを駆使して、東アジア海域の全域で手広く活動を繰り広げ

「倭寇王」としての存在感を増していきます。なかでも特筆すべきは、双嶼港時代からつながりのあったポルトガルを自分の根拠地平戸に招き、松浦氏との貿易の仲立ちをおこなったことです（1550年）。海禁を理由に明から通商を拒絶されたポルトガルは、双嶼港を本拠地として密貿易をおこなっていたのですが、双嶼港が明の官憲により破壊されたのち、新たな貿易の拠点を探していたのでした。ここに海外との貿易の利を求める松浦氏とポルトガルの利害が一致し、日本における最初の西洋諸国との貿易、すなわち南蛮貿易が平戸において開始されることになるのです。



左は平戸市内に建てられている王直像。右は平戸市鏡川町に建つ王直邸宅跡の碑  
王直はこの地に唐風の居宅を構えたとされる。王直が去った後の1588年、領主の隠宅として用いられるようになり「印山寺」とよばれるようになった。

さらに1449年にイエズス会宣教師フランシスコ＝ザビエルが日本（鹿児島）に上陸しますが、彼の来日にも海賊＝海商が深く関係しているとも言います。ザビエルが日本に上陸することを決意した理由のひとつは、マラッカにおいて日本を追放されたアンジロウ（ヤジロウ）という人物に触れ、その優秀さに驚いたからだとも言われています。そのアンジロウなる人物ですが、何らかの理由で人を殺め故郷を追われマラッカにたどりついたのだといわれています。しかし日本を脱出する前はそれなりに地位のある立場（武士または富商）で交易に携わっていたともいわれ、事件を起こしたのち交易船のルートを利用しマラッカに渡ったと考えられます。マラッカでザビエルと出会いゴアで洗礼を受けた後、通訳としてザビエルの鹿児島上陸に同行したアンジロウですが、ザビエルが日本を去った後、「倭寇」に加わり命を落としたとルイス・フロイスはその著書『日本史』に記しています。

またザビエルはマラッカから鹿児島まで乗船した船を「異教徒なるシナの商人の船に乗りたり」と記述していますが、そこにも中国人海商が関与していたようです。彼を日本に送り届けたジャンク船の中国人船長アヴァン（アワン、阿王）は「ラドロ（海賊）」というあだ名を持っていたそうです。この当時は海賊も海商も本質においては同じであることは言うまでもありません。やはりフランシスコ・ザビエルの来日にも海商が何らかのかたちで関わっていたのです。

さらに日本上陸の翌年1550年、ポルトガル船の最初の来航直後にザビエルは平戸を訪れ、しばらくの間滞在し布教活動をおこなっています。このことが長崎におけるキリスト教布教の先駆けとなるのはご承知のとおりです。当時の状況から察すると、このとき鹿児島から平戸へザビエルの乗った船を案内したのは、すでに平戸に居を構えポルトガルとも親しかった王直もしくはその配下である可能性が高いと思われます。

この当時貿易とキリスト教の布教は表裏一体の切り離せない関係にありましたので、ポルトガル船の来航がなかったらザビエルの平戸上陸もなかったはずですが（ザビエルは平戸に入港したポルトガル船が自分宛の手紙を預かってきているのではないかと考え、平戸に向かったようです）。平戸に上陸したザビエルはポルトガル船からも領主の松浦氏からも歓待を受けるのですが、王直が平戸にいないければポルトガルの商人もザビエルも平戸には上陸していなかったかもしれません。

16世紀前半より海外からの刺激によって立て続けにおこる日本史上の大事件…鉄砲伝来、南蛮貿易の開始、ザビエルの来日とキリスト教の布教開始、これらの一連の動きの背後には大航海時代にはじまる世界史の新しいうねりを見ることができます。そのなかで王直をはじめとする海商たちの果たした役割は決して小さなものではなかったのです。

## 4 嘉靖大倭寇、「後期倭寇」の収束

先に述べたように王直が東アジア海域に名をはせることになるきっかけは、皮肉にも1548年におこる官憲による双嶼港の襲撃事件でした。その際、名だたる海寇の多くは捕獲・処刑されてしまいました。しかし幸運にも難を逃れた王直は、同じ舟山諸島の瀝港（烈港、れっこう）を中国における新たな拠点として、活動をおこなっていくのです。その後、双嶼港の攻撃を指揮した官僚は、密貿易の利益を得ていた地元富豪層らの反発を買い失脚しました。すると再び海商たちの活動が活発化します。そこで明朝政府は王直を倭寇鎮圧に利用することを考えました。王直が官憲に協力する形で、商敵と目されていた海寇の首領たちを討ち、その見返りという形で海上交易を実質的に認めるといえるのです。この時点で王直は自他ともに認める「海上の巨商」になることができたのでした。

しかし国家との蜜月はそう長く続かなかったようです。結局のところ、明朝から見ると王直も他の海寇たちも“同じ穴のムジナ”だったのでしょう。引き続き王直を海賊討伐に利用しようという声も一部にはあったのですが、明軍は瀝港を攻撃し王直は日本へ逃げ延びることになります（1553年）。必然的に王直は日本に活動の拠点を移すことになり、そのなかで五島および平戸が重要な役割を果たしたことは言うまでもありません。

海商たちを制圧するための瀝港襲撃だったにもかかわらず、双嶼港に続き瀝港という交易の拠点を失ってしまった海商たちの行

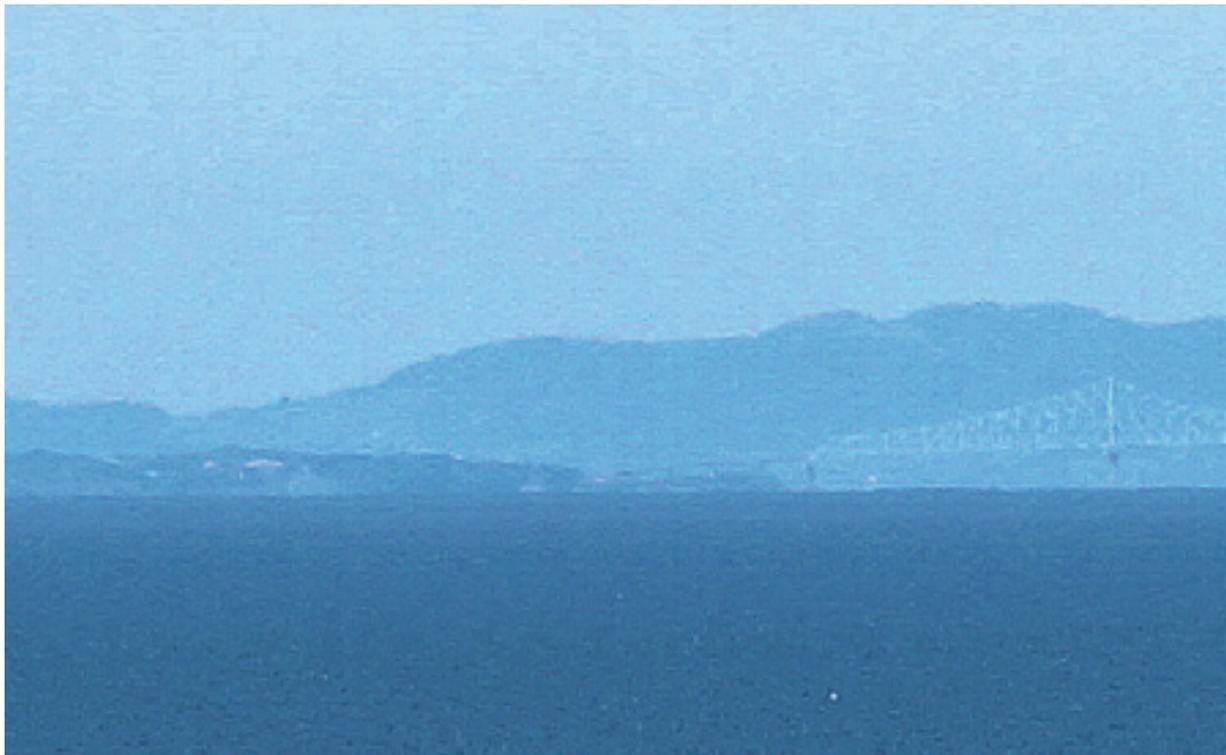
動は過激化していきます。世にいう『嘉靖大倭寇』の火ぶたが切って落とされ、「後期倭寇」はその活動のピークを迎えることになるのです。

ますます暴力的な様相を見せ始めた海商たちの活動に手を焼いた明朝は、1556年に胡宗憲という官僚を浙直総督に任命し、倭寇対策の最前線に据えます。王直と同郷だったという彼は中国に残っていた妻子を保護していると王直に持ちかけ、その身柄の安全を保障するとともに、王直が中国に帰還すれば自由貿易を許すという条件で投降を促しました。早い話が王直の妻子を人質にとったわけですが、王直の側近はこれを畏とし反対したようですが、結局王直はこの条件を受け入れ千人以上の部下とともに翌年、投降します。

王直の帰還後、胡宗憲は彼との約束を守り、自由貿易を実施するつもりだったと言います。ところが明朝中央政府はこれを受け入れず、王直の処刑を決定してしまいます。胡宗憲はこの決定に抵抗したようですが、その決定が覆ることはありませんでした。1559年王直は処刑され、その波乱に満ちた生涯を閉じました。斬首されたあとも膝立ちの王直の胴体は倒れることなく、しばらくそのままの状態であったといえます。その後王直の右腕とされる人物たちもつぎつぎと捕らえられ、一党はほぼ壊滅してしまいました。王直の投降と死は一人の海商の死にとどまらず、後期倭寇の衰退のはじまりを象徴するできごとになりました。

王直が投降したとされる1557年、明はポルトガルに対してマカオでの居住を正式に認め、明とポルトガルの正式な通商も開始されました。またスペインも1570年にルソン島のマニラを占領、翌年マニラ市を設置し交易の拠点としました。このように西欧諸国が本格的にアジアに進出してくるようになると、密貿易に携わってきた海商たちはこれまでのように利益を独占できなくなります。西洋諸国が商売敵となりその前に立ちはだかってきたのです。王直の死後も他の中国人海商たちの活動は続くのですが、彼らに以前ほどの勢いはなくなっていました。

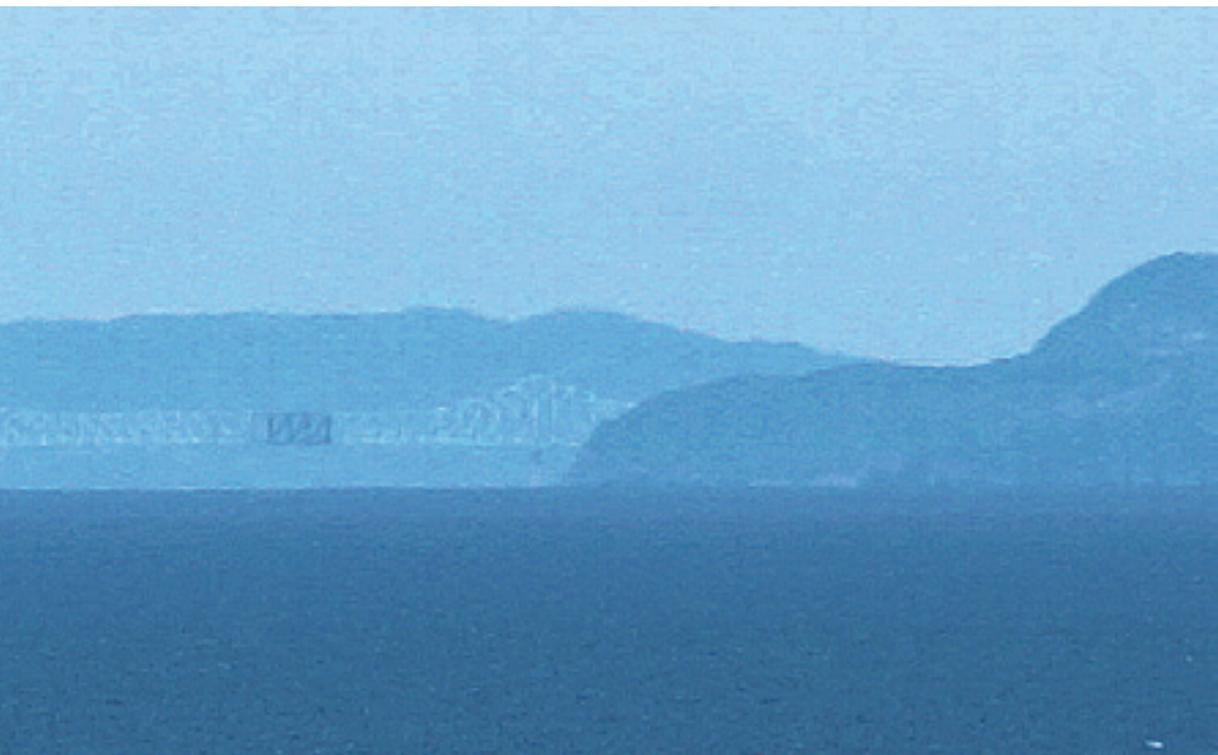
1567年、明朝政府は、倭寇（海寇）と密貿易を生み出した最大の原因は自国の海禁政策にあることをようやく認めこれを緩和し、東南アジア方面への貿易船の渡航を許可しました。しかし日本への渡航は依然として認められなかったため、完全に密貿易を封じることはできませんでした。そのため天下統一の最終段階に入った豊臣秀吉は1588（天正16）年に海賊取締令[海賊停止令、海賊禁止令、海賊鎮圧令ともいう]を出すと同時に、京都・長崎・堺などの豪商に南方との貿易（朱印船貿易）をおこなわせ、その利益を手中におさめようとします。これにより事実上日本人は密貿易に



関わるができなくなりました。

どの時点で後期倭寇が終息したのかはいろいろと意見が分かれるところですが、今述べてきたことが複合的な要因となって、おおむね16世紀中にはその活動はおさまったと考えてよいのではないのでしょうか。

しかし彼らが切り拓いた貿易ルートが消滅したわけではありませんでした。17世紀初め、王直の配下だったとも言われる李旦・顔思齊が平戸を拠点として活動し、その勢力は鄭芝龍（鄭成功の父親）に継承されました。



新上五島町頭ヶ島より生月大橋（平戸市）をのぞむ

## コラム 五島手延うどん

「かんころもち」とならんで五島を代表する伝統的食品といえば、五島手延うどんである。今や日本三大うどんの一つにも数えられるほど、全国的にも知られる存在となったが、その来歴については不明な部分も多い。一説には遣唐使がその製法を中国よりもたらしたとも言われており、五島は日本の麺類の発祥地であるという説もある。またその製法は素麺と共通する点も多い。通常は乾麺として提供されているので保存にも適しており、漁や農作業の合間でも鍋（釜）さえあれば、どこでも簡単に調理できる。五島では小麦粉のことを「うどん粉」ともよんでおり、島の人々の生活に密接に結びついた食品でもある。



五島手延うどんの製造過程 画像提供：新上五島町教育委員会 高橋弘一氏

（写真左）は丸くこねた円盤状の生地を刃物で棒状に切ったものを、手でのばし細くしている。（写真右）は二本の棒に8の字にかけた生地を両側から引っ張り、さらに細くのばしている。

五島うどんの特徴は、五島特産の椿油とミネラル成分を多く含む海塩を使用していること、つるんとした喉ごし、切れにくいコシのある直径2ミリ弱の細い麺にある。かけうどんにして食べても美味しくいただけるが、何といてもお勧めは「地獄炊き」である。鍋（釜）でお湯を沸かし、そこに乾麺をいれ湯掻く、というシンプルながらもっとも五島うどんの特徴を堪能できる調理法である。通常あご（トビウオ）でダシをとったつけ汁と醤油を数滴垂らし溶いた生卵、この2種類のつけ汁が用意され、好みでネギや鯉節を加える。五島でしか食することのできない唯一無二の味だ。





第9章

# 秀吉の 朝鮮出兵

小田原の北条氏を降<sup>くだ</sup>して全国統一を成しとげた秀吉は、次に明王朝の征服を企てました。その先導を朝鮮国王にさせようと、対馬島主・宗義智<sup>そうよしとし</sup>に交渉を命じましたが、聞き入れられるはずはありません。秀吉は全国の大名を動員し、小西行長・加藤清正を先鋒に15万余の大軍でもって朝鮮に侵攻しました。大軍が通過して行った沓岐・対馬は荒廃し、労役<sup>じゅうりん</sup>に駆り立てられた民衆の苦難は大変なものでした。勿論、日本軍に蹂躪された朝鮮国土の荒廃、民衆の苦難はさらに深刻でした。

## ① 文禄の役(壬辰倭乱)始まる

### (1) 秀吉の野望

秀吉の朝鮮出兵は、まさに侵略戦争です。明を征服しようという彼の野望が多くのの人々に深刻な苦しみを与えました。1回目の侵攻を日本では文禄の役といい、朝鮮では壬辰倭乱<sup>じんしんわらん</sup>といいます。そこに至る経緯を追ってみます。

1587年島津氏を追討・服属させ、九州を平定して博多に帰陣した秀吉の許<sup>もと</sup>を、宗義調・義智父子が戦勝慶賀のため訪れました。秀吉は朱印状を与えて、これまで通り対馬一国の領有を認める(所領安堵<sup>あんど</sup>)とともに、朝鮮国王を来朝させるよう命じました。対馬は朝鮮との交易で成り立っている国ですから、通交を続けながら国王を秀吉に服属させるという要求は極めて困難なことです。使者を派遣しても、日本へ行く航路がわからないと拒否されました。断る名目にすぎません。

この報告に怒った秀吉は、小西行長・加藤清正に出陣を命じました。九州から東海は統

一していますが、関東小田原には北条氏が、奥州には伊達政宗が居て、急な出陣は無理です。それでも小西行長・加藤清正にそれぞれ肥後国の南部・北部を与えたので、朝鮮出兵は現実のものとなっていました。

危機感を募らせた義智は、博多聖福寺の僧玄蘇<sup>げんそ</sup>(第10章でも活躍)を正使に自らは副使となり、重臣柳川調信<sup>しげのぶ</sup>及び博多商人の島井宗室(対馬出自という説がある)を伴って朝鮮に渡り、漢城(ソウル)に到って国王に通信使の派遣を要請しました。

朝鮮側に秀吉の強硬な姿勢を伝え、航路がわからないならば義智自身案内にあたり、使節派遣を強く要請したところ、先ごろ全羅道を襲った朝鮮人海賊問題の解決を要求され、これに応じて「沙火同<sup>しゃかどう</sup>」以下海賊たちを連行して引き渡しました。これで使節派遣の名目が立ったとして通信使派遣が決まり、1590年朝鮮使節は京都聚楽第<sup>じゅらくだい</sup>において秀吉に謁見<sup>えつけん</sup>しました。彼は小田原攻めから帰京したばかりです。

朝鮮の国書には、秀吉の日本統一を慶賀する文言が並んでいて、服属を表すものではありませんでした。通信使が受け取った秀吉の返書に、彼の野望が表れています。簡単にまとめておきましょう。

- ・戦国動乱が続いた日本の統一を自分が果たし、辺境まで服属させた
- ・自分は賤しい身分の生まれだが、母の胎内にいるとき日輪（太陽）の加護を受け、今の地位に至った。朝廷は安泰となり、民は豊かになった
- ・これから自分は大明国に討ち入り、中国全土を支配したいと思う。朝鮮には先導を命ずるので、士卒を率いて参列せよ
- ・そして自分の名前を三国（日本・唐・天竺）に輝かせたい

通信使は帰国して、正使は秀吉が攻めて来るだろうと復命し、一方副使は攻めて来ないだろうと正反対の復命をしました。あまりの空想に実感が伴わなかったのかもしれませんが。当時の朝鮮政府は副使の復命を採用し、防御の準備が遅れたといいます。

宗義智は困りました。帰国する通信使に玄蘇と柳川調信を同行させ、先導ではなく「仮途入明」（道を借りて明国に入る）を意味すると説得しましたが、とても無理です。出陣は間近に迫ってきました。

なお宗義智は、秀吉から「羽柴」の姓と「吉」の一字（偏諱）を賜り、「羽柴吉智」を名乗ったのですが、これまで通り宗義智とします。

## (2) 壱岐・対馬の負担

秀吉は佐賀県東松浦半島の先端部に壮大な名護屋城を築かせて朝鮮渡海の本営とし、その周囲には徳川家康・前田利家・伊達政宗・上杉景勝など全国から動員された諸大名の陣屋が160以上もありました。名護屋城跡（特別史跡）の近くに佐賀県立名護屋城博物館があって、文禄・慶長の役全般の解説、名護屋城跡発掘の成果だけでなく、日韓交流史についても展示がなされています。

名護屋城から渡海となれば、壱岐・対馬は蒙古襲来とは逆方向の兵站・中継基地となり、当然ながら壱岐を領有していた平戸松浦氏と対馬宗氏には過大な負担がかかります。壱岐勝本城、対馬清水山城の築城はそうした負担の象徴であり、軍事物資・兵糧の運搬に関わる廻船・水夫、職人・人夫の徴発が壱岐・対馬の島民に重くのしかかってきました。15万余の大軍、水軍その他を入れると20万ともいわれますが、それに必要な物資・兵



糧は莫大です。島民の疲弊は後ほど具体的に述べることにして、1591年に急きょ築かれた勝本城・清水山城を概略説明します。

これら二つの城は、兵站機能だけでなく、秀吉が朝鮮に渡海するとき御座所とするために築かれたと言われています。勝本城跡(国史跡)は対馬を見晴らす標高約80mの丘陵にあり、別名風本城、武末城ともいいます。築城の主体は当然松浦鎮信<sup>まつらしげのぶ</sup>で、有馬・大村・五島氏が協力しました。主曲輪<sup>くるわ</sup>は東西約90m、南北約40mの楕円形です。秀吉の弟秀長の家臣だった本多因幡守正武(俊政)が1598年まで在番したとされています。

現在は城山公園となって北側に虎口<sup>こぐち</sup>(入り口)・石垣が残っており、中腹には周回車道があって、史跡指定はこの道路より上です。全体を解明するには車道下部域の調査が必要となるでしょう。

清水山城は、宗氏<sup>かねいし</sup>金石城背後の清水山に

築城されました。これまで毛利高政によって築かれたとされてきましたが、最近の研究で主体はやはり宗義智であることがわかりました。清水山城跡(国史跡)は、標高約200mの頂上付近に一の丸(西側曲輪<sup>くるわ</sup>)があり、下つて二の丸、さらに三の丸(東側曲輪)があります。石垣・石塁・虎口など遺構の残り具合はよく、また眼下に厳原の町・港を見わたすことができます。総合的に考えて、これが秀吉渡海の御座所というより、例えば金石城を御座所に想定したとき警備のために設置された城かもしれません。

壱岐・対馬には、兵員・兵糧運搬や情報伝達のために水軍基地も置かれました。壱岐には加藤嘉明<sup>よしあき</sup>・藤堂高虎<sup>とうどうたかとら</sup>ら、対馬には九鬼嘉隆<sup>くきよし</sup>・脇坂安治<sup>わきさかやすはる</sup>らがついて、水軍を指揮しました。勝本や府中(厳原)を基地とすることはそのまま壱岐・対馬の負担となります。また、兵員や兵糧輸送の実務を監理する船奉行として、壱岐勝本には先の本多俊政、対馬府中



左: 勝本城縄張図(『長崎県中近世城館跡分布調査報告書』より) 右: 勝本城跡

## ② 朝鮮渡海軍団と 戦闘概要

には山崎家盛らが駐在していたことがわかっています。壱岐では指示により1350石分の廻船改めが行われました。今後輸送が可能な廻船準備ということです。対馬豊崎（大浦）の船奉行毛利高政は後にも登場します。



清水山城 一の丸跡 画像提供：西護氏

### (1) 小西行長と宗義智、五島純玄

- ・第一軍 小西行長（7千人）、宗義智（5千人）、松浦法印鎮信（3千人）、有馬晴信（2千人）、大村喜前（千人）、五島純玄（7百人）計1万8千7百人
- ・第二軍 加藤清正、鍋島直茂ら 計2万2千8百人
- ・第三軍 黒田長政、大友義統 計1万1千人
- ・第四軍 毛利吉成、島津義弘ら 計1万4千人
- ・第五軍 福島正則ら 計2万5千人
- ・第六軍 小早川隆景ら 計1万5千7百人
- ・第七軍 毛利輝元 3万人
- ・第八軍 宇喜多秀家 対馬在陣 1万人
- ・第九軍 羽柴秀勝ら 壱岐在陣 計1万千五百人

都合15万8千7百人

（中野等『秀吉の軍令と大陸侵攻』より）

小西行長の第一軍が、小西・宗軍を除けば西肥前大名衆で構成されていることがわかります。そして小西行長娘のマリアが宗義智の正室ということもあり、小西・宗軍が第一軍の中核部隊でした。秀吉最側近の行長は、朝鮮渡海が避けられないとして今後の展開を予想し、義智に娘マリアを妻合わせたと言われています。妻の影響でしょう、義智も入信してダリオの洗礼名を持ち、因みに岳父行長はアウグスティヌスです。松浦鎮信を除けば、みんなキリシタン大名でした。小西マリアについては第10章のコラムで再度紹介します。

宗氏対馬軍団5千人という数字は10万石に

課せられた軍役ですから、その通りではないとしても、軍監が検閲する仕組みになっていましたので、はずれた数字ではありません。それでも対馬から5千人は、ちょっと多すぎるようです。岳父の行長が助勢し、浪人を雇い、島内の働ける男をかき集めた結果でしょうか。当然田畑の耕作は十分できなくなり、島内に飢えが広がっていきました。

では5千人の内訳をみてみましょう。上下とは従卒も含めたものと思われまます。

・立石党上下	338人
・仁位党上下	91人
・内山党上下	30人
・杉村党上下	60人
・阿比留党上下	70人
・俵党上下	39人
・中原党上下	35人
・柳川党上下	443人
・大浦党上下	60人
・小田党上下	32人
・佐護党上下	150人
・大石党上下	38人
・根メ党上下	22人
・齋藤党上下	82人
・佐須党上下	61人
・津江党上下	135人
・薄木党上下	200人
・古川吉賀党上下	40人
・峯党上下	61人
・岡村党上下	61人

(『改訂 対馬島誌』復刻版より)

立石・杉村・津江などは府中(厳原)の上級家臣からなっており、仁位・佐護・佐須などは地域の有力家臣を中心とした集団です。柳川党上下443人が最も多く、柳川氏の勢力を示しています。ここには柳川氏が伊奈郡代だったことから、伊奈地域の有力者も含まれていました。これでも全体で2千人ちょっとですから、正規の宗氏家臣以外の下働きが多く含まれていたと考えられます。

もう一つ注目すべきは、朝鮮通事(詞)の諸大名への派遣です。これまでの外交交渉・朝鮮貿易によって養成された通事、実務に精通した商人(武士身分)が52人も派遣されています。主な内訳は、小西行長に有能な梯七太夫ら3人、加藤清正に2人、秀吉直系の奉行衆である石田三成に4人、増田長盛に4人、大谷吉継に3人、秀吉側近の木村常陸介・長谷川秀一・安国寺恵瓊に各2人、その他は総大将宇喜多秀家はじめ、鍋島・黒田・島津・毛利・小早川など大大名といえども1人だけでした。なお、義智軍の通事は16人です。

さらに朝鮮姓の通事が派遣されたのは、小西・石田・増田・大谷・安国寺の5大名だけです。秀吉に近い大名が重視されたことがわかります。加藤清正は小西行長の最大のライバル、秀吉には非常に近い大名ですが、通事は2人だけです。

五島氏の出兵概要も述べておきます。宇久純玄は、宇久姓を五島姓に改め、五島大和守純玄として名護屋城に向かいました。

騎馬	27匹
・侍大将	1人

- ・軍奉行 1人
- ・旗奉行 1人
- ・鉄砲・弓・長柄奉行 3人

※長柄は槍のこと

- ・使蕃 3人
- ・用人 1人
- ・大目付 1人
- ・兵騎 11人

他に、外科医師・右筆・護持僧・出家5人・小物見役

- ・歩武者 40人  
近習組、兵具支配、(法螺)貝・太鼓役など
- ・足軽120人 鉄砲、弓、長柄、旗殿
- ・小人38人 幡昇、馬印、籠、持鑓、乗馬口  
乗馬 2匹、平馬 27匹、この他小荷駄

- ・下夫 280人
- 船大小 17艘
- ・船頭・水夫 200人
- 都合 700人

(中島功『五島編年史』より)

以上は五島氏に課せられた軍役です。下夫・水夫は後方支援ですから、実戦に臨むのは半分以下ということになり、5千人のうち約2千人だった対馬の場合と同程度とみてよいでしょう。

『五島編年史』は、文禄3年(1594)朝鮮陣中において、五島純玄が疱瘡にかかって死去し、遺骸は酒漬けにして後送、大円寺に埋葬したことを伝えています。



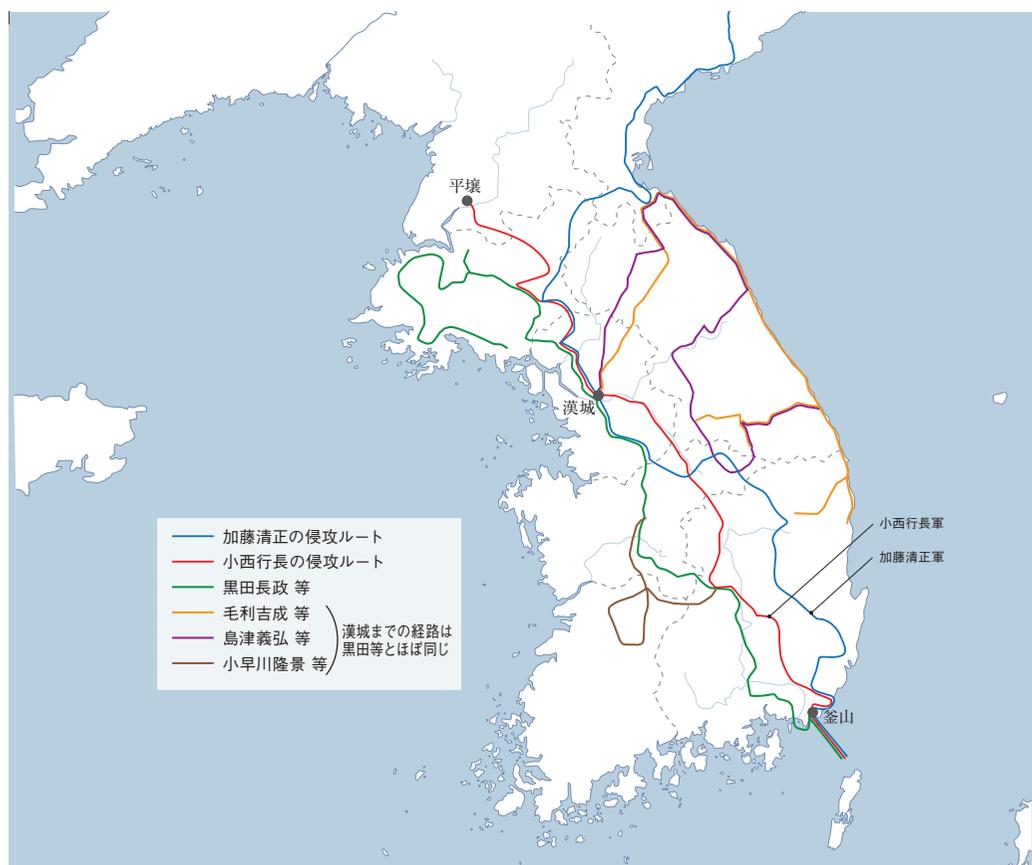
撃方山(→部分) 対馬市上対馬町

## (2) 文禄の役の経緯

天正20年（文禄元年1592）4月半ば、小西行長の第一軍が釜山に上陸し、数日遅れて加藤清正の第二軍、黒田長政の第三軍が次々と釜山付近に上陸しました。戦国の世を戦い抜いてきた精強軍団です。また日本軍は当時の最新武器である火縄銃を多く装備していました。秀吉は攻めて来ないとして防御準備を怠っていた朝鮮軍は全く防ぐことができず、小西・加藤らの日本軍は漢城（ソウル）



大河内湾々口 対馬市上馬町



文禄の役

へと進撃しました。対馬が持っていた朝鮮の地理・風土情報の提供、先に述べた通事たちの従軍は非常に大きかったと思われます。

5月初め小西の第一軍は東大門から、加藤の第二軍は南大門から漢城に入城しましたが、国王は平壤（ピョンヤン）方面に脱出して、捕縛を免れました。漢城占領の報告を受けた秀吉が、甥の関白秀次に宛てた覚書には、秀次の大明国への出陣、後陽成天皇を北京へ行幸させ、秀次を中国の関白とするなど、誇大妄想的な事項が並んでいるそうです。

第一軍、第三軍が国王を追って平壤を目指し、これも攻略すると、国王は明との国境に近い義州に逃れ、宗主国である明に救援を

依頼しました。一方、加藤の第二軍は朝鮮東北部の咸鏡道奥深く侵攻し、王子二人を捕虜にする成果を上げています。

朝鮮八道の統治は、壹岐に在陣した第九軍を除く一軍から八軍の武将が担当しました。明へ侵攻する野望とは違った形態になっています。これまで豊臣政権に忠誠を尽くしてきた大名・武将たちに、新たな知行地を与える方策としての朝鮮出兵を考えることもできそうです。そのためには税（年貢）を徴収する仕組みを確立しなければなりません。いろいろ試みられたようですが、成功はしませんでした。反対に、各地で日本軍の支配に抵抗する「義兵」運動が展開されていきました。これについては後述します。

## コラム 沙也可（さやか）の謎

加藤清正配下の武将が部下とともに朝鮮に降伏して（「降倭」）、逆に日本軍と戦って戦功をあげた。「沙也可」と呼ばれる人物である。火縄銃や火薬の製法を伝え、戦術も教授した。

そのため朝鮮国王から「金忠善」の名前と官職を与えられ、子孫が現在も大邱郊外の友鹿洞という村に住んでいる。

「沙也可（さやか）」とは何者か。その読み方から、すぐに思い浮かぶのは紀州雑賀衆（一揆）である。雑賀の鉄砲隊、雑賀水軍でも有名だったが、信長・秀吉によって徹底的に攻撃・解体された。そして、有能な人材は各地の大名に召し抱えられたようだ。

部下とともに降ったのが事実とすれば、秀吉に深い恨みを有していた雑賀衆が部隊ごと秀吉に反旗を翻した可能性がありそうだ。

なお、「降倭」の数は数千人にのぼるといふ。日本からの補給路が十分に機能せず、飢え・寒さに苦しんだ兵士は多かった。

### (3) 朝鮮の抵抗と明軍の救援

開戦当初は破竹の勢いで進撃した日本軍でしたが、引退した両班（文官・武官）をリーダーとして決起した各地義兵のゲリラ戦に悩まされ、それは慶尚道、全羅道から北部の平安道、咸鏡道まで広がり、食糧・戦略物資の輸送が十分できなくなってきました。義兵の中には僧侶で構成されるものもあって、この後加藤清正と会談する惟政（松雲大師）は義兵僧のリーダーとして有名です。

もう一つ、李舜臣配下の朝鮮水軍が、半島南部の多島海々域で、日本側の水軍と対峙・対決し、各海域で藤堂高虎、来島通総、脇坂安治といった名だたる将が率いる水

軍を破り、物資・食糧を輸送する日本船団の自由航行を許さなかったことも大きいと言われています。

そのため半島西回りで平壤へ食糧を運ぼうとしても朝鮮水軍が阻止しました。日本側にとっては、釜山・熊川と対馬の間の補給航路確保を第一にしなければならず、陸路での補給は人足が足りませんので、当然前線への食糧補給などは滞ることになります。

1593年（文禄2）、慶尚道南部の要衝である晋州城をようやく攻略した後、秀吉の指示により慶尚道南端部に築かれた西生浦城（加藤清正）、機張城（黒田長政）、金海竹島城（鍋島直茂）、熊川城（小西行長）、巨濟島の永登浦城（島津義弘）などは、今後の駐留を明・朝鮮側に知らしめるとともに、李舜臣の水軍に対抗する意味合いもありました。

なお、李舜臣の水軍には、彼が改良・建造させたとされる亀甲船が数艘あって、竜頭・竜尾からの火砲、船の上部を板で覆うなどの構造が威力を発揮したと言われています。

ところで、明国との国境に位置する義州に逃れた朝鮮国王は、宗主国である明の皇帝に、日本軍（倭軍）の侵略被害を訴え、救援軍の派遣を要請しました。1592年7月（朝鮮暦）遼東の明軍が派遣され、平壤を攻撃しましたが、小西行長らの日本軍に撃退されました。翌年明皇帝は、李如松提督以下正規の中央軍を派遣してきました。明の大軍は平壤を厳しく攻め、行長らは脱出して漢城（ソウル）まで退却を余儀なくされました。

勢いによって南下して来る明・朝鮮軍4万



松雲大師像 画像提供：仁位孝雄氏

の大軍に対して、日本側はソウルの北にある碧蹄館<sup>へきていかん</sup>で迎え撃ち、小早川隆景・立花宗茂らの奮戦によって大勝しました。李如松は戦意を喪失し、日本側も補給が不十分ですから戦闘を続けることはできず、日明間で講和をまとめることになったのです。

秀吉の自信過剰は、明国側に出した7ヶ条の講和条件に表れています。

- 一 大明の皇女を日本の(天皇の)后妃にすること
- 一 勘合貿易を復活して、官船・商船を往来させること
- 一 日明両国の大官で、互いに誓詞を交わすこと
- 一 朝鮮南部の四道を日本に割譲すること
- 一 朝鮮の王子と大臣を人質として日本に送ること
- 一 加藤清正が捕らえた二人の王子は帰す
- 一 朝鮮の大臣は今後日本に背かないとの誓詞を書くこと

この条件はそのまま明国には伝えられず、小西行長が主導権をとって和議が進められましたが、一方清正のラインもありました。朝鮮の義兵僧惟政<sup>いせい</sup>(松雲大師)と清正は、西生浦城<sup>せいせい</sup>で何度も会っており、惟政は城内の様子を探るとともに、秀吉の意図を聞き出し、さらに清正・行長の離反を策しました。行長・清正の溝は深くなるばかりです。

出兵を早く終わらせたい行長は、それは宗義智も同じですが、家臣を北京に派遣して、先の7ヶ条要求を伏せたまま、秀吉は明の冊封体制<sup>さくほう</sup>に入りたい希望を持っていると伝えた

め、明皇帝は冊封使の派遣を決めました。

1596年(文禄5慶長元)、明の使節が来日、大坂城で秀吉に謁見しました。その国書には、爾<sup>なんじ</sup>を封じて日本国王となす、という文言があつて秀吉を激怒させ、すぐに朝鮮への再出兵が小西行長・加藤清正らに命じられました。秀吉の激怒はわかっていたことなのに、どうしたことでしょうか。これまでの日朝交渉において国書を偽造してきた宗氏ですが、今回は明の国書だけに関与できなかったようです。1593年から、だらだらと続いた講和交渉は最後のところで頓挫<sup>とんざ</sup>してしまいました。敢えて推理をたくましくすれば、行長らは秀吉の身に何か起こることを予期していたのかもしれませんが。

#### (4) 壱岐・対馬の疲弊

大軍が通過していった壱岐・対馬に関する史料で、特に対馬の被害<sup>ひへい</sup>・疲弊を具体的にみてみましょう。被害を受け苦しんだ住民が書き残した史料ではなく、こういうひどいことが行われているので、固く禁止するという禁制のかたちの古文書が残っています。民衆の疲弊は為政者にとっても深刻な問題でした。

朝鮮渡海の最終基地は、上対馬豊崎の大<sup>おお</sup>河内湾<sup>かわち</sup>(大浦・河内)、鰐浦<sup>わに</sup>です。佐須奈湾<sup>さすな</sup>もおそらくそうでしょう。大浦の撃方山<sup>うつかた</sup>山頂(標高約170m)には、対馬の軍監・船奉行として駐在した毛利高政(友重)によって城が築かれたとされていますが、当然宗義智の関与があつたと思われます。撃方山城跡は石垣

など遺構の残りがよく、大河内湾を挟んで存在する結石山城跡とともに、朝鮮出兵最前線の城郭として大変貴重です。

10数万の軍勢が次々と渡海するのですから、諸大名の陣屋も各所に存在したはずです。仮の陣屋でしょうが、大浦や河内集落の沿岸部には、住民を立ち退かせてでも陣屋が建てられ、物資・食糧、職人の調達も理不尽に行われたとみるべきでしょう。

次の史料は大浦家に伝わる文書で、毛利高政が大之浦百姓たちに通達したものです。

○この森林の木は(朝鮮の) 泗川<sup>しせん</sup>で使う御用木であるから誰も切ってはいけない、もし伐採するようなことがあれば、こちらへ知らせよ

毛利民部大輔御判(友重)

○とくに申し入れる、村々において非分(非法)のことが行われていると聞いた

- ・ぬか(糠) わら(藁) さうし(草紙) 少しも取ってはならない
- ・竹を切ってはならない
- ・浦々で網を引いて獲れた魚を押し買いしては(無理に買い取っては)ならない
- ・女を無理に捕らえてはならない
- ・馬などを借りてはならない
- ・商品については何でも押し売り、押し買いしてはならない
- ・いぬ(犬) にわとり(鶏) ねこ(猫) など取ってはならない
- ・たくみ(匠) を連れ去ってはならない
- ・道具を取ってはならない

(『長崎県史 史料編一』、『上対馬町誌』より)

渡海の軍隊が食糧や日用の品々に困っている様子がうかがわれます。猫はツシマヤマネコも対象かもしれません。飼い猫と違ってニワトリの固い肉と同じですから食用になります。匠は大工職人のことでしょう。道具とともに不足が著しかったようです。毛利高政(友重)も対馬島民の協力がなければ実務が遂行できないことを理解し、治安の安定を心がけたものと思われます。

慶長の役直後になりますが、対馬島民の悲惨な様子が慶長4年(1599)の「禁制三ヶ条」の文言に表れています。対馬は塩・海産物を半島・九州に持って行って売り、穀物を購入する交易で島の暮らしが成り立っていました。半島とは通交が断たれ、九州本土へ行くにも働き手は大半徴発され、帰郷しない者も多かったのです。畑の耕作や食料調達に女性の労働が大きな割合を占めていました。

- 一 国中において男子女子に限らず赤子を踏み殺してはならない
- 一 女房が家を出るとき、家財を持たせてはいけない
- 一 知行の内、女子に権利を残すことがあってはならない

(『上対馬町誌』より)

最初に何とも悲惨としか言いようがない赤子殺し禁止の条文があります。それほど追い詰められていたのですが、子が育たないということは将来の公役・年貢収入に差し障りますから、為政者側も必死です。女性の財産を制限する理由は公役を負担する戸(家)を維

持するためでした。

壱岐においても同様な非法を禁止する、それも豊臣秀吉朱印状の「禁制」が出ています。朝鮮出兵を前に、「押買・押売」「乱暴狼藉」を禁止する治安関係の禁制が肥前にあるいは筑前にも出されたのではないかと思います。とくに壱岐は兵員輸送、食糧・物資搬送の中継基地ですから、特に壱岐国あての「禁制」です。

- 一 軍勢その他の者たちが乱暴狼藉を働くこと
- 一 放火のこと
- 一 壱岐の地下人百姓に對し、非法を仕掛けること

これら条々は堅く禁止する、もし背く者があれば嚴罰に処する

天正廿年(1592)正月(秀吉朱印)

(『平戸松浦家資料』より)

具体的な被害・疲弊に関する史料はないにしても、すでに述べた1350石分の廻船調査など壱岐島民の負担もかなりのもので、対馬島民に近い状況が推認されます。

## コラム 小麦様とは？

「小麦様」、こう呼ばれる女性をご存じの方は少ないだろう。彼女は平戸最教寺にある松浦法印鎮信の墓そばの傍に眠っているらしい。

平戸藩の西口松浦家は家老の家柄で、その初代を松浦信正といい、父は法印鎮信、母が小麦様である。何故小麦様というのか。

法印鎮信が朝鮮在陣の折、小麦畑に隠れていた女性が見つかり、そのまま鎮信が側女そばめにしていた。この女性「かくせい」(小麦様)はやがて懐妊かいにんし、帰陣の際、壱岐渡良浦わたらで出産した。

壱岐勝本の豪商である土肥家の「先祖書」(享保20年 1735)によれば、陣中での懐妊・出産は外聞がよくなないと鎮信が言うのを受けて、赤子を紗綾さあや(絹織物)に巻き、備前の小脇差わきざしを三星みつぼし(松浦家の家紋)染め付けの包物に包んで赤子に添え、畑の中に捨て置かせた。その後、赤子は僧や船主などの助けで成長し、壱岐の神力・仏力によるものとして勝本の商人となった。土肥八右衛門という。

そこに小麦様の意向が反映しているのか、どこまでが史実か確証はないが、小麦様の最初の子が壱岐で成長した可能性はありそうだ。すると次男が西口松浦家を興したことになる。

なお、小麦様のお墓と伝えられるものは、西口松浦家の知行地だった根獅子ねしこにもあり、供養が営まれてきたという。

(史料提供 九州大学大学院 岩崎義則准教授)

### 3 慶長の役(丁酉倭乱)

#### (1) 加藤清正のこと

この再出兵でも加藤清正・小西行長が先鋒を勤めました。清正は、福島正則らとともに賤ヶ岳七本槍と言われ、勇猛な武将というイメージもあるのですが、実際は財務・民政、水利事業にも長けた豊臣政権の実務派官僚として勢力を伸ばしてきました。

ところが、文禄・慶長の役では、朝鮮においても、日本においても加藤清正は猛将そのものです。朝鮮では泣きやまない子どもを「(泣きやまない) 清正が来るよ」とおどしたり(元寇のところでもありました)、日本では虎退治が一番有名です。虎退治については結構史料があって、清正だけではありません。対馬にも、大石荒河介と同源次郎の兄弟が虎と格闘した話が伝えられており(『新対馬島誌』)、出兵した各大名家にも残っています。それでも、虎退治はやはり清正なのです。その清正が蔚山城攻防戦では九死に一生を得ました。

清正が蔚山城を造営するに至った経緯をみてみましょう。そもそも、朝鮮出兵のエネルギーは、秀吉の指示・命令により築城にも多くが費やされました。はなばなしい漢城(ソウル)攻略の前後、秀吉は自身渡海するからと、その準備を急がせ、諸大名は御座所造営のため大変苦勞しています。

当時の戯れ歌に「太閤が 一石米を 買いかねて 今日も五斗買い(御渡海) 明日も五斗買い(御渡海)」というのがありますが、莫大な戦費に諸大名が苦しんでいる状況を秀

吉の御渡海にかけて皮肉っているのです。

さて、1597年(慶長2) 清正は慶尚道蔚山に新城を築くよう秀吉から命令されました。同様に島津義弘は泗川で城普請を開始し、全羅道の順天でも新城が造られ始めました。先に西生浦城から熊川城まで点々と築かれた慶尚道南岸部から少し外に位置する支配の拠点としての新城です。

前回の文禄の役で食糧・物資の輸送がうまくいかなかったことの反省から、慶尚道・全羅道・(忠清道)の実効支配を優先したのと思われます。蔚山城の普請が途上にあつたころ、明・朝鮮連合軍は猛将の名がとどろいていた加藤清正に集中攻撃をかけてきました。清正を討つことで全軍の志気を上げようとしたのでしょう。十分な防備もないまま清正軍は籠城せざるを得ませんでした。

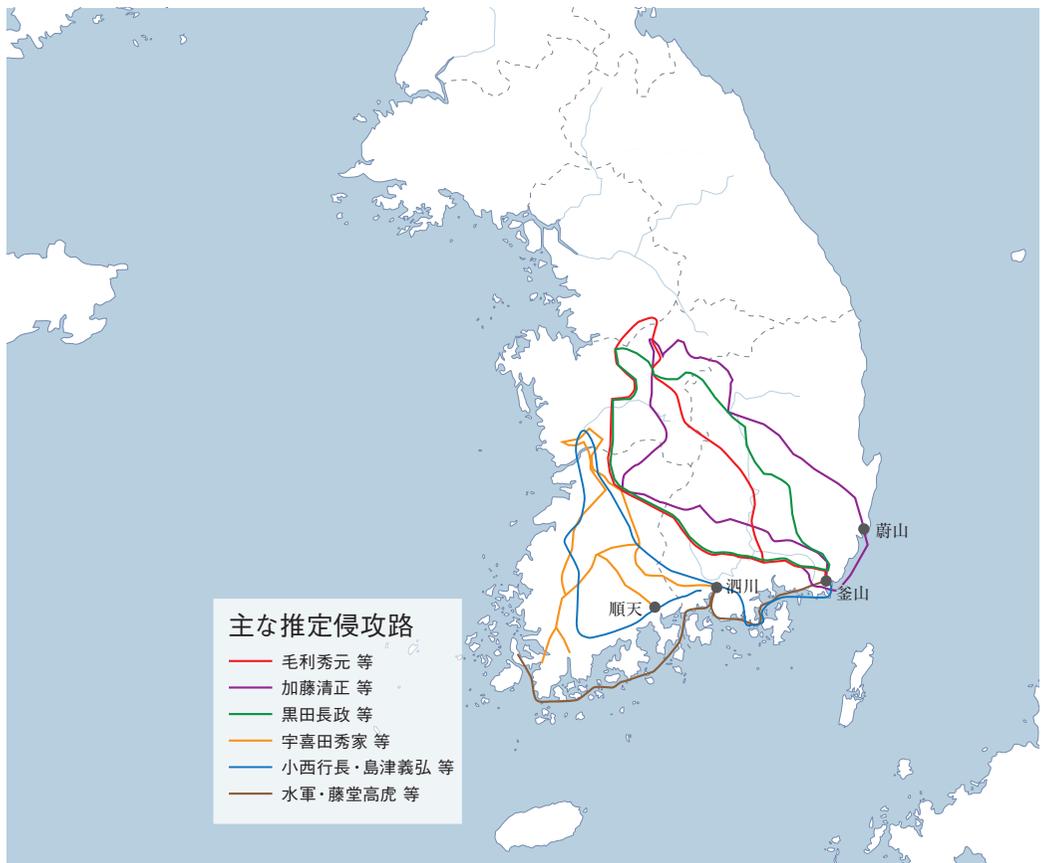
真冬の寒気のなか水・食糧はなく、兵たちは馬の肉を食べ、さらに死者の食料をあさり、衣服に浸みた雨水で喉を潤すなどの状況でした。さすがの清正も、もはやこれまでと切腹も覚悟したとき、ようやく毛利秀元らの援軍が到着したのです。新手の大軍の攻撃に、今度は明・朝鮮軍が大混乱におちいり、2万ともいう犠牲を出して退却しました。

加藤清正が朝鮮に残した影響の大きさを表す江戸時代初期の文書が対馬にも残っています。室町時代に朝鮮王朝から官職を受けた者(受職人)が、交易船を派遣する権利を有していました。その官職授与状を「告身」といい、尾崎の早田家に3通保存されていることは第7章で述べましたが、志多留の武田家

と伊奈の小野家にも各2通あることが知られています（小野家の「告身」は現在県立歴史民俗博物館蔵 県文化財）。

ここでは武田家の「告身」を紹介します。次章で述べる慶長条約が結ばれ（1609年）、日朝関係が一応安定に向かっていったとき、交易の権利を求めて受職を朝鮮に要請し、その結果「告身」を受領しました。告身申請の陳述書で最も強調されているのは、武田又五郎・又七兄弟が清正の西生浦城陣所に火をかけ、50軒ばかり焼いて、講和反対の清正に打

撃を与えたというものです。小西行長陣営にあつて清正とは対立していましたので、ありうる話ですが、真偽の程はわかりません。とにかく、朝鮮側がそれを認めて「告身」を授与したことは事実です。加藤清正陣所への放火は非常なインパクトでした。



慶長の役

## (2) 日本軍再征、秀吉の死後撤退

慶長の役における宗義智軍は、小西行長軍とともに釜山に上陸しました。総勢1千人といますから前役の5分の1です(2千人説もあり、こちらが妥当かも)。対馬の負担・疲弊に配慮がなされたのでしょうか。行長はじめ松浦鎮信・有馬晴信・大村喜前・五島玄雅(純玄の後継)が全羅道の順天城に拠ったのに対し、義智軍は慶尚道西端の南海城を守備しました。南海島の北には島津義弘が築き、入城している泗川城があります。順天城にも近く、連絡・連携の役割を担ったのかもしれない。行長らとともに蔚山城にも遠征しました。

蔚山城攻防戦の他にも主要な戦いがありますので、慶長の役を概略述べておきます。ただ困るのは日本側の史料と朝鮮(韓国)の史料では、数字も評価も違っているということです。蔚山城攻防戦で明・朝鮮軍の犠牲は2万としましたが、これは日本側の史料ですから、実際はもっと少ない可能性もあります。しかし、明・朝鮮軍が大混乱のうちに撤退したことは事実でしょう。清正が強いられた過酷な籠城戦が日本側に衝撃を与え、戦線縮小が提起されたことも事実です。

蔚山城攻防戦の少し前に行われた鳴梁海戦を紹介しましょう。近年韓国で映画化され、英雄李舜臣の活躍がクローズアップされて大ヒットしました。その李舜臣は朝鮮水軍の内部の争いで讒訴され司令官(統制使)を解任されていたのですが、復帰して指揮をと

るようになりました。海戦の経過は、李舜臣率いる13艘の戦艦が133艘もの日本水軍を、鳴梁海峡の潮流を生かして撃破した、というものです。

この海戦で、日本水軍の将たる来島通総は戦死しました。瀬戸内海村上水軍の頭領です。万石以上の大名の戦死は彼一人で、意外な感じもします。陸戦で一人もいないのは、壊滅的な敗走がなかったということです。

その後も明・朝鮮軍の攻勢が続き、完成して強固になった清正の蔚山城から行長の順天城にかけての沿岸拠点を確保するのに重点が置かれたようです。慶尚道・全羅道の実効支配には程遠く、むしろ退去を想定したような感じがするのです。

慶長の役の戦いの特色として、首の代わりに軽い鼻を削いで、その数を戦功とするようになりました。「鼻」ならば武将・兵卒も一般人も見分けはつきません。何百・何千という鼻の数を記した「請取証文」が残っています。

慶長3年(1598)8月、秀吉が死去しました。3月の豪華絢爛を極めた醍醐寺の花見の後、秀吉は体調を崩していました。もう明征服どころではなく、朝鮮南部の確保さえ、ままならない情勢でした。徳川家康・前田利家ら五大老、石田三成ほか五奉行は、朝鮮からの撤退を指示しました。使者が秀吉の死を秘して朝鮮在陣の各大名を回ることになりましたが、自然と明・朝鮮軍側にも伝わったようです。

明・朝鮮連合軍は撤退する日本軍を追撃す

べく攻勢をかけてきました。まず、泗川城ですが、ここには島津氏があります。新城は鉄砲の威力を十二分に発揮する構造になっており、これを撃退しました。討ち取った首数は3万8千余と複数の史料が記しています。ただ、島津義弘が翌年高野山に建てた高麗国在陣敵味方戦死者のための供養塔には、泗川での明人の死者を8万と誇張して刻してあります。

行長の順天城も攻撃されました。明・朝鮮の陸軍・水軍によって陸・海から挟撃されるはずでしたが、泗川の戦いでの敗戦に陸の明将軍は戦意を失い、参戦しませんでしたので、水軍も攻撃を中止しました。秀吉の死を知らせる死者が来たのは、泗川・順天とも攻防の後だったのですが、それとなく気付いていたに違いありません。

さて、撤退の具体的な方法について、小西行長・立花宗茂・宗義智・島津義弘らの西目衆は、加藤清正・浅野幸長・黒田長政・鍋島直茂ら東目衆退去の後に巨濟島きよさいに集まることを申し合わせました。何か関ヶ原の西軍・東軍のようです。

翌11月、島津勢が泗川城を焼き払って撤退に移ったとき、順天城の行長は明・朝鮮の水軍はばに阻まれて窮地おちいに陥っていました。救援に駆け付けた島津勢を明・朝鮮の水軍が待ち受け、島津勢は多数の死傷者を出して苦戦しながらも、この海戦ろりょう（露梁海戦）の間に小西行長と松浦・有馬・大村・有馬・五島の5氏は脱出に成功。一方、李舜臣は銃弾に当たって戦死しました。大変有能な司令官を失った朝鮮水軍の力が低下したことは言うまでもあ



宗義智像 万松院所蔵

りません。これが慶長の役最後の戦いとなりました。

これまで述べてきたように、島津義弘はじめ島津勢の活躍はめざましく、帰国後報償として薩摩国出水郡1万石が義弘の子忠恒(初代薩摩藩主)に与えられました。出水郡1万石は、秀吉から宗義智が拝領していたものですが、代わりに肥前国基肄郡・養父郡のうち1万34石が与えられました。いわゆる後の対馬藩田代領です。

日朝双方の多数の人命を失い、莫大な財物を浪費した無駄な戦争が終わったときから、国交回復に奔走する宗義智の新たな苦難が始まりました。



万松院 対馬宗家墓所

第10章

# 朝鮮通信使と 対馬藩

～250年の平和～



慶長の役が終わると、早速対馬の経済は困窮しました。これまでずっと朝鮮貿易が最大の収益源だったからです。秀吉に代わった徳川家康は、朝鮮出兵の失敗をかんがみ、宗義智そうよしとしに朝鮮との国交回復を命じました。義智は非常な苦心工夫をもって1607年朝鮮通信使きつせんし（回答兼刷還使）来日に成功、朝鮮貿易も回復しました。以後、江戸時代には12回の通信使が来日し、外交交渉、文化交流に多大な役割を果たしました。その象徴ともいべき人物が雨森芳洲です。

## ① 日朝国交回復交渉

### (1) 朝鮮使節の来日

1598年（慶長3）秀吉の死によって、ようやく戦争が終わりました。1日も早く朝鮮貿易を再開しなければ対馬の経済は持ちません。翌年から朝鮮に使者を送って交渉を求めましたが、使者は抑留され帰ってきませんでした。有能な通訳として活躍した梯七太夫もそうです。これまで朝鮮と長く通交関係にあった対馬ですが、秀吉の命とはいえ宗氏は軍団を派遣したわけですから、朝鮮にしてみれば敵そのものです。その上、明の駐留軍もありました。

慶長の役で藤堂高虎の水軍に捕らえられ、四国の大洲、その後伏見に抑留されていた姜沆カンハンという儒者が釈放され、帰国する際対馬に寄りました。彼の著作『看羊録』に宗義智の重臣柳川調信しげのぶとのやり取りが記録されていますので、対馬の必死さを感じ取ってください。

（柳川調信）「わが島は、二国の間であって、

秀吉が上国（朝鮮）を犯した時も、この島がどうしてそれを阻げることができましたでしょうか。それ故、軍隊が動く前に、予めその時期を報告し、上国が予め防備をするよう望んだのであります。しかし、大軍が席卷せつけんして過ぎるに及んでは、わが島としては、無理をしても従わざるをえません…。

とうてい従い難いような要求は、すべて秀吉がこれをなしたもので、今では、もはやそのような要求はありません。…賜米は、ことさら賜わろうとは思っておりません」。

姜沆が朝鮮の虜とらわれ人に聞いてみたところ、壬辰じんしんの交戦以来、倭の軍隊は対馬で「宿舎や薪・野菜を徴発ちようはつし、また「騒々しくわずらわしいうえに、むやみと費用がかかり、骨ほねの髄ずいから懲こり懲こりしています。撤兵して二年たつてやっと人心地がついたような具合」と、対馬の実情を生々しく語りました。そして交易再開の許可を求めて、対馬を通行する人を接待しているというのです。すべて秀吉が悪い、これは柳川調信に限らず対馬の人たち

全部の恨みの声だったのでしょう。歳賜米については本音ではありません。

通交交渉が大きく動き出したのは、関ヶ原の戦いで東軍が勝利し、徳川家康が政権の座についてからです。家康は、宗義智に朝鮮との国交回復を命じました。

その前に、岳父の小西行長に付いて西軍側にいた宗義智の立場はどうなったのか説明しておきます。義智自身出陣してはいませんが、柳川調信の長子<sup>としなが</sup>智永の一隊が島津義弘の陣におり、これについて戦後すぐに調信が家康の許に出向いて、義智の指示で参陣したのではないと申し開きをしました。朝鮮外交に限らず、柳川調信なる人物の交渉能力は抜きん出ているようです。家康も今後の日朝交渉をにらみ、宗義智の朝鮮外交手腕及び柳川調信の能力も併せて、これを受け入れたと思われる。

関ヶ原での島津義弘といえば、西軍の敗北が決定的な情勢にあるとき、前方の東軍へ突っ込んで家康本陣の脇を突破し（敵陣突破）、伊勢から船で帰国した猛将として有名です。朝鮮泗川城の戦と、この関ヶ原での薩摩勢の戦いぶりが、西軍陣営にいた島津氏を存続させたのかもしれない。無理して島津氏を本国に攻めても、攻防が長引けば徳川政権の基盤固めに影響するからです。

さて、1600年（慶長5）には明の援軍が朝鮮半島から引き揚げ、国交交渉を直接朝鮮政府と行うことができるようになりました。文祿・慶長の役で連行された<sup>ふりよ</sup>俘虜の送還も悪感情を和らげていきます。1604年義兵僧の

リーダーだった松雲大師<sup>いせい</sup>惟政が「探賊使」として対馬に来島し、義智・調信・僧玄蘇も同行して翌年伏見城で家康と会見しました。家康は、自分は関東に居て朝鮮に渡っていないこと、再侵略の意志はなく通交を望んでいることを伝えました（家康は名護屋に陣屋を築き、駐在しています）。

これを受けて国交回復交渉が進展し、朝鮮側が出してきた条件は次の二項目です。

一 徳川家康から先に国書を送ること

一 朝鮮王陵を荒らした犯人を差し出すこと

先に国書を送るということは、先の戦乱に対する謝罪の意味が含まれますので、それを家康に求めることはできません。義智と重臣の調信らは、室町時代に足利将軍の国書を対馬で作成したように、家康の国書を偽作して送ることにしました。王陵荒らしの犯人は島内の2人の犯罪者を縛り上げて連れて行きました。

朝鮮側では、犯人は若すぎるし、どちらも怪しいと薄々わかっていたようですが、このあたりで使節を派遣してもよからうということになりました。というのは、その頃<sup>じょしん</sup>女真族（後の清王朝）が勢力を増して朝鮮に侵攻するような北方脅威の情勢ですので、日本との国交回復を急いだ方がいいとの判断でした。ただし、日本側の要求が通信使なのに対し、回答兼<sup>きつかん</sup>刷還使、つまり家康の国書への回答使であり、日本に抑留されている<sup>ふりよ</sup>俘虜を帰国させる役割というわけです。

1607年、江戸時代になって初めての朝鮮使節が来日しました。正式には回答兼刷還使

ですが、一般的には第1回朝鮮通信使と呼ばれています。家康としても徳川政権の正統性



宗義智像 対馬市厳原町

を内外に誇示するという点で、大変満足だったはずです。



宗義智の墓 万松院 宗家墓所

## コラム 小西マリア

小西行長の娘マリアは宗義智のもとへ嫁いだ。勿論、朝鮮出兵を想定しての政略結婚である。それでも、夫の義智が洗礼を受け（ダリオ）、宣教師が来島するなど、対馬にもキリスト教の種が蒔かれた。

関ヶ原の戦いで東軍が勝利すると、西軍の主力を担っていた小西行長は捕らえられ、京都で斬首された。宗義智としてはマリアを離縁せざるを得なかった。マリアは長崎へ送られたらしいが、対馬屋敷がキリスト教関係施設か、そのあたりはわからない。

対馬の人々は、程なく亡くなったマリアを憐れみ、また恐れたのかもしれない。マリアの霊を鎮めるために、今宮神社の祭神として祀った。現在も厳原八幡宮の境内社として存在する。いわゆるキリシタン神社である。

なお、キリスト教弾圧の時代に、最後の日本人司祭として殉教した小西マンショ神父はマリアの子という説がある。



今宮神社 厳原八幡宮境内

## (2) 朝鮮貿易の再開と柳川事件

日朝間の国交回復交渉と並行して、対馬からの交易要請の交渉も続けられました。ようやく1609年（慶長14）、柳川智永（調信の子）を派遣して慶長条約（己酉約条）が結ばれ、文禄の役の前ほどではありませんが、安定的な交易が行われるようになりました。その主な内容をみてみましょう。

- 対馬島からの歳遣船（貿易船）は年20隻、特送船3隻を含む。（20隻のうち）大船6隻、中小各7隻とする
- 対馬島主への歳賜米・大豆は各100石とする
- 受職人は年1回の貿易船派遣とする。ただし代理は認めない
- 来朝する者は対馬島主発行の文引（渡航許可証）を持参のこと
- 対馬島主には先例により文引に押印する図書（銅印）を給しておく
- 文引を持っていない者は賊と見なされるので釜山に近づかないこと
- 過海料（渡航費用）を対馬島人（5日糧）、島主特送（10日糧）、日本国王使（20日糧）に対してそれぞれ給する
- 他はすべて前例による

宗氏を中心とする仕組みは変わりませんが、全体的に厳しくなっています。宗氏の収益にしても、一番よかった嘉吉条約に比べれば半分以下になりました。嘉吉条約では、歳遣船50隻、米・大豆各200石でした。それでも安定的な仕組みが成立したことが重要で、この後交渉していけばいいのです。

朝鮮出兵前から苦勞してきた宗義智、柳川調信・智永親子、外交僧玄蘇は、1615年までに皆没しています。彼らの後を継ぐのは、義智の子宗義成、智永の子柳川調興<sup>しげおき</sup>、玄蘇の弟子僧玄方でした。この後、義成を中心に朝鮮外交、通信使来日を対馬藩の任務として行えば、自然朝鮮貿易も継続するはずでした。

義成と柳川調興は、調興が一つ上の同世代、調興の妻は義成の妹ですから、調興が重臣として義成を支えれば磐石な対馬藩でした。ところが、調興は江戸・駿府（静岡）に滞在して幕府関係者と交友を深め、対馬に帰っても我がままに振る舞っていたようです。というのは、朝鮮との国交回復の功勞で宗氏に対して肥前田代に2800石の加増がなされた際、家康から1000石は柳川智永あてということだったので、それを受け継いだ調興には幕府直参の意識があったと思われます。

とうとう宗氏から受けた知行や歳遣船1隻派遣の権利を返上、妻も離縁し、そればかりか国交回復過程における日朝の国書偽作を幕府に訴え出しました。いわゆる柳川事件です。

調興に、宗氏に代わって朝鮮外交を担う意図があったどうかわかりませんが、宗氏が改易<sup>かいえき</sup>（取りつぶし）されれば、自然そうなります。徳川重臣たちには土井利勝ら調興に近い者が多くいて、儒学者の林羅山もそうだとされていました。それだけ調興に朝鮮外交のノウハウ、才覚があったということでしょう。義成方には伊達政宗らがいました。

この大事件は、江戸城大広間にすべての大名が集められた中で口頭尋問が行われ、

最後は3代将軍家光自らが判決を下して決着しました。義成は無罪、これまでどおり、調興は財産没収のうえ津軽に配流、玄方も財産没収のうえ南部に配流です。家光は、ようやく治まっている日朝外交の安定を重視したと考えられます。

ところが、指示を受けて国書の偽作・改ざんに直接関わった宗氏の老臣島川内匠と柳川の家臣松尾七右衛門は死罪です。家臣でつじつまを合わせた感じでしょうか。柳川一件ともいう対馬藩存亡に関わる大事件は1635年(寛永12)のことでした。

この後、朝鮮外交に幕府が関与するようになり、外交文書作成などのため京都五山の僧が輪番で対馬以酌庵に赴任しました。これを以酌庵輪番制といいます。

この項の終わりに、日朝貿易の主な輸出品、輸入品をあげておきます。

<封進(朝貢形式)>

○輸出:胡椒・明礬・蘇木(丹木)など

○輸入:木綿(米)

<公貿易>

○輸出:銅・鐵・蘇木・水牛角など

○輸入:木綿(米)

<私貿易> 1684年(貞享元)ころ

○輸出:銀・鐵・銅・狐皮・狸皮・蘇木など

○輸入:白糸(生糸)・絹織物・人参など

(田代和生『倭館』より品目)

輸出品で目に付くのは、銀と銅、それに長崎で入手した胡椒・蘇木など南方の物産で

す。輸入品は圧倒的に白糸です。一時期ですが、長崎貿易の白糸輸入を上回るとも言われています。京都~対馬府中~漢城(ソウル)~北京の間で、銀と白糸が大きな流れとなっていました。対馬銀山を含め国内の銀産出が衰えると、貿易も縮小していきます。

封進・公貿易で輸入される高級木綿はだんだん品質が悪くなり、国産木綿と競合して利益が上がらなくなったので、対馬藩は米に換えて受け取るよう交渉しました。朝鮮人参は対馬にとって利潤が上がる商品でした。これについては、後半のコラムを参照してください。



佐須奈港 絵はがき



現在の佐須奈港

## ② 朝鮮通信使 対馬から江戸へ

### (1) 長崎県立対馬歴史民俗資料館蔵「朝鮮国信使絵巻」(重要文化財)

この絵巻は、通信使一行が江戸へ向かう道中の様子を描いたものと思われます。これがいつの通信使を描いたものかは明らかではありませんが、紙質は相当の古さを感じさせます。

対馬藩では藩主以下、通信使側との交渉を

担う藩士や警固の者たちが多数江戸往復の通信使一行に付き添いました。人々の表情、着物の柄の多彩さ、馬の様子などが美事に描かれており、また宗武志氏寄贈の絵巻ですから来歴も申し分ありません。以下、主な部分だけ紹介します。

#### 【絵巻写真】



#### ① (前欠) 楽隊

前の部分を欠いているため、対馬藩の役人たち、清道旗・形名旗などが描かれていない。

楽隊の中で太平嘯を吹く者は2人しかいないが、螺角手らかくしゅが6騎であることから同じく6騎だったと思われる。通信使一行の中でも楽隊は非常に人気が高かった。



#### ② 令旗と軍官

軍官の一団の真ん中に軍隊を指揮・命令する「令旗」が6本並んでいる。令旗の後に弓矢を持つ射手や筒を持つ砲手が続く。



### ③国書と別幅

朝鮮国王から徳川将軍〔日本国大君〕あての国書と、関係書簡である別幅は、特別立派な輿こしに載せて運ばれる。これを龍亭子りゅうていしというが、この絵巻に描かれた龍亭子は、他の通信使絵巻に比べてやや小さい感じがする。



### ④子犬

別幅の輿の横に黒い子犬がじゃれている。人の手足の動き、馬の足の動きがパターン化されているのが気になるが、こうした子犬を見ると、実際に通信使一行を観察した絵師の筆によるものではないかと思われる。



### ⑤三使〈正使・副使・従事官〉

槍を持った2騎を先頭に正使の一団が続く。輿に乗った正使の前後には、仕える小童しょうどう（ソドン）が5騎ずつ、そして警備の軍官が固めている。

正使・副使・従事官を通信使の三使というが、いずれも朝鮮国の高位の文官から選ばれ、国の威信がかかっているため、学識豊かで詩文にも長じた学者が採用される。

三使には衣笠のような大きな日除けが差し掛けられている。三使の輿の脇には通訳を兼ねた秘書役（吸唱）が2人付いている。



#### ⑥文官の一団

従事官に続いて長い文官の行列。おそらく上々官・製述官は駕籠に、上官・中官・通詞たちは馬に乗って行進している。それらの馬1頭、1頭がみごとに描かれている。



#### ⑦後備

後備として警固の対馬藩士が続き、荷物運びの人足もたくさん描かれている。馬上の藩士は槍奉行・足軽奉行といった上級武士。

この絵巻に描かれている総人数は597人、馬147頭、そして犬1匹である。



松原一征氏所有（対馬市指定文化財）

#### 「朝鮮通信使馬上才図巻」より

本図は朝鮮通信使に随行した馬上才による馬の曲乗を描いたものである。馬上才による曲乗は、徳川将軍が特に来日を熱望したものであり、将軍の上覧ののち、江戸の民衆にも見物する機会があり、抜群の人気を誇った。本図は馬上立、馬上倒立などの様々な曲乗を描いており、朝鮮通信使を通じて日本に伝えられた朝鮮国の伝統的な芸能の一つである。

## (2) 壱岐勝本浦の通信使館と饗応料理



勝本の通信使館跡

勝本の通信使館は聖母神社の傍、崖下に細長く建てられてありました。現在は一部が阿弥陀堂になっているほか民家が並んでいます。面積は約2500坪（8200㎡余）、長さは約100間（約180m）。

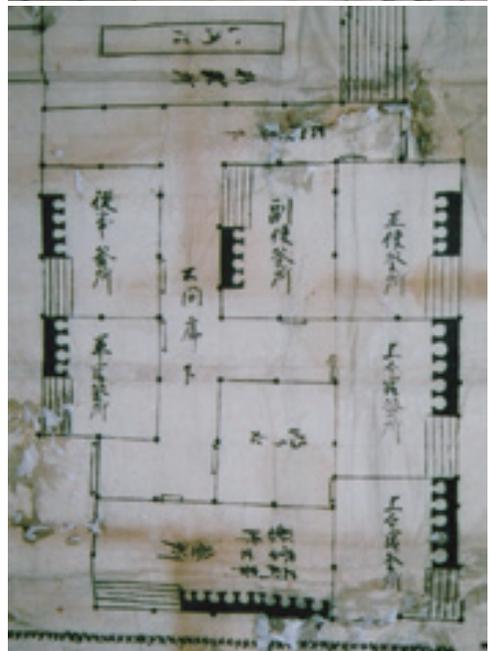
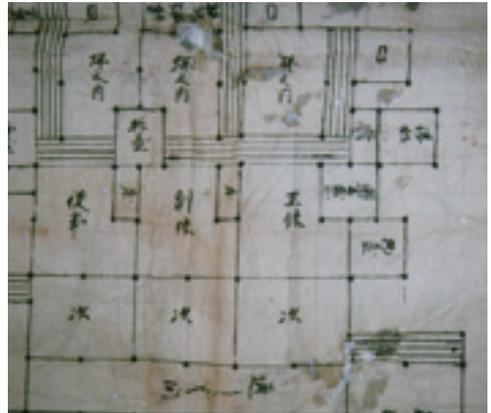
儒教の国朝鮮における身分差は極めて厳格です。勝本土肥家旧蔵「朝鮮通信使迎接受所図面」を見ると三使の部屋には床間があり、それぞれ専用の風呂・洗面所・台所（釜所）が設えてありました。上々官・上官・中官は共用となりますが、勿論身分が下るにしたがって共用人数は多くなっていきます。

○正使 朝鮮国王の名代として使節団を代表し、堂上正三品という高位の文官から選ばれた。勝本の宿所絵図には正使専用の居室・湯殿・<sup>かわや</sup>厠・釜所に加えて国書置所が描かれている。

○副使 正使とともに使節団を代表する役職で、堂下正三品という高位の文官から選ばれた。勝本の宿所絵図には

副使の居室と床及び専用の湯殿・厠・釜所が描かれている。

○従事官 正使・副使とともに通信使行列では輿こしに乗り、五・六品の文官から選ばれた。勝本の宿所絵図には従事官の居室と床及び専用の湯殿・厠・釜所が描かれている。



「朝鮮通信使迎接受所絵図（勝本通信使館絵図）」壱岐市所蔵

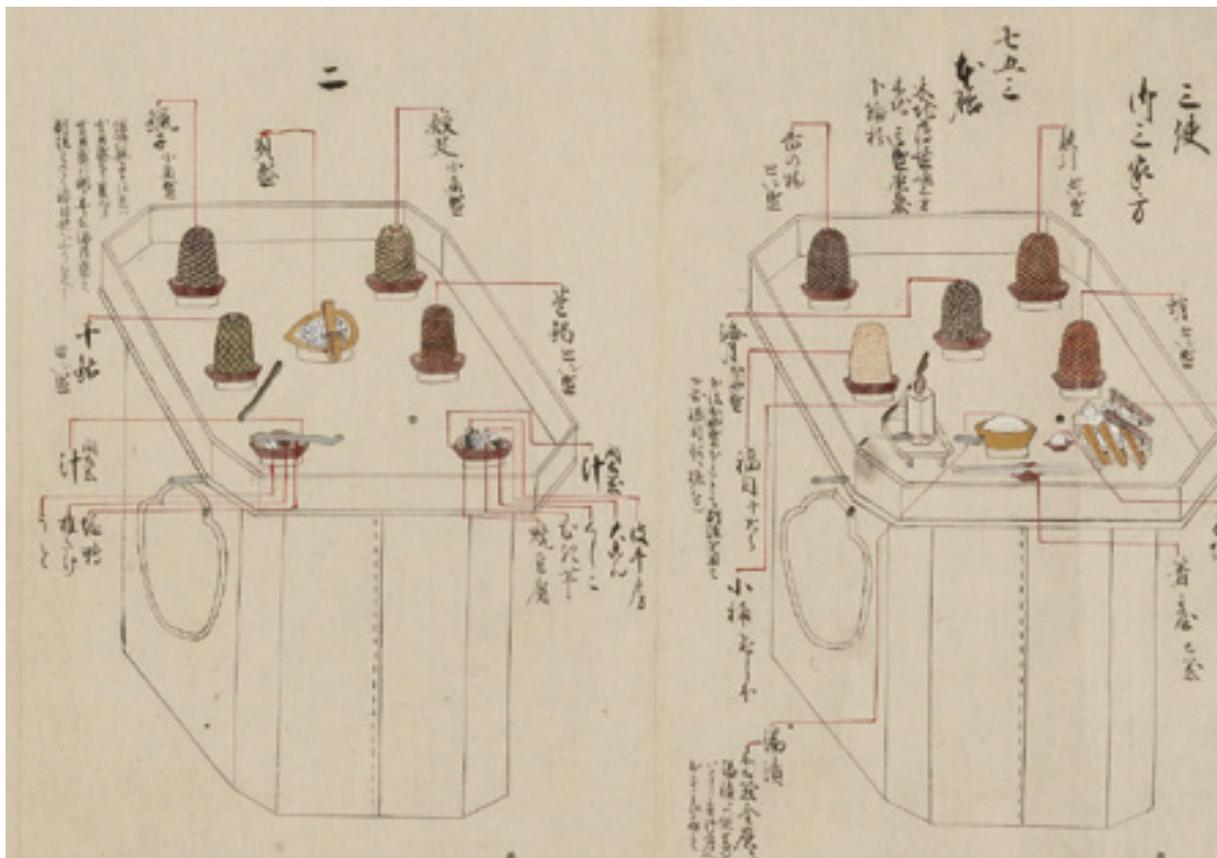
通信使一行への饗応接待は、徳川政権の権威を表すもので、食事は大変豪華でした。正使・副使・従事官の三使と上々官に対する献立は、本膳・二の膳・三の膳からなる七五三の膳といい、本膳七菜・二の膳五菜・三の膳三菜が供せられます。カラスミなど高級食材をふんだんに使い、手間暇かけて創り上げる食の芸術品ですから、だんだん儀礼化して見るだけのご馳走になっていきました。

享保の通信使の京都本能寺における接待例では、上官に五五三膳、中官には二汁八菜、下官には一汁六菜が供せられました。他

に長老伴僧には二汁七菜、通詞には二汁五菜、長老・通詞の下々には一汁四菜とあります（『通航一覽』巻六十）。

壱岐の通信使館で供された明暦（1655年）の七五三膳の例を簡略にまとめて紹介しましょう。「松浦肥前守殿御馳走」です。

最初に、銚子とともに昆布・乾栗、続いて高盛の塩引・くらげ・とこふし・いか（烏賊）が出されます。高盛は儀礼で食べられません。雑煮の中身は、もち・くしこ（串なまこ）・くしあわび・大かつお・むすびこんぶ（結び昆布）・いも・とうふ（豆腐）ですが、これも



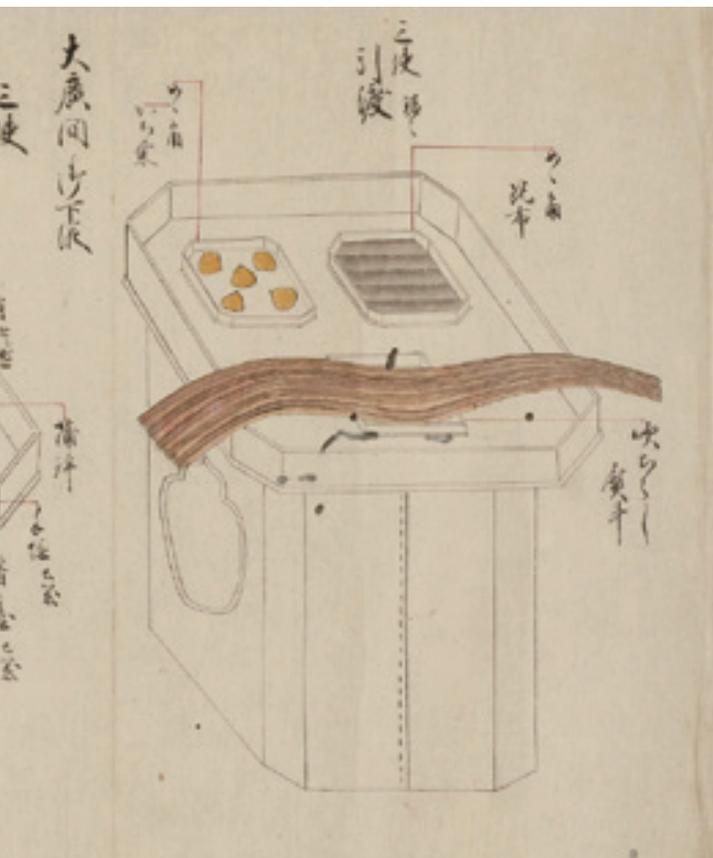
儀礼的でしょう。七五三の小道具は金みがきとありますから、豪華な雰囲気をかもし出したと思われます。さらに、塩引(塩漬け魚)・<sup>すし</sup>鮓・からすみ・香物・<sup>ずるめ</sup>巻鯛・かまぼこが出されて本膳はおしまいです。

二の膳は、たり(酒を入れた入れ物)、ごんざり(五寸切 小さい鱧を素乾しにしたもの、<sup>なます</sup>刻んで膾にする)、また汁は串アワビ・くしこ・つみ入れ・大根・なすび・山椒の粉入りが出ます。さらに、くらげと蛸の含め煮、また汁の中身は鶴・竹の子・しいたけ・<sup>ふ</sup>麩でした。

鶴は饗応料理によく使われます。

三の膳には、羽盛・船盛といった見る料理があります。羽盛は鶉・<sup>うずら</sup>鴨などの焼き物で、飛んでいる姿を表現し、これに<sup>にし</sup>螺(巻き貝)と汁(鯛)が添えてあります。船盛は伊勢エビの尾を跳ね上げて船の形にしたもので、銚子・盃、小鯛<sup>ひな</sup>の吸物も出て、最後の押えとして唐墨<sup>からすみ</sup>が出されました。菓子は饅頭・羊羹・ポーロ・胡麻餅などです。

これで終わりではありません。さらに引替の膳<sup>なます</sup>が出されました。膾(鯛・栗・生姜・<sup>し</sup>紫蘇・<sup>くねんぼ</sup>九年母)、和え物(くこ)、汁(鯛・



「七五三盛付線出順之絵図」  
 県立対馬歴史民俗資料館所蔵  
 (重要文化財)

まつたけ・牛蒡せん・茗荷<sup>みょうが</sup>、鮓<sup>すずき</sup>（鯛）、煮物（鶏）、煎海鼠<sup>いりこ</sup>煮、飯とありますから、これが食事らしい食事です。

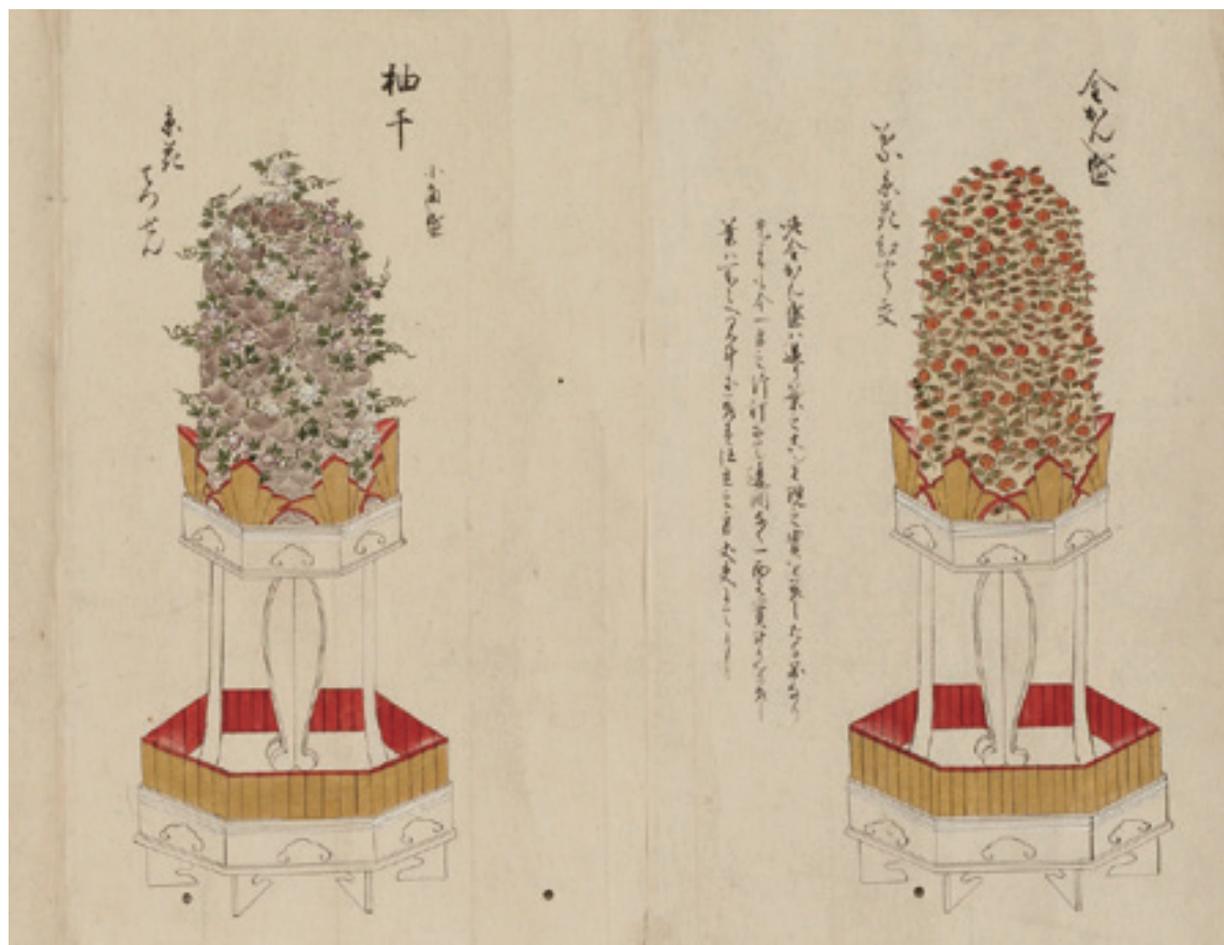
続いて、朝鮮人に人気の杉焼料理が出されました。杉箱の中に味噌を溶いて、鯛・鳥肉・野菜を煮込む料理ですが、当然杉の香りが楽しめます。ここでは、アワビ・ことり・たこ・くわい・たまごを煮込みました。なお、杉板の上で焼く杉焼料理もあります。

以下、主なものを記すと、鱸<sup>すずき</sup>・海松食<sup>みるくい</sup>

（貝）・イカの刺身、鮓<sup>すずき</sup>焼ひたし、雉<sup>きじ</sup>の焼き鳥、しし（猪）・豚、カマボコ、「たまごふわふわ」（鯛）、唐墨<sup>からすみ</sup>、車海老などです。菓子は、あるへいと・かすてら・はるて・つるし柿・せんべい・もも・うりでした。日本食が口に合う人にとっては満足でしょうが、中には合わない人もいたでしょう。

（高正晴子『朝鮮通信使の饗応』を参照した）

正徳の通信使のとき、壹岐で提供された食糧品のリストがありますので、主な品目を





## (2) 江戸往復の行程 (申維翰『海游録』より)

1719年(享保4 肅宗45)申維翰は、徳川吉宗の將軍襲職しゅうしよくを慶賀する享保の通信使の製述官として来日しました。一行は総人員475人、正使は洪致中、副使は黄璫こうせん、従事官は李明彦です。毎回の人員はこの前後で、三使を始め一流の官人が選ばれていますから、朝鮮の国威を表す一大文化使節団でした。日本側の学者・芸術家たちとの文化交流が港の使館や街道筋で行われたのですが、中でも詩文に優れた官人が任命される製述官は、押

しかけてくる学者たちとの応対で大変多忙な毎日を過ごすことになります。

- 4/11 ソウル昌徳宮出発  
~鳥谷関・鳥嶺関・主屹関~
- 6/20 釜山出発~
- 6/20 対馬佐須奈・鰐浦・西泊
- 6/27 府中(厳原)着  
島主宗義誠よしのぶ、長老僧「性湛月心」など出迎え、宿舎:西山寺
- 7/19 対馬出発  
随行者 島主以下千人 大小船百隻



鞆の浦 福禅寺 広島県福山市

- 壹岐勝本…平戸藩接待  
館は崖下 内に房あり、浴室・茶湯・厠なども付設  
身分に応じて各房の設備が異なる。三使は各専用の部屋・台所
- 8/1 (福岡県) <sup>あいのしま</sup> 藍島 (相島) …福岡藩接待  
毎回新築の館舎「博多は何処にありや」毎回こうした質問が寄せられる  
風待ち、出船 戻り 再出船
- 8/10 (福岡県) 地島  
※瀬戸内海を往く
- 8/18 (山口県) 下関 使館は新築…萩藩 (長州藩) 接待
- 8/25 (山口県) 上関 藩主の茶屋が館舎…萩藩 (長州藩) 接待
- 8/26 (広島県) 蒲刈<sup>かまがり</sup>…広島藩接待
- 8/28 (広島県福山市) <sup>ともものうら</sup> 鞆浦…福山藩接待  
使館 福禅寺
- 1711年 正徳の従事館李邦彦「日東第一形勝」の扁額

- 1748年 延享の正使洪啓禧の息子洪景海の書「対潮楼」
- 8/29 (岡山県) 牛窓…岡山藩接待  
使館そばに本蓮寺あり、疫神社奉納「唐子踊り」
- 9/2 (兵庫県) 室津…姫路藩接待  
護行船大小千隻近く 燈火を4・5燈 三使船も火箭<sup>かせん</sup>
- 9/3 (兵庫県) 兵庫…尼崎藩接待
- 9/4 大坂 豪華な御座船に移乗 国書船を先頭に鼓楽を鳴らして淀川をさか上る
- 9/11 京都 使館 本能寺  
※街道を往く 京都から江戸まで  
(滋賀県近江八幡市) 朝鮮人街道  
(愛知県尾西市) 起川船橋 300隻
- 9/16 名古屋…尾張徳川藩接待  
(静岡市) 清水 清見寺
- 1711年 (正徳元)「東海名区」の扁額 (玄徳潤筆)



- |   |  |
|---|--|
| 9/24 箱根越え   | 10/5 馬上才披露 ※乗馬 曲乗り   |
| 9/27 江戸入り、行列を整え、使館は浅草<br>東本願寺<br>江戸城登城、国書の交換 8代将軍<br>吉宗=「関白」<br>回書「日本国源吉宗 敬復朝鮮国<br>王殿下」 | 10/15 江戸出発<br>11/1 京都 使館 本能寺<br>11/4 大坂 使館 西本願寺<br>12/12 藍島<br>12/13 壱岐勝本<br>12/21 対馬府中<br>1/7 釜山着 |

## コラム 倭館（和館）の虎退治

長崎の出島や唐人屋敷、鹿児島島の琉球館と同じく、釜山の草梁そうりょうに日本人の居留地があった。山もある約10万坪の広さは出島の20倍以上、唐人屋敷10倍以上である。その住民は対馬藩の役人及び商人・職人等およそ500人。男だけの居住空間で、女性の出入りも厳禁されていた。丸山遊女が入っていた唐人屋敷・出島とは違い、やはり儒教が国教の国である。朝鮮にある「倭館」であるが、対馬藩の文書では「和館」と書かれている。

さて、1771年（明和8）のこと、倭館に虎が入り込んだ。それも2頭。茶碗焼き窯の上の方から「虎が出た」という声上がり、館内の者たちがそれぞれ武器を持って声の方へ駆け出すと、虎がいた。「はなはだほうこう咆哮いたし、霧のごとくなる気を吐きかける」虎を、槍や鉄砲でようやく仕留めた。

もう1頭出た。今度も鉄砲を撃ち込んだが、山の方へ逃げた。ちょうど開市（私貿易）の日で館内は大騒ぎ。館守若党の小次郎が噛みつかれ重傷を負ったものの、皆で何とか仕留めた。1頭は内蔵を抜き出し塩漬けにして対馬へ送り、もう1頭は館内で焼いて食べた。

（田代和生『倭館』より）

### 3 正徳・享保の通信使

#### (1) 雨森芳洲 (1668-1755) という人物

雨森東五郎、芳洲は号。正徳・享保の通信使に真文役（漢文の外交文書作成など）として同行しました。滋賀県長浜市の旧雨森村が生まれ故郷といいますが、京都生まれという説もあります。江戸へ出て朱子学者木下順庵の門下となり、後に新井白石・室鳩巢らとともに木門五先生の一人と称えられました。

22才（元禄2年）のとき師順庵の推挙で対馬藩に仕えることとなっても引き続き師のもとで学びますが、25才のとき中国語習得のため長崎に遊学しました。朝鮮の学者と交流するに当たって「唐音」で語れば一目置かれます。唐人屋敷で学識ある中国商人とも接触したことでしょう。この後もう一度長崎へ行って修業します。遊学費用は対馬藩から支給されました。当時は宗義真の治世で、対馬が大変



雨森芳洲像 県立対馬高校所蔵

栄えた時代でした。

朝鮮貿易の縮小によって対馬藩の財政に余裕がなくなると、若者の遊学が制限されていきました。長い目で見て、対馬藩が若者を育てることを続けていけば、近代にもっと人材を送り出すことができただろうに、と残念に思います。勿論、勝井騒動という幕末の藩内政争で人材が失われたことは承知しています。

芳洲は対馬藩朝鮮方佐役を命じられ、対朝鮮外交の実務を担当します。そして、意志の疎通には、まず語学力が必要として釜山にわたり、草梁倭館（和館）に滞在して朝鮮語修業に励みました。そればかりか朝鮮語習得のためのテキスト『交隣須知』を作成し、後には朝鮮通事養成のための学校設立にも尽力しました。国際人芳洲は、日・中・韓3カ国語を操って活躍し、朝鮮側通詞の誤訳もわかっていたようです。

同じ木下順庵門下生で対馬藩に召し抱えられた松浦霞沼についても紹介しておきます。木門十哲の一人であり、とくに詩文に優れ、木門では最優秀の評価もありました。また、人柄もよく『朝鮮通交大紀』という大著を著しています。芳洲の次男が養子に入り、松浦家を嗣いだくからいですから、二人は協力して同じ朝鮮方佐役の任務を果たしたと思われる。

## (2) 正徳の通信使関連エピソード

### ◆正徳の通信使来日前に起こった「国書復号」論争

雨森芳洲と新井白石

#### 白石の主張

徳川将軍と朝鮮国王は対等の関係であり、将軍も「日本国大君」ではなく「日本国王」を名乗るべきである。かつて室町時代に足利義満が明国皇帝にあてた国書で「日本国王臣源・」とした先例があるではないか。天皇は明皇帝と同格である。

#### 芳洲の主張

徳川将軍は天皇から「征夷大將軍」に任ぜられ、日本の統治を委任されており、かつてに将軍が「日本国王」を称するのはよろしくない。やはり天皇に対して僭称（勝手に称する）にあたる。これまでの通信使の国書で「日本国大君」としているのを何故変える必要があるのか。

#### 白石

「対馬にありつるなま学匠」（『折りたく柴の記』）。幕府の中枢に居る木門先輩の俺に逆らうなんて。※入門は芳洲が先、白石が11才年長

#### 芳洲

これで白石先生の引き立てで幕府に登用される出世の望みはなくなったか。でも筋は通した。

結局、正徳の通信使の国書は「日本国王」と記されました。でも、白石は芳洲に意地悪をするような狭量な人物ではありませんでした。

た。芳洲も白石が失脚した後、書簡を送るなど交流が続きました。なお、享保の通信使からは元の「日本国大君」に戻っています。

### ◆玄徳潤との「誠信の交わり」

互いに欺かず争わず、<sup>あざむ</sup>真実をもって交わることを誠信という（雨森芳洲『交隣提醒』）

1729年（享保14）、62才の芳洲が裁判役（外交官）となって草梁倭館（和館）に赴任しました。難しい外交折衝、すなわち朝鮮から対馬へ渡す公作米（木綿を米に換えて）年限の更新、公作米に石や砂が混じっているの各村から直接和館へ送るよう交渉するなどの案件は、芳洲でないとまとまらないと藩庁が判断したようです。



雨森芳洲墓 長寿院後山

和館の近くに訳官の事務所がありました。いわば連絡・交渉の最前線です。責任者を訓導といい、この時は玄徳潤が訓導でした。玄徳潤は所用で東萊府<sup>トンネ</sup>へ向かっていたのに、芳洲が和館に到着したことを聞くと急ぎ引き返してきました。

正徳の通信使のとき玄徳潤は従事官付きの上通事で、二人は直接折衝し親しんだ間柄でした。彼は両班階級の出身ではないため、最上位の官人にはなれないのですが、漢詩文・書に優れ、非常に人柄も良い人物として知られています。静岡市清水の清見寺に掲げられている「東海名區」や「潮音閣」の扁額は有名です。

その後、芳洲の外交折衝がスムーズに進んだことは言うまでもありません。互いに利害の異なる立場ではあっても、二人は正徳の通信使のときと同じ「誠信の交わり」を貫いたのです。

ところで、当時玄徳潤は対日交渉の接点である訳官事務所が古ぼけていることに心を痛み、国威に関わるとして私財もつぎ込んで新築・修築しました。その建物を「誠信堂」と名付け、人々の勧めもあり揮毫して「誠信」の扁額を掲げました。こうした玄徳潤の行為・行動に感動した芳洲は「誠信堂記」を認めました。ここは山海の景勝の地であり、優れた詩人であるにも関わらず玄君は景勝を堂名とせず「誠信堂」と名付けた、交隣の道は「誠信」を先としなければ隣国との平和な関係はつくれなからだ、と二人に相通ずる外交理念を語っています。

### (3) 享保の通信使 エピソード(申維翰<sup>シンユハン</sup>「海游録<sup>かいゆうろく</sup>」より)

#### ◆対馬<sup>さきま</sup> 棧原城での論争 雨森芳洲と申維翰

これまで対馬島主の館(棧原城)に招かれ場合、製述官らは島主に対して拝礼する慣わしになっていました。これに対し、製述官申維翰は承服できないと激しく抗議しました。

#### 申維翰の主張

吾は朝鮮国王の直臣、島主も朝鮮国王から米穀を受納しており、身分においては同格である。それなのに自分が拝礼するのに対し、島主は座ったまま袂<sup>たもと</sup>を上げて会釈するだけの簡単な答礼というのはおかしい。それならば自分は宿舎に帰る。

#### 芳洲の主張

(怒気はなはだしき形相、犬羊のごとき声で) あなた方は何かといえば先例、旧例と主張するのに、どういうことだ。これは先例である。

間に入った訳官はオロオロするばかり。結局、島主は宴席に出ませんでした。前回の正徳通信使のとき日本側にいろいろ譲歩したとして、今回は強く構えて来日したようです。

#### ◆「倭」と「日本」

#### 芳洲の主張

日本と貴国は海を隔てて隣国であり、互いに信義を通じている。しかし、我々日本・日本人のことを「倭」・「倭人」と呼び、朝鮮国の文集を見るに、はなはだしきは「倭賊」「蛮酋」と称している。非常にさげすんだ言い方ではないか。今後は「日本」「日本

人」と正しく言ってほしい。

### **申維翰の主張**

わが国の文集は何人のものか知らないが、壬辰倭乱（文禄・慶長の役）後に刊行されたものであろう。平秀吉は、わが国にとって敵の中の敵であり、これを奴といい、賊というのは当然だ。だが、現在は違う。

### **芳洲**

しかし今でも、使節の従者たちは必ず「倭人」と言っている。

### **申維翰**

貴国人は我を呼ぶに「唐人」、書に対しても「唐人筆蹟」と言っている。これはどういうことだ。

### **芳洲**

わが国では古くから貴国文物を中華と同等に扱い、故に「唐人」といって慕うのである。

このやり取りでは芳洲の方が一枚上手でした。当時の日本では一般に外国人（東洋人）を「唐人」と呼んでいたのです。

### ◆対馬府中での涙の別れ

最後の別離の挨拶のため、これまでやり合ったライバル申維翰を訪ねた芳洲は「今夕有情来送我（今夕別れを惜しんで見送りに来てくれた）此生無計更逢君（この後何時君に逢えるかわからない）」という申維翰の書に涙を流しながら言いました。

### **芳洲**

自分は年をとった。対馬の鬼になる（鬼籍に入る）日が近い。国境のこの島に骨を埋

めるつもりである。これ以上何を望もう。君は帰国後、栄達せられんことを。

### **申維翰**

君が鉄石のごとき心の持ち主であることを知っている。今日の君は、どうしてそのように女々しいのか。

### **芳洲**

正徳の通信使のときの別れも辛かったが、このように涙を流すことはなかった。年をとったのである。心身共に疲れ、老醜をさらしている。

このとき52才の芳洲は、その後養生して88才まで長生きしました。壮健なタイプではないにしても「老醜」はありません。一方、申維翰は芳洲を次のように評価し、彼の涙について推測しました。彼は尋常な男ではない、文官を装っているが、内には剣を蓄えている、もし彼が国事に当たり、権力を持つ立場にあったならば、必ずや隣境に変事を生じせしむるであろう、しかし、彼は現在一小島の書記にすぎない、そのまま老死することを悲しいと思っているのだろう、と。

それぞれが国の利害を背負ってやり合っても、根底に両国は平和でなければならない、という大前提が存在していました。言いたいこと、主張すべきことを、お互いに出し合いながら「誠信の交わり」を貫かねばならない、というのが芳洲外交の哲学でありました。

## コラム 朝鮮人参と孝行芋

日朝貿易において、朝鮮人参の輸入は対馬藩に莫大な利益をもたらしてきた。日本販売の特約店のような存在である。逆に言えば多量の銀が朝鮮に流れていたことになる。

8代将軍吉宗は、対馬藩に人参の苗を入手するよう命じた。国産人参の栽培に成功すれば、銀の流出を止めることができるばかりか、滋養強壯、万病の薬を国内に提供できる。一方、対馬藩にしてみれば金づるを失いかねないのだが、気候・土壌も違う日本では成功しないと高をくくっていたのかもしれない。

結局、幕府は荒涼な気候の日光で栽培に成功した。これを御種人参おたねという。その後、国産人参わ（和人参）は会津藩・出雲藩でも栽培に成功し、逆に長崎から中国へ輸出されるようになった。

話は変わって、対馬ではサツマイモのことを孝行芋こうこいもという。久原くばらの原田三郎右衛門が薩摩から持ち帰った種芋が全島に普及し、島民の命を飢饉から救った親孝行な芋である。それが1764年（宝暦14）の第11回通信使のとき、対馬から朝鮮に渡り、備荒作物びこうとして活躍した。朝鮮では「コグマ」と呼ばれるが、勿論孝行芋が語源である。

## 4 対馬での易地聘礼

### (1) 文化8年(1811)最後の通信使

17世紀の通信使では、およそ100万両もの莫大な費用がかかっていたようです。新井白石は支出削減に努め、享保から宝暦の通信使のときも節約がなされましたが、江戸で聘礼を行うと節約も限られます。だいたい70万~80万両くらいの経費がかかったでしょう。

こうした財政上の問題から対馬府中(厳原)での国書交換、すなわち易地聘礼えきちへいれいが決定されました。寛政の改革を主導した松平定信の指令により、対馬藩が朝鮮と交渉し、11代将軍家斉しゅうほうの襲封から23年目によく実現したものです。目的はひとえに財政支出削減、それでも徳川政権の体面は守らねばなりません。

この度の聘礼では上使として次の2名が対馬府中に赴き、幕府からも林述斎らがこの任に当たりました。

- 上使 小笠原大膳大夫忠国だいでんたゆうただかた (小倉藩主)  
脇坂中務大輔安薫なかつかさだゆうやすただ (竜野藩主)
- 幕吏 林大学頭だいがくのかみ (述斎)、大目付・井上美濃守、勘定奉行・柳生主膳正しゅげんのかみ  
目付・遠山左衛門尉さえもんじょう、佐野肥後守、勘定吟味役ぎんみ・松山惣右衛門

これを対馬藩の立場からみると、国書交換を棧原城大広間で行うのですから、気苦労は大変なものでした。一連の行事、相互の進物のことなど、朝鮮側と詰めておかねばなりません。

将軍上使が2名に対して、通信使一行も正使・副使だけで従事官はなし、人員も100名

以上減らして331名でした。日本で人気の馬上才など参加していません。

朝鮮国からの進物は鷹8居、馬2匹となり、相応して将軍から一行各人への進物(銀)も減らされています。そのお礼も、人参が50斤から33斤へ、虎皮15張が7張に、豹皮ひょう20張が10張に減らされるなど、すべてが縮小して実施された対馬での易地聘礼でした。総経費はおよそ38万両でしたから、経費節減の目的は達成されたわけです。

対馬藩にも、幕府から2万両を給付され、肥前国松浦郡浜崎などに約2万石加増されましたので、朝鮮貿易の不振を少し埋めることができました。何より対馬府中(厳原)には、国分寺境内の通信使館(和陽館)新築、棧原城の修築、上使のための金石城修築、道路・港湾の整備などに約12万両もの公共事業が投下されたといえます。

また、江戸から来島した上使・幕吏の配下の者が約2800人、輸送船200艘の船手約4000人、その他見物の者たちも入れると1万人を超える人々が対馬府中に集まりました。そうした経済効果も大きかったと思われる。文化交流も小規模ながら幕府儒官林述斎、古賀精里せいり、佐賀藩の草場珮川はいせんらと行われたことが書画・詩文に残されています。

この後も、老中水野忠邦の指示によって12代将軍家慶襲封の通信使聘礼を大坂で行う計画が対馬藩と朝鮮国の間で交渉されていますし、徳川政権下ではずっと通信(外交関係)の国として位置付けられていました。250年の平和という所以ゆえんです。

【巖原の地図】



巖原町史付図「(文化八年) 対州接鮮旅館図」

- ①上使 (金石屋敷) ②井上美濃守 ③林大学守 ④佐野肥後守 ⑤客館

## (2) 長崎県立対馬歴史民俗資料館蔵「朝鮮国信使絵巻」(重要文化財)

この絵巻は古藤満氏から寄贈されたもので、対馬藩重臣の暢孫家<sup>ながつぐ</sup>が旧蔵していたものです。貼り紙に記載された役職名からして対馬府中(厳原)の馬場筋通りを行く第12回朝鮮通信使の行列を描いたものと考えられます。大目付・町奉行・朝鮮方頭役・同右筆など、対馬藩の役職が貼り紙に書かれています。



### ①先導

馬上の人物には貼り紙がないが、朝鮮人楽隊の部分に誤って「町奉行」とあることから、その可能性もある。



### ②清道旗

道を清めて通るという意味の旗。後続の騎馬隊は、偃月刀<sup>えんげつとう</sup>と三枝槍<sup>さんえきさやり</sup>を持っている。



### ③楽隊

沿道の民衆に人気の高かった馬上の楽隊が生き生きと描かれている。最初の4騎は法螺貝のような楽器を吹く螺角手、続いて喇叭4騎、同じく管楽器太平囂の4騎、鼓打が4騎となっている。さらに徒士の鉦打が2人、シンバルのような細樂が4人、最後に鼓少（小だいこ）2人、計24名で楽隊を構成している。



### ④形名旗

朝鮮国王のシンボル旗で、雲竜模様が絹地に描かれている。旗の縦9尺（約2m70cm）、幅6尺（約1m80cm）、竿の長さ3間ほど（約5m40cm）の大きさという。3人がかりで持っている。

形名旗の後に8騎の軍官と従者が続くが、この通信使には、將軍家光のとき以来、馬の曲芸乗りとして有名になった馬上才は含まれていない。



### ⑤対馬藩士

徒目付2人、朝鮮方右筆2人、朝鮮通詞2人、朝鮮方目付役、同頭役各1人が国書に乗せた轎（こし）を警護するように歩いている。朝鮮方右筆とは、正徳・享保の通信使のとき雨森芳洲が勤めた真文役に当たるものであろう。



#### ⑥国書と別幅

朝鮮通信使来朝の主たる目的は、徳川大君の將軍職就任を慶賀するために国書を持参し、答礼の書を受け取ることにある。したがって、朝鮮国王の国書と、その関連書簡である別幅は特別立派な輿に乗せて行列の中心をなした。



#### ⑦正使と副使

令旗・巡視旗各2本に続いて警固の軍官、蓋（貴人のための日傘）、奚琴（ヘグム）という胡弓に似た弦楽器や笛・太鼓を奏でる8人の楽隊、そして仕える小童数騎の後に、輿に乗った正使が登場する。正使は金履喬、軍官が後備として付く。副使前後の構成もほぼ同じで、こちらは李勉求。輿の傍には吸唱でなく小通詞が付いている。そして従事官はいない。



#### ⑧製述官

日朝両国の学者・芸術家による文化交流は、朝鮮通信使の大きな華であった。そのため、通信使の主要メンバーには、朝鮮国の国威をかけて詩文・書画に秀でた一流の人物が選ばれた。中でも製述官は、押し寄せる日本側の文化人との応接に多忙をきわめた。この絵巻の製述官は李顥相。府中にも幕府関係者以外に佐賀の儒者草場はいせん佩川らが渡っている。



⑨後備（対馬藩士など）

行列の後半には、荷物持ちの人足、対馬藩の足軽の一隊、通詞の一団が続き、後備として騎馬の輿頭くみがしらと、歩兵の槍部隊、騎馬の槍奉行が行列を締めくくっている。描かれている朝鮮人は171人、日本人は423人、計594人に及んでいる。



通信朝鮮使行列・巖原港まつり

2017年（平成29）10月、「朝鮮通信使に関する記録」がユネスコの世界記憶遺産に登録されました。日韓の団体・自治体の活動が実を結んだわけですが、とりわけ対馬に事務局がある朝鮮通信使縁地連絡協議会（松原一征理事長）の長年にわたる努力は賞賛されるべきものです。



# 国 日本 境 遺産

| 吉岐 | 対馬 | 五島 |

交易・交流と緊張の歴史

# 四 島



---

年 表

---

地 図

---

## 国境の島 交流と緊張の歴史（年表）

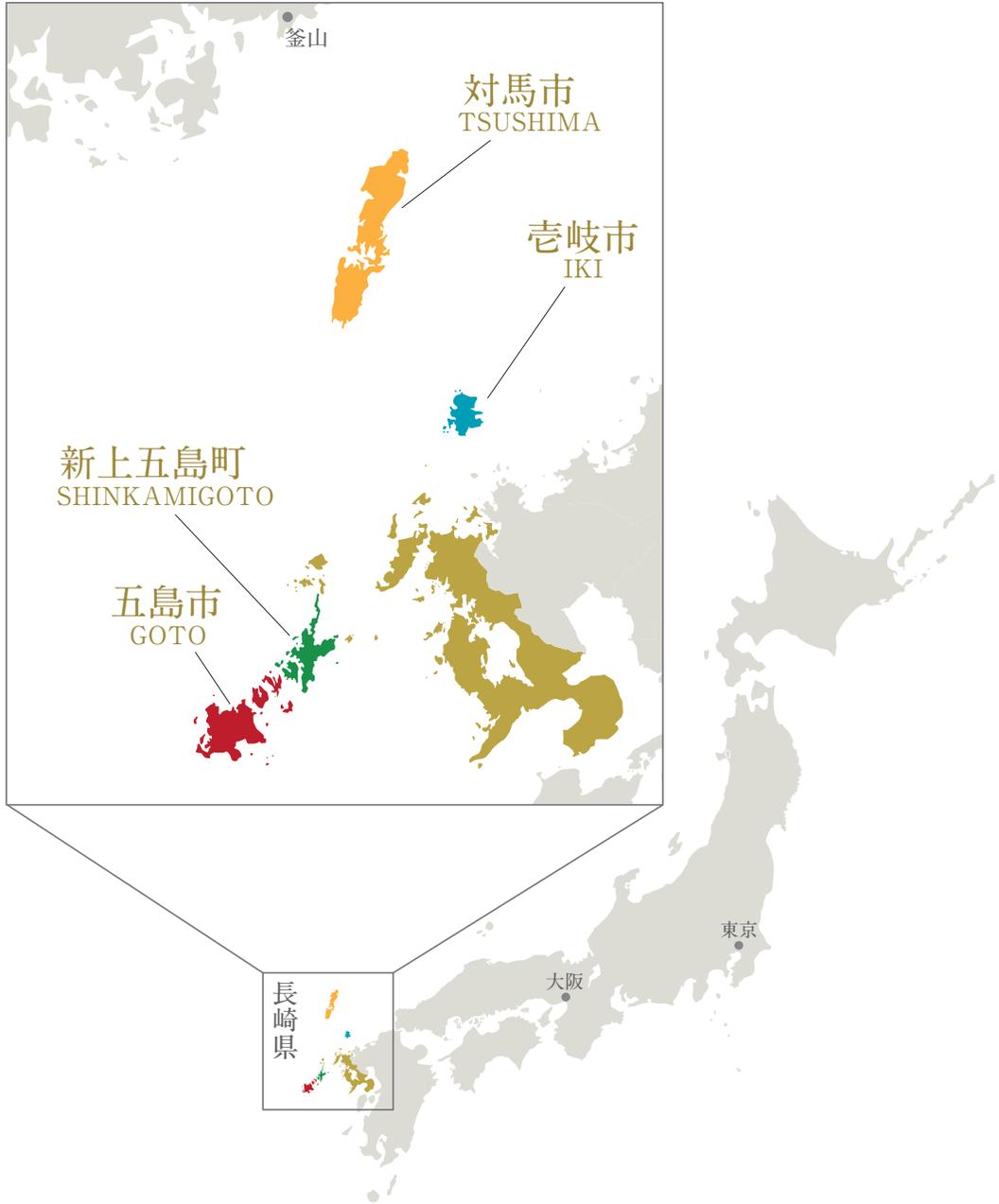
	壱岐・対馬・五島関係事項	大陸・半島情勢
<b>原始・古代</b>		
縄文時代	対馬 佐賀貝塚 海洋漁労文化、韓半島と交流	
弥生時代	対馬 ガヤノキ遺跡 ○対馬海人の交易活動 広型銅鉾大量に出土(北九州製) 原の辻遺跡[特別史跡] ○一支国は邪馬台国連合の一国	漢帝国  魏・呉・蜀
古墳時代	対馬出居塚(前方後方墳) 根曾古墳群(前方後円積石塚) ○ヤマト政権の朝鮮半島出兵 ※平常は交易・交流	高句麗・百濟・新羅  527 筑紫磐井戦争
6c後半～7c初め (飛鳥・白鳳期)	<b>壱岐古墳群</b> (前方後円墳、円墳) 壱岐にヤマト政権兵站基地	
630(舒明2)	遣唐使はじまる(北路)	589 隋、中国を統一
664(天智3)	壱岐・対馬に防人・烽火を置く	618 唐興る
667(天智6)	対馬に <b>金田城</b> を築く=黒瀬の城山[特別史跡]	663 白村江の戦い
674(天武3)	対馬から銀を「調」(みつぎ)として献上	
奈良時代		
736(天平8)	遣新羅使一行、浅茅あそ湾で風待ち(「万葉集」)	
740(天平12)	藤原広嗣、五島値賀島で捕らえられ、斬首	
761(天平宝字5)	藤原仲麻呂の新羅征討計画、対馬に水先案内200人割り当て	
平安時代		
804(延暦23)	第18次遣唐使船派遣(空海・最澄乗船) 五島を出発(南路)	
9c～10c	新羅海商(海賊)の活動	
866(貞観8)	肥前国高来郡の郡司ら新羅人と組んで対馬奪取を計画	
876(貞観18)	肥前国松浦郡の庇羅(平戸)・値嘉(五島)両郷を2郡とし値嘉島とす	
927(延長5)	「延喜式神名帳」成立、対馬 <b>大社6座、小社23座、計29座</b> (九州全体で107座) 壱岐 <b>大社6座、小社18座、計24座</b>	936 高麗、半島統一 960 宋建国
1019(寛仁2)	刀伊の賊(女真族)、対馬・壱岐を襲う	
<b>中世</b>		
鎌倉時代		
1185	松浦党水軍、壇ノ浦の戦いに平家方として参戦	モンゴル、高麗を征服
1274(文永11)	<b>文永の役</b> 、元・高麗軍が対馬に来襲、続いて壱岐を襲う	1260 フビライハーン即位
1281(弘安4)	<b>弘安の役</b> 、東路軍対馬・壱岐を襲う	
南北朝・室町時代		
	対馬海商集団の活動が盛んになる[前期倭寇] 海の武士団(商人) <b>松浦党</b> の活動活発化、五島 <b>日島の石塔群</b> 日本海沿岸の交易ルート	1368 明建国 1392 朝鮮建国
1384(永徳4)	<b>松浦党</b> (下松浦住民等)一揆契諾を結ぶ 大一揆の一つ ◆平戸氏、田平氏、日宇氏、志佐氏、宇久氏、御厨氏、津吉氏、 生月氏、有川氏、青方氏、奈留氏、伊万里氏、山代氏など参加	
1389(元中6)	高麗の兵船100艘、倭寇の基地対馬を攻撃	
1404(応永11)	日明勘合貿易はじまる	
1416(応永23)	対馬島主宗貞茂、朝鮮に使を遣わし、大蔵(だいぞう)経を請う	
1419(応永26)	<b>応永の外寇</b> 、朝鮮軍約1万7千人が対馬浅茅湾に来襲	

1443(嘉吉3)	嘉吉条約締結、日朝貿易促進 ○対馬島主の館は佐賀に(室町)第3回朝鮮通信使来日、書状官申叔舟(「海東諸国紀」)	
1477(文明9)	早田水軍の棟梁、朝鮮国より受職、現存最古の「告身」(重文) → 朝鮮貿易許可	
1551(天文20)	大内氏滅亡 勘合貿易終わる～再び私貿易活動活発になる 王直ら中国人主体の海商活動[後期倭寇]	
<b>近世</b>		
1591(天正19)	秀吉、朝鮮出兵を命ず、壱岐に勝本城、巖原に清水山城を築く	
1592(文禄元)	<b>文禄の役</b> (壬辰倭乱)、加藤清正、小西行長出兵、宗氏、松浦氏らも	
1597(慶長2)	<b>慶長の役</b> (丁酉倭乱)	
<b>江戸時代</b>		
1607(慶長12)	宗義智、日朝国交回復に動く ○徳川家康、江戸幕府を開く 江戸時代1回目の <b>朝鮮通信使</b> 来日(正式には回答兼刷還使)	ヌルハチ台頭
1609(714)	慶長条約締結、日朝貿易再開 ●朝鮮外交は対馬藩に委任	1627 後金軍の侵入 1644 <b>明滅亡→清</b>
1678(延宝6)	釜山 <b>草梁和(倭)館</b> 落成(約10万坪)	
1687(天和4)	対馬藩、中江藤樹の三男 定省を招き、学校奉行とする	
1689(元禄2)	対馬藩、木下順庵門下の <b>雨森芳洲</b> を召し抱える	
1703(716)	朝鮮国訳官使船、対馬鰐浦沖で遭難、112名溺死	
1711(正徳元)	雨森芳洲、新井白石と論争(徳川將軍は「大君」か「国王」か)	
1764(宝暦14)	第11回通信使のとき対馬の孝行芋(サツマイモ)が朝鮮に伝わる ⇒ 韓国では「コグマ」という	
(江戸中・後期)	※朝鮮貿易不振、江戸幕府財政窮乏	
1811(文化8)	第12回の朝鮮通信使、対馬棧原城で国書交換[易地聘礼]	
1861(文久元)	ロシア軍艦ボサドニック号、対馬浅茅湾芋崎を占拠	
1863(文久3)	五島石田城(福江城)完成、幕末の海防警備のため	
<b>近・現代</b>		
1871(明治4)	廃藩置県、対馬藩領は巖原県となる 壱岐は平戸県、五島は福江県	
1872(75)	巖原県は佐賀県・唐津県などと共に伊万里県に統合 8月17日、対馬を佐賀県から分離して長崎県に編入	
1897		大韓帝国となる
1900(733)	対馬久須保水道(万関の瀬戸)開削	
1905(738)	対馬沖日本海々戦 ○日露戦争(1904～5)	
1908(741)	沖縄県及島嶼町村制施行【 <b>対馬特別制度</b> 】	1910 韓国併合条約
1919(大正8)	対馬に市制町村制適用(本土に30年遅れで地方自治権)	1912 中華民国成立
1930年代	壱岐黒崎砲台、対馬豊砲台など巨大砲台建設 ○1937日中戦争始まる ○第二次世界大戦(1939～5)	
1948		大韓民国成立
1953(昭和28)	<b>離島振興法</b> 成立、議員立法で10年の時限立法として	1949 中華人民共和国
1999(平成12)	巖原～釜山間に高速船「シーフラワー号」就航	
2015(平成27)	「国境の島 壱岐・対馬・五島～古代からの架け橋～」として日本遺産第1号に認定	
2016(平成28)	国境離島新法成立	
2017(平成29)	「朝鮮通信使に関する記録」がユネスコ記憶遺産に登録される	





# 国境の島 広域MAP



# 壹岐



# 対馬



# 五島





## あ と が き

この冊子は、「国境の島 壱岐・対馬・五島」の交易交流と緊張を繰り返してきた歴史を深掘りしたものが欲しいという中村知事の強い思いを受けて編纂・執筆しました。十分に表現できたか、その評価については、島民の皆さんはじめ読者の方々にゆだねますが、編著者は力の限り取り組みました。

第8章「いわゆる後期倭寇の真実」と第4章のコラム「山王山と最澄伝説」は文化振興課指導主事の橋本正信が担当・執筆し、その他は長崎学アドバイザーの本馬貞夫が担当・執筆しました。その際、多方面の研究者・島民の方々から、ご教示・ご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。

地図作成担当は橋本正信、写真は二人で壱岐・対馬・五島を撮影するとともに、現地の教育委員会や研究者の方々に提供を受けました。

お世話になった多くの方のお名前を、一々ここに上げることは控えさせていただきます。ただ、故人となられた考古学研究者3人、藤田和裕氏、高野晋司氏、福田一志氏（県文化課）のお名前だけ紹介させていただきます。

今後この冊子が、いろいろな分野でお役に立つことを心から願っています。

長崎学アドバイザー  
本馬貞夫

日本遺産「国境の島」壱岐・対馬・五島 交易・交流と緊張の歴史

2018年(平成30)3月

編集・発行 長崎県文化観光国際部文化振興課

〒850-8570 長崎市尾上町3-1

TEL:095-895-2762

デザイン・印刷 株式会社インテックス